山岳

第三十年
第一號

山岳

第三十年第一號

山岳第三十年第一號目次

冬の白頭山	宮崎武夫	一頁
ゲオルク・ジムメルの「ディ・アルペン」をめぐりて	辻荘一	六
アイヌの作る山小屋	犬飼哲夫	七五
王堂チェムバレン先生	小島烏水	八三
支那文獻に表はれた白頭山	太田喜久雄	九五
天保五年の大豪登山記	笹谷良造	一〇六
鳳凰登山史の片影	小屋忠子	一一八
足高山小記	渡邊獨逸	一三五
フレッシフィールドを想ふ	松方三郎	一四〇
遭難報告		一四九—一六六

鹿島槍ヶ岳に於ける内藤況三氏の遭難(一四九)——御嶽に於ける俵、馬嶋兩氏の遭難(一五二)——立山地獄谷に於ける佐伯宗作氏の遭難(一五三)——一ノ倉澤に於ける山口敏彦、福田一雄兩氏の遭難(一六〇)

圖書紹介　一六七—一七八頁
田部重治，紀行と隨筆（浦松佐美太郎）——冠松次郎，白馬連峯と高瀨溪谷（松方三郎）——M. Walton: Scrambles in Japan and Formosa.（黑田孝雄）——S. Spencer: Mountaineering.（黑田孝雄）
會報　一七九—一九八頁
會務報告——月例理事會——臨時役員總會——昭和九年度會員大會——第六十五回小集會——第六十六回小集會（關西）——三十周年記念晚餐會——三十周年記念山岳圖書展覽會——新會員——會員計報——退會者——日本山岳會會則——關西支部規則——山岳投稿規定
圖版
白頭山（東方上空より）　朝日新聞社　對頁四
火口壁（大正峯と天池）　朝日新聞社　一〇
憩ひ（大臙脂峯にて）　平吉功二六
第一キャムプにて　兒島勘次四三
山岳圖書展覽會場にて　一八四—五
「立山登臨圖記」より　卷末附錄
「氷河記」より　卷末附錄

挿　圖

白頭山及び其の附近概念圖――「石狩日記」より――路小屋の骨組の作り方――路小屋の最初の骨組――路小屋の最後の仕上げ――ユニイシカリ上流のエゾ松を材料とした小屋――ユニイシカリ上流の板を用ひた小屋――オコタンペ川口の熊取の窪小屋――「鳥獣草花繪等初心道しるべ　中」より――鳳凰山の懸佛――一ノ倉澤略圖

附　錄

山岳圖書展覽會日錄

カット

坂本直行

冬の白頭山

宮崎武夫

まへがき

昭和九年十二月から翌十年一月にかけて白頭山の冬期登山が京都帝大學友會旅行部の現役及びその先輩よりなる京都帝國大學白頭山遠征隊によつて企てられたところ、幸に無事所期の目的を達成することが出來た。

こゝにはその出發から下山に至る間の筆者を中心としての隊の行動の概略と裝備、食糧の主なるものについて記しておく。尙今回の遠征の如く、隊が幾つかの班に分れて行動する場合では、一隊員を中心とした記錄では遠征隊の活動の全貌を物語ることが出來ない。重複を省みず記錄の各所にその日〳〵の隊全隊の行動の概要を挿入したのは幾分之によつて、前述の缺を補はんがためである。

今度の山行においてはごく小規模のものであつたがサイエンティフィックな調査や研究もなされてゐたが、その方面のことは本文では觸れないことにした。それ等の詳細なデーターについては近く遠征隊の名に於いて刊行される「白頭山遠征隊報告」を繙讀されたい。

地圖

百萬分ノ一　白頭山

二十萬分ノ一　白頭山　惠山鎭　甲山

五萬分ノ一　合水　東興里　含井浦里　仲坪場　惠山鎭　甫安所里
普天堡　胞胎里　神武城　小白山　白頭山

隊員

農學士	理學部講師	隊長　今西錦司
理學士	理學部講師	西堀榮三郎
農學士	理學部植物學教室	高橋健治
醫學博士	醫學部外科學教室	淺井東一
經濟學士	大阪市勤務	宮崎武夫
法學士		奥貞雄
農學士	農學部植物遺傳學教室	平吉功
農學部學生		長谷川清三郎
工學部學生		堀龍雄
經濟學部學生		加藤泰安
理學部學生		兒島勘次
文學部學生		杉山佐一
京都醫大學生		谷博
大阪朝日新聞社員		藤木九三
東京朝日新聞社員		丸山四郎
蒲田口案內人組合		今田友茂
有明案內人組合		大和由松
立山案內人組合		佐伯宗作

遠征隊日程

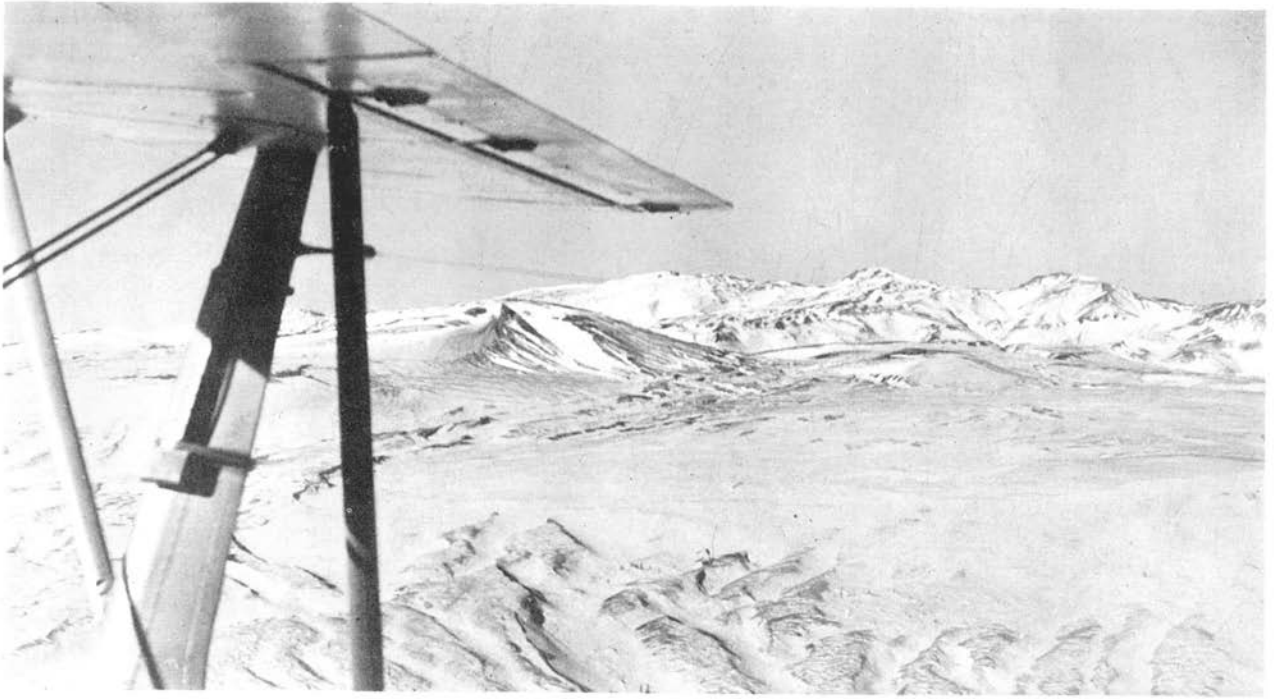
昭和九年十二月二十日　今西隊長等五名の先發員京都發、諸事打合せ及び準備のため京城、惠山鎭に向ふ。
二十五日　西堀等十三名よりなる本隊京都發、惠山線合水驛に向ふ。
二十七日　本隊正午合水驛着、午後一時自動車にて出發、夜惠山鎭着、先發隊に合す。
二十八日　午前十一時半自動車にて惠山鎭發、午後三時半胞胎里着、直ちに荷物を橇に積み替へる。同地警官駐在所に休泊。
二十九日　晴　八時半胞胎里發十一時上興慶水渡過、午後三時半虚項嶺着。夕方物資全部到着。同地にキャムプ。
三十日　晴　ルート偵察のため偵察班二隊を出す。
三十一日　晴　ルート偵察、BC（ベース・キャムプ）一部架設す。BCまでの道ふみ及び輸送をなす。
昭和十年一月一日　晴　BCへ輸送。一部隊員BCへ移る。
二日　晴　虚項嶺に一部を殘し本隊はBCへ移る。偵察班は小臙脂峰附近まで至り、偵察終了す。
三日　雪　休養。
四日　晴　第一隊前進、CIを架設し宿營。全員輸送に從事す。
五日　晴　第一隊CIIへ輸送をなす。飛行機飛來しBCへ新聞、ガスマントルを投下す。
六日　晴　第一隊CIIを架設し宿營。
七日　晴後雪　第一隊十一時四十分に登頂。
八日　風雪　滯在、飛行機飛來。
九日　晴　第二隊は天地に下り宗德寺に至る。
十日　晴後曇雪　第二隊は層岩登頂、第三隊は白岩登頂。
十一日　晴　天池及びCIIを撤收しCIに下る。
十二日　晴　CIを撤收し全員BCに集結、飛行機飛來し、テント、食糧を投下す。
十三日　晴　休養、一部下山。
十四日　雪　本隊下山　BC一部撤收。
十五日　雪　BC撤收全員胞胎里集結。
十六日　晴　胞胎里午前十時發、普天堡にて中食、午後四時惠山鎭着。

冬の白頭山　宮崎

十七日　雪　惠山鎭發令水、吉州を經て京城に向ふ。
十八日　午後二時京城到着。朝鮮ホテルに入る。
十九日　京城滯在、總督府、軍司令部等を訪問。
二十日　朝鮮神社參拜、午後二時半「ひかり」にて京城出發。
二十一日　京都着。
二十二日　遠征隊の解散式を行ふ。

一　根據地惠山鎭へ

十二月二十五日午前九時五十五分家族や多くの關係者に見送られて京都驛を發つた。隊員が驛に來揃つたのはもうかれこれ九時半ごろで、それから小川琢治先生の激勵の辭があつたのでプラットフォームには入つたとき汽車はもう着いてゐた。大學、三高、府立醫大の岳友達が荷物をつぎ〳〵に運んでくれやつと積み了つたとき、汽車は待ち兼ねてゐたかのやうに動き出した。兩側のデッキは背丈よりも高くいろんな荷物が積み上げてあり、一體自分の荷物が漏れなく積みこまれてあるのか、どこに何があるのかさつぱり判らない。今度の山行の大部分の裝備品を納入した西岡一雄氏が最後の打ち合せのため乘りこむできた。あれはかういふ風に作り替えて一月五日の飛行機に託してDC（ベース・キャムプ）に投下してくれ、それからあれをもう幾つ追加してそれも飛行機で、天池測深用のロープはこれ〳〵になど、忙しい一時である。神戸をすぎると少し落ちついてきたので荷物の整理にと



白頭山（東方上空より）

朝日新聞社

りかゝつた。各荷物にはいち〳〵日の丸印のエフをつけて散佚を防ぐとゝもに、數度の乘換の際判別に便利なやうにした。貨物として送り出せない取扱注意の觀測用の精密機器類やラジオ用品、それにこの出發にやつと間に合つた品物など全部で五十二箇もあり、特別に大きく造らせたルックサックも一パイでハヂけるほど詰つてゐる。その上なか〳〵重く、ちよつと横手へ移そうと思つても少々の力ではビクともしない。やつとのことでどうにか下關まではこれでよいといふ程度に片付いたので、一同の顏にもやれ〳〵といふ安堵の色がたゞよふてきた。白頭山行の準備が忙しくなつたのは十一月ごろからのことであつたが、それからといふものはそれこそほんとうに出發の前日まで、毎日々々夜おそくなつても諸用品の考案、註文、種々の交涉それにいろ〳〵の買物、荷造り、發送とつぎからつぎへと果てしなく用事があり、幾十日かのあわたゞしい日を送つてゐた隊員としてはあまりにも當然すぎることであつた。この日は久しぶりでうらゝかに晴れ上つた冬には珍らしい日本晴であつたが、我々の氣持もこれに劣らずはれやかであつた。この一、二ケ月といふものは準備のことで頭が一杯になつてゐたが、やつと肩の荷がすつかり下りたので實に朗かな氣持であつた。棄がおちて裸になつて何だかうすよごれてゐるやうな森も我々の目にはあでやかにうつつた。紺碧の海も五月の空のやうに麗しく感ぜられた。これは誰れもがそう思つてゐたらしい、ふとヨットの話が出て、一しきりその話題でもちきつてゐたのもあながち偶然ではない。職業がら常日ごろ港や海べりによく出入してゐる私でさへこの日、食堂車からうち眺めた瀨戸內海や周防灘は實に美しいと思つた。こんなにまで明朗な海はまだかつて心に映じたことがなかつた。滿鮮國境に聳ゆる白頭山の冬期初登攀を目指してはる〳〵出向いて行くその車中で、いろ〳〵の點において「山」とは對蹠的な「海」の美しさにみとれるといふのも心にそれだけのゆとりが出來てきたからであらう。

下關では今は門司のビール會社に勤めてゐる井上氏がやつてきて呉れ、この邊の勝手をよく知つてゐるところから何かと世話をやいてくれた。例の五十何箇といふ嵩高の荷物を連絡船に積みこむのがまた一苦勞であつた。廊下はたちまち一杯になつてしまつたがまだ過半の荷物が殘つてゐるので、いろ〳〵と賴んで一つの入口を締め切りとし、その入口につゞく階段に押しこんでやつとどうにかきまりをつけた。こんなことに大變手間取つたので二時間近くの乘換時間も殘り少くなり、夕食もそこ〳〵に船にかへり、井上氏から贈られたスタウトを廻し飮みにしてすぐにねた。

釜山では獵銃のことで西堀と佐伯が忙しそうにあちこちしてゐる。朝鮮鐵道局では我々一行のため釜山から合水までの半額切符を釜山驛に廻付してゐる筈なのだが、これがどこにきてゐるのか判らず、あの長いフォームを行つたりきたりしてまご〳〵さゝれた。荷物のつみこみも終つた。とにかく箇數が多く、かつその多くが易損品なので乘換はなか〳〵厄介である。

禿げ上つたガラ〳〵の山、その間をゆるやかに流れぬける河、見すぼらしい藁ぶきの家、內地のそれとは甚しく異つた窓外の景色をぼんやりと飽かず眺めてゐたり、汽車が停るとだゝつぴろいフォームを物珍らしげに散步などしてゐて朝食をすましたのは何でも十時を大分すぎてからのことであつた。しかしこんな朝鮮風景をいつまでも眺めてゐるわけにはゆかない。丁度すぐ橫手に乘り合せてゐるインテリの朝鮮人を相手に、西堀や輸送班のものは盛んに朝鮮語のA・B・Cを勉強してゐる。今度は山で朝鮮人夫を使役する關係上、朝鮮の言葉を幾分知つてをらねばとかねん〳〵痛感してゐたが、準備の方に時間がとられてどうにもそこまで手が廻らなかつた。たうとう汽車の中でのにわか仕込みでゆかうといふのである。この人は多分學校の先生か何からしく國文法のことも一通り

は知つてをり、なか〳〵要領よく親切に傳授してくれた。單語をたんねんに手帖に書きとめてゐたが、練習をつゞけないので汽車を降りるころにはすつかり忘れてしまつた。無電係のものもにわか仕込みであるがチー・チィー・チ・チとモールス符號の復習に餘念がない。飛行機との交信を受持つてゐるものは空地連絡の布板信號符作成に議を凝らしてゐる。その上今度考案されたオーバーシュースなども少し手を入れる必要があるので裁縫もしなくてはならぬ。やり出せばいろんな事柄がある。何か仕事をしてゐると時間のたつのは早いものでそのうちに京城にきてしまつた。京城では山友達が澤山出迎へてくれた。「今年は例年になく暖かですよ、漢江なども一度はつた氷がとけましたからね、こんなことは實際珍らしいですよ、この分なら山も幾分は樂でせう、しかし凍傷には充分御注意なさい」と親切にいつてくれる。そして我々が着こんでゐる揃へのグレンフェル上衣を見て「山ではどんなものを着られますか？　えゝこれですつて？　こんな薄いもので大丈夫ですかね、いくら暖いといつても白頭山の寒さは隨分きびしいですからね。こんなので行けますかね」と如何にも不安そうなので、このグレンフェル上衣は日本で實地に用ひられるのは今度が初めてゞあるが、極地々方ではこれまで度々用ひられてをり、一九三三年の英國エヴェレスト探檢隊にも愛用されてゐて、そのすばらしく卓越した性能についてはすでに試驗濟みであること、松方氏の好意により實物がやつとこの間我々の手にはいつたので、その通りのものを鐵紡で大急ぎで作らせたこと、こま〳〵としたところにまで細心の注意が拂はれてゐること等につき詳しく說明した。しかしなほ充分には納得してもらへなかつたやうだ。京城の人々の顏には危惧の色がみち〳〵てゐた。もつともグレンフェル上衣について心配をかけたのはこれが初めてではなかつた。京都驛でもこんな親切な人があつた。生憎發車時間が差し迫つてゐたのでゆつくりと話をする間もなく、殘念なことにはその姓名すらきゝもらしたが、わざ〳〵や

つてきてくれて「お見受けしたところ甚だしい輕裝であるが他に怎なものを用意してゐるか、大變差出がましいことだが自分は最近までかなり永らくの間白頭山の附近で暮らしてゐたが、その體驗から推してこんな服裝では危かしく感ぜられて仕方ありません。至急何とか善後策をおとりにならぬと凍傷はおろか、生命の危險がありまず、充分御要愼なさい」といふのである。我々はその好意に厚く感謝して別れたのであつたが、京城でもまた、ことにその道のエキスパートから同じやうなことを言はれたのである。このときは朝鮮の山をよく知つてゐる人人の言葉であるだけに我々も一應は自己批判をしてみたが、澤山着こむばかりが能でもなく、これだけあればそう心配するほどのこともなさそうに思はれた。

今度乘換の吉州へは夜中の二時すぎにつく。その上停車時間がわづかに一分間なのでまた〳〵荷物の積み卸しが頭痛の種となつてくる。積みおろしの用意とその部署を決めて、夕食を濟ますと早々に寢臺にもぐりこんでしまつた。吉州では隊員はもとより、車掌を初め驛員總がゝりで手傳つてくれたが停車時間を三分間も延ばしてもらつた。荷物の點檢が濟んでやれ〳〵といふのでふと氣がつくと耳はもう感覺がなくなつてをり、鼻の先が白くなつてゐる者もある。北鮮の夜風は流石に嚴しい。だん〳〵身體中に寒さがぞく〳〵と泌みこんでくるので荷物は出迎への宿の番頭に委せて宿屋へかけこんだ。

白岩へ行く汽車は八時すぎに出る。停車場についたときは丁度日の出る少し前であつたが薄雪を着飾つた山が朝日に映えて紫や金色にかゞやいてゐた。汽車は大部分朝鮮人で滿たされ、ニンニクの香が鼻をつく。途中の南夕といふ驛では總督府鐵道局から遠征隊の貨客輸送援助のため特派された飯山氏が乘りこんできた。同氏は京城から先發隊とゝもに惠山鎭に至り、本日は我々を出迎へるため惠山鎭からわざ〳〵やつてきてくれたのである。

同氏から惠山鎭の正確な情況を初めて聞いた。といふのはこのときまで耳にするニュースは何れもまち〳〵で少しもあてにならない。積雪二尺といふがそれが惠山鎭のことなのか、胞胎里なのかさへ判明しなかつたほどである。それから先發隊があちこちでいろ〳〵の交涉や依賴をして廻つてゐるがその大體の模樣もきいた。何れも至極順調に纏つたとのことで一同安心した。ことに一行を護衞のため惠山鎭の守備隊から派遣してくれる警備隊のなかには電信兵が特に加へられてあるとのことなので、無電係大いに氣をよくし、チー・チー・チ・チ の練習も一入活氣づいてきた。

汽車は赤ちやけた急な崖の間を細い流に沿うて喘ぎながら急勾配を登つて行く。山裾のガラ〳〵のところも、すみ〳〵までよく拓いて畑が作られてゐる。主に燕麥を作つてゐるとのことである。きれいに並んだ畝のところどころにはさゝやかな泥塗りの家があり、そのぐるりはきまつて柴垣でとり圍まれてゐて、垣のへりには漆黑の豚がうろついてゐる。この邊の農家の格好は南鮮や京城近くとは大分趣を異にしてゐる。

山に圍まれた合水の驛についたのは丁度正午であつた。空はカラリと晴れ上つてゐたが、物凄く冷たい風がビュウ〳〵と吹いてゐた。風の强いところとは豫ね〴〵聞かされてゐたが、その强さよりもむしろその冷たいのに驚いた。耳なども痛くなつてきたと思つてゐる間にもう感覺がなくなり、手の指などは勿論のこと、掌が動きにくゝなつたほどである。何もかも打ちやらかしにして、急いで驛舍に逃げこむ、その寒さは不意打であつたゞけに隨分ひどく痛めつけられた。恐らく今度の朝鮮滯在中でこのときの寒さが一番ひどく感じたやうに思ふ。持つてきたゞけのものをあるだけ着こみ、最防寒して荷物のとり片付けに出て、どうにかトラックに積みこんだ。プラットフォームのあちこちには砂と煤煙で灰色にうすよごれた雪がはき溜められてゐた。何氣なしに靴の先でち

よつと蹴とばしてみて驚いたことには、その雪は少しもクラストしてをらず恰もたつたいま降り積つたばかりの雪のやうにフワ〳〵としてゐた。この雪は一昨日降つたもので、それからはずつと毎日快晴で陽がカン〳〵照つてゐるとのことであるが、それだのに陽光の影響をうけたやうなところが少しもない。良質の雪であればあるほど敏感だから、如何に北緯四十二度の弱い陽光だとはいへ、相當影響されるやうに考へられるがどうも不思議なことである。

合水から惠山鎭までは自動車で五時間約二十六里の道のりである。南大川は合水で二分するので水が急に細くなる。砂と雪が風に舞ひ上つてゐる川沿ひの狹い石ころ道を自動車が走る。兩側はそぎ立つたやうな急な崖になつてゐていかにも嶮阻な峽谷へきてゐるやうな氣がするが、この崖のすぐ上にはなだらかな臺地があつて、そこには農家もあり、畑も作られてゐるのである、そのまた一段上にはひろ〳〵とした高原がどこまでもひらけてゐる。その高原には沮洳地もあり、大きな池もあつて冠帽峰の裾野を洗つてゐる西頭水や博川水などもその源をこの山陰に發してゐるのである。

鴨綠側と豆滿側との分水嶺をなす尾根、その千八百メートルのところに南雪嶺といふ峠がある。咸鏡南道と北道との境になつてをり、朝鮮で最も早く雪を見る峠の一つで、その南麓の白岩といふに寒氣ことのほか嚴しいところである。このときは一尺ばかりのフワ〳〵とした雪があつた。道の北側には見窄らしい小屋が一軒淋しく建つてゐる。峠の茶屋といふにはあまりにも風情がなさすぎる。こんな寒い、淋しいところで一體どんなことをしてゐるのだらうかと好奇心にかられて入口の戸を押し明けてのぞき込んだが、溫突（オンドル）でぬくめられた室内の生あたたかい空氣がこれを遮るかの如く、闖入者の眼鏡を曇らせてしまつた。この附近にはほんの少しばかりの間では

火口壁（大正峰と天池　左端は白岩）

朝日新聞社

あるが、火田民が焼き殘した森があり、珍らしくも枝にはさるをがせまでついてゐる。

南雪嶺の西麓に嶺下といふ小部落がある。この附近は鐵道工事でごつた返してゐる。どろを塗りこめた小屋が澤山建ちならんでゐる。吉州からの汽車がやがて惠山鎭まで伸びるので目下建設工事の眞最中である。この延長線のうち最も難工事とされてゐた南雪嶺も今では全部開鑿を終つてもうレールを敷くばかりになつてゐる。飯山氏から聞いたことであるが、このトンネルを掘つてゐるとき非常に寒くために作業が豫定通りに捗らない、八月のことであつたが、丁度南雪嶺の眞下あたりでは凍土にぶつつかつたとのことである。この凍土が如何なる性質のものであるか、また怎ういふ成因であるかに就いては深く調査されなかつたものゝ如くであるが實に惜しいことをしたものだ。

合水と惠山嶺との丁度まん中に鳳頭里といふ往還隨一の部落がある。百二、三十軒もあらうか、各家の溫突からは黃煙白煙が濛々と出てをり、背後の山から吹きおろしてくる冷たい風がこの煙を押しつけてゐるので部落はすつかり煙につゝまれてゐる。すぐ側の小高い所から見ると丁度雲が盆地を包んでゐるやうである。雪に蔽はれて見るからにすつきりとした甘坪嶺へヂグザグをきつて登つてゆくころには早くも宵やみがせまつてきた。夕陽に赤く照らされてゐるのは南胞胎山であらう。馬上嶺からは白頭山のファースト・グリンプスが得られるといふので、何とかして日のあるうちに行きつきたいものと心は焦つても、舊式の自動車ではどうもスピードが出ず、甘坪嶺を越えるころから急に暮れだし、馬上嶺に登りついたときには足下に惠山鎭の街の灯がきらめき、その外側に凍結した鴨綠江がほんのりと白く光つてゐた。先發隊に迎へられて惠山鎭についたのは七時近かつた。寒いので出迎への人々との挨拶もそこ〳〵に、ころげこむやうにして宿舍白頭館に入る。緞通の上に坐つてゐると溫

突の暖味がだん〳〵廻つてきて、尻の方がほこ〳〵として大變氣持がよい。溫突つていゝものだねなんて溫突の遠か禮讃者も出てくる。街上には少し雪があるので人が通ると布帛を裂くに似た音がする。この音は內地できくのより大分調子がかん高いやうだ。先發隊の人々からいろ〳〵と狀況をきゝ、またその後の京都や本隊の樣子を語り合ひながら夕食を伴にし、ふと氣がつくと藤木さんの顏がみえない。一昨日來風邪をひいて三十九度近い高熱を出し二階でねこんでゐるとのことなので早速交る〴〵見舞に行つたが、もう峠は越したものゝ如く、幾分元氣をとりもどしてゐた。營林署、警察署、守備隊、自動車屋などから電話がひつきりなしにかゝつてくる。來訪者があとから〳〵とつゞき、隨分あわたゞしい。西堀と淺井は夕食の箸をおくなり無線電話についての打合せのため守備隊へ出かけてゆく。隊員は携帶品の整理に忙しい。念のためといふので京都驛から送り出した二百余箇の荷物をいち〳〵點檢したところ、一箇不着になつてゐる。途中でどこかへ紛れこんだものらしいが、それが一體何であるのか判らないので隨分心配した、結局ガソリンであることがやつと判つたので自動車屋で早速買ひ入れて補充をしたが、これがガソリンであつたのは洵に仕合せであつた。

二　胞胎里へ

二十八日はいよ〳〵惠山鎭出發の日である。床についてゐた藤木さんも起き出てきた。座敷二つを打ちぬいた廣い部屋で皆一しよに朝食を攝る。食事のゝち今西隊長から、ベース・キャムプ設立までの間の部署を決定し、それ〴〵つぎのやうに發表した。

本　部　庶務、計畫に關する事務　今西、淺井、長谷川、杉山

偵察班　ルート、キャムプ地の偵察發見に關する事項　奥、兒島、加藤、佐伯

架設班　ルートの修理、テントの架設　西堀、平吉、堀、大和

輸送班　諸物資の輸送　高橋、宮崎、谷、飯山

通信班　後方連絡、通信記錄に關する事項　藤木、丸山、今田

惠山鎭の町で選拔した十六人の人夫が宿屋にやつてきた。皆よいからだをした逞ましい男である。何れも朝鮮服を着て、脚はポソンでかため、守備隊から借りた毛胴着を着こんでゐる。ちよつと打ち見たところなか〳〵頼母しそうである。一昨日ついたトラック一臺の荷物はもう胞胎里へ廻送してあるし、昨日我々と一緒にきたトラックもそのまゝにしてあるので、たゞこゝで買ひ入れた人夫用の米八斗、副食物の鹽鯖、みそ、のろしかの皮、ストーブ、その他荷造り用の繩、細引、立木伐採用の大鋸といつたやうなものを積みこめばよいのである。それからこれを守備隊、警察署に廻してそれ〴〵の荷物を積み込んだ。十時ごろ一同警察署を訪れ、鴨綠江の上流地方に巢喰ふ馬匪賊の動靜について說明をきゝ、なほ當地方の國境警備狀況の概要をもきいた。我々一行の警備、聯絡に直接當つてゐる當署では、いろ〳〵と手配をし非常に緊張してゐる。やがて惠山鎭の中央にある本町の廣場に向つた。そこはもう人の山、日の丸の小旗が波をうつてゐる。守備隊、小學生徒、國防婦人會、町の人々はもとより、對岸の滿洲國長白府からも澤山の人々がやつてきて黑山の人である。しかし極めて秩序よく兩側にきちんと整列してゐる。一般の交通は勿論遮斷されてゐる。我々が一列横隊に並ぶと福田惠山鎭邑長が見送りの人々を代表して激勵の挨拶を述べ、今西隊長が隊員一同を代表してこれに謝辭をのべた。双方とも短い簡單なもので

あつたが實に元氣の罩つた名挨拶であつた。ついで福田邑長の發聲で京大遠征隊の萬歳が三唱された。その雄叫は北鮮の冷氣をふるわし、すみ渡つた寒空に谺した。國境の町からわき昇る歓聲には意氣と、緊張がみち〳〵てゐる。地元の人々からこんな熱誠な見送りと、官民の頗る行き屆いた援助を受けうる我々は實に幸福な遠征隊である。四臺の自動車に分乘すると老も若きも、男も女も、口々に熱誠こめて萬歳々々と叫んでゐる。十一時半、われるやうな歓呼の聲と、打ちふる日の丸の旗の波をくぐつて自動車がゆるやかに滑り出した。すべては國境の町ならでは味へぬ情景、見られぬシーンである。我々も面映ゆること、思ふとゝもに、地元官民の絶大な好意を目のあたりみて如何に心強く思つたか知れない。我々のすぐ後には諸物資を滿載した二臺のトラックがつゞいてくる。その上にはこの町で選抜した體軀の逞ましい十六人の人夫がぶらさがつてゐる。彼等も萬歳の聲に送られて勇躍登山隊に參加するのである、獨り我々のみでなく、町の人々の彼等に期待するところも亦きわめて大きい。

町を出はづれて右折するとすぐ鴨綠江畔に出る。そこには對岸長白府に渡る長い橋があり、橋のたもとは憲兵が護つてゐる。この邊の鴨綠江は全部凍結してゐる。そのためか川幅は割合にせまくみえる。左岸につけられた立派な國境警備道路を六臺の自動車が走る。部隊は登山隊十九名、守備隊十三名、警官八名、人夫十六名計五十六名の多數よりなつてゐる。あの熱狂的な見送りに引き較べると、古色蒼然たる四臺の自動車、二臺のトラック——外に一臺昨日廻送してあるが——ではいさゝか物淋しい感がする。しばらくして渭淵浦の駐在所につく、惠山鎭から一里ばかり。久枝惠山鎭警察署長の案内で所内を隈なく見學した。馬匪賊襲來時の防衛施設、特に工夫された耐寒輕機關銃や諸銃器、非常信號通報等について詳な說明があつた。馬匪賊の跳梁といふ極めて特殊な事情があるこの地方で、國境警備に携つてゐる人々の苦勞は如何ばかりかとしみ〴〵想はれるとゝもに、この馬匪賊

の存在といふことが白頭山登山にも色々と影響し、夏でさへも軍隊または警官の護衛のもとにわづかに二、三の登山隊が山に立ち入るのみなのである。まして冬季の登山に至つては、ことのほか厳しい寒氣は何とかして凌ぐとするも、登山隊、護衛部隊、それに附隨する人夫等のため勢ひ大部隊となり、この多人數と物資の增大は登行速度を遲らし、所要日數の逐加は必然的となつてくる。さればといつて秋のうちに所要の物資を運び上げておくといふことも、馬匪賊が盛んに横行してゐるこの邊では到底事情が許さない。登山技術そのものよりも、種々の困難や複雑な平地交渉が附隨してくるので、冬季登山の企も幾年か遲延してゐたのであらう。

鴨綠江はうね〳〵と蛇行してゐる。この邊までくると、南をうけた箇所はところ〴〵氷が融けて川水が奔流してゐる。道もまた川に併行して曲りくねつてゐる。水流がこちらに寄つてゐるところは對岸の滿洲國にひろ〴〵とした畑がひらけてゐるが、朝鮮側は急な崖になつてをり、その崖をきり開いてわづかに道がつけられてゐる。こんなところに限つて上の溝からはつらゝが下つてをり、時としては氷が街上にまではみ出し、青氷が路一面に蔽ひかぶさつてテラ〳〵に光つてゐるので、自動車がスリップしそうで大變氣持がわるい。水流があちら側に行つてゐるところはその反對に朝鮮側に立派な畑がひろ〴〵と拓けてゐて、ところ〴〵には農家が點在してゐる。こんな家からはきまつて、雪の上に點々とした踏跡が印され、それが川の中心までつゞいてゐる。そこには川の厚い氷に直徑一、二尺位の孔が穿つてあり、朝鮮服をまとつた婦人が蹲んでパガヂで川水を甕に汲みこんでゐる——井戸の掘いこの邊では炊事はもとよりのこと、萬事萬端川水によつてゐる——實になごやかな國境風景であり、あのいかめしい警官駐在所の存在とは全く反對の情景で、妙なコントラストが感受される。畑の端にはこれぞといふ堤塘も見當らないし、家もちよつと打ちみたところでは地盛りもしてないやうだ。こんなのも雨量の少

い、乾燥した地方なればこそ出來ることである。しかし、もし一度大雨が降つたらその被害が如何に大きいかを想像すると慄然たらざるを得ないものがある。これは降水量の多い內地に住み馴れてゐるもの丶取り越し苦勞であらうか。

部落につくとその土地に駐在してゐる警官や消防組、それに學童、村の人々が一列に並んで迎へてくれる。隊長はその度ごとに車を下りて謝意をのべてゐる。この寒空にながい間雪道にじつと立ちつゞけてゐる出迎への人々はさぞかし辛いことであらう。鴨綠江にはなれ、しばらくして行きついた普天堡といふ部落は七、八十軒もある大きな村で、こゝにはモダンな設備を誇る立派な農事試驗場がある。例によつて澤山の人々に出迎へられ、見送られて通りすぎた。相も變らない赤茶けた山肌の間を通りぬけてゆく、もうこれから奥には村らしい村もなく、あちこちに三々五々小さな農家が點在してゐるばかりである。寶泰里近くなると將軍峰がいかめしい岩肌をあらはしてゐる。日かげになつてゐるこまかい岩しわの間には、その光り方から推して氷があるらしい。寶泰里からすぐに登り坂となりヂグザグが暫くつゞく、この坂の兩側は畑であるが畝の間には燒株が澤山にあり最近まで火田民がこの附近に蟠踞してゐたことを物語つてゐる。惠山鎭へくる途中の甘坪嶺やその附近もこゝと丁度同じやうな畑が展けてゐた。一體森林がきり拓かれ、それが漸次畑に代り、耕地面積が順次增加してゆくのはよいとして、現にこんな燒株が澤山ある畑をみても、このやうな畑を耕してゐる農民は隨分えらいことだらうと同情されるが、別段火田民を憎む氣にはならない。しかし、こんな畑と、森との接續するあたりは何丁も〳〵の間見るもいたましい山火事の跡がつゞいてゐる。實に「火田亡國」である。亭々と伸び上つてゐる落葉松の大木が黑こげになつて立ち枯れしてゐる姿には何とも言ひ表しやうのない物淋しさが感ぜられる。いかに勞力の尠い耕作方法

だからとはいへ、またどんなに森林が豊富だとはいへ、森をよくも焼き拂ふ氣持になつたものである。その心情はむしろ哀れむべきものがある。美しい森林は火田民にどん〳〵焼き拂はれてゆく、たま〳〵陽當りの悪い北斜面に焼き殘された一むれの林は濕気の燃料として伐り出されてゆく。北鮮の林は實に不仕合せである。

この邊から奥はこの秋にやつと道普請が出來上つたばかりで、まるで我々のために改修工事がなされたやうなものであつて、幸にも胞胎里まで自動車が通じた。もしこんな退屈な山道をトボ〳〵と歩かされたらそれこそたまつたものでない。三時半今日の泊り場胞胎里の警官駐在所についた。こゝは惠山鎭から約二十五里、自動車で約三時間ほどかゝる。滿鮮の國境線から少しへだゝつてをり、所謂國境第二線であるが、この谷筋最奥の部落だけに警備もなか〳〵嚴重である。人家はわづかに二十軒ばかりの寒村であるが、その割にしては隨分大がゝりな駐在所で、こゝに二十人近くの警官が駐在してゐる。駐在所の周圍にはかなり深い濠をめぐらし、土手を築いて鐵條網がはつてあり、土手のなかは通行が出來るやうになつてゐて、ずつと銃眼がしつらへてあるといふ嚴重さで、駐在所といふよりはむしろ砦といつた方が適切であらう。あたりは相も變らず焼株が立つてゐる畑である。日當りのよい、南むきの斜面などは可なり上の方まで畑が作られてある。貧弱な雜木林がところ〴〵にある。谷間の部落ではあるが山奥にしては割合に明るい。

昨日こゝに着いたトラック一臺の荷物はもう橇に積みかへてある。易損品などはいち〳〵藁で叮嚀にくるんであり、細なところまで親切な注意が拂はれてゐるのにはたゞ〳〵感謝の外ない。早速橇を呼びあつめ、今日中に全部荷造りを片付けて明朝はすぐに挽き出せるばかりにして置くことにした。まづ第一に人夫の統制にとりかゝつた。惠山鎭から連れてきた十六人に、この附近で雇ひ入れた八人を加へ都合二十四人の人夫を駐在所の前庭に

一列横隊にならべ、物資の輸送についていろ〳〵と注意を與へ、人夫頭を任命し、白で番號を書いた赤い腕章を左腕につけさせ、一切番號でよぶことにした。人夫頭を一番にし、その次には內地語を解するものといふ風にして、早速荷物の整理にとりかゝらした。トラックから荷物を卸させて大體分類をし、そのあとから順次橇に積みこんでゆくのである。駐在所の前庭は一パイの荷物で、はいつてくる橇、出てゆく牛、大變な混雜で足のふみ入れる餘地もない。橇は荷物をのせると、外へ出て繩をかけて縛りつけるのであるが、そのときずるい馬子は我々の目がとゞきかねるのをよいことにして、荷物を側の溝の中へほりこんだりするので少しも油斷がならない。集つてきたゞけの橇にはまだ積みきれないのでまた橇を呼びにやつたり、監視をしたり、四方八方に氣を配つてをらなければならない。二十七臺の橇にどうにか積みこんで、薄暗くなるころにはやつと荷物の整理も了つた。人夫達は附近の人家に分宿させ、隊員、守備隊は駐在所に泊つた。駐在所の部屋には溫突とストーブがある。私の部屋は淺井、藤木、丸山、大和に私の五人であつた。食事がすむと藤木さんは原稿を書きはじめ、丸山さんは寫眞機をひねくり廻してゐる。大和君は「もう暫くするとお尻がボカ〳〵してきますよ」などゝいひながら物珍らしげに溫突に薪をくべてゐる。私は飛行機との布板信號符號追加で西堀といろ〳〵打ち合せてゐる。そのうちには藤木さんがせきをしながら原稿や寫眞の後方託送、連絡について打ち合せにやつてくる。最後の村であるだけに何かと打ち合せ事項があつて忙しい。輸送班は今西隊長とゝもに人夫や橇のことについて相談してゐるが、これが容易なことで決らない。つまり朝鮮人夫は雪の上では寢ない、テント生活を強制すると逃亡の虞がある、それでこゝから二里ばかり行つたところに伐採小屋があるからその小屋に人夫を泊めて、そこから每日通はせるといふことに輸送計畫を變更しては如何といふのである。しかし、これだとその往復に時間がながくかゝり、何ほどの

輸送作業も出來ないし、從つて日數も長くかゝるので、どうしてもこちらの初めの計畫通りにやらないと非常に都合が惡いので、互にあれかこれかと考へてゐるがなか〳〵結着がつかない。守備隊でも「朝鮮人が雪の上で寢るかどうか、また寢るとしたらどの位の作業能率があるかといふことは、今回の耐寒行軍の一つの研究事項ともなつてゐる。それでとにかくテントで寢かせてみて、もし逃亡したら、その時はまた別の方法を講ずるといふことにして、一つやつてみませうじやないか」と、我々の計畫を極力支持したので、豫定通り取り運ぶことにやつと落ちついた。初めから未訓練な人夫の使役といふことが如何に面倒であるか覺悟はしてゐたが、まづ惠山嶺にきて、彼等が雪の上ではねないだらうといふことを聞いて、こいつは厄介だと思つてゐると、案の定このことが一番ごてた。計畫や輸送方法が決つてからでもその心配は一通りのことではなかつた。こんなことを打ち合せてゐる間にいつしか夜も更けて、澄み切つた空にダイヤモンドの粉をまき散らしたやうに輝いてゐた澤山の星がだん〳〵尠くなり、空が少し曇り氣味だと思つてゐると灰のやうな細かな〳〵雪がおちてきた。夜がふけるにつれてぞく〳〵と冷えこんでくる。寒暖計をのぞいてみるともう零下二十三度に下つてゐた。

三　虛　項　嶺

二十九日　晴　夜間に小雪。八時半胞胎里の駐在所を全員徒歩で出發。行進順序、尖兵二名、守備隊、登山隊、朝鮮人夫(二十四名)、警官隊、牛馬繞(二十七輛)。

午後二時半先發部隊は虛項嶺(約一四一〇米)着、露營準備に着手。牛馬繞は四時半ごろ到着。後方との連絡、警備のためこゝまで警察の有線電話が特に架設されてある。

宿營は守備隊、警官隊は南テント、登山隊は北テント、人夫二十四名は東テントに分れ、各テントには何れもストーブがある。

六時には全員起き上り何かと用意をとゝのへ、豫定より三十分おくれて八時半に出發した。荷物は全部橇に收まつたので、各自の手廻り品は人夫に擔がせ、寫眞器ぐらゐをポケットに突こんだゞけの輕裝なので至極樂である。こゝからベース・キャムプに辿りつくまでは馬匪賊の一番危險な區域なので哨戒しながら前進してゆく。守備隊は登山隊と人夫、警官隊は橇の護衛といふことに分擔を定め、先頭には二名の尖兵を出して行くのである。尖兵から二丁ほどはなれて守備隊、登山隊、人夫等がすぐこれにつゞき、橇は前後を警官隊に護られて順次進んでゆく。部隊は昨日の五十六名のところへ更に警官、人夫それに二十七臺の牛馬橇とその馬子達が加はつたので總員は百人を超え、その隊列は蜒蜿として數丁の長きに及んだ。昨夜降つた新雪に飾られた野山は朝の陽光に冷たく輝いてゐる。純白の雪野原にポツ〳〵とした黑點が何丁も〳〵つゞいてゐる。このとき「エキスペディション」といふ言葉が無性に想ひ出されてきてならなかつた。事實規模こそ大きいとはいへないにしても、その組織からみても、言語を異にしてゐる土地に入りこみ、未訓練なポーターを使役するといふ點からしても、これをエキスペディションと呼んで必しも不當ではあるまい。我々は宿年の念願やうやくこゝに叶つて、今日こそはエキスペディションの力づよい第一歩を大地に印したのだ。前途に橫はつてゐる種々の困難や幾多の障害は我々の愈らざる熱と自信とを以て打ち克つて進んで行かねばならぬのだ。

空は昨日も矢張りそうであつたが、すつきりと晴れ上つてゐる。こんなにきれいに澄み渡つた空はまだ見たことがない。日本アルプスで晩春や初夏の候にごく稀に見る靑空は、水蒸氣が多いせいか何となくどんよりとしてい

をり、ために重ぐるしい感があるばかりか、やがて雨の近いのを想はせるものがある。秋晴は今日の空にやゝ幾しとするもこんな直截的な明朗さは求むべくもない。すみ〳〵まで澄み切つてこれほどまでにきれいに晴れ上つた空は北鮮獨特のものであらう。陽がすでに高く昇つてゐるのに殘月が明かに見えることでも、どれほど空が澄み渡つてゐるかよく想像されやう。村はづれにはちよつとした急坂がある。橇は折角ほとんど上までやつと辿りついたのにヅル〳〵と逆滑りをしたり、横倒しになつたまゝ坂の下まですべり落ちたり、慘々の態で難澁を極めてゐる。警察の方では今日中に虚項嶺まで行ければ上々と思つてゐるらしいが、我々としては出來るだけ橇を利用して進みたい。虚項嶺から二十丁ばかり先の三池淵までは何とかして陽のあるうちに行きつき度いと考へてゐるので氣が氣でないが、そうかといつてどうしやうもないので、切株の上に腰を卸して橇が上つてくるのを待つてゐるより仕方がない。牛はとにかくとして、この邊の小さな馬は弱い。馬橇はどれも獨力では登りえないで一つの橇に二頭も三頭もの馬をつけて、一豪々々順々に引張り上げてゆくのである。こんな悠長なことをしてゐるので、わづか七、八丁の坂を全部の橇が通過するのに一時間以上もかゝつた。村は足の下に見えてゐる。各家の溫突からは白煙が濛々と舞ひ上つてゐる。溫突は原始的な煖房裝置ではあるがなか〳〵旨く考へ出されてゐて、完全燃燒するやうに仕組まれてある。その白い〳〵煙が陽の光をうけてたゞに白いばかりでなく美しいまでにてり輝きながら靜かに、眞直ぐに昇つてゆく。「煙直上」とはこのことであらう。我々が出發するとき側に立つてぽかんと眺めてゐた十人あまりの朝鮮人は矢張り同じところに立つてまだ我々を見送つてゐる。恐らく彼等は部隊の姿が朝鮮落葉松の森の中にすつかり隱れてしまつても、なほしばしは立ちつゞけてゐることであらう。

急坂を登り切つてしまふと、もうあとは脊の高い落葉松の森の中のなだらかな山道をどん〳〵ゆけば三時間た

らすで上興慶水の伐採小屋に辿りつけるのである。動物の採集を受持つてゐる西堀や佐伯は鐵砲一挺をかついで、雪をけちらかしてあちこちと飛び廻つてゐるが、その努力の甲斐もなく獲物は案外に少い。雪の上には獸の足跡すらないのは我々一同、ことに腕によりをかけてやつてきた佐伯を勘なからず落膽させた。大部隊ではあるし、こんな道草をとつてゐるので上興慶水についたのはもう正午ま近のことであつた。そのうちに橇もポツ〳〵とつき出した。橇がきそろふまで三、四人を殘し、他は先發して出來るだけの露營準備をしておくことにした。私等三、四人の輸送班は橇をまとめ、本隊のあとを追うて間もなく出發したのであるが、この伐採所を通りぬけるのがなか〳〵の骨であつた。それは縱橫に散亂してゐる伐木の上を橇は無理無體に押し切つて行くのであるが、馬子たちは馬がためらつてゐても聲を大にして叱咤するだけで、懷手をしてゐて一向に手をかしてやらない。橇が倒れかゝつてもまだ手を出さない。こんな始末であるから伐木を越えるのに橇は文字通りの七轉八倒で、たうとう轅を折つたものが出來た。止むを得ず他の橇は先にすゝませ、伐採所まで橇を買ひに走らせたりした。こんなことをしてゐるのでます〳〵おくれ、本隊とはだん〳〵はなれ、虛頂嶺についたのはもう日暮れ前であつた。二時間ばかり前についた本隊は薪や敷物を作つたり、テントのフレームを伐つたり、出來るだけの用意をして橇の來着を待ちわびてゐた。途中で轅を折損した橇に相憎ストーブやテント等が積載してあつたが、これが一番遲れてついたのでテントの架設がます〳〵おくれ、その上こゝではどの食糧棚を解けばよいのか、鍋釜や大工道具類はどこにはいつてゐるのか、こんなことは長谷川一人より判らないので、あちらでもこちらでも長谷川、長谷川と呼んでをり、同君は引ぱり凧になつてゐる。とりあえず炊事の用意にとりかゝる。そのうちに夕やみがせまつてきた。この地方は陽がはいると氣溫は急降し、間もなくほゞ最低氣溫近くにまで下つてしまふのでその寒さ

は急にひどくなる。守備隊の圓錘型テントはもう立ち上つて、ストーブの煙突からは盛んに火の粉が出てゐる。こちらはやつとテントがついたばかりである。寒い雪野原で、雪まみれになつた丸太を組み立てたり、縛りつけたり架設作業も樂ではない。それがやつと出來上るとつぎにはストーヴの組み立てであるが、鐵板に觸れると手袋をはめてゐても手がすぐにかじかんでしまつて、細かな仕事はどうも思ふやうにゆかない。その上橇の顚覆や橫轉で鐵板が大分デコボコになつてゐるので、ねじ釘の穴がうまくあはない。こんなことでテントがちやんと立ち上り、ストーブが景氣よく燃え出したのはかなりおそくなつてからのことであつた。それでもテントには三〇〇燭光もあるといふガソリンランプ（ガソリンを燃料とするマントル白熱燈）がつき、めし鍋や暖い汁をもちこんでくると皆急に朗かになつた。ストーブも設計の手違ひのためとかで、少しけむるが落葉松はゴーといつて頗るよく燃える。あたゝかいものが胃袋にどん〳〵はいつてゆくので外套をぬぎ出した人も出來たほどである。人夫達も米のめしにかぶりついてゐる。北鮮奥地の雪の褥も割合に居心地がよい。間もなく匪賊の奇襲をうけた場合登山隊はどこそこへ、人夫達はどこへ避難するやうにと守備隊長からの通告があり、テント場の前方に荷物を移し、それで臨時のバリケードを急設して萬一にそなへ、着劍した歩哨がテントの前に立つ。三十分交代とのことだがこの寒夜に徹宵の歩哨勤務は洵に恐縮千萬である。キャムプの第一夜は靜かに更けて、テントの灯は順次消されてゆく、歩哨の劍光だけがかすかな光芒を放つてゐる。空は隈なく晴れ渡つてゐる。この漫に

夜の空には星が多い
私の胸には惱が多い

といふ俚謠があるが、歌の文句に違はず隨分澤山の星である。人夫達があたつてゐる焚火の煙は眞直ぐに上へ上

へと昇つてゆく。身を切り、肌をさし、痛いやうに感ずる寒さ、しかし靜かで明るい感じのする夜空である。こんなに美しい夜だのに馬匪賊どもは一體どこで我々を待ち伏せてゐるのであるか。

一時すぎであつたらう六土場——虚項嶺まで三里ほどある——から二人の警官が京城放送局發表の氣象通報を書きとつたものを持つて聯絡に登つてきてくれた。これは我々が上興慶水をおひるすぎに出發してからの消息がはいらないので下の警察署では一行の安否を心配し、六土場駐在所へ電話をかけて、登山隊の情況を見屆けてくるやうにとの事で、わざ〳〵聯絡のために冷たい夜風を衝いてやつてきてくれたのであるが、我々の無事なのを見て安心し「下では大變心配してゐますから、無事であることを早く知らせてやりませう」といつてろく〳〵休憩もしないで急いで下つて行つた。

四　ベース・キャムプへ

三十日　晴　登攀ルート偵察のため奥偵察班は白頭本澤方面へ、西堀偵察班は神武城方面へ出發。

奥班は午後五時頃歸着。同七時吹雪模様となつたので宮崎、飯山はテルモス、食糧等を携へて西堀班を出迎へに赴き九時半一同無事歸着。協議の結果奥班のルートを採ることに決定。

からりと晴れ上つたよいお天氣である。今日は二つの偵察隊を出すことになつてゐる。白頭本澤を見付けてそれを遡り頂上に達しやうといふのが大體のプランであるが、白頭本澤へは神武城へゆく夏道を辿つて行つて澤の末端を見付け出し、そこから澤通しに上つてゆく迂回コースと、森林帶を斜に突つ切つて白頭本澤のかなり上流

地點に出でこれを溯つてゆく直線コースの二つが考へられるので、今日はそれ〴〵の方面に偵察隊を出してルートの難易、長短、露營地等を調査してくるのである。架設班も本日は偵察に從事することゝなり、西堀等四名は迂回コースに、奥班は直線コースの方に向ふ豫定である。なるべく早く偵察隊を出發さす必要があるので、炊事當番の私は暗いうちに起きて用意にとりかゝつた。暗いといつても北緯四十二度のこの邊では八時ごろにならぬと日が出ないから左程早くもない。明け方の冷たい風が身に泌みこむ、テントでよく寢るかしらと案じてゐた人夫達も案外元氣な顏をしてテントから出てくる。あまり寢むそうな顏をしてゐないところを見ると熟睡は出來たのであらう。焚火をさせて早速炊事を命ずる。食事の用意が大體出來てから皆を起す、そのころには胸から上の方を落葉松の林の上に出してゐる南胞胎山が桃色にそまり出し、やがて空氣もだん〳〵暖かになつてくる。

偵察隊がテントを出たのは九時ごろのことであつた。この邊は危險區域なので各偵察班にもそれ〴〵三、四名づゝの警備隊がつく、殘りの者はこゝに滯在してゐるのであるが、白頭山の片影さへ見たものはまだ一人もなく、BC（ベース・キャムプ）の位置も定らず、從つて都合では前進キャムプを三つにせねばならぬかも知れないといふ不安な狀態なので、心からのび〳〵と休養するわけにはゆかない。その外滯在といつてもいろ〳〵と用事がある。高橋は寒暖計や濕度計を据へつけてゐたが、やがていろんな道具を背負つて森の中へ姿を消してしまつた。淺井はアンテナを張るといふので木に登つたり、木を伐り倒したりしてゐる。寫眞班の長谷川は望遠レンズで南胞胎山をねらつてゐたが間もなく藤木さん等と連れ立つて三池淵へ撮影に行つた。これといつた藝をもたない者たちは日の丸の國旗を樹頭にかゝげたり、ストーブの煙突を直したり、電話の修繕の應援人夫になつたりなか〳〵忙しい。この電話は有線電話で、我々のために今度わざ〳〵下から架設してくれたのであるが、昨日は電

話が通じなかつたばかりに村の人々にとんだ心配をかけた、それで今日中にどうしても修復を了らねばならないのである。輸送班は荷物の整理に忙しい。荷物といつてもトラック三臺分の物資の整頓といへばなか〳〵大變である。荷物にはいち〳〵番號がペンキで書きこんであり、BCCII行は青、赤、白のペンキで書き分けてある。手元には內容品のリストを持つてゐてそれにより、急ぐ物の順番に並べ、それを人夫達に適當な重さに仕分けさすのである。これをずつと一列に並べておいて、明朝擔ぎ出すのに便利なやうにしておく。こんな事柄は人夫を四、五人呼んできて、自分は丸太の上にぢつと腰をおろしてゐて、舌と指先だけ動かしてをればそれでよいのであるから忙しいといつても樂である。明日からは輸送で忙しくなるので他の人夫たちにはどし〳〵薪を伐らした。彼等の薪割は神技に幾く、それに力量もあるので見てゐても氣持ちがよい。實に見事なものである。

奥班を護衛して行つた警官は四時ごろに歸つてきた。奥たちがテントに歸りついた時はもう薄暗かつたから五時ごろであつたらう。小白澤への途中にはひどい山火事のあとがあつて、道筋はあまりすつきりとしてゐないこと、それに倒木がとてもひどいので割合に行程が捗らないこと、そのため白頭本澤まで到達出來なかつたこと、中の小白澤には水がありそうなこと等を夕食をしながら語り聞かせてくれた。水がありそうなといふ一事が我々の心に非常に强くひゞいた。そのうちに天氣は少しくづれ氣味となり、風が出てきた。七時になるが西堀等は歸つてこない。整備隊について行つてゐた人夫が手紙をもつて歸つてきた。それには「登山隊未だ歸らず、天候險惡になりつゝあるをもつて一行の安否氣遣はる。一同は焚火をして登山隊を待ちつゝあり」と記されてゐた。とりあへずその人夫に食糧を持たしてまた引き返させた。この人夫は賓泰里の者であるが、この邊の男にしては勇敢で、單獨で傳令に立つてゐた。間もなく飯山氏とゝもに私が食糧をもつて一行を迎へに行つた。つめたい夜風

憩ひ（一月六日午後一時大臙脂峰にて）　　平吉　功

をついて三池淵をつゝきり神武城の方へ少し行つたところで丁度西堀班や兵隊さんが歸つてくるのに出合つた。皆はなか〳〵元氣である。「奥班は歸つてゐるか、白頭本澤まで行つたか、何ッ行けなかつた？　俺達は澤をたうとう見つけ、それを澤通しに少し溯つてきたぞ、ボサも何もなうて、大きな奴がところ〴〵にあり、それが丁度よい加減にな、そらすつきりしてゐるぞ」など、早速狀況をきかされた。テントへ歸つてきてからも同じやうなことを繰返し强調し、ルートとしては當然こちらをとる可きだとつけ加へた。結局今西隊長は行程の關係上奥班のルートをとることゝし、明三十一日から前進を開始することに決定して架設班、輸送班にそれ〴〵準備を命じた。

三十一日　晴　偵察班は早朝、架設班は幕營材料一式を携へて出發。一四三〇米の水のあるところにベース・キャムプの位置を決定し、一部の架設を終る。輸送班は朝鮮人夫とゝもに九時ごろ出發。本日は道踏みを主目的とし、荷物は各自四、五貫位とする。

各班とも午後四時ごろから順次虚項嶺に歸着。

偵察班は落葉松の大密林に妨げられて視野を奪はれ、その上無數の倒木に阻まれて行進意の如くならず終に白頭本澤に到達し得ず。これが發見に全力を注ぐことゝなり、西堀、偵察班に加はる。

三十一日もよく晴れた穏かな日であつた。奥偵察班は八時すぎにもう出發した。架設班が幕營材料を分擔して重い荷を擔いで偵察班のすぐ後につゞく。BCで差しあたり入用な品物を擔いだ輸送部隊が警官隊に護衛されて出發したのは九時ごろであつた。數多くの人夫達はシュプールの横手に一列に並び隊伍を整へて行進する。途中ではラッセルの交代を教へたりなどしつゝ三池淵に辿りつく、こゝからは小白山を目指して三池淵の氷上を渡り、雜木林に入る。道は起伏が極めて尠く、登つてゐるのか下つてゐるのか判らないほどである。落葉松の林のなか

を倒木を右に或は左によけつゝ北東目指してたゞどん〳〵行くだけのことである。積雪は虚項嶺附近より幾分深く大體三、四尺位のもので、人夫達は相當にぶかつてゐた。パリ〳〵――急げ〳〵――といつて先を急がせてゐるが行程は割合に捗らない。まだ半分もこないうちに中食の時間がきてしまつた。この分では今日もまた夜行進かと思つてゐると間もなく山火事の跡にはいり、谷が引き返してきてBCはすぐそこだといつたので人夫達は急に元氣を出し、三時すぎに落葉松の密林にかこまれたテント場についた。そこでは架設班がもうテントの架設を了つて焚火にあたつてゐて、ホットレモンを御馳走してくれた。テント場の側の土手の下からは泉が滾々と湧き出てゐる。萬物凍るといふこんな山の中で、こんな綺麗な湧水を掘りあてるなんて偶然とはいへ實に幸運であつた。警官も「冬は非常に水の少い山ですのに」と大變感心してゐた、恰も我々が水のありかを豫見してゐたかのやうに。事實軍隊にしても、警官隊にしても我々に神武城廻りのコース即ち夏道をとるやうにすゝめてゐた。それだのに私達は近道をしたので内心非常に危んでゐた。ところが、きてみると木の混んでゐないところを割合に無駄もなくうまく通りぬけてゐるし、それに水まで掘りあてゝゐるので大變感心してゐた。それからは見通しのきかない林の中ではどうして方向を見定めて行くのか、などゝ交もごもたづねられた。人夫達は荷物を置いて御褒美の煙草をもらひ、いそ〳〵と歸り出した。架設班、偵察班もそれ〴〵引き上げてきたが、結局足のおそい人夫達をつれてゐる輸送班が一番遲れ、虚項嶺に歸りついたときはもうとつぷりと暮れてゐた。偵察班は今日も白頭本澤まで行けないで歸つてきた。倒木と密林に妨げられて右往左往し、白頭本澤の近くへきてゐるのには違ひないと判つてゐながら、澤を突きとめてくる時間の餘裕がなく、已むを得ず引き返してきたのである。

今日は大晦日なので忘年會をやつた。BCの架設がすでに一部了つてゐるのでもうそこに泊れるのであるが、今

夜は全員打ち揃つて忘年會をやらうといふので偵察班もわざ〳〵歸つてきたのである。雪の曠野にちよこんと建つてゐる小さなテントのなかで賑かな忘年會が始まつた。間もなく兵隊さんがくる、警官もくる、大さう盛んな忘年會である。暫くすると今度は兵隊さんのテントから餘興をやるからと誘ひにきた。なか〳〵匠し藝の上手な人もゐた。北鮮地方にきてゐる兵隊さんは大抵東北地方の雪國育ちの人が多いやうだが、今度きてゐた兵隊さんも福島、山形兩縣の人が多く、私は朝鮮の北端で思ひがけなくも、東北訛の歌を耳にして大變なつかしく思つた。

一體こんな大部隊で所謂ポーラー・メソッドといふやうな方法をとつて前進をつゞけてゐると、全員が一ケ所に集結するやうな機會は案外に少いものである。こんどなども、二十日近く山にはいつてゐたが全員打ち揃つて一ケ所にゐたのはわづか五晩位のものであつた。かうなるとチーム・ワークが大變六ケしくなつてくる。むしろチーム・ワークといふよりはもつと廣い意味の「人の和」といふことが大きな意義をもつものだとつく〴〵思つた。どのスポーツでも、また強ちスポーツのみに限つた事柄ではないだらうが、國際登山隊といつた風のピックアップチームや、寄合世帶がとかく破綻しやすいことも萬更取り越し苦勞でもなく、また頑迷固陋なセクショナリストの我儘な言葉だとも早々に斷じ去ることは出來ないであらう。

昭和十年一月一日　晴　守備隊、警備隊、警官隊、登山隊、人夫等全員整列して遙拜式を行ふ。
輸送班は二十餘人のポーターにCI、CII用の荷物を運搬せしむ、一人約八貫位。
偵察班五名及び淺井は十時虛頂嶺を發つてベース・キャムプに向ひ、同地泊。

朝鮮にきてからまだ曇つた日は一日もない。今日の元旦も矢張り連日に劣らぬ快晴である。八時半ごろには守備隊、警官隊、登山隊、人夫等が一列横隊に並んで遙拜式を行つた。このころ、南胞胎山の肩から日が漸く出て

きた。正月はいつも山の中で暮してゐる私達ではあるが、流石にこのときはいひ得ぬ感慨に浸り、旅情はひしひしと胸を打つものがあつた。

今日は輸送班が第一番に出發した。CI用の荷物を運ぶのである。もう道が出來てゐるので荷は重いが早く捗り、暮れないうちに歸つてきた。偵察班は正午ごろに發つてBCに泊り、翌二日には白頭本澤をつきとめ、長驅して山頂部附近の情況偵察をも敢行しやうといふのである。これには西堀も加つてゐる。この晩は人員が減つたのでテントには大分餘裕が出來てきた。

二日　晴　本部を虚項嶺の中繼テントよりBCに移す。隊員も相當重量の荷物を運搬し、人夫は約八貫の荷を持つてBCへ往復す。虚項嶺には殘存荷物管理のため高橋、飯山の二名殘留。
BCに一夜を明した偵察班は八時出發、終に本澤を突き止め、澤通しに溯行をつゞけ、三時半森林限界を突破し、小臍脂峰の北方まで強行偵察、九時ごろBCに還る。偵察隊より山頂部の詳細な狀況報告あり。

つぎの日もまた快晴、虚項嶺には守備隊のテント一つを殘してBCへ移動するのである。人夫には幕營材料とCII行きの荷物を持たし、隊員は寢袋や炊事道具を持つて十時ごろに出發した。久しぶりで重いルックを持つと骨身にこたへてきて辛らい。例のだら〳〵道を約五時間でBCに辿りついた。テントを架設したり、立木を伐つたり忙しい。それでもBCの架設がいよ〳〵終了するのだと思ふと氣も落ちついて流石に嬉しい。BC宛になつてゐる荷物は片端から梱包をほどいて整理する。そのうちにはスキー架けまで出來るといふ始末で、永久施設——大げさな言葉だが——といつたやうな氣分が横溢してゐる。落葉松の大密林の間のほんの猫の額のやうなせまい空地にテントを張つてゐるので、少し陰氣な感じがあるのと、山火事の跡がすぐそばまで來てゐて、木肌の燒けた痛まし

い落葉松が立つてゐるのが――テント場からは見えないが――いさゝか氣にかゝる。製材小屋のやうな嫌なところだと西堀がいつたが、なるほどそういへば伐採小屋のやうなところもある。わづかばかりの空地にテントが押しあつて立つてゐるので、フレームとフレームとが衝きあわさつてゐる。側では鋸の音がしてゐるし、アンテナの邪魔になる樹木が幾本も伐り倒される。その度ごとに枝と枝とが觸れ合つてガサ〳〵と音がしたかと思ふと、ドッカンといふ大音とゝもに地響がしてくる。伐木を引つぱつてくるかけ聲、割木にする斧の音、こうなつてくると伐木丁々といつたやうな風情などは微塵もなく、これではどうしても飯場氣分である。しかし西堀がいふほど氣持のわるい處でもなく、風當りの勘なそうな落ちついた泊り場である。八時ごろ西堀、奥等の偵察隊が歸つてきて、今日は白頭本澤を澤通しに登つて森林限界を突破し、小臙脂峰の横まで行つてきた、白頭本澤はよい澤だぞ、上の方はビュー〳〵吹いてゐたなどゝ語つて皆を大變悦ばせてくれた。これに勢づいて今までは控へ勝ちにしてゐた御馳走が出だした。今度農學部で作つてきた罐詰や乾燥野菜が隊員の腹を充たしてくれる。食慾も增進してゐる時分なので何を喰べてもうまい。

三日　曇のち雪。新積雪約十五センチ。休養。高橋は人夫を率ゐてBC着。飯山は下山。物資輸送ほゞ完了のため人夫は六名を殘し他は下山。警備隊も全部BCに移動を完了。

三日の朝は初めてどんよりと曇つたいやな空模様であつた。九時ごろからは灰のやうな細かい雪片がおちはじめた。しかし、いよ〳〵今日から白頭山の核心めざしてじわ〳〵と攻めよせてゆくのであるから隊員の意氣は頗る軒昂である。出發の準備をしてゐるとき隊長は突然「本日全員休養」と宣した。輸送に、偵察に、物資の整理に、この地にきてからといふものは忙しい日を送つてゐるのでこの日の休養は大變うれしかつた。ひる前から雪

はしん〳〵とふり出した。二時ごろ守備隊、警官隊がBCに到着し、人夫十六人も荷物を持つて同行してきた。今日で荷物の輸送も大體了るのでこの十六人は解雇することにした。十六人のうち九名は守備隊に雇はれ、七人はよれ〳〵になつた朝鮮銀行の紙幣を手にしていそ〳〵と山を下つた。四時半ごろ高橋が殘りの人夫をつれて登つてきた。これで全員BCに結集したわけである。こゝに白頭山登頂の豫備工作が全部完了したのでいよ〳〵登攀にかゝることゝし、次のやうに部隊の編制替を行つた。

第一突擊隊　奥（リーダー）平吉、堀、兒島、加藤、谷、佐伯の七名、四日BC發、CIIIを架設し、白頭山の最高點大正峰に登る。

第二突擊隊　今西（リーダー）西堀、高橋、淺井、大和の五名、六日出發、第一隊を掩護しつゝ前進し、天池の調査及び第三高峰の層岩（二七三七米）に登る。

第三突擊隊　宮崎（リーダー）長谷川、杉山、藤木、丸山、今田の六名、七日出發、前進部隊の掩護をなしつつ、CIIIより第二高峰の白岩（二七四一米）へ往復する。

詳細な行動表が各隊に通告され、隊長から種々の命令や注意があり、各隊ともいろ〳〵と作戰計畫をたてるのに忙しい。緊張と歡喜のひと時である。第一突擊隊は現役部隊で、白頭山の最高點を目指して眞先に登攀するのである。この隊に加へられた者は嬉しそうなほゝ笑を浮かべてゐる。昨日惠山鎭營林署の宇津木さんが虛項嶺まで慰問に登つてきて、そのときお餅をどつさりもらつた。それを高橋が運び上げてくれたので一同大悅びで、多少急性胃擴張になつてゐる隊員どもは、食後であるが餅をストーブの上で燒き、汁の中にほりこんでおぞうにを作りわづかに正月氣分に浸つた。すると間もなく、我々は生理實驗の對照になつた。背筋力計とかいふひどく力の要

る奴を引張らされたり、血壓の試驗をされたりした。淺井と谷がこま〳〵としたデーターをとつてゐる。

五　前　進

四日　晴　前進キャムプ用の物資を全員分擔し九時出發、（各員の荷物は八貫乃至九貫）午後三時小臍脂澤と白頭本澤との出合（約一七〇〇米）に到着、直ちにCIを架設。

前進キャムプには我が國最初のボーラー・テントを使用。

奥、平吉、堀、谷、佐伯、大和の六名をこゝに殘し他はBCに歸る。この夜CIの最低氣溫零下四十一度、守備隊のテントでは零下四十三度（遠征中に測られた最低）。

ねるときまだ盛んに降りつゞいてゐた雪もこの朝からりと霽れあがつて空には一點の雲もなく澄み渡つてゐる。恰も我等の第一突擊隊の出發を祝するかのやうに。テントの前に皆集つて第一隊の出發のためにエホッホを三唱した。その聲は隨分と元氣で、勇壯な雄叫びであつたが、だゝつぴろい森の中のことゝて何の反響もなく、勿論谺もしない。すーつと落葉松の森に吸ひこまれてしまつた。CIII用の荷物、それに重いラジオ用品、幕營材料等の嵩高の荷物はとてもルックにははいり切らないで頭よりもまだ高く積み上げられてゐる。全員八、九貫の荷物を擔いで九時に出發した。昨日一日中ひつきりなしに降りつゞいてゐた雪は約五寸ほど積つてゐて、偵察隊のシュプールも大分吹き消されてゐる。荷物が重いので皆よろ〳〵として歩いてゐる。林はこんではゐるが小さなポサがないので氣持のよい林間行進をつゞけてゆける。倒木も割合に少くなつた。この倒木であるが、ところによつては算を亂してバタ〳〵と見事に倒れてをり、實に慘憺たる光景を呈してゐる。これがごく一部の區域に限ら

れてゐるのである。そんなところから少し離れるとそこには枯木が群をなして立つてゐる。枯木でも立つてゐるのにその近所にはこんなに澤山の倒木があり、その對照が非常に奇異の感をいだかせる。しかも多くの場合かういふ倒木區域ともいふべきものは線をなしてゐる。恐らく旋風の中心が通過したあとにこのやうな細長い倒木區域が出來たのであらう。この邊は一帶に岩盤であつて土壤はごく淺いそうであるから、根は地中ふかく入り得ないので、少しひどい風が吹くと一たまりもなくバタ〳〵と倒れてしまふらしい。DCを出て一時間あまりもすると白頭本澤にはいつた。この澤を見つけ出すのに偵察隊は隨分苦勞をさゝれたのであるが、澤にはいる少し手前に小丘陵がつゞいてゐるのでなるほどちよつと見つけ苦くそうな地形である。澤には二段の典型的な段丘が出來てゐる。澤の中はかなり廣く、絶好のルートで、主に河原を行く、兩岸がせめよせてきて澤がせまくなつてゐるところは、丁度林間につけられた切り開きの中を行くやうな氣持がする。大雨が降つた直後には瀧にでもなるらしい箇所も二、三あつた。こんなところは一〇米ばかりも登りさへすれば、そこには幅の廣い段丘が開けてゐるからその林の間を行けばよいので、高廻りの苦心といふものも更にない。荷が重いので休み〳〵行く。現役の若いものでもふう〳〵いつてゐる。二時ごろ風が出てきた。雪面には鱗狀の小波が出來てゐて偵察隊のシュプールも完全に吹き消されてゐる。ストックのリングが雪面から離れる度毎にパッと粉雪が散つてゆく。風は實に冷たい。涙水があとから〳〵と出てくるのには施す術もなく皆往生した。間もなく河原が急に展けて、廣河原といつた風のところに出た。こゝは白頭本澤と鮮奥澤との出合ひである。風かげにはいつて少し息を入れて、また寒風を衝いて出かける。それから一時間ほどするとまた前にも增してひろ〳〵とした河原に出た。これは白頭本澤と小臙脂澤とが合してゐるところである。横手の小丘に登ると落葉松の小枝の間から白頭山の上半分がはるか彼方に小さ

く見えてゐる。いつしか荷をおいて皆小丘の上に集り、望遠鏡を交る〴〵廻して山を眺めてゐる。頂上附近に濛々と舞ひ上つてゐる雪煙と、あらわな地肌が風の強さの一通りでないことを何よりも雄辯に物語つてをり、思はずこりや凄いぞと武者ぶるひをした。こゝをCIにすると翌日は定界碑まで行けるか怎うかといふことについて議論がはじまつた。偵察隊に加つてこの附近をずつと見廻つた西堀はもう一時間ほど前進するやうにと主張してゐたが、重荷に疲れたのか軟論が勝を占め、結局こゝがCIに決定された。今夜こゝには第一突撃隊員のうち奥、平吉、堀、谷、佐伯、大和の六名が泊ることになつてゐる。風當りのなるべく尠なそうなところを物色してゐると、テントを風當りの強いところに張つて耐風試驗をしてみてはといふことになり、小丘のすぐ下の風道に張ることにした。この附近と、鮮奥澤の出合附近とには澤筋から少し横手にはいるとまるで庭園のやうにこぢんまりと落ちついてゐて、風當りの少い靜かそうなところが隨所にあり大變氣持のよい泊り場がある。テントの周圍に荷物を置き、空になつたルックを背にしてBCへと三段滑走をはじめる。重荷に惱まされて喘ぎ〴〵やつてきた道も空身になり追風をうけると隨分樂であり行程も捗る。こんな調子ならもう一時間位は前進をつゞけることも出來たのになどゝ今になつて勝手な熱を昇げ出すものもあつた。何でも暗くならないうちに出來るだけ行つておき度いといふので皆ピッチをぐん〴〵上げた。白頭本澤から別れるところではもう暗くなつて咫尺を辯ぜず、夜風は身を刺すやうに冷たくなつてきた。なだらかに起伏してゐる森の間をヘッドライトを賴りに進む。三十分ばかりして、もうBC近くなつてからであるが、どれもこれも電灯の光が弱くなり、終には螢の光のやうになつてしまつて全く照明の用をなさなくなつた。まるで急に盲になつたやうなもので行進意の如く捗らず、わづかばかりの距離を歸るのに隨分時間を喰ひ、相當おそくなつてからBCにかへりついた。電池は今朝取りかへて行つたのにもう消

えるなんて不思議だと思つて、ストーヴの上に置いてみたところ、みる〳〵うちに灯が明るくなつてきた。矢張電池が凍つてゐたのである。このとき寒暖計は零下三十五度に下つてゐた。夕食がすんでからは昨夜のつゞきで血壓、脈搏、背筋力等の調査があつた。

この夜のことであつた、CIではたうとう零下四十一度に下つた。虚項嶺で露營を初めてから零下三十度以下にはたび〳〵下つたが、零下四十度を超したのはこの夜が初めてゞあり、またこの晩だけのことでもあつた。この日CI近くへきたときの風は實に冷たく、歸りには電池が凍つたりして、この寒さは格別だと思つてゐたがたうとう零下四十度を超した。しかし初めて經驗したこの零下四十一度といふ寒さは——何れこれは拂曉のころであり、そのときは勿論行動はしてゐないが——我々にとつてはさほど辛いものではなかつた。北鮮に入つてから二、三日間位でこの地の寒さに馴化したやうで、これは思つてゐたより短期日のうちに馴化出來た。しかし寒さも零下三十度を超すと相當冷たく感ずる。皮膚感覺の上からいふと——濕度も大いに關係するが——どうもこのあたりに一つの段階があるやうに思はれる。その次の段階が大體どの邊か今度は判らなかつた。

五日　晴　CIにあつた第一突擊隊はCII用の物資を携行し、大和を殘して九時出發、折からの強風を衝いて定界碑附近まで前進し荷物を置いてCIに戻る。今西、兒島、加藤がICよりCIに移る。

正午朝日新聞社の長友機飛來し、十二月二十六日以後の新聞、ガスマントル、通信筒をICに投下。無線電話と地上の布板信號とを以て空地間の連絡を行ふ。

昨夜の寒さも何處へいつたのか、日が昇り出すとあたゝかくなつてきた。今日もよく晴れ渡つた好いお天氣である。正午ごろに飛行機がくる筈になつてゐるのでラヂオ係の淺井は配線をしたり、電池や何かをストーヴで暖

めたりして交信の用意をしてゐる。焚火をして發煙信號をするために杉山が青葉を蒐めに廻つてゐる。私等は筵、キハツ油等の發煙材料や布板信號を人夫に擔がせてもよりの空地へ出かけて行つた。まづ焚火をして、布板信號を作り、信號を判り易くするためそのまわりのボサを刈りとつてゐると早や三池淵の方に胡麻粒が見えだした。爆音が風に乘つて傳はつてくる。豫定より少し早かつたので隨分あわてた。一生懸命に落葉松の枝を拂つて青葉をくすべたが焚火が充分に出來てゐないうちであつたので思ふやうに煙が出ない。フワ〳〵とした僅かばかりの煙はすぐ風に吹き消されてしまつて高くは昇らないうちに紺碧の空にとけこんでしまふ。飛行機は我々のゐる位置が判らないものか神武城の方に飛び去り、その上をしきりに旋回してBCを探し求めてゐる。多分神武城方面にずつとつゞいてゐる偵察隊の古いシュプールを辿つて行つたものらしい。いくら經つてもこちらにやつて來ないので實に氣が氣でなく、機首がこちらに向くと焚火に雪をかける。すると瞬間濛々たる白煙が上る、こんなことを幾度か繰返してゐた。飛行機は旋回を止めて白頭山の頂上の方へ行つた。山を一、二度ぐるりと廻つてから神武城の方にゆき、またしきりに旋回をくり返してゐる。やつとCIを發見したらしい。白頭本澤の眞中についてゐるシュプールを辿つて終に森の中から幽かに立ち昇つてゐる煙を發見し、ぐん〳〵と機首を下げてきた。BCの上を低く、ごくゆつくりと二、三度旋回し、赤布をつけたものを二、三箇投下して、もときた三池淵の方へ機影を沒した。飛行機からは十二月二十五日以來の新聞が三揃へと、通信筒、ガス・マントルが百箇投下された。ガス・マントルは三打ばかりがどこかに紛れこんで判らなくなつたので飛行機から投下してくれるやう、大急ぎで電請したものである。ガス・マントルが切れそうでひや〳〵してゐたが、これでほつと安心した。通信筒からは天氣圖、メッセージ、天池の結氷狀況の報告等が出てきた。機上とBC間のラジオ交信はどうも旨くゆかなかつた。こちら

は随分頑張つて發信してゐるのに何の應答もない。首をかしげてゐるところへ通信筒がおちてきて、「本日寫眞班同乘のためラヂオ・オペレーター來らず交信不能」とあつた。

今西や第一隊のものは飛行機を見送つてCIへ登つて行つた。西堀は紫外線測定器を人夫に擔がして出てゆく、高橋は落葉松や唐檜の枝ぶりか何かを忙しそうに撮影してゐる。私もついて出て物珍らしげに側をうろ〳〵してゐたが、何の役にも立たず、どうも邪魔になりそうなのでテントに歸つて中食の用意でもすることにした。食事が了ると皆新聞を引ぱり出して讀んでゐる。一月一日の新聞であつたか、バードの南極の記事が出てをり、その中にはラヂオについても言及されてゐたが淺井がいたく感心してゐた。

六日　晴　第一突擊隊は奥と今西とが交代し、午前十一時半CI出發、午後五時ごろ強風の吹きすさぶうちで、定界碑直下にCIIを設く。
第二突擊隊と第三突擊隊の宮崎、丸山はBCよりCIへ。
人夫六名BCよりCIへ物資の殘りを運搬往復。

六日、第二隊がCIへ向け出發する。連絡掩護の都合上私と丸山氏の二人が第二隊と同行することにした。補充の荷物もかなりにあるがこの間ほど重くはない。天氣も相變らずよい。ゆつくりと歩いて行つたが三時ごろCIに辿りついた。丘の上の落葉松の樹頭にくゝりつけてある日の丸の旗が非常にはつきりと見立つてゐる。第一隊の奥が殘つてゐた。兩足の小指を凍傷にやられたのでこゝで靜養してゐるのである。增岩山の肩に夕日がは入つてしまふとぐん〳〵と冷えこんでくる。しかし住心地は上々である。ポーラーテントにもガソリンランプが灯つた。ランプを持ちこむと、テントの內はたちまち零下十度位にぐつと上る。奥は兩足が凍傷になつてゐてもまだ頂上を諦め兼ねてをり、メジシン・ボックスを側に引きよせて手當に餘念がない。

七日　晴夕刻降雪、漸次荒模様となる。

第一隊は今西隊長と、もに九時四十分CII發、十一時四十分最高峰たる大正峰に登頂し午後一時半CIIに歸着。指揮、聯絡掩護の關係上今西、佐伯はCII撤收まで止ることゝなり、他の第一隊員は午後二時發、五時半CI着、夕食をとり堀を殘して七時發、十一時半BCに歸着。

第二隊は　午前九時半CIを發し、午後二時半CIIに入る。

第三隊の殘員は午前九時半BC發、午後三時半CIに着く。

三寒にはいつてゐるのだが毎日よい天氣がつゞく、今日は十時ごろに西堀等の第二隊を送り出してから、薪を伐つたり、附近を撮影して廻つたり、テントを掃除して片付けたりしてゐるともう三時ごろになつた。間もなく第三隊のエホッホが聞えてくる。長谷川の顏色が隨分惡いと思つてゐたらすぐに寢こんでしまつた。幾日も〳〵の長い間澄み渡つてゐた空がおひるすぎから少し濁りだした。颯々たる風がとき〳〵吹きぬける。增岩山の肩あたりの落葉松は大分搖れだした。どうも荒模樣である。第一隊はまだ下つてこない、今朝の天候であれば頂上へは間違ひなく登つてはゐるであらうが。何れにしてもこの時間では夕飯を喰はせてやらねばならない、カチ〳〵に凍つて白くなつてゐる殘飯に湯や味噌を入れておじやを作りだした。うどんも出來た。ミルクも熱くなり、もう薄暮となつたのにまだ歸つてこない。折角のあつい雜炊も冷えてしまふ。飯をお椀によそつて喰べてゐるうちに、お椀のふちの方からどん〳〵凍り出すといふ寒さであるから火から卸すとすぐに冷たくなり、やがてカチカチに凍つてしまふのでたまらない。第一隊は一體何をしてゐるのだらうかと額にしわをよせ、出迎へにゆく準備をしてゐると元氣なエホッホがきこえてきた。テントを飛び出してみると谷の奥の方でヘッドライトが五ツ六ツちら〳〵と光つてゐる。早速こちらからもエホッホを叫ぶとすぐに返事があつた。その聲の元氣なことから推し

て登頂は無事に成功した事が判つた。それ！　といふのでおじあを煖めたり、ミルクを火にかけたり歡待するのに大騒ぎである。

十一時四十何分かに無事登頂したこと、天池に張りつめてゐる氷の美麗なこと、頂上では風が強くて寫眞機がゆら〳〵と搖れるので三脚を押へてゐてやつとパノラマ寫眞を撮つたこと、森林帶を出はづれると雪が少いこと等その他山頂部の情況を詳しく語りきかせてくれた。冬期初登攀に成功した彼等は至極元氣である、我々も色々な模樣を親しく聞いて大いに愉快になつた。連日に亘る偵察、輸送、架設作業の勞苦がいまやつと酬いられたのであるから。この外に層岩が實に立派な山であること。白岩へは大分遠いこと等も報告してくれたことは覺えてゐるが、そのときは別段氣にもとまらなかつた。大正峰の登攀に成功してくれた悦びで胸が一杯であつた。風がだん〳〵吹きつのつてきた。焚火は風に煽られてゴー〳〵と音をたてながら燃えさかつてゐる。山の方の空は曇りだし、そのうちに風には雪がまじつてきた。第一突撃隊は天氣運が非常によかつた。

第一隊がBCへ向つて出發してからCIでは夕食である。もう肩の荷がすつかり卸りたのでこの日の晩餐は實にうまかつた。何の話をしても愉快でたまらない。テントの外は風の音とゝもに更けてゆく。

八日　雪のち晴　風強し、本日各隊とも滯在。正午すぎCI以下漸次晴れ模樣となる。昨夜半から今朝にかけて強風物凄く安眠出來ず。正午朝日の長友機が吹雪を衝いてCIに飛來。

何時ごろのことであつたか風の音に眼を醒すとテントの天井はしきりに搖れてゐる。ビューツと強い風が吹いてくるとテントはぐつとへちゃがつてしまふが竹製のフレームは直ぐに起き直つてくれる。幾度も〳〵こんなことを繰り返してゐるうちに風下側の竹がつぎめのところから一本折れた。寢袋からごそ〳〵と這ひ出て豫備の竹

を添木にして應急修理をしたが、こんなになるのは綱の引つぱり方が悪く、補強が充分でないからである。外はまだまつ暗で、雪まじりの風はなか〳〵止みそうもなく、風道に立つてゐるテントを手嚴しく吹きつける。明るくなつて少しづゝ風が鎭まりかけるまでに竹がもう一本折れた。焚火はすつかり雪に埋もれてしまつて、そのまわりに置いてあつた食糧や食器のありかも判らない。枯木にぶら下つて、雪まみれになつてゐる寒暖計の度盛は零下二十四度を示してゐた。この天候では上の隊は到底前進出來まいから、第二隊は滯在することに決め、十時ごろ大分風が靜まつてきたのでテントの綱をはり直したり、雪をかきのけて米や味噌を掘り出しにかゝつた。

今日は飛行機がくるはづになつてゐるが、この風では多分來ないとは思つたが、とにかく布板信號だけは出しておいた。テントのなかでねころんでゐると變な音がしてゐるやうなので外に出てみるとまがふ方もない飛行機の爆音である。霏々とふる雪のなかに機影がごく幽かにみえる。ひどく風に煽られて旋廻も思ふやうに出來ないらしい。通信筒を落して早々に歸つて行つた。通信筒には「雲ふかくして頂上不明、天池への投下不能、明日投下す」とあつた。このことがあつて間もなくうす紙をはぐやうに空が晴れだした。風にはこばれてきた雪が暫くの間ちらついてゐたが、やがていつもの通りの快晴になつた。飛行機ももう三十分ばかり遲くきたらよかつたのに殘念なことをしたものだ、この夜は昨夜にひきかへて實に靜かであつた。

九日　晴　第二隊は午前十時(I)發、天池への乘越で朝日機の飛來を待つたが遂に來らず、幕營材料はなく、食糧も少なかつたが、敢然天池に下り、天池の氷上を渡つて宗德寺に四時ごろ到着し夜營。第三隊は長谷川を殘し、奥を加へて午前九時半(I)發、午後四時(II)に到着した。

同夜の隊員配置は

天池宗德寺　西堀、高橋、淺井、大和

CII　今西、宮崎、奥、杉山、藤木、丸山、佐伯、今田
CI　長谷川、堀、平吉、兒島、
BC　加藤、谷

九時ごろ第三隊は堀に見送られて白頭本澤を登りはじめた。CIにつくなり寢こんでしまつた長谷川はどうも快方に向はないので止むなくCIに殘ることゝし、凍傷で行惱つてゐた奥が第三隊に加つたので人數は矢張り元通りの六人である。昨日の大吹雪でシュプールは跡方もなく吹き消されてゐる。澤を登りつめて尾根にかゝるあたりから落葉松の丈は低くなり、曲りくねつた枝がお行儀わるく四方に張り出してゐる。こんな落葉松もだん〳〵疎になつてやがて小さいのがあちこちにぽつ〳〵と生えてゐるばかりになつた。この邊までくると雪は殆ど吹き飛ばされてゐて凹地に殘つてゐるわづかばかりの雪もすつかり堅くなつてゐる。久しぶりで草の褥に腰を卸して長い休憩をとつた。東の方にひろ〴〵と展開してゐる豆滿江の水源地々方の山々は、落葉松の密林にすつかり蔽はれてゐて文字通りの大樹海である。かなり距つてゐるはづの北胞胎山は、まるで赤外線寫眞でも見てゐるかのやうでディテールまではつきりと見えてゐる。靄といふやうなものはどこにも見當らない。澄み切つた紺碧の空が果てしなくつゞいてゐる。虛項嶺の泊り場ではつい鼻の先に見えてゐた南胞胎山がはるか彼方に遠のいてしまつてゐる。隨分遠くまではるゞ〳〵きたものだといま更ながらしみ〴〵と思つた。小臍脂峰の横腹からは增岩山、間白山、臥獅峰、鮮奥山等の一群の山々が光線の關係で大變グロテスクに見える。間白山などは白頭本澤附近からは非常に端麗な姿に見えてゐたが、こゝからは隨分變りはてゝる格好である。おひるごろなのでもう飛行機がくる時分であるが、一向に爆音がきこえてこない。細谷に殘つてゐる雪を辿つて爪先登りのだら〳〵坂を上へ〳〵

第一キャンプにて（一月十四日午前）　兒島勘次

と登つて行く、間もなくアイゼンにはき替へたが、附近にはスキーデポに適當な特徴のある箇處も見當らないので仕方なしに擔いでゆく、附近一帶は曠漠たる大高原なので、こんなところで霧にまかれたらそれこそどんなであらうなどゝ語り合ひつゝ喘ぎ〳〵上つてゆく、神武城の方へゆく澤と白頭本澤の二つの澤が極く相接近してゐてその分水嶺がはつきりとしてゐないので上の方から下りてくる場合には充分注意を要するところである。大臙脂峰の腹をまくあたりから、だん〳〵荷物が肩に喰ひ込んできて行程は思ふやうに捗らない。三時ごろへト〳〵になつて定界碑のすぐ下に建てられたCIにたどりつき、今西と宗作が迎へてくれた。間もなく今西等は大臙脂峰へ登りに行つた。こゝから大臙脂峰へは尾根通しに行つて往復約二時間行程である。今日飛行機はたうとう來なかつた。西堀等の第二隊はコルで飛行機の飛來を待つてゐたが、午後二時ごろ終に意を決して天池に下つて、氷上を横斷し宗德寺に向つたそうであるがこの寒空に、あんな破れ小屋ではさぞかし辛からうと氣にかゝつて仕方がない。飛行機もどこかへ不時着陸でもしてゐるのではないかなどゝこのテントでは憂鬱な話が出る。やはり強い北風がしぢゆう吹きつけてゐる。しかしこゝのテントは綱がきちんと張つてあるし、テントの裾には石を置いたりなどして嚴重な補强工作が充分に施してあるので强風がふきつけてもビクともせず端然と立つてゐる。こんなに風の强いなかを嵩高の荷物を運び上げるのは並大抵の苦心ではなく、その日は折あしく、殊の外風のつよい日であつたそうだが、テントの架設作業も一通りのことではなかつたらう。前進部隊の勞は多とせねばならない。いろ〳〵の關係で、明日第三隊は三つに分れて行動することになつた。卽ち天池撮影のため丸山、今田の二名は天池に下つて宗德寺に至り第二隊に合すること、奥、杉山は大正峰に登つてCIへ引き返すこと、殘る藤木、宮崎の兩名は第三隊當初の豫定通り白岩へ往復することにした。風のつよい廣い野原に佗しく立つてゐるテント

もこの晩はよく安眠出來た。

十日　晴のち雪　第二隊の淺井は掩護、飛行機への信號等の用務を帶びて殘留、西堀、高橋、大和は午前九時に宗德寺を發し、正午層岩頂上を極め午後三時宗德寺に歸着。第三隊は三つに分れ、奥、杉山は大正峰に登りCIへ下る。丸山、今田は天池に下つて宗德寺に至り第二隊に合す。宮崎、藤木は白岩へ往復。

この日風強く加ふるに午後三時頃より吹雪。白岩へは、九時半CI發、三時十五分白岩頂上、七時CII歸着。

十日、九時ごろには仕度を了へて行進をはじめた。宗德寺にゐる第二隊へ食糧補給にゆく宗作も一緒に出た。冷たい風が吹きつゞけてゐる。間もなく大正峰へゆく奥、杉山に別れ、谷間を二時間ばかりも登りつゞけて行くと天池へ乘越すコルへ出た。天池への下り口としてはこの附近では恐らく唯一の箇處であらう。なるほどこゝからの天池やこれを圍む層岩以下の山々の景觀は實に素晴らしい。大密林、それにだゝつぴろい高原といつた風のいまゝでの白頭山風景とはすつかり趣を異にしてゐる。急な崖をはせ下つて、もう天池の水上を歩いてゐる宗作の姿が針の頭のやうに小さく見える。やがて丸山、今田の兩名が下り出す。こゝの下りは相當急だ。強いしかも冷たい風がひどい勢で吹き上げてくる。私達もやがて尾根縱走をはじめた。二、六五一米の瘤のあたりで今西に別れ、二人きりで輕石まじりの風に飜弄されながらぼろ〳〵の岩稜や、ふき溜りの雪の中をもそ〳〵とすゝむ、層岩の方からはいやな雲がむく〳〵と出てきて、それがだん〳〵こちらへ吹きよせてくる。天池が刻々に雲につつまれてゆき、天候がだん〳〵惡化してゆくので心では隨分焦つてゐるのだが足がどうも思ふやうに動いてくれない。風に煽られてひよろ〳〵としながら、幾度か登つたり下つたりして三時十五分やつとのことで白岩の頂上

にたどりついた。途中別段悪場があるわけではないが、細い尾根筋を縦走し、強い風に勘なからずいためつけられて難行に難行をつゞけ、やう〳〵のことで目指す白岩の頂にたどりついたのではあるが、このときは怎うしたのか別に「感激」といつた風のものはあまり起らなかつた。それでもやはり、附近に散らばつてゐる輕石の大きな塊を拾ひ集めてきて型の如くケーアンをつみ上げ、ピッケルを振り上げてエホッホを叫んだ。このエホッホも唇を出るや否やつよい風に吹き消されてしまつて何だか張り合ひがなく、一そう淋しくもあつた。風當りをさけるために寢ころんで、堅パンを噛りだした。雪がしきりに吹きつけてくる。風によろめきながらもときた尾根を急いで下りだした。ボロ〳〵のやせ尾根は敬遠してトラバースをすることにしたが、わざ〳〵こちらへ廻つただけのこともなく、思つたほど樂ではなかつたのみか、がら〳〵の岩を蹴ちらかし、ふみ落しながらよろ〳〵と進まねばならなかつた。疲勞は漸次加はり、少し歩いては休み、立ち上つてもすぐにまた休む。雪を把んで口へ入れてから〳〵になつてゐる喉をわづかに濕すのであるが、口の中には砂が殘る。この邊の雪は砂——輕石の粉——だらけである。天池への乘越に辿りついたころにはもう暗くなり、それに天池にも雲がかゝつて何も見えなくなつてゐる。Ⅲのある高原も雲がすつかり包んで、たゞ大臙脂峰の頭が雲海の上にちよこんと出てゐるばかりである、丁度大洋にうかぶ小島のやうな格好で。風には雪さへ混つてきた。この雲のなかで、暗くなつてから、あんな廣い野原で一體どうしてテントを見つけ出そうかと心配しながら下りはじめ、間もなく雲の中に吸ひこまれてしまつて全然見透しがきかなくなつた。坂も下りきつて廣い野原の一角に辿りついた。ところ〴〵には今朝のアイゼンの爪跡も見かけたが咫尺を辨ぜぬ暗夜のことゝてすぐに見失つてしまふ。大體の方向を定めてかなり行つたところで、草の上に腰を卸した。風があるからそのうちにはどこか雲も切れて何か見えるだらうと思つて

三十分ばかりも待つてゐたが一向にそんな氣配もなく、むしろます〳〵ひどい吹雪になるので、止むなくまた歩き出した。しかしそれは當も、自信もないたゞのそゞろ歩きであり、實に賴りないものであつた。五分ほどすると吹雪の奥にかすかな灯が見えた。今西が我々を出迎へにきてくれたのである、このときは實に嬉しく、急に元氣が出て駈け出したほどである。輕石まじりの雪を噛つてゐた口が間もなくブランデーの香高い、あつい紅茶を啜つた。テントへは七時ごろに歸りついた。今西や宗作がひどく喜んでくれ、あの無口な宗作さへもが、あゝよかつた〳〵と何度も繰り返してゐた。この二人の悦びにつりこまれて、このときになつて漸く登頂の歡びがこみ上げてきた。第二隊も層岩に多分成功したらしいとのことです〳〵嬉しくなつた。空は墨を流したやうにまつ暗になり、暗雲のなかに立つてゐるテントを強い風がひつきりなしに吹きつけてゐる。雪が横ざまに飛んでゆく、すごい吹雪になつた。今西が迎へにきてくれなかつたらこんな荒れのなかを朝まで當もなくうろ〳〵として居らねばならなかつたことであらう。シュラーフザックにもぐりこんでからも白岩の模様や、宗德寺へ往復してきた宗作が語る天池の話に花がさいた。上から見下してゐるとき天池は三池淵より小さいと思つてゐたが、氷の上に下りてみるとあまりに廣いので驚いたとか、天池の氷には縱橫にクラックが入り亂れ、それがすき通つて見えてゐるので丁度友染模樣を見てゐるやうで實に綺麗であつたとか、宗德寺は破れ寺ながら三重になつてをり、もとは相當の寺であつたらしい等とかたりきかせてくれた。それにしても層岩登頂の成否と飛行機のことゝが案ぜられ一抹の不安は拭ふべくもなかつた。

十一日　晴　平吉、杉山はCIを九時に出發、間白山に登頂し、BCへ午後十時に歸着。
長谷川快方に赴きBCに下る。第二隊及び丸山、今田は宗德寺を引きあげ午後二時CIをへてCI

へ下つた。第三隊はCIIで第二隊と合しCIIを撤收してCIに下る。

朝おき出たころ、風は相變らず吹きつゞけてゐたが、雪は止んで空は大分晴れてゐた。このテントも今日撤收されるのであるが食糧が少くなつてきた。殘つてゐるものは順次片付けてゆくのであるがもう美味いものもない。この朝は飯鍋に倒節を入れて鰹飯を作つてわづかに腹を滿たした。直徑十尺に足らないこんな小さなテントも、さて撤收となると何かと取り片付けるのに手間のかゝるものでかれこれおひる前までかゝつた。第二隊は一時すぎにおりてきた。聲がとゞくやうになるや否や、屠岩はどうだつたかとどなれば、あちらからは白岩へは行けたかと尋ねてくる。やがて無事に成功したのを互に祝福し合ひ、朝の殘りの鰹飯をかきあつめて少しづゝ頒けあつて食べ、二時、荷物をまとめ、テントのあとには念のため「天池への物資投下不要」といふ布板信號を出しばなつしにして下山の途についた。第二隊と第三隊、それに今西に宗作を加へた一行十人が朗かに、賑かに下りだす。飛び殘つて堅くなつてゐる谷間の雪の上を制動をかけながら滑つてゆく、森林帶に入ると風もおち、雪は軟くなつたがスロープがゆるやかなので殆ど滑らない、そのうちには日も暮れてきた。電灯をつけてベッタ〳〵と平地行進をつゞけCIについたのは七時すぎのことであつた。そこには兒島がBCからいろ〳〵の食糧をもつて掩護に上つてゐて呉れたので三日ぶりで御馳走を口にすることが出來た。

十二日　晴　天池へ幕營材料の投下、氷結面爆破のため朝日の長友機正午ごろ飛來。CIでは「天池への投下不要」の信號を出したところ通信筒、テント、若干の食料を投下して行つた。BCにある隊員はCIの撤收作業援助のため人夫をつれて正午すぎCIに着、撤收、荷造りをなし、午後五時ごろ一同BCに歸還。八日ぶりで全員BCに集合。

靜穩で麗な朝が訪れた。風はそよとも吹いてゐない。すつかり伸びて十一時ごろからボツ〳〵と下り初めた。十二時には第一隊のものが人夫をつれて撤收援助に上つて來てくれた。丁度このとき八日以來天候不良のため止むなく飛行を見合せてゐた長友機が天池への幕營材料投下、氷結面爆破のためやつてきた。大急ぎで「天池への物資投下不要」の信號を出した。幾回も〳〵テントの上を旋回し、氣壓狀態がよいのかうんと低空飛行をし、信通筒から食糧、テント等を投下し、名殘り惜しげになほも旋回をつゞけつゝ南の方へ機影を沒した。荷造をして重いラジオ用品などをまた擔いでBCへは夕方に辿りついた。「馬匪賊接近す」との情報が昨日村からとゞいたので兵隊さん達は大變緊張してゐる。四日に第一隊が出發してから各隊は順次前進し、八日ぶりで全員がBCに結集したわけである。この八日間には白頭山の最高點たる大正峰、第二高峰の白岩、第三高峰の屠岩への登頂に成功し、大臙脂峰、間白山へもそれ〳〵足跡を印した。しかも全員無事で些少のアクシデントも起らなかつたのは實に天佑ともいふべく、全員よくその部署と任務を理解して一糸亂れぬ統制ぶりを示し、萬事極めてスムースに進捗したのは永年に亘つて培はれてきた「人の和」の賜物といふことが出來やう。日滿兩國旗を背景にして一同杯を高らかに差し上げてお互ひの奮闘と成功を祝し合ひ、ついで追擊部隊と撤收係が左の通り組織された。

北胞胎山　兒島（リーダー）加藤、谷、佐伯
南胞胎山　平吉（リーダー）堀、大和
小白山　今西（リーダー）西堀、今田
撤收係　高橋、淺井、宮崎、長谷川、杉山
奥、藤木、丸山の三名は連絡のため十三日下山。

即ち附近に衛星的に散在する南北胞胎山、小白山への追撃部隊を編制するとゝもに撤收係をも作り、明十三日からそれ〴〵行動を起すことゝなつた。やがて賑かな慰勞の宴が張られ、兵隊さんや警官も坐をともにして互ひにその健闘を讃え勞を犒つた。人夫達も間もなく下山出來るので流石に嬉しいらしく大噪ぎである。この夜のアリランの調べには特に元氣がこもつてゐた。實際彼等はよく動いてくれた。その作業ぶりは實に誠實そのものであつて、內地に渡來してゐる朝鮮人から類推して京都でいろ〳〵と考へてゐた取越苦勞が全部杞憂に了つたのは我我にとつて洵に仕合せであつたばかりでなく、彼等の名譽のためにも特筆大書しておかるべき事柄であらう。寒い夜は靜かに更けてゆく、テントからはランプの煌々たる光と、アリランの調べがおそくまで洩れてゐた。

六　ベース・キャムプ撤收

十三日　晴　南胞胎山に向ふ平吉隊は十時BCを出發して胞胎里に下り、警官駐在所に泊る。奥、藤木、丸山は平吉隊とともに胞胎里に下り、藤木、丸山は惠山鎭に直行。

北胞胎山に向ふ兒島隊は正午BCを出發し三池淵に幕營。小白山に向つた今西隊は午後九時BC歸還、但し時間不足のため登頂せず。

十三日の午前十時には平吉隊と連絡係とを送り出し、兒島隊も正午ごろに出かけて行つて、併せて十人も減つたのでテントはひろ〴〵とした。人夫には撤收の準備をさせた。

十四日　雪　藤木、丸山京城に向ふ。平吉隊は南胞胎山に向つたが、降雪に妨げられて二〇〇〇米附近から引き返した。兒島隊は北胞胎山へ向つて三池淵を出發したが風雪に惱まされ、

一八〇〇米附近で日沒となり偶然に發見した小屋に假泊。

今西、西堀、淺井、長谷川等は人夫をつれて二時ごろにBCを發ち胞胎里へ下る。BCではテントもたゝみ、撤收の準備全く出來上つたが、運搬人馬が午後四時半漸く到着、然も深雪と吹雪の爲め馬背による輸送を斷念するの已むなきに立ち到り胞胎里から人夫の應援を求め、一方宮崎、杉山は七人の馬子に荷物を擔がして八時半BCを發し、午前零時半虚項嶺着。高橋、今田は荷造したテントをほどいてBCに泊る。

當夜の隊員配置は、北胞胎山の小屋、兒島隊。胞胎里、平吉隊と今西、西堀、淺井、長谷川。虚項嶺、宮崎、杉山。BC高橋、今田。

十四日は朝から雪がふりつゞいてゐたが、十時ごろにはテントもたゝみ、すつかり荷造りも出來て物資輸送のために登つてくる筈になつてゐる七頭の馬の來着を待つてゐた。十二時になつても馬子達はこないのでまた食器をとり出して中食をした。二時になつても一向やつてくる氣はいもない、いつまでも荷物の側にじつとしてゐるわけにもゆかないので、撤收係に四名を殘し、今西等は二時すぎに情況を見かた〳〵五名の人夫をつれて下つて行つた。テントも片付き人も減つたので急に森閑としてきた。この邊がざわついてゐた間どこかへ姿を晦してゐた貂が木の洞から匍ひ出してきて、朽木の上をちよこ〳〵としてゐる。頭の上には雷鳥もきてゐる。何れ、テントの周圍に捨てゝある殘飯に眼を光らせてゐるのであらう。大勢のものが二週間もこゝにBCに滯在してゐたので林も相當に荒れ、附近もかなり散らかつてゐる。紙屑類は焚火の中にどん〳〵ほりこみ殘つた食糧は一箇所にあつめてテントのグランドシーツを被せておいた。どうせ近日中に馬匪賊どもが漁りにくることであらう。午後四時ごろになつて馬がついた。人も馬もともにかなり疲れてゐるらしい。しかしもう時間もかなりおそいので馬子達にパンをやつて大急ぎで馬に荷をつけて出發させた。しかし、いつまでたつても馬子たちの喊高い聲がついそこで

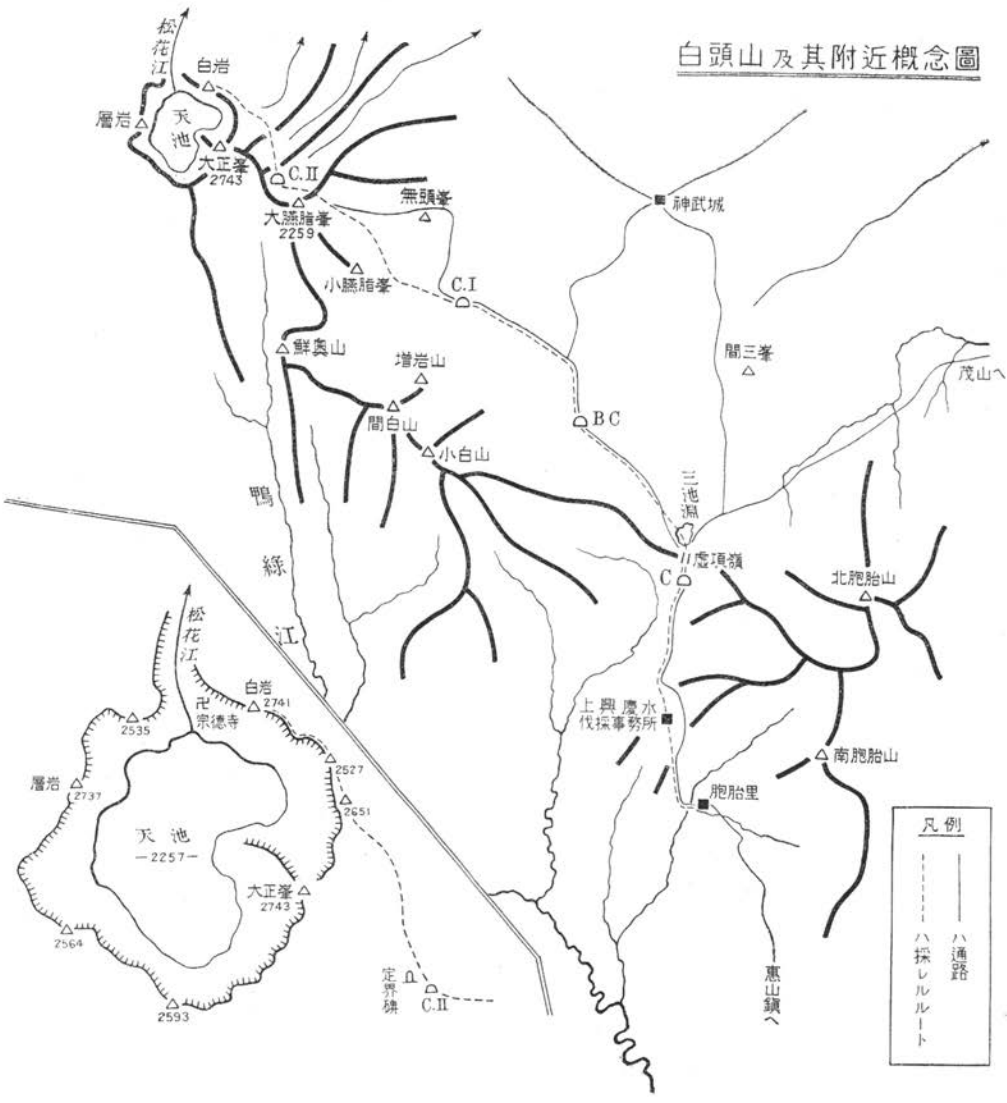
してゐる、一向に進行してゐないらしい。私達は夕食を食べてから出かけるつもりでその用意をしてゐると馬子達は打ち揃つて戻つてきた。この荷物ではとても行けないからといつて荷を置きに歸つてきたのである。それぞれ三分の一位の荷を卸してすぐ出かけたがやはり行進は捗らないやうである。食事が了つたので様子を見に行くと吹雪と深雪に惱まされて馬はバタ〳〵倒れる。倒れた馬を引き起そうとして馬子も倒れるといふ始末で、雪まみれになつた人と馬と荷物の一群が暗と吹雪に包まれて實に慘憺たる光景を呈してゐる。人と馬との苦しそうな息づかひがあたりの靜寂をわづかに破つてゐる。馬背による輸送は斷念するの已むなき狀態なので、また〳〵BCに引き返させ、馬の荷物を全部卸させ、馬子に五貫ばかりの荷を持たせ空馬をひいて下らした。このときはもう八時ごろで依然として雪はしん〳〵とふりつゞいてをり、風さへ出てきて今日の輸送作業は困難をきわめた。馬背による輸送計畫が折からの降雪のため完全に挫折したので折角登つてきてくれた馬も何の役にもたゝず荷物は大部分BCに殘つた。荷造をほどき、圓形テントをとり出して高橋と今田はこゝに止ることゝし、杉山に私、それから警官がつき添うて馬子達とゝもに虛項嶺に向つた。空身になつた馬はどうにか雪をふみわけて行くが、今朝馬糧をもらつただけなので大分腹がへつてゐるらしく相當弱つてゐる。ひよろ〳〵になつた人と馬が虛項嶺についたのは十二時をすぎてからのことであつた。そこには兵隊さんが四、五人殘つてゐてくれた。二人の警官は人夫の增援依頼のため直ちに下つて呉れた。馬子達はだれも馬糧を持つてきてゐないので上興慶水まで七頭分の馬糧を取りに警官とゝもに一名下らせた。虛項嶺のテントは今朝すでに撤收を了つてゐるので鋸も斧もなく、一本の薪をとる術もない。馬子達は附近にある燃え殘りの小枝をかき集めてきて小さな焚火をしてその周圍に蹲つてゐる。何の用意もしてこないのに吹雪の中を夜行軍さゝれ、その上思ひがけなくも雪野原で露營をさゝれたの

で馬子達は隨分閉口してゐた。杉山と私は側にあるお堂の中にはいつて横になつた。小さなお堂で頭と足がつかへるので、海老のやうになつて二人が辛うじて横になれた。すき間からは雪がどん〳〵吹きこんでくるので上衣を頭からかぶつて寢た。寢てみると思つたほども寒くはないが、腹がすいて仕方がないので堅パンをとり出してボリ〳〵と噛りながらいつの間にか寢入つてしまつた。

十五日　雪　この雪は十六日の明け方まで降りつゞいたが虚項嶺では新雪量約二十センチ。兒島隊は北胞胎山の登行を繼續、然しコンディション惡く二一〇〇米附近から引き返し、十二時ごろ虚項嶺を通り胞胎里へ四時半到着。

撤收作業はこの降雪のため捗らず、昨夜胞胎里に下つて馬橇を待ちわびてゐた今西等は夜の二時半ごろ人夫十五名BCに急派頼むとの電話があり、總動員で附近の民家をたゝき起し、ボーターの狩出しに努め漸く十五人を揃へ午前四時すぎ平吉、大和が引率して出發、BCへ向ふ。BCでは彼等の勞を犒つて中食を與へた。各々八貫位の荷物を持たせて虚項嶺へ下らせ七時頃到着、こゝで橇に積み替へ、胞胎里へは午前二時着。初めの豫定よりは一日半も遲れたが撤收作業全く完了、京城に向つた藤木、丸山のほか全隊員胞胎里に集結。

五時ごろには兵隊さんが下つた。すると間もなく馬子達はいろ〳〵な口實をもうけ、手をかへ品をかへ下山しやうとしてゐる。杉山と二人でいろ〳〵となだめすかして慰留に努めたのであるがたうとう逃亡者を出した。結局馬子二人にボーター一人だけが殘つた。朝になつても雪はまだ降りつゞいてをり、もう三、四寸も積つてゐる。九時ごろに二人の馬子と人夫一名をBCに向け出發させておいて、私と杉山は逃亡馬子の補充をするために上興慶水へ連絡に下つた。夜行軍、睡眠不足等がたゝつて歩くだけでもなか〳〵辛い。一里ほど行つたところで平吉と大和が十五人のボーターをつれて上つてきた。BCに殘つた荷物はこれで大體片付くだらうとの見込がついたので



白頭山及其附近概念圖
松花江
白岩
層岩
天池
大正峯
2743
C.II
大臙脂峯
2259
無頭峯
小臙脂峯
C.I
神武城
鮮奥山
増岩山
間白山
小白山
BC
間三峯
茂山へ
三池淵
虚項嶺
C
北胞胎山
鴨
緑
江
上興慶水
伐採事務所
南胞胎山
胞胎里
惠山鎮へ
凡例
ハ通路
ハ採レルルート
松花江
白岩
2741
卍
宗徳寺
2535
2527
2651
層岩
2737
天池
—2257—
大正峯
2743
2564
2593
定界碑
C.II

ポーター達とゝもに虚項嶺に引き返し、人夫達にパンを頒けてやつた。大和が人夫を引率してBCへと急いだ。そのうちには今暁逃亡した馬子達が引き返してきて、私達にペコ〳〵と頭を下げてゐる、何を言つてゐるのか判らないが多分謝つてゐるのだらう。これは上興慶水で警官に出合ひ、うんと叱りとばされたので、馬に食べ物を與へるや否や大急ぎで虚項嶺へ引き返して來たのである。これで輸送の方も大體目鼻がついてきたのですつかり氣をよくし、枯枝を拾ひ集めて焚火をし、茶を沸してパンを喰べてゐると兒島隊が歸つてきた。昨日は行き暮れて偶然見つかつた獵師小屋に泊つたとのことである。平吉は大變悦んで早速本隊に通告するために急いで下つて行つた。私達は虚項嶺まできてゐる荷物を二臺の橇に積みこんで兒島隊とゝもに二時ごろ出發し、胞胎里へ向つた。夕方上興慶水についたが馬橇が非常に遲れてゐるので兒島隊のみ先に下り、私達はこゝの高瀬伐採事務所に入つて橇の來着を待つてゐた。橇がきたのは八時ごろのことで人馬ともに弱つてゐるのでそれ〳〵食事をさせて休憩してゐると高橋がBCから下つてきた。十一時ごろには大和、今田、ポーター、それに馬橇も來着した。一同は腹ごしらへをして、一氣に胞胎里まで强行軍をつゞけることゝした。間もなく吹雪をついて出かける。この邊からは道がよく踏んであるので橇もよく滑り、行程はどん〳〵捗る。馬子達は昨晩一睡もせず、その上今日はこの强行軍であるから居眠りながら歩いてゐる。胞胎里のすぐ上の急坂では行くときと同樣また橇の横轉やら顚覆があつた。暗夜のことゝて負傷者が出ねばよいがと案じてゐたが幸にも一同無事で午後二時ごろには全部胞胎里の警官駐在所に歸着した。

七　主なる携帯防寒具及び食糧

最後に今度の遠征に使用された裝備、食糧等について簡單に記しておかう。

防風衣　白頭山は風が大分強そうなので防風衣についていろ〳〵と考へてゐたところ、松方氏の御好意により、所謂グレンフェルの上衣を親しく手にする機會を得た。協議の結果これを携行することゝし早速鐘紡へ註文し、出發直前にやつと出來上つた。生地は勿論國産である。型は外國圖書の寫眞などに出てゐる通りであるが、すつかり二重になつてゐるので防風保溫力は實に驚くばかりである。吹き倒されるやうな強風の裡にあつても、これを着てをれば風のために寒いといふやうなことは決してなかつた。その上細い糸で織つた布地を用ひてあるので些とみると防水布地のやうで、かつラシヤやサージなどより丈夫であり、また毛皮などよりずつと輕裝であるから、テントの架設作業やその他いろ〳〵の作業に便利である。ズボンもやはり二重になつてゐて、太く作り、スキー靴を履いたまゝで着脫が出來るやうにしてある。裾は紐でくゝる。腿の所はゲートルをつけるか、紐で脚にしばりつけてアイゼンの爪などがひつかゝらないやうにする。上は長く、かれこれ乳の近くまでもとゞいた、バンドは二ケ所につけてある。所謂エムボタンはない。用便のときは一々バンドを解く必要があつたが、空氣が非常に乾燥してゐるので小便は日に二、三度位であつたからエムボタンのないことも不自由ではなかつた。

毛皮外套　防寒用のものとしては北海道産の犬の皮で外套を作つた。頭巾付きで、頭巾は吹雪のときなどにはひもでひきしぼることが出來るやうになつてゐる。これは非常にあたゝかであつた。CIへ輸送をして行くときで

あつたが、防風衣と、この毛皮外套と二者の比較を休憩中にやつてみた。その日は快晴で時間は正午ごろ、谷間であつたので風は少しもなく、氣溫は零下十二度であつた。一番上にこの外套を着てゐたが外套の内側へ寒暖計を突込んでみると七度近くもあつて、外套の内と外とでは十七、八度の溫度差がある。上衣、チョッキと順々に中へ入れてゆくと着物一枚で大體五度位ちがふ。グレンフェル上衣ではその内側と外側との溫度差は五、六度であつた。普通のサージの服でも大體こんなものであつた。これは好奇心にかられてふとやつてみたまでのことであり、そのやり方もルーズなものであるからこれを基にしてとやかくといふのは差し控へねばならぬことであり、人體に感ずる寒さは氣溫、溫度、風等の種々のファクターによるのであるから溫度差だけを以つて一概に論じ去ることは出來ないが、これを要するに、兩者を適當に使ひわける事が肝要なのであらう。

オーバーシュース　靴の凍結を防ぐためにオーバーシュースといふものを作つた。これは外國では割合に利用されてゐるものらしいが、今度作つたのは靴底はアザラシの皮で毛を外側に出し、上の方は犬皮と羊皮との二通りを作つたが何れも毛は内側になつてゐる。スキーの耳金の當る箇所には外側から當皮をしてある。これは非常によかつた、如何に寒くなつても、また夜行軍をしても靴が凍つて堅くなるやうなことはなかつた。またこれを履かない人は夜行進などをすると汗が凍つて靴下と靴との間に霜が出來る。オーバーシュースをつけてをればこんなことはない。羊皮も犬皮も大體同じやうな實績であつた。今度このオーバーシュースを胞胎里出發以來履いてゐたが、登頂してベース・キャムプに修繕しうる程度の小破狀態で戻つてきたのは少なく、大抵は修理出來ない程度に大破損したので途中で投げ捨てゝきた。

手袋　駱駝毛の薄手の五本指のもの三つ、毛絲あみスキー手袋一つ、犬毛皮の一本指の手袋一つを持つてゐた

が、大抵二枚もあれば大丈夫であつたが、架設作業や、荷造りを手傳はされるとひとたまりもなく穴があくので取替品を必要とした。

テント　大きなのを三つ、小二つ、外に飛行機から一つきて三つ、都合六つあつた。虚項嶺では一番大きいテントに全員ねてゐたが、少し窮屈であつた。BCに移つてからは二つはりO・Bと現役と分れ、外に朝鮮人夫三名宛を容れてゐた。食事、協議などはO・Bのテントの方でやつた。外に倉庫用に持つてきたテントは虚項嶺では人夫がはいりBCでは守備隊と警官隊が使用した。テントは輸送の便宜上なるべく薄地のものを撰び、張り方を工夫して、生地の薄いのを補強した。即ち落葉松の細くて長いのを撰んでこれでフレームを作り、それにテントをつり下げて縛りつけるのである。架設のときは少々厄介だが一度張つてしまふと長い間はりつぱなしにしてもたるんだり、傾いたりしないので却つて世話がない。それに吊り下げ式のテントだと、内側にはポールがないので大變ひろびろとしてゐる。BCは二張ともこの式であつた。ベンチレーターとしては何もなかつたが、それで別段どうもなかつた。たゞストーブの煙突から出た火の粉がテントの上に落ちると、すぐに焼け、それが見る〳〵うちにすつーと焼け擴つてゆく、その度毎に肩車をして消すのであるが實に際限がなかつた。煙突にいろ〳〵と工夫を加へて大分良くなつたが、それでも撤收するころには煙突の附近の屋根は布地よりも焼けてブランクになつてゐる所の面積の方が大になつた位である。布地の防水加工は必ず不燃性のものであることが肝要と思つた。現に古い方のテントは大正十何年かの春に三高が春黒部の東澤へはいるときに作られた古いものであるが、そんなにこげはしなかつた。

CI、CIIはともに圓形テント――正しくいへば六角型――を用ひた。これは一九三三年のエヴェレスト登山に用

ひられたものにヒントを得て作成したのである。直徑はCIは十三尺、CIIは十尺とした。高さはテントの中で立てるやうにといふので兩方とも五尺五寸位とした。收容人員は十人と八人位がせいぐ〳〵で五、六人であればゆつくりしてゐる。二重張りで、生地は通稱バルーンシルクといふものを用ひた。グランドシーツはテントに縫ひつけてある。フレームは竹であるが、竹を二枚はり合せたものを用ひた。外側は六方へ綱をはりこれで補強をする。

このテントは輕く、收容力も大であり、それでゐて內側が廣く用ひられる。丸型であるから風にも大變強いし、CIIなどは六日五晩强風に吹き曝され通しであつたが、どうもなかつた。あの風の強い定界碑附近では、このテントがなかつたら相當苦しめられてゐた事であらう。これにはストーブその他の煖房具はない。CIIではテントの內で炊事してゐた。外は風がつよく雪をとりに出るのがせいぐ〳〵であつたから。CICIIには炊事にガソリンコンロが二つ宛配置してある。

シュラーフザック　試驗の意味もあつたのでいろ〳〵の種類のものをもつて行つた。

眞綿　六百匁の眞綿を入れ袋の生地は絹紬でその上は防水布で包んだ。下にカボックを敷く。

羽根蒲團　普通の羽根蒲團でその上を防水布で包んである。これも背中はカボックを敷く。

眞綿と毛皮　三百匁の眞綿を矢張り絹紬の袋の中に入れ、この袋を更に毛皮の寢袋の內側に入れる。この毛皮には犬とのろしかと羚羊の三通りあつた。

防寒や寢心地のみについていへば眞綿と毛皮のコンビになつてゐるものが最もよく、羽根が一番人氣がなかつた。今度の寒さでは眞綿だけの袋でも充分であつた。服をすつかり脫いでシャツとズボンだけになつてはいつてゐたが、それでも寒さのために目がさめた事などは別になかつたやうだ。CICIIでも、それで充分安眠出來た。今

度の山は空氣が乾燥してゐたので眞綿の袋が大成功であつたが、他の地方の山でもこれと同等の成績を期待して良いかどうかはまだ解決されてゐないやうだ。

懐爐　各種の懐爐を比較してみたが結局七福懐爐といふのを持つて行つた。懐爐灰は三千もきてゐた。どうも火持ちが悪く、その世話が厄介であつた。天池隊が宗徳寺で二晩ビワークしたときは相當活用されたらしいが、その他では必要なかつたので殆んど用ひられてゐなかつた。しかし懐爐は今後もつと弘く活用されてもいゝものであらう。

ランプ　ラテルネも持つて行つたがこれは豫備で、昭明用としてはガソリンを燃料とするマントル白熱燈をつけてゐた。このランプは大二、小一で三百燭光と、二燭光とかで、とにかく明るかつたし、また些とした煖房にもなる。CIではテントも小さいので大分煖まつた。これで隊員の氣持ちも隨分朗かになつたし、凌ぎよくもあつた。ランプやコンロ用のガソリンは四罐持つて行つた。

電燈　夜間行進用として耐寒電池とヘッドライトを各自持つてをり、替電池も澤山運び上げた。CIIではこの電燈を照明用につけてゐた。

ラヂオ　ラヂオ用品はICとCIに澤山きてゐた。私はこの方面のことは一向に判らないが結局キャムプ間の連絡は不結果に了り、たゞ京城放送局の氣象通報やら、支那の放送唱歌を聞いた位のことであつた。CIへは隨分重い思ひをさゝれて運んだのだがどうも殘念でならなかつた。

食糧　主食は米によることゝしミルクパンを補助食とした。山中で洗米の煩を避けるため水晶米を買ひ入れて一石もつて行つた。中食はミルクパンにし、CIIは朝と晝はパンといふことにしてゐた。米は流石に美味かつた。

丁度一石要つた。人夫達には惠山鎭で米を八斗買ひ入れ、間もなく更らに一石二斗を追加したが、これは二斗ばかり殘つた。CIIでは米を炊くのに壓力鍋を用ひた。

酒　理化學研究所で特に作つてもらつた五〇%のウイスキー一斗、その他にラム、ジンなどが取り交ぜ十本ほど持つて行つた。ホットレモンやホットオレンヂの素を作つてもらつて持つて行つた。卽ちこれを少しコップに入れ湯を注ぐとホットレモンなり、ホットオレンヂが出來る、これに砂糖を入れてのむのである、ともに結果は良好であつたがオレンヂの方が特に美味かつた。

みそは陸軍の粉末味噌で、醬油は三河の大津屋の醬油の素を持つて行つた、何れも好成績であつた。

副食物は主として乾物、罐詰、乾燥野菜等であつた。乾物は和布、椎茸、高野豆腐、干瓢、湯葉等で別に附言することはない。

罐詰　食料品店で買ひ入れたものと大學農學部で作つたものとある。買ひ入れたものについてはこれ亦附言する要はない。大學で作つた罐詰はベーコン、チキンのトマト煮、チキン、燒豚の四種であつた。これはよい材料を仕入れて、大學で食堂を經營してゐるアヅマヤの主人に調理してもらひ、農學部の營養學教室で罐詰にしてもらつたのである。これには薄味がつけてあり、ライスカレー、スープ、煮付等何の材料としても使ひうるやうにしてある。これが何れも大好評を博し、副食物としては殆んどこれを食べてゐた。それだのに少しも飽いてこなかつた。それのみか、それがあつたので食物には一向不自由せず、山でよく起り勝ちな何を喰つて見たいといふやうな食慾も殆んど起らなかつた。

乾燥野菜　矢張り大學の農學部で作成した。今度持つてゐつた種類は蓬蓮草、人參、牛蒡、白菜、葱、玉葱、

林檎、馬鈴薯、澤庵漬であつた。何れも低溫乾燥してあり、營養分は損はれてゐないとのことであつた。使用の半日ほど前から水に浸しておくと殆んど原狀に回復し、口あたり、味ひ等も大體においてよく、うつかり食べてゐるとこれが乾燥野菜だとは氣がつかないほどであつた。たゞその香であるがこればかりはどうとも致し方がなかつた。牛蒡、人參、白菜等がことに成績よく葱はやゝ劣つてゐたやうだ。乾燥野菜は目方が輕くなり、嵩が低くなるので輸送上大變便利であるばかりでなく、長日間の貯藏にもよく耐へ變味腐敗の虞がないので、その用途は可なり弘いものゝやうに思はれる。

ゲオルク・ジムメルの「ディ・アルペン」をめぐりて

辻　莊一

昭和十年二月十四日第六十五回小集會に於ける講演を骨子としたるもの（編者）

ジムメルが稀に見る多方面的哲學者であることは、彼の著作目錄によつても知ることが出來るが、それよりも「哲學的文化（フィロゾフィツシエ・クルトウア）」なる論文集を通覽することによる方が、更に便利であらう。彼は「歷史哲學（プロブレエメ・デア・ゲシヒツフィロゾフィ）の諸問題」を、「貨幣の哲學（フィロゾフィ・デス・ゲルデス）」を書いたと同時に上記の小論文において、或はミケランジェロを、ロダンを論じ、或は流行、冒險を論じ、更にコケットリイを論じて、あらゆる文化現象を、彼獨自の哲學的立脚點から論じ去り、說き來るあたり、實に彼の頭腦の犀利にしてかつ廣大なるを、あり〳〵と見せつけられるやうな氣がする。この如き傾向は實に彼がその當時においては未だそれほど流行語として通用しなかつた所の、生哲學の研究者の一人であることを最もよく示すものであらう。從つて彼の說き來る處はすべて生哲學の立場においてなされるのであつて、今それについて考へんとする彼の山岳論「ディ・アルペン」も、この小論文集におさめられて、同じ立場から考へつらぬかれてゐることは云ふまでもないことである。

この幸うじて數頁に亘る小論文は北川淳一郎氏編「四國アルプス」のうちに、大意が抄譯されてゐることは、會員黑田氏の高敎によつて知り得たのであるが、それを精讀する暇が與へられてゐない故に、この少文は氏の努

力に比して屋上屋を架する愚擧となり了ることを私かに恐れるものであるが、今は一度私見を陳べて大方の叱正をまつの勇を敢えてするわけである。しかし北川氏はジムメルを目して新カント派の哲學者であるとして居られるやうに見うけられるが、自分は始めに陳べた如く、別の立脚點によつて彼を生哲學者の一人に見なし度い、と云ふのは彼が好んで用ふる辯證法をもつて、彼の方法論の中心であると見たいからである。しかしこれは全く枝葉の問題であり、彼の山岳觀とは直接に關係なき事柄である。この點についてはカウフマン編「現代の歴史哲學（ゲシヒツフイロゾフイーデアゲエゲンヴアルト）」を參看せられんことを望み、この點に立入ることを避けて、直ちに彼の山岳觀を檢討することにする。しかし彼の山岳觀を單に紹介するに止まらずして、彼の思想のうち、自分の考と相容れない點がある故に彼を批評する態度を取らうと思ふ。然らば果して自分に一定の山岳觀があるか否かをよく吟味することは第一の義務である。自分は未だ歐洲アルプスの景觀に接したことはなく、また純粹の氷雪的景觀の間に身を置いたこともない。かゝる經歴のものが山岳景觀についての一家言を作すことは輕率の嫌がないでもないが、幸にして我々人間には、かなりの點まで他人の經驗を了解すると云ふ能力が與へられてゐて、多くの登山者がかゝる境地に身を置いた時の感銘を、文章や言語をとほしてよく了解することが出來るのである。勿論ある種の人格にはこの種の了解が全然不可能なこともあるが、自分は幸にして山を愛することにおいてのみは敢えて人後に落ちないつもりである故に、直接の經驗は貧弱であらうが、山岳景觀を說く資格において全然缺如してゐるとは考へない。

かゝる方法によつて考へられたる自分の山岳觀をあらかじめ開陳しておくことは論の順序として缺くべからざることである。しかし今それを喋々するまでもなく、ジムメルに關する自分の考を陳べるに當つて自ら明らかになつて行くであらうし、また特に必要とせられる向は自分の今までに與へられた機會に書きくだしたものを參看

せられることをのぞむ。

ジムメルが風景を論じた機會はこの「ディ・アルペン」のみでなく「ディ・ルイイネ」がある。夙に谷川徹三氏はこの論文の趣意によつて「山」と題する一說文をものし、日本の山岳景觀の代表たる富士山の美を說明せられたのである（「論文集「感傷と反省」所載）。この敬服すべき考察において「ディ・アルペン」を援用せられてゐるのであるが、山の構成を、上に聳え立たむとする力と、これをひきたほさんとする力との釣合によつて說明せんとする所は主として「ディ・ルイイネ」に依つたと思はれる點であつて、山と人間とのつながりは、この二つの力を所緣として成立すると、（この論文、特に谷川氏の解釋によれば）考へられるのである。しかし「ディ・アルペン」におけるジムメルの說は更に汎くなつてゐて、人と山とのつながりを種々の契機によつて求めてゐる。すでに「山」においてもこの意がしるされてあるが、自分はこの點を更に强調して、主としてこの論文によつて考へて見たいと思ふ。

彼は先づ山岳の大きさなる點についての省察から論を引き出す。從來の美學諸說においては、形の大きさはあまり問題にせられず、主として形式上の釣合等によつて、ものの形の美しさが說かれるのがつねであつたが、彼はこの形式上の諸契機に大きさを加へやうとするのである。もし從前の形式美學のとくが如く、もののかたちの美しさが單に釣合や線のうごき方等のみで說明され得るならば、ミケランジェロの巨大なグヴィデの像をその釣合のまゝ小型にちゞむるもなほその美を保存することとなり、全く事實に反することとなる故に、一の形式的美はつねにその形式が成立せる大きさを度外視することは許されないのである。しかし自然物中のあるものは殆んどこの大きさの制限をうけないものがあると彼は云ふ。それは卽ち人體である。人體の美について古來から多數

の説明がなされてゐるが、これには人體の絶對的大きさは殆んど問題にされてゐない程、人體は大小の形に或は伸大し、或は縮少してもその特有の形式美は變化しないものである。從つて人體像は大小とりどりに藝術品として成立し得る。大は奈良の大佛より小は人形に至る迄それらは人體としての美しさを失はないものである。これに反して山岳はそのまゝの大きさでなくてはその固有の感銘を與へ得ないものであると彼は斷言する。この斷言は卽ち山岳を造形美術の對象となすことの不可能を同時に示すものであつて、この點に注意すれば彼の言はやゝ疑はしく響く如く感ぜられないではない。卽ち我らはセガンティニを有し、ホドラアを有する。これは皆山を描いて成功してゐるのであるまいか。しかしジムメルはこれに對して云ふ、これら有名の山岳畫家は種々の技巧によつて、山の大きさを直接ならず、間接にカンヴスにうつすか、或は大きさを描き出すことを避けてゐるのである。卽ち自然物のうちにおいて人體と山岳は大きさの點については對蹠的位置を占めることとなる。この位置づけの根本の理由は今更說明するまでもなく、人間と山岳との、人間に對する位置に依るものであることは一目してあきらかである。卽ち我々は人間であるが故に、人間の形は最も親しきものであり、その大小如何に係らず人間として、仲間として把握するのである。かつ人間の形はあらゆる點において自然物中最も整然たる釣合の形式を有するものであつて、この形式上の整頓は、大きさの制肘をうくるには、あまりに強力なるものである。この二つの契機、卽ち親熟と形式の整頓によつて、人體は大小の大きさの間を融通無碍に往來し得るが、山から一度その大きさを奪へばその固有の性質を失ふ。この理由は實に山岳が無形式なるによると彼は云ふ。人體の形式美は既に先人が發見したる如く、その輪廓線の流麗、各部分の長さの均衡、類形の反復、又は場合によつては左右均齊によつて基礎づけられてゐるが、山岳は富士山の如き特殊の場合の外、これらの條件に殆んど適合しない。

この故に山岳は無形式である。それのみならず人體においては常に肉が骨格を包み、物理的器械的構成のあとを止めないが、山岳においては大小の岩石が無秩序に積み上げられ、骨格が露出し、それに觸れれば傷をうくるの憂を抱かしめる。山岳は單に無形式なるに止まらずして、形式を積極的に破壊せんとする傾向をすら示すものである。

かゝる性質、卽ち無形式そのものの如き山岳がなほ一種の力を有してその形式的美を感ぜしむるは實にそれが巨大なるが故である。巨大なるものは、彼に從へば超時間的である。超時間性はすなはち靜である。しかしわれわれはこの巨大なる山岳に對する時、一種の落着かざる心持、無力、不安を感ぜずには居られないのである。かつこの超時間性の靜と不安とはいづれも自己の心內における直接の經驗ではある故に、この全然相反せる二つの生活感情が互に鬪爭してゐる狀態を經驗し、更に山岳そのもののうちに此の二つの感情が綜合されてゐると觀ずるのである。この綜合に山岳の力が存し、この力の故に我らは山を美と見出し、それに引きつけられるのであらう。美術史論者ヴォリンガアの說を借り來るならば、我らは山岳の超時間的靜的契機に關しては感情移入をなし、山岳の我々に與ふる不安の印象は、この不安を除くものとして山岳を抽象し來るのである。この複雜なる、相反せる要素をふくむ所の體驗は實に山岳においてのみ見出されるものである。かく解し來る時我らが山岳に對して感ずる特有の感情はジムメルによつて巧みに基礎づけられたるを發見するのである。山岳の有する材料性、換言すれば骨格の露骨せる點に關する物をそろしさを彼は不安の感情の基礎としてゐるのであるが、これも勿論一契機をなすには相違ないが、しかしそれにも優つて山岳に對する自己の無力より發する不安の方が更に大であり、これとかれとが直ちに融合して一のより大なる不安の感情を醸し出すであらうことは容易に看取し得ることである。

ジムメルのこの考へ方は極めて暗示に富んでゐる。この靜と不安との辯證法的な關係以前に溯るならば、この二つの契機の對立は實に所謂靜觀的登山と攻撃的登山との對立を示唆するものなのである。もしある登山者が主として超時間的な山をのみ見て、その不易なる點に自己の精神の動搖を托して解消せんとするならば彼は所謂靜觀派となるのであらう。しかし山岳の不易の方面を見んと欲するならば、その人はあまり山に近づいてはならないし、またあまり險阻な山に登つてはならないことになる。これらの行爲はその登山者を苦しめることであり、從つて山岳に對して攻撃的に行爲せしめないではおかないからである。延いては登山者は精神上の怠惰を來すおそれが十分にある。何となればかゝる人は行爲せざる故に常に山岳からの感銘をうけ入れてゐさへすれば、その人の山に求むる所は十分に滿足させられるからである。その上低い山に必然的に附屬してゐる森林、溪流、高原の牧場等は何らの努力を須ひずして、そのまゝ人間に近きものと觀ぜられる故に、こゝには生命の擴張と充實への情熱が認められないことになり、遂には山岳ならざるものによつてその人の求むる所をみたさんとするに至るのである。これは登山者としては悲しむべき結果でなくて何であらうか。しかして山岳の不安なる契機にのみ着目するならば、ある人は山と緣なき衆生となり了る。たゞ山岳は恐しき、居心地の惡きものたるに止まり、そのうちに美は見出されないことになる。未だ人智が幼稚であつた中世紀において人々は山岳をたゞ只管におそれるばかりで決してこれに近づかうとはしなかつたが、文藝復興期に至つてはじめて山岳の美がいくらか見出された。實に文藝復興期の精神は自分の力を信じてゐた故に、自然からの脅迫に屈しなかつたのであればこそ、見なれない山の景色に壓倒されることなくこの壓迫と不安に耐えて、靜と不安との融合を味得し得たのである。所謂攻撃的登山の理想はこゝになくてはならない。徒らに血氣に任せて不安に身を投ずることは攻撃的登山の半解者であ

り、決して正しき認識をもつた人とは云はれないのである。たゞ一つ重要なことは攻撃的登山は、さきに注意した如く極めて強盛なる精神力を必要とするものであつて、この精神力こそは靜觀的登山者のあるものには全然缺如してゐると云ふ事實である。靜觀的登山はある時には精神の怠惰を來す危險を伴ふのであるが、攻撃的登山においては怠惰は絶對にゆるされないでつねに緊張してゐなければならない。この緊張に耐える精神と體力が攻撃的登山者の必須の條件であり、これを缺く所には眞の登山は見出されないのである。この意味において攻撃的登山者のみが眞の登山者であり、山の美はかゝる登山者によつてのみはじめて味得されると斷言してよい。しかしてかゝる强盛なる身體と精神とは青年においてのみ、或は極めて少數の壯年においてのみ期待し得るものである故に、登山は青年を中心として考へられなければならないと云ふ結果を來す。老年者又は健康の十分でないものゝ登山は、青年時代の攻撃的登山の豐かなる體驗が基礎をなしてゐない限り、極めて偏した位置を與へられるにすぎないことも、これらの考察から自から派生するものである。

再びジムメルに立歸る。今までに考へられた所は形式としての山岳であつたが、形式なるものが生きるのはそれに附與せられたる生命に據るの外はない。從つて彼は形式を中心として考へた後に生命についての考察にうつつたのは當然のふむべき順序であつた。それに立入る前に敢えて私見をもつて彼の考への途をとゝのへなければならぬ。形式は生命の客觀化であるとは殆んどすべての生哲學的藝術論者の口に筆にする所である。先に考へた如く人體藝術が最も藝術らしき藝術としたのは、その形式的契機が最も整頓してゐるからであることは云ふまでもないが、同時にそれが自己と同じ人間であるからである。この故に人體藝術に似た藝術、卽ち人間に最も近きものを描寫せんと意圖する藝術ほど生命的價値に富むものである。ギリシヤ神殿建築の柱のエンタシス等が力と

親しさを感ぜしめるのはこの理由によるものであらう。この點から山岳を考察するならば山岳の有する形式的契機からは殆んど何物をも期待することは出來ないのである。これに關してジムメルは如何に考へてゐるのであらうか。

彼の考によれば無形式には二つの意味がある。その一は形式完成前の無形式、その二は形式完成後の無形式である。完成前の無形式は若々しい如何にも力に滿ちた感を伴ふ。幼兒のまる〳〵と肥滿せる、少女の伸々とせる、いづれも完成前の無形式に伴ふ美である。それに反して廢墟に見られる美は形式完成後の美である。建設への努力と、破壞への傾向との二つは共に形式の否定である。かく考へ來つて山岳を見るならば、異つた辯證法的なものがそのうちにあることを發見する。この點に想到した彼の洞察は並々ならぬものであらう。山岳は實に若くしてかつ老いたるものである。山岳は日夜崩壞しつゝあるものであつて、岩石は絕えず下へ下へと力を失つて崩れ落ちつゝある。かゝる岩石の形成する景觀は、有りし日のさかりを偲ばしむる淋しい感じを伴ふことがある。丈短かい牧草の原のうちに所々とりのこされた大きな岩、谷の終りに積みかさなつた石、これらはその一つの例である。同時に山岳は形式完成以前の無形式の美を具へてゐる。鋭い山岳は本來の地球の重力に絕えず反抗してゐるものであつてこの爭鬪に耐えて山岳が聳立してゐる限り、山の成立の要素たる岩石はつねに形式に向つて努力しつゝあるものである。これらの岩石がつくる所の景觀は若き努力を示す。この二種類の景觀が錯綜してゐる處に山岳美の特異性が存し、この特異性は他の景觀に求むることはやゝ困難に屬するのである。卽ちジムメルはこの生命的契機をとり上げて山岳における複雜なる美の相を明らかにした。前に彼は靜と不安を直接にその形式から導き出して、その綜合を山岳において指摘したのであるが、このたびは形式完成の前後の狀態の生命的契機の

綜合を山岳において見出したのであつた。

ジムメルのこの思索のあとを辿る時、我々は日本の名山たる不二山について考へるやうに誘惑される。しかしこのことはすでに谷川氏の「山」につくされてゐる故にこゝには資する必要はない。たゞ我々日本人の父祖がある意味において完成後の頽廃に伴ふ美にとらはれてゐたことを見出し、かつその頽廃の美の内容が比較的若々しい對數曲線である故に必らずしも、頽廃のみの美ではないことをも併せて認識してゐたことを見出すことを注意しなければならない。

以上はアルペンの景觀としては決して徹底的の境地ではない。廣く山岳景觀と云へば山地景觀（ベルグランドシャフト）、アルプス的景觀（アルペンランドシャフト）及び氷雪地景觀（フィルンランドシャフト）と分けて考へることが出來るが、今迄吾々が問題にしてゐたのはアルペンランドシャフトであつた。ジムメルはこれに立止まることなくして、フィルンランドシャフトに至らんとするのである。氷雪地帶の特徴は無生命である點である。この地に長時間在ることは單に生理的に人を殺すのみならず、精神的にも死を味はしめる。何となればそこに何らの運動がないからである。森林や溪流、特に後者は生命そのものゝ姿であり、そこに變化發展が徹底的に象徴化されてゐる。しかし氷雪地帶には白一色の濃淡があるのみで、濕度は低く動物の姿も極めて稀である。登山者は岩石に對して不安を感ずるが、技術と意志とをもつてその不安を克服することに慣れた上は、ある程度まで不安の念を打消すことが出來るであらう。しかし氷雪の間にあつては岩石の間と同じ心持で居ることは殆んど出來ないで、より物凄い、より奥行の知れない淋しさ、即ち非生命的な感情にうちかたれさうになる。氷雪地の美は墳墓の美であり、死そのものゝ姿である。この地において人はたゞ自己の無力を感じて永遠そのものを意識し、人間以上の大なるものへの祈願歸依を直觀すると彼は云ふ。即ち岩石に對しては我

我は生を延長し得るのであるが、氷雪に對しては吾々の生を延長し、移入することは拒否されてゐる。卽ち氷雪を鎧へる山岳は人間の歷史に對してつねに否定的に作用し、生と生とを互に隔離し、その相互の影響を阻害する。しかし海洋はそれに反して人間の運命や發展を象徵化し、人と人とを結合するやうに作用するのである。その上氷雪地帶は山地と異り絕對高の性質を有する。一般に山岳は平地よりも高く、山頂にあれば平地を見下すことが出來、こゝに一種の征服感がおこり、これが登山なる行爲をして快ならしめる一要素となつてゐると考へられてゐるのであるが、自分の經驗及び若干の他人の云ふ所を綜合するに、これは必らずしも必須の要素ではない。むしろ高峻なる山岳に登れば平地との高距を感ずることはない。日本に見られざる恒常の氷雪地帶に入る時には必らずや絕對高を感じて、平地のことは全く忘れられてしまふことであらう。平地が全く人間的で、低平であるとするならば、中級の山はこれとの對比において成立する高峻であつて、未だ到らざるの境地であると云ふことも可能であらう。もし登山者がかゝる山地においてのみ滿足してゐるとするならば、その人は未だ理想的な登山者であると云ふことは許されないであらう。岩石をふみこえ、氷雪のうちに身をおくこそ登山者の眞の欲求であると云はなくてはならない。この絕對高こそは、生との對比においてゞはなくそれ自身として成立する超越である。この意味において氷雪地帶は藝術的描寫に耐えないものである。所謂美しき山岳風景は殆んど常に前景に比較的生的契機の明らかに把握する風景、例へば山地植物の色美しき花盛り、牛、羊のむれあそぶ牧場等を有し、はるか遠景にこれとの對比が成立するやうに氷雪の山岳を描寫するに止まり、眞の絕對高は描出されてゐないことは注意すべきことである（この思想によつて自分がセガンティニを論じたものが「山」昭和九年十二月號に收められてゐる）。しかし高峻は本來低平に對して云ふ語であつて、絕對高なる觀念はそれ自身として矛盾である。岩

石の山は辯證法的にその美を、その生的契機を云ひあらはすことが出來たのであつたが、氷雪地帶の絶對高においては矛盾をそのまゝに綜合的に直觀する方法に依らざれば、その美を感得することは出來ないのである。換言すれば超人にあらざればこの地の景觀を美と見出すことは出來ないのである。歷史は我等人間にとつては變轉極まりなきものであるが、神の眼から見る時には一つの動かないものである。山岳の氷雪地帶は神の眼に映ずる歷史の相を象徵してゐるものである。

ジムメルは斯の如く考へ去つた。數多き山岳美論のうちに、かくの如く深く徹する所のものは多くの登山家の愛讀を得て然るべきものである。しかし自分としてはこの優れたエッセイのある部分に關して異見をさしはさむことが出來る。それはジムメルの考が至らなかつたが故のものではなく、彼が生きた時代と現在との時間の差から起るものであつて、敢えて彼を論難するわけではない。彼は先づ山岳の形式が不整頓であることを認め、これにも係らずこれを美と見出す根據を明らかにしてゐることは上によつて知ることが出來よう。しかし彼の云ふ如く山岳の視覺上の形式は我々にとつても果して不整頓であるか。この點は一應の考察を要することゝ思ふ。そのために我々はホメールから出發しなければならぬ。ラスキンの「近代畫家論」第三卷第十三章第十五節以下に記された處によるならば、この當時のギリシヤ人の美と見た風景は極めて感覺的なものであつた。足觸り、香等の如き所謂低級感覺の快美なるものが、美しき牧場の風景を形成する大きな要素であり、また水氣があることも他の大きな要素であつた。これは營養本能との關係において始めて理解し得ることであつて、生の觀念は極めて狹き範圍内において、その延長と移入とを見たのである。しかして一方彼ホメールが、更にギリシヤの造形藝術家が、人體を描寫するに如何に巧であつたか。かゝることは實にホメールをもつて代表せられたギリシヤ人が殆んど山

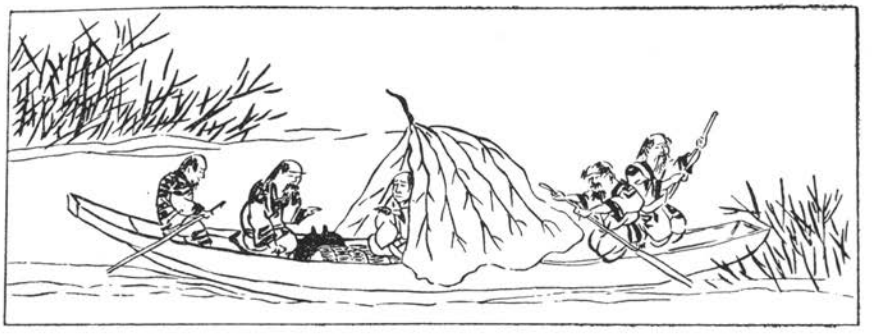
岳に關しては緣のない衆生であつたと云ふことを示す。尖鋭なる山岳は彼にとつてはむしろ邪惡でさへあつた。この時代のギリシヤ人の生の感情は本能と極めて密接にむすびついてゐてそれ以上に出ることなく、形而上學的、宗教的に飛躍することはなかつたことが明らかである。更にラスキンの解釋に從つて中世に入るとき、山岳はいくらか異つた風に眺められたことが明らかである。同書第十四章第四節にあげられた、この變化の理由は重要であると思はれる。卽ち中世紀の騎士は平凡ならざる風景を感傷的にたのしむことを知つてゐた點でギリシヤ人と正に反對であつて、平凡ならざる風景の享受は卽ち彼らの生命感の擴充を示すものである。ラスキンは殆んど人種の差を問題にしてゐないやうであるが、この自然觀の差は實にこの點からのみ理解せらるゝの外途はない。しかしかゝる浪漫的なる中世紀も文藝復興を經て啓蒙時代に至り、更にドイツの古典時代に至ると徐程ギリシヤ的要素が入り來る。この點はラスキンによつては考へられてゐないことであるが、ゲエテがそのイタリイへの途上、アルプスの峠を越した。この時の彼の日記には溪谷から眺められたアルプスの雪山を美しいと見、山間における人文について興味を感じてはゐるが、山岳景觀との精神的交流は殆んど見られない。更にヴィルヘルム・マイステルのうちのミニョンの歌の中に山は龍の棲む所と表象せられてゐる。これは生命感の充實の兆候であるかも知れないが擴張を示すものではない。これに次いでラファエル前派やオオフェルベックの復古的浪漫主義がおこる。ラスキンは「プレラファエリティズム」においてこの浪漫主義をある點まで保護し、タアナアをその派に續くもの、或は忠實なる自然描寫の完成者として賞讃したのであつた。(エヴリマンス　ライブラリ所收 Pre-Raphaelitism and other Essays upon Art. page 1 ff) しかし概してイギリスの浪漫派は基督敎的中世紀の色彩に染みてゐて、この點がラスキンの一面と相通ずるものがあつたのであらう。更にジムメルが生きた時代と國とは前者に比

してやゝ敬虔さの足りない人間中心的なものであつた。浪漫派の思想家のあるものがカトリックに轉向したことに意味をつけるとすれば、中世紀的なるものへの復歸であらう。しかしジムメルの思想はよりプロテスタント的であつて、自己のうちに神を見出す態度に出てゐる。それでも神を超越的なものと考へ、氷雪地帶はかゝる神の象徴であると考へたことはすでに明らかにした點である。この點に關してはラスキンとジムメルとはやゝ反對の位置に立つものである。しかしてジムメルの生命感が極めて充實しかつ擴張せられたものであることは、ラスキンに比して直ちに理解されることである。要するに生命感は時代と共に進歩發展するものであつて、すでにジムメルと我々との間にもこの點に關しては相當の差が出來てゐると考へられるのである。

我々の生命感が彼のものに比して更に廣いものであることは、機械美の論さへも正當とせられることによつて證明される。前時代の人々が醜なりと見た商業建築の樣式や、鐵の面と線との交錯は我らのうちに一種の英雄的な心持、しかもサン・テクジュペリが「夜間飛行」の主人公によつて表はさんとした心持に似た心持を單なる聯想でなく、更に密接な或は必然なものとして、そのうちに見出すことが出來る。またかつてギリシヤの哲人が唱導した如く、有益なるが故に美なりとの觀念からではなく、單に形式として機械の美、素材の美を見ることが出來る。このやうな眼の持主は、ジムメルと同じやうに山岳を不統一なものと見、そのうちに存するディアレクティクによつてのみ山岳にひきつけられてゐてよいであらうか。自分は敢えて否と答へたい。卽ち我々はすでにこのディアレクティクを通過した水準に到達してゐるのである。特に現在の青年登山者は單に場數を踏んでゐると云ふ有利な條件によるのみならず、はじめから山岳景觀を美しと見てゐるのである。勿論このテエゼに對して、アンティテエゼが措定されてゐるのであらうが、自分は不明にしてそれを意識し得ない。かつて松島、橋立、嚴島を

美とした日本人は今やこれらよりも更に開放的な（ヴェルフリンの云ふ意において）風景を美となしつゝある。この意味において極東の島國、山岳らしいものの極めて少數のみを有する我邦におけるわれらの考へすら、彼ジムメルの抱いた山岳景觀論と異つた、更に廣き生命感を基礎とせる山岳美論を樹立する資格が與へられてゐると思ふ。

この新らしき山岳美論は行爲を出發點とすることを要する。行爲のうちにおいては山岳と登山者との間には何らの間隙はない。特に我ら日本人においては自然との精神的交流が容易になされるのであつて、この點は西洋人がつねに自然と人生との對立の意識をもつのとはかなりの距離がある。西洋人が山岳と自己との距離を感じつゝ思索した結果はそのまゝに我らの山岳美論となすことには若干無理がある。眺められた山は、單に眺められた山以上のものではない。登山者の立場においての山岳美論のうちの山岳は、眺められた卽ち距離をへだてた山岳ではなく、我身我がいのちを托するものである。眺められた山の美はすでに客觀的な、生命のうすいものである。しかし命を托する山は自己の一部である。或は自己と山岳とは對立の形式による存在ではない。主觀客觀の未だ分裂せざる前の存在である。この點から發生する體驗的な何ものかこそ、將來の山岳美論の根本觀念をなすものではあるまいか。我らはあまりにも山岳を客觀視すぎてゐた。しかし世はすでに行爲の世となつた。善かれ惡かれ、行爲が理論を生産する時代になつて來た時に、山岳美論のみがとりのこされてゐるべき筈のものではない。主觀客觀の未だ分れざる混沌の時期を表現する方法はたゞ象徵あるのみである。この點が山岳文學の出發點でもあり、また山岳美論の基礎ででもあり得るであらう。



アイヌの作る山小屋　犬飼

アイヌの作る山小屋

犬飼哲夫

現在に於いては、北海道内には純血のアイヌ族が尠い様に、アイヌと稱せられて殘つてゐる者の中にさへ所謂和人と異つた昔のアイヌ式の生活様式をなすものは勿論、それを知つてゐる者も先づ古老を除いては無いと云へる。その昔蝦夷と云はれてゐた時代の北海道に鹿、熊等の野獸が多く、河には魚屬が溢れた時に、アイヌが山野を獲物を漁つて驅け巡つてなしてゐた狩獵生活は、今ではその面影さへ留ることなく全く普通の生活になりきつてゐることは今更此處に特記すべきことでもない。從つて彼等の現今の登山や山生活に於いても山をよく知つてゐると云ふ外に何等の特性をも見出せない。

然し乍ら、その昔物資の窮乏してゐた蝦夷時代にアイヌ間に自ら發達した生活様式は、今日に於いても登山その他の山生活に參考となることが決して少くない。文明の恩惠に浴した我々は、遙にアイヌを凌いで夫々適應した物を使用してゐるから、當時に於けるアイヌの服裝の中には、我々が特に今用ひて便利

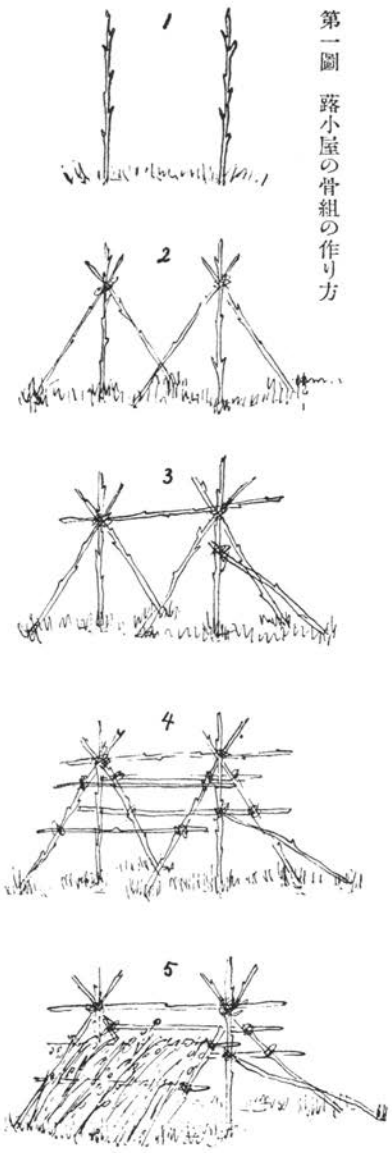
であるものとてはないが、これに反してキャムピングや雨除けの方法は嘗てはアイヌが天幕等のなかつた時代に全く行く先々で自然に存在する材料を用ひてタシロ（ナタに類する刃物）一本で細工したアイヌ獨特のものがあり吾々が場合により利用して便宜を得ることが多い。

先づ冬の積雪期のキャムピングを述べれば場所により方式も異るが大體主なことは云ふ迄もなく防寒衣服より寧ろ焚火により暖をとることである。森林中では雪の中で斜に出てゐる大木を撰びこれを背にその前で焚火をして寝る。尤もこれがエゾ松等であれば根下は雪が少く枝が垂れ下り自然の圍をなし更に雪が降つても樹上から雪塊の落下がないから危險は少いから別に細工を要しないが、他の喬木であれば側面丈を樹枝等で簡單に圍ひ前を開いて置く。斜の木を撰ぶのは落雪を防ぐことにもなるが、焚火の輻射熱を受け且樹幹が煙筒代用になり通風をよくし煙が籠ひ上るから充分な暖を取り得ることになる。大木のない土地では先づ雪を一坪か二坪位なる可く深く除け且つこれを周圍に高く積んで穴の様になしこの上を周りから木の枝等で蔽ふこともあるがそのまゝのこともある。兎に角穴の中央を爐にして焚火をするのであるが穴が充分深くて下土に接して居れば火持がよく、焚火の暖氣で爐座が沈降することがないが、數米に及ぶ積雪中でこの作業は相當な道具と勞力を要するから普通は少し掘つてから足で踏んで雪を固め爐座として雪の上に丸太を列べその上で焚火をなし沈下を防ぐ様にする。この際ナ、カマドが一番焼け悪いから爐座に適するが、これがない時はなる可く太い木を用ふる。場合により直徑二三寸の枝を敷きその上に雪を薄く踏みつけ更に又枝を敷き數層に重ねて座を作り焚火することもある。最も理想的なのは川の端か又は崖等の土の表はれた箇所の附近でこの穴を作り小石か土を雪を踏み固めた上に敷きその上に焚火をすることである。以上稍ゝ準備を整へた場合に行ふ雪中のキャムピングであるが、焚火が不可能な場合

の露營にはアイヌはトド松の葉を用ひた。卽ち長さ一、二米のなる可く葉の多い枝を取り雪を拂ひ落してこれを厚く雪の中に敷き、その上に寢て更になる可く多く同樣な枝葉を自分の上に根本を揃へて積み重ね蒲團を着た如くにする方法で、道に迷つた時などの應急策で比較的暖いものだとメノコ（アイヌの女）が語つてゐた。——アイヌ人はこの小屋は出獵の時作るから犬と共に寢て互に暖め合ふて焚火の暖を補ふことが多い。

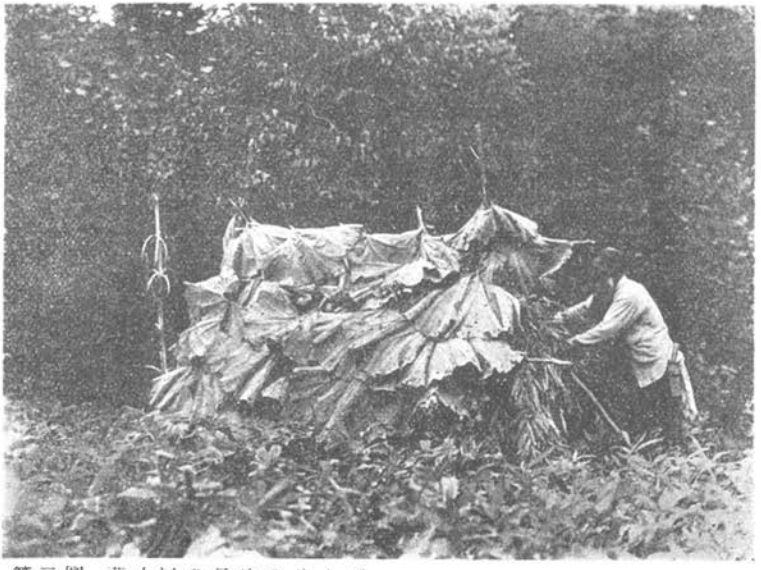
雪のない時分に作るアイヌの山小屋はシシェとかクチャ（獵小舍）と稱し、木の枝、皮、蕗の葉等を用ひて作り數日間はそのまゝ使用し長く使用する時は更に修理して用ふる。又アイヌは雨が激しくなると隨所にこの山小屋を作つて避難することがある。今でも石狩川、音更川（オトフケ）等の上流地方の森林中に至ると魚釣や狩獵の時に使用したこの山小屋の跡を發見することが出來る。

第一圖　蕗小屋の骨組の作り方



今阿寒地方のアイヌ土佐藤太郎の蕗小屋を例にしてその作り方を說明すれば右の如くである。先づ直徑五・六センチ長さ二米位の棒を二本作りこれを一米半位の間隔に(1)の如くに挿し込んで立て、次に(2)の如く左右から支へ且屋根の梁となす。これ等は總べて柳等の丈夫な木皮で結びつけ、次に(3)の如く棟をつけ更に後方から前後に搖がない様に支柱を入れる。この際アイヌなら入口は必ず宗教的に西方に向ふ様に作る、これで支柱は全部前後左右共支へられて動搖しない。次には(4)の如く屋根の樽木を入れ、これが出來上ると葉の着いた小枝を(5)の如くに根本を下に密に立て掛け枝の先端を樽木に卷きつけて動かない様にする。これが小屋の骨組みで、次に蕗の葉の表面を內に向け下の方から屋根を葺き上げて行き、所々小枝に貫き挿して落下を防ぎ幾枚も重ねて最後に棟を葺く。小屋の後方は葉の著いた小枝で塞ぐのである。(第二圖第三圖參照)　これ丈の動作をする時間は約卅分間で、若し雨の激しい時は片側丈の屋根を葺いて入り小止みを待つて他の側を葺く様にしてゐる。小屋の中央には簡單な焚火をなし得てこれ位の廣さなら二人を收容するに足る。アイヌはこの小屋の前に二米ばかりの生木に夫々家系により定數の刻りかけを作り、叉になつてゐるところに獵から歸ると、直に獵具を掛けて幸を祈り然る後に小屋內に持ち込む様にしてゐる。この木をパツカイネと云ふ。又獲物があつた時には入口から持ち込まずに小屋の後方卽ち東側に小窓を作つてそこから入れる。これは昔からのアイヌの宗教心から來た習慣で、東の窓は神聖なものとしてゐるからである。北海道に於いては蕗の葉は非常に大きい物があるから日除け、雨露除け等に利用されることが多い。冒頭の挿圖は安政年間に松浦竹四郎氏が石狩を探險した時の石狩日誌中にある圖で蕗の葉を天幕代用にしたところである。

第二圖　露小屋の最初の骨組



第三圖　露小屋の最後の仕上げ

蕗の葉のない時や蕗のない所ではその代りにトド松、エゾ松の枝葉、その他濶葉樹の枝葉、笹の葉、イタドリ等を用ひて屋根及び側壁にするが最も使はれるものはドロ、柳、トド松等の比較的厚皮の木皮で、長さ二米位に立木の皮に上下に輪切りをつけて次に縦線を切つて剝ぎとりこれを重ねて屋根や壁に使用する。第四圖は主としてエゾ松の枝で作つたもので第五圖はこれにドロの木の皮を交へて作つた小屋である。石狩川の上流の川邊や洲の中の林には所々に斯くして剝がれた枯木の大木が立つてゐる。第六圖は筵を用ひて作つたアイヌ小屋で大體の

第四圖　ユニイシカリ上流のエゾ松を材料とした小屋
（黒瀬太一氏撮）

第五圖　ユニイシカリ上流の板を用ひた小屋
（黒瀬太一氏撮）

第六圖　オコタンペ川口の熊取りのための蓬を用ひた山小屋
（撮影一太瀬黒）

形式が窺はれる。

近年になつて和人が澤山北海道に入り込んでからは本邦で昔から作つてゐた拜み小屋と稱するもので數本の棒を中央で結び合せてこれに屋根掛けをした小屋をアイヌが作ることもあるが雨漏りを完全に防ぐには昔から作つてゐたアイヌ式の山小屋の方が適してゐる。

序に夏の間のアイヌの非常食糧で吾々にも利用し得るものは蕗である。その調理法は彼等は多く蕗の葉を灰の中に入れて蒸し焼きにして食ふがアク味がとれて食ひ易くなる。又特に蕗の葉の中にヤマベ、イワナの小さいものを入れて蒸し焼きにして食つてゐるが蓋し露營生活中を慰める珍味である。

王堂チェムバレン先生

小島烏水

登山者から看ると、チェムバレン先生の名は、明治早期の登山時代に、逸早く、しかも鮮明に掲示された先驅者の標札である、こゝに早期登山時代といふのは、明治初期から中期にかけて、所謂日本アルプスと呼ばれるところの、甲斐、信濃、飛騨あたりの連嶺探檢に、西洋人（主として英國人）が、先驅の働きをなした時代である、日本人の登山者で、今日「故老」とか「先達」とか言はれてゐる老人たちは、大體に於いて、明治の中期乃至後期に活動したと言つた方が、正鵠を得てゐるだらう、今更らしく言ふまでもないが、その頃は、日本アルプスといふ名稱も、世間に知られてゐないし（但し明治後期は別）又參謀本部の實測地圖も、未だ出版されてゐないどころか、實測にも着手して無かつた山地も多く、殆んどこの部分は、白紙の山岳地、暗黒の秘密國であつた、それに目鼻をつけたのは、何と言つても英人牧師（現に本會の名譽會員）ウォルタア・ウェストン氏が、一八九六年（明治二十九年）に、倫敦の書肆ジョン・マアレイから刊行された「日本アルプス登山探檢記」といふ一書である、この本は、今では、あまりに有名で、岡村精一氏の邦譯單行本も出てゐるから、改めて紹介を要しないが、私たちは、當時この原本に教へられて、日本アルプス地方に對する登山慾を、いやが上に生長させて行つた。

この本を讀むと、第一章のところに、著者（ウェストン）は、數年前チェムバレン教授に依つて、熱烈に說か

れた日本アルプスに、初めて注意を向けるやうになつた、と書いてある、そしてチェムバレンに依つて「いみじくも日本アルプスと呼ばれたる」とも言つてゐる、私がチェムバレン教授の名を知つたのも、永久に記憶するやうになつたのも、それからのことである、ウェストンの本だけで、推斷すると、實際最初に「日本アルプス」といふ名稱を唱へたのは、明言はされてゐないが、チェムバレン先生であるらしくも思はれたから、私は早計にも、この名稱は、先生が、新稱として附したものと信じ、自分の早期の山に關する著作物に、チェムバレンの命名であるかの如くに書いたのが、いろんな書物に轉載せられ、「日本アルプスとは、英人チェムバレンの命名する所にして」などと書かれたものである、後に研究の進むに隨つて、この名は大阪造幣廠に雇はれた英人ウヰリアム・ガウランドの命名したものであるといふことが解つたが、それにしても、最初にこの名を印刷したのは、アーネスト・サトウ先生で、それをチェムバレン先生が繼承し、更にこの名稱を確定的に設立したのは、前記ウェストンの著書である。

その事を、やゝ詳しく述べさせてもらふ、一八八一年（明治十四年）に、英國公使館（當時は大使館では無かつた）附書記官のアーネスト・メーソン・サトウ先生、及び退役海軍士官エー・デー・エス・ハウス兩氏の共編「中部及び北方日本旅行案内」を、横濱本町二十八番館のケリー社から出版されたが、その時、既に編輯資料を、廣汎なる範圍に亘つて、チェムバレン先生と、英文學教授のアストン先生に仰ぎ、大和の吉野地方、信濃飛驒山塊の地質、及び信飛山塊の主要高峰の記事は、前記ガウランドの提供を受け、岩鼻山・岩木山・弊梯山の登山記は、他の北方日本の山岳記事と共に、地震學者のミルン教授から、「八ヶ岳・白山・及び立山」は、無機化學の教授アトキンソンの述作から、材料を獲た趣を、序文（一八八一年二月一日付）に述べてゐられる（但し、何々教授とい

ふ肩書きは、私が註釋的の意味を持たせて、添加したのである、誤りがあつたら、私の責任である）が、この本は、山岳地に關する限り、詳密とはいへないが、併し信飛地方の大連嶺に對して、日本アルプスと稱して然るべき旨を、初めて印刷物に記述したのは、正にサトウ先生等の本書、越中飛騨の部、緒論（第二六五頁）に於いてである。

十年の後、卽ち一八九一年（明治二十四年）に至つて、チェムバレン先生は、友人グブルュー・ビー・メーソンと共同して、本書の版權を讓り受けられた、その頃は、日本内地に鐵道の新たなる開通も多く、國の風貌も、大なる變化を來し、旅行道の革命も生じたので、根本的に改訂を施され、地圖十五枚を添へ、「日本旅行案内」の名の下に、ケリー・ウオルシュ社、及び倫敦のジョン・マアレイ共同出版として發行されたが、この時は、既にウェストンが渡日して、神戸の一教會を牧してゐたし、ウェストンからも、材料を受けた趣を斷はつてあるが、本卷所載の立山・槍ヶ岳・針木峠・信州駒ヶ岳・白山等の記述は、寧ろガウランド氏、サトウ先生、チェムバレン先生等の、登山經驗及び資料の拾收が與つて力あることを推察せられる、何となれば、當時は未だウェストンも、是等の諸高山に登つて居らず、その他に於いては、小泉八雲、ベルツ博士、ライン博士、グリッフィス先生等の諸氏も、材料を供給されてゐるが、是等の諸家は、登山家を以つて目すべきでないからである、因みに言ふ、私の所藏してゐる一八九一年版の本書は、チェムバレン先生より、巨知部忠承博士への獻呈本で、巨知部博士の手署がある、今は兩先生共に亡く、友情記念の本卷が、後學、私の手に愛藏されてゐる。

以後、本書は數版を重ね、版毎に新材料を增加し、日本地理資料としては、單に外人が、依つて以つて信憑するのみならず、日本人も、殊に山岳地帶の記述や案内は、本邦の學者と雖も、本書から飜譯する外には、東京の

「地學雜誌」又は、火山方面に於て、震災豫防調査會の報告ぐらゐを除いて、頼るところが無いといふ狀態であつた、例へば明治二十七年に初版を發行して一代の風景觀を一變させたと思はれる矧川志賀重昂先生（本會の名譽會員、既に物故せらる）の「日本風景論」も、日本アルプスといふ名こそ、襲用しなかつたが（但し、他の同氏の論文では、採用してゐられる）信飛地方の火山以外の諸高山を記述するに當つては、材料を隨分多く外人なるチェムバレン先生の「日本旅行案内」から、邦譯するの止むを得なかつたことは、今日から論ずれば、不見識のやうでもあるが、當時は、さうするより外、材料が獲られなかつたのだから、何とも致し方はない、斯く言ふ私は、「日本風景論」とウェストンの「日本アルプス」に教へられ、啓發、激發されたことは非常なもので、溯源すると、チェムバレン先生の「日本旅行案内」に辿り著くのだから、明治早期登山時代の山岳文献に於けるチェムバレン先生の功績は、偉大なものである。

尤も、實を言へば、チェムバレン先生の傑れたる述作は、むしろ他の方面に存する、萬葉集、古今集、謡曲等を英譯された「日本上代の詩歌」（明治十三年）を初めとして、「英譯古事記」（明治十六年）「日本小文典」（明治二十年）「日本事情」（明治二十三年）の如き名作を續々刊行せられ、殊に「日本事情」は、ウェストンの「日本アルプス」にも參照されてゐるし、外人に日本の事情を知らせた名著として、海外にまで影響するところ頗る多かつたが、登山家の看點から視る時には、たとひ輯製的のものであつて、創作的でなかつたにしても、「日本旅行案内」が、白紙の山岳地、暗黒の秘密國なる日本アルプスに投與した、赫々たる光明感に眩惑したことを自白する、念のために「日本旅行案内」の出版年月を左に列記する。

日本旅行案内改訂第三版　一八九一年（明治廿四年）

同　　增補訂正第四版　一八九四年（同　廿七年）
同　　增補訂正第五版　一八九九年（同　卅二年）
同　　訂正第六版　一九〇一年（同　卅四年）
同　　訂正第七版　一九〇三年（同　卅六年）
同　　增補訂正第八版　一九〇七年（同　四十年）
同　　第九版　一九一八年（大正七年）

この中の第四版（明治二十七年）に至ると、既にウェストンが、信飛地方に盛んに登山を開始し、倫敦の「アルパイン・ジャーナル」にも、日本アルプス登山記の第一報（明治廿六年五月號）を送つてゐる程で、富士川――天龍谷の間の、山岳地及び飛驒越中の諸高山は、ウェストンの改訂に待つこと多大である旨を、序文で謝意を表してゐる。

しかも、チェムバレン先生は、單に記述者たるに止まらず、自身で、明治の早期に、信州大町から越中立山まで、針ノ木峠を經て、冒險旅行を敢行されてゐる、尤も私は、未だその年月を審らかにしないが、先生は明治六年、二十三歳の時に、始めて日本に來航せられ、針ノ木峠の記事は、サトウ先生の前記「中部日本案内」（明治十四年）にも揭げられ、チェムバレン先生の手に、日本旅行案内の版權が歸してから針ノ木の記事が增補されたにしても、舊作（明治十四年版）が依然基本になつてゐるから、その中からチェムバレン先生の觀察記錄を、分離させて、登山の年月を判定するといふ方法を取ることは、困難である、ともかくも、その當時、針ノ木峠を踰えるといふことは、非常の難事であつて、私が先生と文通するやうになつたのも、針ノ木峠の道路の模樣を、先生

に手紙で教へていたゞいたのに、始まつてゐる。

その手紙をいたゞいたのは、ハッキリと年月をおぼえてゐないが、恐らく明治三十九年頃であつたと思ふ、先生は明治二十三年に、東京帝國大學文學部の教師を、多病のために辭職せられ、大學から、名譽教授の稱號を贈られ、箱根宮ノ下に隱棲されてゐたが、恰も明治四十年版の日本旅行案内（第八版）發行に垂んとしてゐた時だとおもふ、その本の原稿の一部、針ノ木峠に係はるところの校正刷に、朱筆を入れられたのを封入せられて、私（先生）と共同著者メーソン氏の知悉せる限りの、針ノ木峠の道筋、その他の模様はこの原稿に盡きてゐると言つて、お手紙を添えて下すつた、その折りに、交換といふ意味でも無かつたらうが、先生は目下印刷中の本書新版に收むべく、白馬嶽の記事に就いて、私に材料の供給を依頼せられた、その前版（明治卅六年版）までの「日本旅行案内」には、大蓮華の名の下に、白馬嶽と近似した山の記事が收められてゐるが、これは恐らくウェストンの供給に係はつたもので、ウェストンの「日本アルプス」、亦大蓮華の登山記あつて、白馬嶽の名は一切見るところがない、白馬嶽は、日本の登山家、それも高山植物研究家の間に、夙に名が高かつたやうであるが、明治三十五年に山崎直方博士（當時は理學士、日本山岳會員、今は故人となられた）が、嶽の中腹、葱平邊で、氷河の遺跡なるものを發見せられたといふ報告があつて、學界を騒がせた後とて、特に先生の注意を惹かれたものであると想はれる、當時私は、未だ白馬嶽に登つてはゐなかつたが、友人や雜誌などから聞知綜合して材料を整理して、至つて簡單ではあつたが、先生に送附したことがある、印刷成つて先生から With the authors' compliments. と印刷した紙片を挾むだ第八版の、惠贈を受けたが、書中初めて（この案内記としては）白馬岳の項が、大蓮華峰の記述とは別に、獨立して收められ、氷河遺跡發見のことも書き加へられてゐる、僅か二十行ぐらゐの

簡單なもので、今日から見れば、全く以て物足らなさ過ぎるが、それは私の供給した資料が、貧弱を極めてゐたからである。

私は、先生の御手紙を、大切に保存して、嘗て日本山岳會の大會にも、解說を附して、陳列したことがあつたが、私の渡米後、大震災の騷ぎで、宅は燒けはしなかつたが、家族の避遁後、空屋へ一揆的避難者の闖入があつたゝめ、多くの貴重なる山岳文献資料（主として手紙原稿類）が、行衞不明になり、先生の手紙も、未だに見つからないので遺憾に思つてゐる。

先生は、箱根宮ノ下逗留時代に、よく私の勤務してゐる横濱正金銀行横濱本店の窓口から、私に聲をかけて下された、恰度私が外人預金係であつて、窓口にデスクを置いてゐたので、先生の通帳を扱つてあげながら、山の話や、山岳文學の話を伺つたことも、度々あつた、記憶に存したことを、一つ二つ憶ひ出すと、私は明治四十年十月二十七日に、當時神奈川中學に通學の弟榮（サカエ）（現日本山岳會員）を連れ、御殿場を午前三時に出立、午後一時三十分に、劍ヶ峰に達したが、新雪は八合目から見え出して、絶頂につゞいてゐた、その新雪の狀態等を檢べて「橫濱貿易新聞」紙上に「雪中富士登山記」と題して兩三日に亘つて、紀行を連載した、今なら十月頃の秋山に、雪中登山も、凄まじいと、笑殺されるところだが、その當時は、十月末となつては、剛力を得るすら困難で、皆んな農事に忙がしく、相手にしてもくれなかつたし、勿論登山者などは、一人も無く、空山寂寞のきはみであつた、チェムバレン先生は、毎日その紀行を讀まれたさうで、私にそのことも話された、（この一文は、明治四十一年九月刊行の拙著「山水美論」に收められてゐる）何にしろ、語學の天才で、博言學の素養があり、日本人にすら、難解の古事記を英譯するくらゐの、根氣の强い、理智の明晰な先生のことだから、私の淺薄な文章を讀んで

下すつたといふことが、既に赤面の至りである。

も一つ、當時私は、ラスキン崇拜で、苟くもラスキンに關する著作は、取り寄せて、解りもしない癖に、目を通さないと氣が濟まない程であつた、一九〇四年倫敦のジョン・マアレイから出版されたキッチンといふ人の著「オックスフォルドに於けるラスキン及び其の他の研究」といふ單行本を、丸善から購入したが、其の第一章に Ruskin at Oxford, as an undergraduate and as slade professor とある題からして、先づ解らない、この「アングダアグラヂュエート」と「スレード・プロフェッソル」の稱號及び職分に就いて、見當が附かなかつたので、チェムバレン先生が窓口に見えたときを、捉まへて、その意味を質したが、英國人の先生のことだから、言下に明解を與へられるかと思ひの外、暫く沈吟して、充分に說明をして下さらなかつたのは、少々意外であつた、尤も日本と英國とは、大學の組織も違ふし、殊に大學の職制に緣故のない私に、說明しても、理解困難と思はれたかも知れない、別のことだが、私の「日本アルプス」第一卷に、溪流に立てるラスキンの肖像を入れたのは、前記キッチンの本書に、フホトグラビウア製版で卷頭に揭げられたのを、轉寫したのである、原畫は所謂ラフェール前派頭目の一人、ジョン・ミレースの作である。

かう書いてゐても、銀行の窓口で、月に一回ぐらゐは、お目にかゝつた先生の、氣品の漂つてゐる細面が、在ますが如く、眼前に浮んで來る、先生の體格から、おもざしから、漢學流に形容すれば、淸瘦鶴の如しで、靜かに、ポツリ、ポツリと、澄み切つた言葉使ひの、上品で叮嚀なことは、好學的な、研究的な、態度と精神がおのづと流露してゐる、粗野なる銀行の一小僧が、いかに恐縮してしまつたことか、今考へてもいぢけてしまふが、それは併し、先生の氣高い精神に撲たれたからで、先生の態度は、親しみ易く、隔てとては更に無い、氣の措け

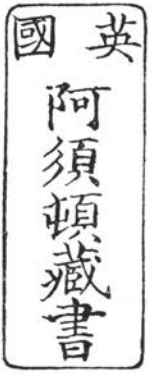
『鳥獣草花繪本初心道しるべ　中』より

ない老人であつた、只だ先生は、平生病氣克ちで、俗に「影が薄い」といふやうな、弱々しさの感銘を受けた、先生の日本渡來は、明治六年で、恰も私が誕生した年であるから、正金銀行でお目にかゝつたときの先生は、今から逆算すると、五十五・六才（明治四十年前後として）でしかない、卽ち今日の私よりも、若年であられたが、餘程御老體のやうに見受けられた、つは私が、當時若かつたゝめもあらうが、先生も、あまり御丈夫とも思はれなかつた。

私は、先生のお手紙を失つたことを、前に述べたが、先生が明治四十四年三月に、日本を去られてから後のこと、私が米國から歸朝して後のこと、神田の古本屋から、偶然にも、先生の藏書印ある古版本を探し出した、發行年代不明であるが、江戸時代に於いて京都の書林通三條須磨勘兵衞（弘簡堂）から、版行された西川風の浮世畫畳摺の三冊本で、「鳥獸草花繪本初心道しるべ」と題されたものである、毎巻々頭に、先生の藏書印

と、長方形の朱肉印が、押捺されてゐる、こゝで遲蒔ながら、先生の全姓名（フルネーム）を擧げると、Basil（バシル） Hall（ホール） Chamberlain である、Basil は辭書を引くと、希臘語 Basilikon から來た言葉で、英語の Royal 則ち「王」に當る、Hall の「堂」なることは、言を俟たず、先生が王堂と號せられる所以で、外國人が、漢學者流に、號を附けるのは、或はサトウ先生あたりが、最初に試みられたものではあるまいか、卽ちサトウ先生の藏書印は

とあり、アストン先生も、亦音便に依られて



といふ印影を押捺されてゐられる、併しチェムバレン先生の王堂は、一層日本的である、日本の最近の哲學者で、今は故人となられたが、田中王堂といふ論客があつた、偶ま號の同一から、憶ひ出されたまゝ、附記して置く。

次にチェムバレン先生の、王堂印の藏書庫に就いて、文學博士佐々木信綱氏は、左の如く記述されてゐる。(「心の花」第三十九卷第四號)

先生は、箱根を愛されて、宮の下富士屋ホテルの、日本建の東端、二十七、二十八號の兩室に夏を、本館の角の日あたりのよい四十五、四十六號兩室に冬を、過された、しかしてホテルの構内なる熊野神社の傍に、書庫を建てて、夙くバシル・ホールを、王堂と譯され、英王堂藏書といふ印をつくられたが、その印を押した約一萬數千卷の書を、をさめられたこの書庫は、疊間は書齋にされてをつたので、明星が岳に向ふ窓の邊に、搖り椅子に倚つて、或は秘書をして書物を讀ましめ、或は舊式な萬年筆を用ゐては、著書の訂正を、絕えずしてをられた。

或は思ふ、私の入手した繪本も、この箱根の書庫から洩れ出たのではあるまいか、たとひ、さうであつても、なくても、如何にして先生の藏本が、市に出たかは、私の與かり知らないところである。

最後に申す、「日本旅行案内」の共同著者、メーソン氏は、晩年になつて、不幸にも鎌倉で、大震災に遭ひ、壓死せられたが、チェムバレン先生は、日本を去られてから、風光明媚なるジェネーヴのレーマン湖畔で、靜かに餘生を送られ、本年二月十五日、同湖畔のリッチモンド・ホテルで、八十五歳の高齡を保つて、永眠されたのは、清福羨やむべきである、先生は若いときから、壯年時代まで、最も日本の風物を愛せられ、老後は、アルプスの水光山色に親しまれ、そこで天壽を完うされた、影が薄いと思つたのは、馬くんぞ知らむ、本體は斯の如く強きも

のであつた。

日本山岳の記念すべき恩人として、サトウ先生、ガウランド氏は、私の相見えざる故人だから、今言はず、チェムバレン先生、メーソン氏、ウェストン氏と、この三老人を並べて考へると、南畫の虎渓三笑といつたやうな風格を憶ひ出すが、今日餘生を保つてゐるのは、さすがに一番若いウェストン老一人で、それすら、氣の毒なほどに老衰されてゐると聞く、私は暮春の愛惜を以て、この痛々しい唯一の殘存者に、壽永かれと希ふこと、切りである。

チェムバレン先生逝かれるや、佐々木博士は、歌道の雜誌「心の花」のために、私に一文を徵さる、私は「早期登山時代のチェムバレン先生」と題した短文を同誌に寄せた（載せて四月號に在り）その後になつて、不備誤謬の點があつたのに鑑み、且つは又右の「心の花」や、四月の「國語と國文學」に出でた「チェムバレン教授追悼錄」に依つて敎へられたところも多く、既出の「早期登山時代のチェンバレン先生」を骨子として、重ねて本文を起草した。

文中、先輩外人の氏名に對し、或は先生、或は氏、或は呼び捨て等、體裁不一なることを覺つたが、迂つかり、さう書けてしまつたので、就中ウェストンに對する呼び捨てなどは、あまりに親密なためである、ウェストンも微笑こそすれ、叱りはしまひと思ふ、と言ふことさへ、他人行儀か。

支那文獻に表はれた白頭山

太田喜久雄

一

今冬京大遠征隊の記錄的な登攀に當つて、東西兩朝日新聞が鳴物入りで吹聽した結果、滿鮮國境に聳立する白頭山の存在が極めて明確に世人の腦裡に印象附けられた。元來白頭山又は長白山は、我が國定教科書に載せられてはゐるが滿鮮現地の人々又は特殊の關係に置かれる人々を除いては、大多數の世人は此の山の存在を忘却し、たとへ名前は知つてゐても何處に在るかと云ふことに至つては皆目見當のつかぬ人々が多かつたと云はれる程我が國人には緣遠い存在であつた。然るに此の山は新興滿洲國人には其の皇祖、淸朝發祥の靈山として一つの尊崇の目標となつてゐることも日滿兩國關係の極めて密接した今日、時にとつて興味ある問題であると云へよう。此の滿鮮國境の最高峯は一體如何なる意義を有する山であつたか、古來支那人は如何に見てゐたか等、支那文獻上に表はれた白頭山に就いて以下若干の考察を試みてみよう。

尙ほ白頭山に關する文獻は梓書房より發行される京大遠征隊の報告書卷末に列記してあり、地質鑛物學上の文獻は渡邊武男、長澤佳熊兩氏『朝鮮咸北の山々、冠帽峯机山峯及白頭山』(「山岳」第二十七卷第二號)、山成不二麿氏『白頭山』(「地學雜誌」第四十年)渡邊武男氏『白頭火山』(「火山」第

二卷第一號）後尾に列擧されてをり、又た朝鮮鑛業會より立石巖氏が昭和八年十月に『朝鮮に於ける地質及鑛物の調査沿革竝文獻』を編んでをられるから特に此の方面に興味ある讀者は參照されると便宜である。

二

先づ第一に白頭山の山名の由來する所以であるが、白頭山は朝鮮に於いて行はれる稱呼であつて、現今支那人は之を長白山と呼んでゐる。

『北塞記略』の「白頭山考」に、

「白頭山。在茂山府西三百六里。古名不咸山。中國之人謂之長白。東方之人謂之白頭。蓋山極高。四時常氷雪。故名。」

と記して此の點を明確に扱つてゐる。

『東國文獻備考』に、

「白頭山在茂山府西三百五十里。」

『海左地圖說』に、

「白頭山首起西北。直下大荒。至此陡立。其高不知幾千萬仞。山巔有池。如人顱穴。周可二三十里。水色黝黑不測。四月氷雪委積。望之漠漠一銀海也。山形在遠若複白蓮。及登巔。四圍微凸中窪如仰甕口向上外白內赤。四壁側立。若糊丹堵坼。其北數尺水溢出爲瀑。卽黑龍江源也。從岡脊而下三四里。始得鴨綠之源。」

『英祖朝寶鑑』に、

「丁亥秋七月。左議政韓德夏言。白頭山乃是我國之朝宗山。而北道又爲國朝發祥之地。北嶽祀秩。今宜移設于白頭山也。上下詢大臣。奉朝賀兪拓基曰。我國諸山。皆發脈於白頭山。而山之傍近。又是列聖發祥之地。立國近四百年。尙未崇祀。恐是闕典。白山之祀。臣無容別議。上從之。命咸鏡道臣。擇地於甲山府八十里雲龍堡北望德坪。建閣。望祀於白頭山。」

『東國輿地勝覽』卷之五十「會寧都護府」の條に、

「白頭山。卽長白山也。在府西七八日程。山凡三層。高二百里。橫亘千里。其巔有潭。周八十里。南流爲鴨綠江。北流爲松花江。爲混同江。東北流爲蘇下江。爲速平江。東流爲豆滿江。大明一統志。東流爲阿也苦河。疑指速平江也。」

として白頭山の名稱を用ひ、韓の光武年間に編纂せられた韓國北界の境界地域踏査書たる『北輿要選』には、上編に於ては、白頭古蹟攷、白頭舊疆攷、白頭圖本攷、白頭碑記攷、下編に於ては、探界公文攷、勘界公文攷、

察界公文攷、奈界攷文攷等、朝鮮側の文獻には盛んに白頭山の名稱を使用してゐる。

長白山の滿洲名は果勒敏珊延阿林と云ひ、果勒敏は長、珊延は白、阿林は山を意味する。

『盛京通志』に、

「長白山。卽果勒敏珊延阿林。在吉林城東。稍折而南。橫亘千餘里。東自寧古塔。西至奉天府。諸山皆發脈于此。山巔有潭。爲鴨綠混同圖們三江之源。古名不咸山。亦名太白山。亦名白山。」

『吉林通志』に、

「長白山。國語曰果勒敏珊延阿林。在吉林城東南六百餘里。橫亘千餘里。本漢元菟郡境。漢曰單單大嶺。魏曰蓋馬大山。後魏曰太白山。又曰徒太。曰從太。曰太皇。皆一山也。其名曰長白山則金始。又曰白山。在元開元路舊會寧縣南六十里。明三萬衛東北千餘里。東至寧古塔。西至奉天府。諸山皆發脈於此。山高約百里。山頂有池。五峯圍繞如屏。南一峯稍下如門。中潭杳窈。距岸五十丈許。周圍約三四十里。山之四周百泉奔注。西南流入海者爲鴨綠江。東南流入海者爲圖們江。北流入海者爲混同江。」

『滿洲源流考』に、

「長白山在吉林烏拉城東南。橫亘千餘里。東自寧古塔。西至奉天府。諸山皆發脈於此山。巔有潭。爲鴨綠混同愛滸三江之源。古名不咸山。亦名太白山。亦白山。亦名徒太山。亦名太末山。其名長白山則金始也。」

白頭山と云ひ、長白山と云ひ、其の名稱の起る所以のものは、此の山の形態に因つたもので、白色と云ふ感じが強く遠望する者に與へてゐるのである。山名に就いては從來幾多の變遷があつたが多くは此の白色と云ふ意味感を强調してゐるやうである。小川琢治博士に從へば、白頭山は其の高度雪線に達しないが古來白山の名があるのは、此の山を構成せる熔岩の白色皚々、周邊の黯綠黑色なる針葉樹林に反襯せるに因るものであると云つてをられる。

三

然らば此の山の初めて文獻上に表はれて來るのは何時頃かと云ふに、『山海經』の「大荒北經」に、

「大荒之中有山。名不咸。在肅愼氏之國。」

とあり、『晉書』「東夷傳」に、

「肅愼氏。一名挹婁。在不咸山北。去夫餘可六十日行。東濱大海。西接寇漫汗國。北極弱水。其土界廣袤數千里。」

と云ふ記事があり、更に『通典』に、

「挹婁卽古肅愼。其國在不咸山北。」

『太平寰宇記』に、

「挹婁國在不咸山北。夫餘北千里。」

と述べてゐるのがある。『滿洲源流考』、『吉林通志』、『盛京通志』の撰者は何れも不咸山を以て白頭山に當ててゐるが、支那邊疆に活躍せる肅愼民族の住地が明確に何處なるかに疑問のある現代では果して不咸山が白頭山に當るや否やは頓に斷定致し難い性質のものである。而も不咸山は、『太平御覽』、『翰苑』の註、『史記正義』、及び『後漢書』「孔融傳」の註に引く「肅愼國記」の肅愼の境域に關する文獻には何れにも見當らない。『山海經』の不咸山は確實なる地理上の知識に基くところがあるかと云ふに、同書の性質上俄にそう考へることは困難である。『晉書』の不咸山は『山海經』に據つたもので、それを挹婁の南の山としたのは編者の杜撰は免れ難い。從つて不咸山は不明の山であることになる。『北塞記略』の「白頭山考」には、

「按不咸山據東史。北沮蘇鞨。皆云在不咸山北。以此推之。似在我國界內。而不知何山爲古之不咸也。今以白頭山稱之不咸者。何所據歟。」

と擧げて不咸山の白頭山なる根據の薄弱なることを指摘してゐる。尤も滿鮮地方に於いて白頭山は最も著しい山であるから或は之に當てるのも必しも不當ではないかも知れない。

此の山に關する稍〻詳細なる記事の文獻上に表はれて來るのは『魏書』の「徒太山」、『北史』の「從太山」である。『魏書』卷一百「勿吉國列傳」の條に、

「勿吉國南有徒太山。魏言太白。有虎豹熊羆。不害人。人不得山上溲汗。行遥山者。皆以物盛。」

とあり、又た『北史』卷九十四「勿吉國列傳」の條に、

「勿吉國有從太山者。華皇太皇。俗甚敬之。人不得山上溲汗。行經山者。以物盛去。上有熊羆豹狼。皆不害人。人亦不敢

殺。」

卽ち『魏書』には徒太山、『北史』には從太山として記載されてゐるが、『新唐書』『靺鞨傳』に、

「靺鞨居肅愼地。粟末部居最南。抵太白山。亦曰徒太山。與高麗接。」

とあり、又た『隋書』も徒太山と記してゐるから恐らくは北史の從太山は徒太山の誤りと見る可きではなからうか。

長白山の名が初めて用ひられたのは旣に『吉林通志』に記されたのを示したが如く、『契丹國志』、『金史』に見えるのが始めである。

『契丹國志』に、

「長白山。在冷山東南千餘里。乃白衣觀音所居。其山禽獸皆白。」

『金史』に、

「女眞地有混同江長白山。混同江亦云黑龍江。所謂白山黑水是也。

昭祖耀武至于白山。入于率賓扎喇之地。所至克捷。還經佛頁水。

會寧府會寧縣有長白山。

大定十二年。有司言。長白山在興王之地。禮合尊崇。議封爵建廟宇。十二月。禮部太常學士院奏。奉敕旨。封興國靈應王。卽其山北地。建廟宇。」

大定十七年、省臣奏。咸平府路一千六百餘戶。自陳皆長白山錫馨珊沁河女眞人。遼時僉爲獵戶移居于此。號伊勒敦部。本朝之興。首詣軍降。仍居本部。今乞釐正。從之。

章宗泰和二年。遣使報謝于長白山。

昭祖族人果布者。從昭祖耀武。至于白山。

溫都布拉。始居長白山阿布緻河。徒隆州額勒敏河。

昭祖耀武。至於青嶺白山。舒嚕佐之也。」

爾來長白山の名は支那人が襲用して現今に至つたもので、其の以後の文獻には必ず長白山の名が用ひられてゐる。例へば、

『元一統志』に、

「開元路長白山在舊會寧縣南六十里。橫亘千里。高二百里。其頂有潭。周八十里。淵深莫測。南流於鴨綠江。北流於混同江。今呼爲松阿里江。東流爲愛呼河。」

『明一統志』に、

「長白山在三萬衞東北千餘里。故會寧府南六十里。橫亘千

里。高二百里。其巔有潭。周八十里。淵深莫測。南流爲鴨綠江。北流爲混同江。東流爲阿雅噶河。今考西南流入海者爲鴨綠江。東南流入海者爲圖們江。北流入海者爲混同江。並無阿雅噶河之名。古今稱名之異也。」

尙以上說明した山名の外に、『後漢書』、『魏志』、『冊府元龜』等に單々大嶺の名あり、又た『魏志』に蓋馬大山の名あり、『吉林通志』の編者は何れも之を白頭山に當ててゐるが、直接是等の文獻を研究しても其の正確な位置は明かでない。單々大嶺は南北の走向を有し、滿鮮境の分水嶺であるものの如く、『滿洲源流考』の編者は「單々」と滿洲語の「善延」が相似てゐるから卽ち長白山ならんと註釋してゐるが、直に之に唱服すべきや否やは疑問である。蓋馬大山も亦た北鮮に在ることは判るが、卽ち長白山であると斷定するには材料が甚だ少い。

四

旣に屢〻揭げた文獻に依つて白頭山の所在は、吉林の東南方に當り、滿鮮交界地に蟠居する最高峯で、諸山の盟主となり、山巔に鴨綠、混同（松花）、圖們（豆滿）三江の水源となる潭があることが判明する。然しながら現今に於いても尙朝鮮側の地理は實地踏査に依つて比較的に明瞭にされてゐるが、一度滿洲國側に足を踏み入るれば、鬱蒼たる原始林の中にあつて猛獸の害と稍〻人煙に近き附近は馬賊出沒の危險に爆らされて四近の地理が殆ど正確に調べられてゐない。從つて是等の事柄が原因して、正確なる實地測量圖が出版されておらず、文獻には白頭山頂上の天池が三江の水源であると簡單に片附けられてゐるが如く見えるが、事實は必ずしも斯様に簡單明瞭なものでもない。日本群島の如き島嶼國では分水界は主要山脈の走向に一致して、宛も屋根より雨水が相背流するが如き河流が多く、水系と地勢との關係は餘り複雜ではないが、大陸に於いては之と反對に、時々水系は複雜極まるものであることがある。暗黑大陸の名を以て探檢家の競うて遠征したアフリカ大陸に於けるニーヂェル、ナイル、ザムベジ、コンゴの諸大河上流相互關の係、アジア大陸

に於けるメコム、メナム、イラワヂ諸大河水源、黄河、揚子江上流々域地方の錯綜せる狀態等は何れも近世までは附近の地理が不明のまゝ殘され、或は其の儘現在に至つてゐるのである。之を小規模にしたものは此の白頭山三江水源地附近の地勢で、花崗岩、片麻岩の地盤よりなる複雜なる高原性の地勢は容易に近づき難きものとしてゐるが故である。天池より流出するものは松花江の源流たる二道江であつて、鴨綠、圖們兩江は白頭山頂附近の諸水を蒐めて流下し、天池より發しておらず、而も從來支那文獻では松花江の水源は白頭山西北溪谷より發する頭道江を本流とされてゐたが、之は『吉林通志』編者の謬見に起因するものであらうと云ふ結論のみ單に述べて三江水源問題の考證には此處では觸れない。

五

白頭山は清朝發祥の靈山として清朝人尊崇の對象となり、延いて清朝の皇室を迎へた新興滿洲國人亦祖先發祥の靈域として崇拜の念厚きことは前述したところであるが、之に關しては次の如き天女傳說があり、建國の歷史として著明である。

『滿洲源流考』に、

「譜稽實錄。長白山東。有布庫哩山。其下有池。曰布勒瑚哩。相傳。有三天女浴於池。神鵲銜朱果。置季女衣。季女含口中。勿已入腹。遂有身。尋產一男。生而能言。體貌奇異。及長。母告以吞朱果之故。因錫之姓。爲愛新覺羅。名之曰布庫哩雍順。與小舟乘之。母遂凌空去。舟順流至河步。于是登岸。折柳及蒿爲坐具。端坐其上。其地有三姓。爭爲雄長。日搆兵雙殺。有取水河步者。見而異之。歸語人曰。汝等勿爭。吾取水河步。見一男子。容其貌。非常人也。天小慮生此人。衆往觀皆以爲異。因詰所由來。答曰。我天女所生。天生我以定汝等之亂者。且告以姓名。衆曰。此天生聖人也。不可使之徒行。乃交手爲舁。迎至家。三姓者議推爲國主。以女妻之。奉爲貝勒。其亂乃定。遂居長白山東鄂多哩城。國號滿洲。是爲開基之始。越數世遭寇亂。宗族多遇害。有幼子遁有荒野。賊追之。舍有神鵲止其首。追者遙望棲鵲處。疑爲枯木。中道而返。乃得免。隱其身以終焉。又再傳爲肇祖原皇帝。是此山實爲清億萬年發祥重地云。」

『盛京通志』にも同樣の記事を揭げて居り、卽ち淸朝の祖先愛親覺羅氏が長白山の東、布庫哩山の麓、布勒瑚里の池附近を誕生地として長じて三姓の騷亂を平定し、鄂多理城に據つて着々基礎を固め、破竹の勢を以て西方に雄圖を伸ばし、漢民族の本土を席捲して明朝に代つて淸朝十二世二百九十七年の基を拓き北京に都する迄の由緒ある發祥の地と目されるものである。

『淸史稿』「太祖本紀」にも、

「太祖承天廣運。聖德神功。肇紀立極。仁孝睿武。端毅欽安。弘文定業。高皇帝姓愛親覺羅氏。諱努爾哈齊。其先蓋金遺部。始祖布庫里雍順。母曰佛庫倫。相傳感朱果而孕。稍長定三姓之亂。衆奉爲貝勒。居長白山東。俄漢惠之野俄朶里城。號其部屬曰滿洲。」

と記して『滿洲源流考』の說を裏書きしてゐる。

さればこそ淸朝では長白山を尊崇し、『滿洲源流考』『盛京通志』、『吉林通志』、『大淸一統志』等の記事に從へば、長白山の神を尊んで、吉林城の西南九里の地にある溫德衡山卽ち望祭山に奉遷して每年春秋二季に祭典を催し、盛大な儀式を行ひ、吉林將軍副都統が祭主となり、盛京禮部より役人を派遣し、大祭には皇帝は祭文を奉つて長白山神の靈を安んじ、大臣を特派するのが例となつてゐる。雍正十一年には望祭殿を建設してゐる。乾隆八年には御製駐蹕吉林境望仰長白山の詩があり、同じく十七年には御製長白山瑞樹歌、同じく十九年には御製望祭長白山詩があり、皇室が率先して祖宗の靈を安んじてゐられる。康熙十六年(『大淸一統志』、『盛京通志』、『吉林通志』等には十七年としてゐるが、之は十六年の誤りであらう)には祖宗發祥の地の地理を明かにするため勅命を奉じて內大臣覺羅武穆納等が登山してをり、同じく二十三年再び駐防協領の勒瓠等が長白山に派遣されてゐる。康熙十六年に特派された一行の道程、旅行記は方象英の封長白山記に詳しいから左に全文を記してみよう。

「康熙十有六年四月望。上以長白山發祥要地。特命內大臣覺羅武某。一等侍衞兼親隨侍衞費耀色。一等侍衞賽護禮等。於大暑前馳驛往。五月四日啓行。十四日至盛京。二十三日至兀喇。

宣諭鎭守將軍等。召村莊獵戶。皆無知長白者。都統尼雅漢族
祖戴穆布魯。世採獵。以老退閒。自言祖居額黑訥陰。聞其父
嘗云。獵鹿長白山。貢以歸。四日可抵家。以此度之長白山距
訥陰當不遠。因問訥陰路幾何。獵戶噶喇大額黑等曰。陸行
十日。水路乘小舟二十日。乃命獵人喀喇前導。各持三月糧。
又慮食盡馬乏不能歸。也期將軍巴海。裁來一舟。候於訥陰。
于是噶喇大額黑等由舟。覺羅率固山大薩布素由陸。六月三日
啓行。經文德瘐河。阿虎山。庫納訥林祁爾薩河。渾沱河。法
布爾堪河。納丹佛勒地方。輝發江。法河水。敦林巴克喀河。
納爾渾河。敦敦山。卓龍窩河。凡數十處。抵訥陰。而噶喇大
等亦至。蓋自江逆溯。由瓦努湖河。至佛多和河。復順流來
會。纔七日耳。十一日發訥陰。一望林莽。遂不得路。薩布素
率旅甲二百人。伐木開道。十二日悉衆行。是日薩布素遣顧僖
等。先後馳報前進。約百數十里。登一山。升樹而望。遙見遠
峯白光片片殆長白山也。因留噶喇大額黑督采珠蚌。十四日。
與薩布素等會。密樹茂林。攙摩闢路。十六日黎明。聞鷄鳴六
七聲。雲霧迷漫。不復見山。乃從鷄鳴處覓徑。得鹿蹊。循之
以進。則山麓矣。始至一處。樹木環密。中頗坦而圓。有草無
木。前臨水。林盡處有白樺木。宛如栽植。香木叢生。黃花
爛漫。隨移駐林中。然雲霧漫漫。無所見也。衆惶惑。前誦綸

音。禱甫畢。雲披霧捲。歷歷可視。莫不觀呼稱異。遂梁躋而
上。有勝地。平敞如臺。遙望山形長瀰。近視頗岡。所見白光。
皆冰雪也。山高約百里。五峰環繞。懸水而立。頂有池。約三
四十里。無草木。碧水澄清。波文蕩漾。繞池諸峰。望之搖搖
若墜。觀者駭焉。南一峯稍低。宛然如門。池水不流。山間則
處處有水。左流爲松阿里兀喇河。右流爲大小訥陰河。瞻眺之
頃。峰頭游鹿一群。皆駭逸。惟七鹿忽墜落。衆喜曰。神賜也。
蓋登山適七人。時正乏食。拜而受之。回首望山。倏復雲霧。
遂于十八日南回。至前登山高望處。一氣杳冥。并不見有山光
矣。二十一日。至二訥陰河合流處。二十五日。至恰庫河則陰
東流合處也。二十九日。由恰庫河。歷色克騰圖。白黑噶爾漢。
噶大渾薩滿。薩克錫法克錫松河。里多渾大江。險絕處凡九。七
月二日。次兀喇。十二日。抵寧古塔。遍閱會寧諸府。八月二
十一日。還盛京。具疏聞。上以發祥之地。奇蹟甚多。山靈宜
加封號。下內閣禮部儀。封爲長白山之神。歲時享祀。如五嶽
焉。夫封山之典。肇始唐虞。然報祀嶽瀆。非有關於鍾祥之自
也。志稱長白山。橫亘千里。高二百里。巔有潭。周八十里。南
注爲鴨綠。北流爲混同。國家龍興所自。然至今無知其處者。
容慮周詳。穆然念祖宗所由。出專官訪求。備歷險異。卒光大
典。以答神庥。其享天心而致靈貺宜哉。謹摭原疏。綴葺爲記。

用志千萬世無疆之盛云。」

是に由つて之を觀れば、六月三日に吉林を出發して七月二日に吉林に歸着するまで丁度一ケ月の日數を費してをり、獵師を道案内として路を拓いて進行する有様は各國何處も同様である。畫尙ほ暗い密林地帶ではあり、加ふるに猛獸の害もあつて滿洲側よりの登山は極めて稀であつて、此の『封長白山記』は殆んど唯一の白頭山登高記であらう。

六

白頭山は滿洲側よりは清朝發祥の靈山として上下の崇拜を蒐めたが、朝鮮側よりも亦祖先發祥の靈山として同じく尊崇の標となつてゐたことは朝鮮側の文獻に依つて極めて明瞭にされてゐる。高山が常に民間信仰の目標となることは世界共通の思想であるが、最高の山岳が偶然にも祖先發祥の傳說に結びつけられたことは興味深い點と云へよう。朝鮮側にあいては此の傳說的な信仰問題の外に、滿鮮國境設定の政治問題のため古來屢〻登山されたことは『北興要選』、『北塞記略』等に收められた各種の記事に依つて明かにされてゐる。地形の比較的簡單にして登山の容易なる點も與つて力ありと云へよう。山頂附近の比較的詳細な記載は前記の文獻に從ふの外なく、滿洲側のものでは民國十九年編修の『撫松縣志』に書かれた、

「長白山位於縣之東南境。土人名曰老白山。四時望之。色白異常。故名長白山。中有天池。環池多奇峰。大者曰白雲。曰冠冕。曰白頭。曰三奇。曰天嶺。曰芝盤。小者有十。曰玉柱。曰梯雲。曰臥虎。曰孤隼。曰紫霞。曰華蓋。曰鐵壁。曰龍門。曰觀日。曰錫屏。又有伏龍岡。雞冠岩。泪日坡。懸雪崖。軟石崖。四圍環繞。池之左右有三泉。曰金綫。曰玉漿。曰隱流。池之東北有三山。曰麟轡。曰鳳轡。曰碧螺。偶値天朗氣清。臨池縱目。則怪石壁立。絢爛照人。其氣象之雄厚。山勢之崢嶸。不特爲撫松諸山之主峯。寔我遼寧全省第一名山也。高約三十六里。爲東北各省諸山之最高峰。周約三百里。居於撫松長白安圖三縣之間。」

の記事が稍〻詳細なものである。

七

之を要するに、白頭山は滿鮮國境に聳立する高距二、

七三〇米の最高峯で、山巓に火口湖天池を有する一大火山であり、地質上の營力が及ぼす複雜なる高原性の地勢のため、松花、鴨綠、圖們三江の水源地に當りながら水源に就いては種々の說が行はれ、殊に滿洲側は斧鉞を入れざる鬱蒼たる原始林で、附近の正確な地理が未だに明かとされてゐない。之に反して朝鮮側は比較的傾斜の緩漫で森林地帶が少きため古來登山者もあり、稍〻正確な地圖も發行され、科學的な調査も進められてゐるわけである。山名に就いては古來種々變遷があつたが結局外觀上の形式より由來し、白色の山と云ふ意味を表はしたものである。山岳崇拜の世界共通の例にもれず淸朝以來特に尊崇の中心となり、朝鮮側よりも亦此處では詳しく說明しなかつたが祖宗發祥の靈域として非常な信仰を上下共に國民の腦裡深く植ゑ込まれてゐるのである。

天保五年の大臺登山記

笹谷良造

江戸期の大臺登山記

大峰山登山の歴史は、たとへ確たる史上の證左はないにしろ、千年の古に遡り得るに反して、僅か數里の距離にある大臺ヶ原山は、江戸中期に至つて二三の地理書にその斷片的な記述があるに過ぎない。登山記になると、私の知つてゐる限りに於いては、江戸中期になつて始めて世上に現はれる。正確なる年次は明かではないが、寛政年間に南畫の大家たる紀州の野呂介石が登山して「臺嶽涉歷略記」を遺した。これが大臺登山記の最初ではないかと思つてゐる。次いで同じく紀州藩の本草學者畔田翠山の大臺ヶ原に關する詳細なる記述と地圖とを載せた「吉野郡名山圖誌」がある。地理書であつて登山記ではないが、明かに登山によつて得た記錄であり、且驚異に値する親切なる筆致である。この著述の完成年次も不明だが、弘化年間を去る事遠くないと思はれる點があるから、前述の介石の登山記よりも凡そ五十年後と思はれる。第三は卽ち本稿に於いて紹介しようとするもので、紀州の儒學者仁井田好古の長子たる長群が天保五年秋に登山した紀行であつて「登大臺山記」と題する一書である。江戸末期の幕府採藥使であつた植村政勝も、大和一國を歩き廻つたが、大臺ヶ原山には登らなかつたらしいから、江戸時代の大臺登山記は前述の三書が現在知られてゐる總てである。

仁井田長群氏

この登山記は、餘りに長文でない上に、指南器、千里鏡などを利用してゐる點で、中々面白いと思つたので、全文を揭げて紹介する事にしたから、その內容は讀者諸氏の御精讀にお任かせすることにし

て、その概要をも說明する煩をさけよう。たゞ讀者諸氏のために二三の記事を錄して御參考に供する事としたい。

此の書をいち早く世に紹介せられたのは、河東碧梧桐氏であつた。已に大正八九年頃、「吉野群山」といふ一文に其の一節を引用せられたのであるが、どういふ誤解であつたか、其の著書を仁井田好古の著としてある。この點については更に後に述べる積りであるが、私はこの碧梧桐氏の一文を讀んで「登大臺山記」なるものが世に存する事を知り、多年その一讀を望んでゐたが、昨年末に至つて和歌山縣立圖書館にその寫本のある事を知り、漸くその渴を醫するを得た。今こゝに揭載したものはその寫本によつたのである。長群自筆本の有無については全く未知であるのはまことに遺憾である。

父の仁井田好古は微賤の家より身を起し、紀藩臨一の儒者となつた立志傳中の人であつた。毛詩の研究では支那の學者をさへ驚かしたと傳へられてゐる。然しその大業は何といつても「紀伊國續風土記」といふ百冊に近い大著述で、數ある地方誌でも稀に見るものである。著述の完璧は期する事困難であるが、本書は紀州一國を記述して餘す所なしといつていゝもので、續くものゝ常に想ひ起すのは、その著述の如何に苦心を要したかの點である。「登大臺山記」も、續風土記編纂のための一副產物なるを思へば、その眞摯なる態度には敬服の他はない。

「大臺ヶ原山」は和歌山とは正反對の、紀州東端に位する。從つて續風土記を編するに當つて一應調査する必要があつた。卽ち迷信的に魑魅魍魎の住む境として恐れられてゐたために、適當なる記述を見出すことが出來なかつたのであらう、天保五年十一月、仁井田父子及び國學者加納諸平の三人は、遙々と實地踏査に赴いた。然し父の好古は、老齡のためであつたか、探險の域を脫しなかつた大臺登山行には加はらず、山麓にあつて待機し、若くして元氣な長群と諸平とが行に當つた。文中家翁、家大人と稱

するは卽ち父の好古の事である。

諸平の歌

長群と行を共にした加納諸平には、登山記があるかどうか知らぬが、或はなかつたのではないかと思はれる。然しその時に和歌を作つた事は、已に長群の登山記にも一二首見えてゐるが、諸平の歌集「柿園詠草」には所々に載せられてゐる。この諸平の歌については、昨年の二月に「ケルン」誌上で京都大學の新村博士が詳細に紹介せられた。短歌五首、長歌一首で、博士が山岳文學の雄篇だと云はれてゐるが、まことに珍らしいものである。たゞこの「柿園詠草」では登山年次が出てゐないので、いつの登山の折の作であつたか不明であつたが、私は前述の碧梧桐氏が引用された部分から推して、多分天保五年だらうといふことを、その年の七月に同じ「ケルン」に載せておいた。その後長群の登山記の全文を見るを得てその點が確實となつた他に、諸平の長歌ではどういふ順路を取つたか、もう一つ判然としない所があつたが、今この登山記と對照して見て、不明の個所を明かにする事が出來て、何よりも愉快に思つてゐる。卽ち長群の登山記は、單に登山記として珍らしく且面白いのみならず、諸平の歌の註釋としても役立つのである。出來るならば諸平の一百九十七句から成る雄大なる長歌をも併せ載せて對照の便をはかるべきであるが、已に「ケルン」誌上に出たものであり、又「柿園詠草」は何度も活版になつてゐるから、煩を厭うて掲載を見あはせた。心ある諸氏はついて對照の勞を取られたい。尙「柿園詠草」には續編があつて、それも近々出るといふ事である。この長群の登山記に引用してある諸平の「臣の木」云云の歌は「柿園詠草」には見えないが、或は續編にでもあるのであらうか。さうすれば尙他に大峯登山の和歌もあるかも知れない。

登大臺山記

仁井田長群撰

大臺山は南方の高嶽にして紀勢和三國の堺にあり、古より人跡不通の地なり。熊野吉野の山嶽は天下の知る所にして、其名ある山川は實に千を以て數ふべし。其高大なるは大臺を冠首とす。實に畿內南海衆嶽の宗なり。熊を取り奇貨を求め又良材を求めて樗(くれ)を仕出す者、或は山中に小屋を掛る事ありて、希に其一斑を知る而已。一山を通覽して其全形を知る者絶てなし。家翁(父仁井田好古をさす、筆者註)風土記修撰の命を蒙り、長群等亦其事に與り、郡邑を周覽し古跡を尋ね地理を考へ風俗を察視す。今年天保五年熊野を巡視して十月十四日相賀莊引本浦に至る。此地大臺山を去る事稍近し。莊の大長速水七郎平を呼びて大臺山登嶺の事を諗ぶ。大長愕然として口呿して合はず。答ふる事能はざる事數頃、やゝありて云ふ、人跡不通の域妖魅罔鬼の巢窟、君等登らせ給はんやと。滿坐其狀を笑ふ。大長色定りて漸にいふ、大臺山上其廣大は云ふも更也、四方皆絶壁にして登るに由なし、唯其尾筋一二縷に攀ぢ躋るべしといへども、其地皆篠竹(クロタケ)密比する事幾許里なる事を知らず。山中に入る者露宿する事數日なり。されば山を出る事能はず。君等これに登らむとし給ふ、暴虎馮河の戒を犯し給ふにあらずや。群等是を聞ざる如くにして唯嚮導する者ありやと問ふ。大長已む事を得ずして曰、木津村(こつ)便山村小名の中或は是あらむ。是に於て木津村の中に募る。太右衛門孫市二人の者募に應ず。二人いふ、某年獵師と某谷にある事一月、某年某谷にありて樗を仕出したる事數月、山中の全形を辨へずといへども、其山中にある時過る所の樹木、或は枝を折り或は樹皮を剝ぎ目標をなし置けり。山に入てこれを求めば或は大に迷はざるべしと云。群等是に於て策を決し二人に命じて嚮導をなさしむ。長群其山の形狀大勢を概するに、其山高さ一日半程、重岡複嶺其數を知

るべからず。其絶頂平曠なる所を大臺が原といふ。四方皆絶壁にして其平曠なる所大抵周廻三日程、山麓周廻七日程、是より以内人跡絶たり。四方絶壁の中山脈相連なるもの四あり、其東の方に走れる峰巒大抵二十里許、志州鳥羽に至りて海に沈む。勢志二州此山脈を界とす。大杉谷朝熊等其間にあり、其水を勢州宮川とす。其南の方に走れる峰巒凡三十里餘、本國新宮に至りて海に沈む、其間に北山・入鹿・尾呂志・大野の諸山委遲として連續す、其水を上は北山川といひ、下は熊野川といふ。其西之方に走れる峰巒凡五十里許、本國加藤・大崎に至りて海に沈む。其間に大峰あり吉野あり天川あり高野あり、横峰・生石・藤白等の諸山皆隷屬す。其水を上にして吉野川とし下にしては紀川とす。其北の方に走れる峰巒凡五十里許、濃州にして木曾川に沈む。大和・伊賀・近江と伊勢とを分堺す。其間高見嶽・國見嶽・三輪山・春日山・鈴鹿山・柚岳・三國嶺等を隷屬す。此四の山脈より畿内南方千峰万嶺皆枝分して大臺山其上頭にあり。故に衆嶽の宗といふ。山麓までは松杉檜栢あれ共半腹より上は松杉檜栢なく、石南樹籔竹のみにして稀に五葉の松あり。山峰及原は悉武那縦にして他樹なし。鳥獣羽虫の類も又なし。風烈しきを以て木皆のびず、蟠屈して林泉の樹の人爲を以て作りなすが如し。絶頂三峰あり、第一を日本が原と云ふ、日本中を望觀すといふを以て名附く。其南にあるを片原臺といふ。其名文字の如樹木なき原なり、其南にあるを大烝といふ、亦樹木なき赤峰なり。三峰は大臺原の東堺にして和州勢州爰に分れて絶壁なり。大烝の處又紀州と堺す。勢州は大杉谷の奥也。紀州は相賀組・木津村の龍辻山に接して北なる絶壁は、和州入波姥谷の山奥にして紀川の源なり。南の絶壁は悉石壁にして大臺原の水三溪となり、石壁に至りて三つの瀧となり大和の北山より瀉下す、是を東の瀧中の瀧西の瀧といふ。其瀧の高さいづれも皆八丁許ありといふ。是北山川の源なり。西の絶壁は大和北山の高瀬の山奥にして姥峰に接す。是大臺の形勢の大概也。鄽導の者いふ、大臺山四方絶壁なれば尾筋を傳ふにあらざれば登るべ

からず、東方に二の尾筋あり、巽隅の尾筋は大峯に至る、近年山稼の者なく篠竹密茂にして一歩も進むべからず。艮隅の尾筋は日本原に至る、險難なりといへども篠竹稍稀にして登り易し。是に於て大臺の艮隅に嚮導せしむ。十月十五日登嶺す。大長乞て曰、人多き時は食續かず、人少ければ防守乏し、壯男健歩の者に非れば此選に充がたし、君等自ら選び給へ。是に於て長群及諸平二人行に當る。群の僕一人鉾を持て從ふ。大長代一人地士莊司宅左衞門帳書一人地士北村莊兵衞指南器千里鏡を持て督行す。嚮導二人、一人は炮を持、一人は笄を持、米糧を負ひ釜席を携ふるもの五人、上下凡十二人、外に數人共日の中飯を負擔す。昧爽古本村に至り溪に入る事一里許、夫より峰を越へ谷を涉り、一歩は一歩より高く一峰は一峰より嶮なり。路益〻細く石益〻尖る、其俊絶なるに至ては石角を攀ぢ蘿葛を捫りて登る。氣息喘々として續きがたし。或は十餘歩にて一休し、或は五六歩にして一休す。既して日停午に至り僅に平處を得て午飯す。飯畢りて負擔するもの數人辭して歸る。大抵大臺山の麓にては路傾欹險なれども一線路のたどるべきはありしに、漸山麓に近くして細道も亦絶して、榛莽壅塞して足を投ずべき所なし。嚮導の者前に在りて樹を伐り草莽を押開きて登る事半里許、少しく平處を得たり。是を堂倉といふ、此地は勢州に屬して大杉谷の迫詰なりといふ。此處山谷一面の積雪にして寒風堪がたし。因りておもふに、是地大臺の山麓なりとも、今登り來る路程の遙なると積雪の形狀を見れば、此土の高き事既に中天の上に至て世外にあるの想をなせり。側に壞れたる小屋二宇あり、近き頃樸を仕出したる跡といふ。時に日既に西山に落ち谷底稍暗し。嚮導の者此小屋を據として一宿すべしと。卽ち斧を振ひて大樹を伐倒し其枝葉を採て小屋の四方に挾み上を覆ひ、其幹を節斷して薪となし大に燎をなさしめ、又茶を燒き飯を炊ぐ、俄頃にして辦ず、諸平歌一章を賦す。

深山木の木きりたつと斧とれば空もとゞろに嵐吹くなり

燎火を盛にして陽氣を助け山獐陰獗を防ぐ。衆皆火を

中にして環坐す、時に明月皎然として雪色益凄然たり。驚嵐山岳に響き寒威骨を刺す。少時ありて驟雨暴に過ぎ衆鼾皆震ふ。既にし雨霽れ月色蒼然たり。衆皆疲困甚といへども意中危懼を抱くを以て眠に就く者なし。唯薪を加へて火勢を助くるのみ。俄にして嚮導の者西の方を指して謂て曰、日本原此頂上にあり、今既に夜半なり、玆を去りて攀躋らば暁天には必日本原に至るべし、朝日の海面に湧く時富士峰を望む、其奇いふべからず。長群兵部と覺へず起ちて踴躍して曰、快哉此言、疲困を忘るべし。乃衆をして大炬數十を作らしむ。明月天にあれども樹林陰翳して暗夜の如し。衆皆手毎に炬を秉り相照して登る。嚮導の者二人前行して路を披き相呼びて相應ふ。既にして隔る事數町、聲相通ぜず、炮を放ちて其在る所を知らしむ。衆炮聲を認て其處に向ふ。巖角を攀ぢ蘿蔓を援き、南に迷ひ北に陷り時に人數を算へて行く。暁天果して日本原の東邊に至る事を得たり。時に東方已に明けて烟霞騰起して日輪洋中に湧出たり。志州勢州の地皆眼下にあれども、夫より東は烟霞蒼茫として富士峰を視るべからず、遺憾甚し。嚮導の者いふ、大抵雨風三日の後朝日の時東望すれば、參遠尾濃四州を望み富士峰を海中に覩つべし。東風三日の後夕日の時西望すれば中國路の海陸を遠望すべし、此連日風なきを以て望む所纔に近きに留まれりといふ。因りて遠眼鏡を以て是を望むに、視る所畿內の山河志州勢州熊野のみ。初山に登らんと議せし時衆皆いふ、古來相傳ふ、大臺山に一足の鬼あり、是山靈なり、故に山に入る者多く歸る事を得ずと。相顧て皆色を失。大人にこれを諭して曰、此皆利を以て登るものゝ云所也。今大臺山の絶頂に登り共至る所を窮むる者は是公命なり。山鬼何ぞ害をなす事を得ん。余爾等が爲に一絶を賦して山鬼を諭さん。山鬼是を視ば必恐れて避け隱るべし。自今以後山に入る者此詩を懷せば、山鬼の害を免べし。衆是を聞て喜て色を生じたりき。因りて表木を削りて其詩を錄して是を携へ、日本原の中央に建つ。

乾坤唯一氣　地察又天明　萬古柱紺內　何容邪物生

天保五年歳次甲午冬十月十六日奉命巡視紀日本原而書焉　紀藩仁井田長群　源一父加納諸平兵部建

諸平樅の木の多きを見て又歌一章を賦す。

臣の木の立るを見れば人目なき山さへ君に靡也けり

日本原の西を巴嶽といふ。吉野川熊野川宮川の川源なり、世に傳ふる歌に

大臺や巴に三の水上は熊野によしの伊勢の宮川

とある、此處をいふなり。又世人多くいふ、巴嶽に巴淵といふありて、いと廣く葦荻など高く茂り藤かづら生じけり、淺き澤などやうの水に見ゆれどもいと深く、風吹けば其茂生の露落ちつもり川の水かさをなし、北より吹ば熊野川の水をまし、西より吹ば伊勢の宮川のながれを添へ、東より吹けば吉野川の水かさまさるといふ事、あらぬ虚言なり。されども其諺にて其山の奥深く人跡絶へたる地なる事思やらる。南に轉じて片原臺に至る。片原臺樹木の無き處、根笹一面に生ひ茂りて青疊を敷が如し。此に坐して遠望するに、四邊の樹木蟠屈結磐して是を望むに深山高岳の内にある事を覺えず。人功を以て作りなせる別墅の趣あり。故に此處を茂經の屋敷跡と名づく。側に小池あり、晴雨に拘らず水のある時あり、又無き時あり。是一奇なりといふ。衆皆疲困して覺えず假寢す。大禿この南にあり。至る事あたはず。大禿に牛石といふあり。或は麼石（オシ）といふ。相傳ふ、昔役行者牛鬼を押たる所なり。其ふせ殘りを理源大師此牛石に封じ込しといふ。此石に障る者あれば白日瞑闇になり、咫尺を辨へざるに至るとて獵師など恐れて近よらず。又大禿の側に白壞（クニ）といふ山壞崩して横八町長さ一里の直立の絶壁あり。此處蟆子（ブト）多し、山民これを鹽からといふ、其壞の側に雁窟（カリガネノ）といふあり、深さ知る者なし。雁數萬其内に住めりといふ。又其側に大蛇倉（だいじゃくら）といふ千尋の石壁あり、何れも嶮絶の地にして人跡至りがたしといふ。大臺ヶ原の其通體三溪に分かるれども、細溪數岐その間を縱横せり。又原の中一面の籔樹にして數尋の外見る所なし。故に其際限を知るべからず。嚮導の者其目標せし樹木を尋ぬれども得ず。原の中に屢迷ひて行く處を知らず。因りて磁石を取り

て其方位を考へ唯西に向ひて往き、左右に奔走して僅に名護屋谷に出で午飯す。名護屋谷とは昔名護屋の者此谷の山材を買ひ薪を仕出せる故に稱すといふ。大和谷に越ゆ。大和谷といふは大和の者昔時此谷にて薪を仕出せる故に稱すといふ。又迷ひて往所を失ふ。辛くして高野谷に至る。昔弘法大師高野を開く前此大臺原を伽藍の地にせんとて地形を見ん爲に登山あり、故に名づくといふ。此說は誤りにて高野谷は小屋谷にて亦材木を仕出す者の小屋を掛し名なるべし。夫より山葵谷（わさびだに）に越ゆ。此谷山葵多く産す、故に名とす。山葵を取らしめて家土産とす。是より北の方大杉谷の境に芍藥谷といふ小谷あり、芍藥多き故に名づく。薊谷（あざみだに）といふ小谷あり、薊多き故に名づくといふ。亦入（シホ）の波の境に溫泉あり、味醎し。百蛇來りて浴すといふ。漸進みて大臺原の西北の極に至る、時に日既に暮に薄る。嚮導の者の曰、是より尾筋の峰を傳ひ姥峰に降るべし、其路程を計るに大抵二里許といふ。左右皆絕壁篠竹稠密にして高さ丈餘、是を押開きて行く、其艱險堂倉谷を出し時に勝るべし。二人前行して炮を放ちて其行方へ知らしむべし。君等炮聲を認て誤り給ひそといふ。因りて篠竹の內に中に入るに二人進めば竹其跡を封じて前人見えず、後人又見えず。大に聲を放ち互に相呼應して行き、時々人を數へて炮聲の響く方に向ふ。嚮導の者といへども時として方角を失ひ、磁石を以て向ふ所を定て又前行す。月輪高く頂上に懸りて左右前後視る所なく、時々炮聲の深谷に響くを聞のみ。何れの時か此中を出て、何れの時か向ふ所に至るべきと思ふに、身の毛よだちて物冷し。夜三更漸姥峰に降り始て一條の路に出る事を得て、一統に蘇息の想ひをなし互に其恙を賀す。斯日若夜明て堂倉を發し又大禿に登らば、原の中に二宿するにあらざれば此に至る事を得ずといふ。是より往く事半里許にして山堂一宇投宿すべきありて、初て人を見る事を得たり。此所南を大和北山とし、北を大和姥谷とす。兩方ともに人里を去る事各三里、此峰の東を大臺とし西を大峰とす。此峰登降六里の高峰なれども東西の高山にくらぶれば猶阜ましと

す。故にこの峰を越ゆるにあらざれば吉野と北山との往來絶べし。相傳ふ、此峰にして夜に入れば姥見はれて人を喰ふとて、世人恐れて夜行する者なし。山民相謀りて此お堂を建て往來の者止宿の所とす。此夜堂中に宿する者數人あり、衆の至るを見て驚き且怪み、夜中君等如何にして玆に來るといふ。大臺山を踰るを聞て曰、多賀々々（タガヽヽ）と唉稱して止ます。十七日夙に起て南行し山を降る事三里許にして初て人里に出る事を得たり。其所を高瀬（コセ）村といふ。こゝにて午飯す。是より東行し、日暮出口村に至りて宿す。此地大臺山の正南に在りて三瀧の水合して玆に出るを以て出口の名あり。實に北山川の上源也。夜山民大臺の事に熟せる者を集め、鄉導の者と供に地形及山脈水脈の經緯を討論し、衆言を參考して其實なる者を折中し、長群親筆を採りて大臺山の圖を作る。其小名に至りては山に入る者の一時の標名なれば、人異（コトナ）れば稱も亦異り。今據ありて通名とすべきものをとりて圖中に載す。宿の主いふ。此數年前奈良の役人十九人大臺原に登りて地形を考ふる事あり。山中にある事十餘日、吏山を巡り路に迷ひて大に饑餓に及び辛くして舊路を尋ね得たり。されば縱地理に熟せる者といへども山上に三宿するにあらざれば容易に山狀を盡すべからず。君等紀州を立て僅に三日、大臺の原を過ぎて此に至る。如何にして地理に熟し給ふや。衆皆笑ふ。十八日夙に出口を發す、俊坂棧道或は度索して通ず。龍辻に至りて午飯す。玆を紀州東西の界とす。左右悉篁竹なり。龍辻の右を天竺納戸といふ。深山なるをいふなり。又雷峠といふあり。黃昏古津村に至る。里人等迎へて無事を賀す。其明日家大人等に長嶋に相會し、大臺の圖を出し形勢の大綱を指點す。家大人いふ、千巖萬壑吾目中にあり。因て群等に代りて二絶を賦す。

大臺雲嶽踞三國　峻聳撐天氣勢雄
誰道川源如巴字　千崖萬壑失東西

日本原頭望大瀛　海天日湧富峰明

託身知在層雲表　一縮乾坤入眼睛

按ずるに大臺山今三國の境に在りといへども、紀にあるもの一分、勢にあるもの二分、和にあるもの七分、然れども大臺原の大和の地となれるはいと後の世の事にて、和州北山莊十四箇村の地は舊本國北山鄉にして、大臺原悉紀州の地なり。然らば紀にあるもの七分、勢にあるもの二分、和にあるもの一分なり。しかし考へたる四の證あり。先地勢により考ふるに、大臺原より姥峰大峰に至り、其峰筋より北に落る水は吉野川に落ち、南に落る水は熊野川に落れば、此水流兩國の境なるべし。是一の證なり。又北山の稱紀州にありては固より當れり、和州にありては南山といふべし。北山といふべからず、是二の證なり。和州北山莊西野村寶泉寺觀音大士龕記に、南帝勅願寺紀州牟婁郡熊野奥北山内泉村興泉寺　永享九年丁巳二月建之　開山事僧　とあり。是三の證なり。又安永年間本國北山鄉の村民窮迫して家財を賣し者あり。隣村の者車長持を買得たり。共長持の底の淺きを訝り底を破りて視るに、二重底にして其中に古き文書を藏む。紀和兩國疆界の事を書せり。其文に據れば、古紀州の地今和州に入るもの多し。因りて官に訴べく古に復せん事を請ひし事あり。是四の證なり。戰爭の世互に相力奪して古制を失ふもの多かるべし。慶長鍵蠹（戰ひの收まるをいふ、筆者註）の後諸國の疆界を定むるに、悉古制を考らるゝに暇あらず、當時私に定め來りしを用らるゝも有けんかし。

因にいふ、前に書せる姥峰といふは、神武天皇の御由緒ある地なり。日本書紀を考ふるに、神武天皇東征の時熊野より大和に入らせ給ふ事を書して、皇師欲レ趣二中洲一而山中險絕無二復可レ行之路一乃拔邁不レ知二其所一跋涉、時夜夢　天照太神訓二于天皇一曰、朕今遣二頭八咫烏一、宜以爲二鄉導者一、果有二頭八咫烏一自二空翔降一、天皇曰此烏之來自叶二祥夢一、我皇祖　天照太神欲二以助一成基業一乎、是時二大伴氏之遠祖日臣命一帥二大來目一督二將元戒一、踏レ山啓レ行乃尋二烏所レ向仰視而追レ之遂達二于菟田下縣一、因號二其所一曰二菟田穿邑一、とあり。頭八咫烏とは其山川を跋涉する狀を讀せる號にして、其人の名を賀茂建角命といふ事は山城風土記姓氏錄等に見えたり。其導き

奉りし道今地形を以て考ふるに、決なく熊野新宮より北山に至り姥峰を越えて宇陀の穿邑に至らせ給ひしなり。姥峰は今猶山民の外通路なき地なるに、數千歳の古帝者の神祖の御通行ありし其艱難實に思ひやらる。

又因にいふ。賀茂建角命、天皇を導き奉り後葛城の賀茂に留り遂に山城の賀茂に留るとあり。よりて役小角の事を考ふるに、崇神天皇の時、大國主命の子孫に大田田根子といふ人あり。賀茂氏の祖なり。役小角は其族なり。或は傳ふ、大田田根子の曾祖母は建角身命の女なり。されば小角の禁呪を持し鬼神を役使し、名山大嶽を跋渉して熊野より大峰の道を踏開き、葛城に修業せしも皆頭八咫烏の遺法を紹述せしならむ。

又因にいふ、前に書せる小瀬姥谷等は南朝の遺王王子の御由緒ある地なり。後龜山天皇の御孫尊義王の御子尊秀王、次に忠義王といふあり。南方の武士等取立奉り、尊秀王は大河内に坐し入鹿莊大河内村忠義王は河野谷に坐す、今北山郷に神山村あり神止村あり此の高瀬村に南帝山龍門寺といふ寺あり、此の寺は尊秀王の御開基のよしにて、御位牌あり。當時開基南帝王一宮自天勝公正聖佛とあり

て、王此所に住給ひて讀たまふとて寺傳に殘れる歌

のがれ來て身をおく山の柴の戸に月も心をあはせてぞすむ

長祿元年赤松の黨遺王子を弑し奉り、北山吉野等の者と戰闘せし事、諸書に見えたり。其の遺蹤かれこれのこれり。龍門寺に王の御遺物也とて、古き香爐花立燭臺あり。今遺蹤を尋ね見れば懷古の情感涙とゞめあへず。

嘉永二年己酉暮春寫之　　平野氏

一、讀者の便を思ひ句讀點を施し、變體假名を普通の平假名に改めた他、私意を以て一字も訂正はしなかつた。いづれも「」「覺へず」等の假名遣ひもそのまゝにしておいた。又送假名法が出來てゐなかつたので、江戸時代の文には「入て」「絶たり」などのやうに、りやえを送つてない事が多い。少々讀みづらいけれども原文のまゝの方がよいと思つたので、これも一切改めてゐない。

一、表紙の題簽には「大峯山登嶽記全」とあり、內題には「登大峯山記」とある。題簽は後人がつけたかも知れな

いと思つたので、内題の方を取ることにした。

一、和歌山圖書館本の表紙裏に次の文を墨書した紙がはりつけてある。

「日本繪入新聞　十八年十一月二十八日　二十八號
大和國大峯ヶ原の開墾工事は愈々來る三月より着手さるゝに付、天保五年の頃紀州藩主の命を奉じて、同藩士石(マヽ)井田長群氏が實地檢分したる其時の紀行書を取寄せ、參考として昨今取調べ中なりと。」

一、仁井田好古は明和七年(一七七〇)生、嘉永元年(一八五〇)歿、年七十九歳。仁井田長群は寛政十一年(一七九九)生、安政六年(一八五九)歿、年六十一歳。加納諸平は文化元年(一八〇四)生、安政四年(一八五七)歿、年五十四歳。卽ち登山の年を勘定して見ると多少誤算はあるかも知れぬが、好古は六十五、長群は三十五、諸平は三十一といふ事になる。二人共に若盛りである。

一、本文中に「大峯ヶ原山の圖」を作つたとある。今和歌山圖書館に「峯嶽全圖」と題した見取圖樣のものがあつて、「大峯山之圖、天保八酉年、田邊藩中、勝本瀧左衞門寫之」と圖中に記してある。大きさは一寸忘失したが、新聞紙四頁位あつたと思ふ。長群の書いたものは或はこれではないかと思はれるが、確證は何もないから斷言出來ない。

一、本文中に平假名で振假名を施したのは筆者のもので、片假名のものは原本に施してあるものである。

一、原本は半紙大、二十枚のもので、大きな字で七八行に書いてあつた。行數及び字詰は忘失した。

鳳凰登山史の片影

小屋忠子

一、山岳宗教の起元と役君小角

上古宗教の幼稚時代、日月と共に信仰の對照となつたものは山岳である。之れは何れの國に於いても、宗教發達上の經路であつて、我國では持統天皇の御代、役君小角と云ふ人が現はれ、山岳崇拜の宗教を始めた。彼は三十二歳にして家を捨て、大和國葛城山に籠居する事三十年、苦修練業の結果、遂に得道萬能の域に達

したと言はれてゐる。彼は後世役行者と謂はれ、怪奇物語の主人公に祭り上げられてゐるが、それは博學多能なる彼の行爲が、當代の人々の意表に出でゝゐた事が多かつた爲めの誇張である。當時彼は、全國著名なる山岳を跋渉し、信仰を捧げると共に、道を弘め民衆を濟度し、世に貢獻する處も亦少くなかつたと云ふ。其の頃山梨縣にも巡行し、精進の湖に沐浴し、富岳に渉つて修行したと云ふ事が、甲斐文獻に載せてある。後彼は、韓人の誣告に因り、妖妄奇術を以つて民衆を惑はす者とされ、文武天皇の御代爲めに捕はれて伊豆に流されたが、程なく赦に逢ひ、母と伴に唐に走つたと、大日本史に記されてゐる。彼によつて始められた山岳宗教が、卽ち今に傳はる修驗道である。

修驗道は當時急速なる勢を以つて、廣く各地に行き亘り、其の教を受け、流を汲んだ所謂行者（山伏とも亦道者とも云ふ）によつて、到る所の山岳は開かれ、諸人讃仰の靈地となつたのである。四邊峻嶺を以つて圍まれた山梨縣の如き、彼等修業の道場とするに最も相應しく、ある程度の盛況を呈したであらう事は、駒、鳳凰、白根等南アルプスの主峰を初め、圍繞する諸山に祀る神佛や、口碑傳說の類が、多くは彼等を中心にしてゐる事によつても、窺ふ事が出來る。

二、鳳凰山の信仰と傳說

就中鳳凰山は、其の分峰の總べてに、大日如來、地藏尊、觀世音菩薩、藥師如來の諸佛が勸請分祀され、古き信仰の跡を留めてゐるが、更に此の山には、此の山のみが持つ、奇しくも尊き傳說があつて、特に信仰の古きと、篤きを誇つてゐる。

「鳳凰山。昔、奈良の法皇當國に流され給ひて、此の山に渉り、都を慕ひ給ふより、法皇ヶ嶽と云ふとなん、西河内領奈良田と云處に、法皇の住み給ひし趾とて、礎今に存せり。」（甲斐名勝志）

「鳳凰山。昔、法皇都より遙々此の國に下らせ給ひ、山中に入らせ給ひて還御なしと。併し、何れの頃にも、法皇の甲州へ入らせ給ふ事を聞かず。又、弓削道鏡都より、法皇なり

と僭して國民を欺きしとも云。後、奈良法皇なりしと云傳うれども、諸史にも見へず。」（裏見寒話）

と、云ふのが其の傳說であつて、今尙ほ山麓の人々が深く信じて語る誇りである。傳說中の奈良法皇と云ふは、人皇四十六代孝謙天皇、御落飾後の御稱號であると附記してある。

又、鳳凰山名起因の一說として、山麓芦倉の古刹、鳳凰山大寶寺（今は住職なく、緣寺北巨摩郡神山村、鳳凰山願成寺佐藤住職兼務）由來記に、

「甲斐國白根ノ麓ニ住居候、白鳳鳳ト申者有之、御尋來リ候處、鳳凰柴ノ庵ヲ結ビ罷在候、從レ夫鳳ト有宗見和尙御兩人、年來同居罷在候上、宗見和尙觀音菩薩ヲ有ニ造立一本尊ト奉ニ尊敬一、華嚴宗法續山大寶寺於建立仕罷在候處、其後當國奈良田村ニ、人皇四十六代孝謙天皇樣ト奉レ申王樣、御通被爲遊候節、法續山大寶寺ト申候得共、柴ノ庵同樣ニ候處、君樣御逗留被成ら仰有之故、雖有御請仕候、御逗留ノ內御奇有之、其後法續山改、鳳凰山大寶寺山號被下置候而、從レ夫奈良田村へ御越被爲遊候而、早速御君樣白鳳鳳依ニ御召一、直樣罷出奉レ拜ニ御尊顏一候處、種々御尋有之候付、具ニ御答申上候得者、然者其方御君樣へ御奉公可仕旨被仰聞候付、雖有御請仕、從レ夫御奉公仕年來罷在候。」

とある。此の由來記は昔から門外不出の爲め、廣く知られて居なかつたが、今夏親交久しき佐藤師によつて、他の寺寶と共に示されたのを、乞ふて寫し取つたのである。この由來記と云ひ、前の傳說と云ひ、吾正史の上から言へば、何等據り處なく、一顧の値も無い事ではあるが、何れも千百數十年の昔、而も畏れ多くも、孝謙帝に御關係の有る事ばかりである。是れを見ても、如何に此の山が、永き信仰の歷史を持つてゐるかゞ、肯定されるのである。

三、鳳凰山千古の祕扉を開く

甲斐駒の男性的山肌に接觸するよりも、南アルプスの王者を以つて誇り氣の、北岳を脚下に踏み躙るよりも、何よりも鳳凰山に登るのが私は好きである。それは此の山の幾多の尊き傳說に、久しき憧憬を持つたの

と、全山悉く信仰に覆はれる、此の山の雰圍氣に浸り度いためと、そして此の二つの氣分に陶醉しながら、此の山の因緣を探ね廻るのが嬉しいからである。

此の夏も、一週間の餘暇を得、鳳凰山に登り數々の遺物を發見し得、それによつて幾百千年、緘默の內に過ぎ來つた、鳳凰登山史の片影を窺ふ事が出來た。

一、懸佛一面。

徑九寸七分、重量七百匁、金屬製にして光澤ある灰黑色を呈す。表面中央に、五寸餘の佛座像の浮き彫りあり、裏面粗雜にして處々に綠靑を生ぜる部分あり、佛像の部は中空をなす。邊緣二重にして二個の支持點を附す、一文字の記入なく、年代全く不明。

此の懸佛に就いて、甲斐文書に

「鳳凰山。一說に、頂上の祠中に掛鏡あり、往時盜をありて之竊み

去らんとせしに、洞前の岩間、急に窄まりて行く事能はず、畏れて立歸り、鏡を舍けば道復開けて始めの如くなりしと云。（甲斐國誌）

掛鏡と云ふのは、恰も圓鏡に座像を配着せる如き形態を爲すが故に、當時の人々は、斯く呼んだのである。又後世、此の山を社地として、天照大神を奉祀した時代があつたが、其の時代より大神を管掌し來つた、山麓駒城村の神官、小池家の當主、忠正氏所藏の鳳凰山由緒書中に

「鳳凰山大神。
祭神、天照大神。
祭日、九月九日。
社領、六千三百六十余坪。石鳥居高八尺。山頂に御鏡、大さ尺許、中に御影代あり、一面。烈風、又は山崩等にて、土中に埋れ候哉、今は御座なく候。」

とある、何れも此の品を指す事は瞭かであるが、確固たる存在を示してない。尙ほ亦

「鳳凰山。絶頂の岩の上に、黄金に鑄たる、三寸許の衣冠の像あり。鳳凰權現と云、是れ奈良法皇の御影なりとぞ、昔より盜ありて、此像を竊み去らんとすれば、重きこと盤石の如し、故に盜み去ることを不得。」（甲斐名勝志）

前記甲斐國誌懸佛の內容に類似してゐるが、懸佛の外に、黄金像の存在を暗示し、一段と私の興味をそゝつてゐる。何れにしても、怪奇なる傳說の附隨する事は、古來靈驗灼かなるを示し、信仰の盛んなるを語るものである。

二、古錢。十四枚。

何れも穴錢であるが、內四枚は邦錢であつて、十枚は支那錢である。

1. 邦錢。總べてが寛永通寶である。
2. 支那錢。十枚十樣、悉く時代を異にしてゐるが、其の大部分が宋錢である。

イ、開元通寶。吾國に最も古く傳はつた支那錢であつて、唐初代高祖の武德四年初めて鑄造して以來、唐末代に至る迄、繼續鑄作せるを以つて、同名にも係らず樣々の型態がある。

ロ、咸平元寶。北宋三代　眞宗恒の咸平年間の鑄造

ハ、天禧通寶。同朝天禧年間の鑄造。
ニ、景德元寶。同朝景德年間の鑄造。
ホ、治平元寶。北宋五代、英宗曙の治平元年鑄作。
ヘ、熙寧元寶。北宋六代、神宗頊の熙寧年間の鑄造
ト、元祐通寶。北宋七代、哲宗煦の元祐年間の鑄造
チ、政和通寶。哲の次朝、徽宗佶の鑄作
リ、紹聖元寶。同朝、紹聖年間の鑄造
ヌ、永樂通寶。明朝永樂九年の鑄作
三、劍鉾類及び鎌。

何れも五寸内外の鐵製摸造品であつて、現今稻荷詣者が、社前に奉納する鐵鈑製小鳥居の類と、性質を同じふするものであらう。

以上三種は研究の爲め、手元へ持ち歸つてあるが、山頂に殘したものに

四、小石祠及び石佛。其の他

山頂の各峰に祠られてゐるが、多くは無銘である。或は風化して文字消耗せるか、その内辛うじて文字を讀み得るものに、天文十一年と刻んだのがあり、稍〻明瞭なるものに、天保八年と記入したのがある。更に下つて、明治二十四年と願主名を刻んだものが最も新しい。石佛は何れも一尺前後の小體で、其の數も百餘に及んでゐる。然し、信仰に乏しい心なき登山者の爲めに傷けられ、原形を維持するもののないのは遺憾である。尙ほ此の外に、登山者の注目を引くものは、地藏岳頂相擁して聳立する二大岩盤の第一基底を爲すに似たる、大岩石の南面觀音岳と相對し、縱約五尺、横凡そ三尺、深さ四五寸の長方形の彫り込みである。岩表及び苔蘚の模様より考察して、相當の古さをもつてゐる。現在は不似合ひにも、方三寸ばかり高さ尺二三寸、大日如來と刻める小石塔を載せてあるが、往時必ずや、何等かの必要によつてせられた事は疑ふ餘地がない。

五、口碑傳說の貴きを知る。

前項迄は何れも形ある物體であるが、本項はそれに反し、無形の收穫であつて、しかも私にはこれが最も價値ある紀念品である。昔から各地に謳はれる口碑傳說の類は、殆んど數へきれない程澤山あるが、私は今迄

それを顧みた事がなかつた。數年來、鳳凰山の研究に心を寄せてからも、多くの人々から、又色々の古文書から、此の山に關する樣々の口碑傳說を聞き知つたが、それを決して歷史的價値あるものとはしなかつた。只だ、神秘的童話に對すると同樣の、一種の憧れをもつてゐたばかりであつた。然るに今回、懸佛の出現によつて、從來の傳說に對する觀念は全く一變し、傳說の歷史的價値を認識した。

前記諸項の事物が、私にとつて何れも貴き紀念品である事は云ふ迄もないが、更にこれ等の事物は、鳳凰登山史を探る上に、より以上の重要性を持つてゐる。卽ち、從來傳說と想像の外、全く不明であつた鳳凰山史も、前記各項を適確に考證する事によつて、一茫の光明に浴する事になるのである。然しながら、歷史的學識と、考古學上の智能に缺けてゐる私には、それは極めて難事であるが、所有者の特權を以つて、以下二三の愚考を加へ、先輩諸氏の御批判と、御垂敎を乞ふ事にする。

四、懸佛の研究

懸佛が神佛の主體として奉祀された事は、昔からであつて、吾國では佛敎渡來と共に、輸入されたものと云はれてゐる。現在山梨縣社寺中、懸佛を寶物或は主體とするものは、二十餘社寺に及んでゐるが、多くは德川時代に、其の附近の鑄工が製作して奉納したものである。中、最も著明なるは、中巨摩郡鷹尾山三崎明神、同じく鷹尾山權現、同じく鷹尾寺所藏の三面と、東八代郡南八代村、天眞山自性院所藏の一面と、都合四面である。此の四面について古記錄には

「御崎明神。向山權現、三體王子(大福王子、大莇命王子、大智德王子俗ニ文珠ト稱ス)ヲ配祀ス。掛鏡一面、圓鏡八寸六分、中央ニ衣冠ノ神像ヲ刻ス、左方ニ三體王子、甲斐國八田御牧北高尾、右方ニ天福元年、大歲癸巳十二月十五日、其ノ背ニ大勸進蓮華坊辨慶ト刻セリ。」

「鷹尾山權現。文珠ヲ祀リ、不動ヲ配ス。又近頃土中ヨリ掛鏡ヲ得タリ、面ニ降三世明王ノ像ヲ鏤メ、背ニ建仁元年大歲

癸亥正月十一日、願主僧辨尊ト刻セリ。別當ヲ眞言新義トス。」

「鷹屋山鷹尾寺。眞言宗明五寺末、儀丹上人寶龜年中ノ草創。寺寶ニ唐銅ノ掛鏡アリ、面ニ降三世明至ノ像ヲ彫リ、建仁三年大歲癸亥正月十一日、願主僧辨尊トアリ。」

とある。

更に殘る一面は、

天眞山自性院。臨濟宗妙心寺末、古鏡一面アリ、二百年許前ニ土中ヨリ得タリ、徑一尺一寸、緣二重、大日像ヲ中央ニ、左右ニ花瓶ヲ刻ス、無銘、古時ノ掛鏡ナリ。

とある。尙ほ鷹尾山中の社寺は、何れも眞言宗に關係し、辨尊辨慶は共に眞言傳であつて、師弟關係にあるらしい。自性院の掛鏡は二百年前の發掘とのみで、何時の頃より二百年前であるか判明しない。恐らくは、由來記を書いた時よりの年數であらうが、其の時代も瞭かでない。人々の語る處によれば、千年餘を經過したものと云はれてゐるが、果して如何であるか。

今回出現の懸佛も、鳳凰山靈の主體である事は前記古文書、並に由緒書によつて瞭かである。昔から、鳳凰山靈を大日如來であると云ひ、又鳳凰權現であるとも云ふが、佛書に法王卽ち大日とあるを見れば、兩者或は同一とも考へられる。此の兩者の本體に就いては、後章に詳しく說くつもりであるが、先づ、懸佛中の座像及び製作年代、其の他を明かにして置かねばならぬ。

私は十一月九日、山梨縣開發主事、遠藤朝三氏の紹介をもつて文部省に出頭し、斯界の權威、上田三平氏を訪ひ懸佛の鑑定を乞ひ、親しく其の敎を受けた、同氏鑑定の要項は次の如くである。

一、鑄銅製懸佛。
一、主體大日如來。
一、室町或は鎌倉時代の作。
一、概評。室町時代以後のものでは絕對にない、此の種のものが神佛の主體として祀られたのは古くからであつて、高山などには多く行者の手によつて奉祀されたのである。上代のものは小型で輕いのが多く、此の樣に大型で、重いのを見た事がない。製作の進步からみると室町、或は鎌倉時代ではなからうかと思ふ。然

し、此處に一つの疑問がある、それは室町鎌倉時代のものとすれば、年代と奉納主の名前が刻んであるが、今迄の例である。然るに、これにはそれがないので、或は室町鎌倉時代より、ずつと前かも知らん。その點は、尚ほ研究の餘地がある。上代のものとして、斯かる大物は甚だ稀である、何れにしても、懸佛は珍品の部に屬する。

上田氏の鑑定によつて、懸佛の像影が大日如來である事が判然した。してみると此の山の主體が、大日如來であるとするロ碑は的確である。尚ほ、懸佛鑄作を室町、或は鎌倉時代と云はれたが、これによつても、吾鳳凰山は、既に五百年の昔、多くの登山者を抱擁し、山岳禮讃の聲を盛にした事が瞭かである。然し、私は更に一歩を進め、大日如來並に鳳凰權現の本體と、これを崇拜した人物、並にその年代を探り、上田氏の意見と對照研究したならば、亦ある新事實を捕へ得るであらうとの、望みを以つて筆を進める。

五、大日如來

大日如來は眞言宗の本尊である。元來佛教は、宗旨によつて本尊の名稱を異にするが、何れも佛教の開祖である、歷史的人物釋迦を、各宗派の教義に則り、理想化した、架空的人格に捧げる稱呼である。如來、彌陀、彌勒、菩薩、尊等何れもそれである。眞言宗に於いても、全くこれと同理で、釋迦を佛化再生した者が、卽ち大日如來である、鳳凰山の主體が大日如來である、大日如來が眞言宗の本尊である以上、此の山の開祖は、眞言宗の僧侶か、少くとも其の信者である事は想像に難くない。そこで、眞言宗は如何なる人によつて始められ、如何なる經路を以つて、發達したかを知る必要が起る。佛教史に於ける眞言宗の消長は其の全盛時代は、平安初期桓武天皇の末期より、平安中期末後冷泉天皇の御代あたり迄であつて、別けても殷賑を極めたのは、空海の入唐歸朝後より入定迄の、十年間である

事が推測出來る。平安末期には、既に人心離反の傾向あるに加へ、時代に適合した新宗の起立が多かつた爲めに、下り坂になつてゐる。

後項の爲めに、山梨縣に於ける眞言宗の變遷を、簡單に述べておかう。今、山梨縣社寺史を見るに、古刹の大部分は、初め法相・華嚴の如き奈良時代の宗義に依つて建立し、後改宗して眞言を捧じ、更に曹洞宗に改めて現代に及んでゐる。これは日本佛教史の變遷に致してゐるが、現今の山梨縣各宗分布狀態に示す如く、曹洞宗の八割を占むるは、戰國時代の國主、武田信玄が同宗の大信者であつた事に起因する。空海は入唐前後各一回、關東を巡遊布教したが、山梨縣に入錫した事は諸記錄中に見えない。然し、其の遺跡として、到る處口碑に殘つてゐるのを見れば、彼の入峽は一概に否定する事は出來きない。當時既に、甲斐の國府と伊豆は、一路官道（後に鎌倉街道となる）によつて連絡してゐた事が、和名抄や、延喜抄に散見するのを見ても、其の旅程は必ずしも難事ではなかつた。就中、吾が鳳凰山に關する傳說の一つとして

弘法大師は、高野山を選ふに先立ち、山梨縣の巍峰鳳凰山を入定の地として調査したが、腹案より、一谷一峯が物足りなかつた爲に、斷念して高野を賜はつた。

と言ふのがある。其の時大師は、山麓に在つた法相宗の一草庵に滯留し、大いに眞言の妙諦を說き勸めたと云ふ事である。大師滯在の草庵は、其の後再度の改宗と改名はあつたが、今尙ほ曹洞宗の古刹、萬松山宗泉院として榮へてゐる。これ等の消息を語る、左記瑞光庵書上（瑞光庵は眞言宗當時の寺稱）は、今寺寶の一つとして秘藏されてゐる。

「瑞光庵書上。

當庵は元法相宗にして元興寺末に候、智達を以て開祖となす、智達庵と申し千時齊明天皇七年に御座候、從レ夫專達、眞惠、直齋、眞雅、眞雄、眞隆相續して大に本宗を弘道せり。眞達に至りて、弘法大師の附法となり、後弘仁十三年、大師此處に錫を投じ敎化せらる。乃轉じて眞言宗となる、大師及去宣玉はく、我密敎の瑞光に依り、庵の繁榮無疑是より瑞光庵と名附く。

（以下歴代庵主ノ法名アルモ略ス）

右之通相改差上申候　以上

甲斐國巨摩郡間爲郷

眞言宗瑞光庵三十八世　俊　育　書判

德治二丁未七月朔

寺社奉行所」

大師巡錫の年代、其の他に信じ難い點がないではないが、兎に角我が國古代の佛教は法相、三輪、俱舍、成實、律、華嚴等、所謂古京（奈良）六宗の盛時であつて、各地に散在した寺院は、總べて此の中に含まれてゐた事は確實である。元興寺は、吾が國最古の法相宗寺院で、奈良猿澤池の南邊に在り、北邊に在つた興福寺と共に、同宗の双璧であつた事が歴史に見える。勿論今は跡形もない。開祖智達も歴史上有名の僧侶であつて、齊明天皇四年、勅によりて智通と共に入唐し、玄奘に師事した事が書記に見えるが、斯かる有名人物が當時山梨縣に下り、一庵を開いたか否やは、數考を要すべきであるが、此の寺院の古刹である事を證據立てるには、古き口碑と共に十分に役立つ。此の外、空海入甲の古記錄として、前記鳳凰山由緒書中にも

「往昔弘仁の頃、釋空海雨乞として登山、本社に地藏、觀音等諸經を、讀誦の處と申傳へ候」

と云ふのがある。平安時代、さらぬだに眞言宗の旺盛を極めたと云ふに、空海自ら錫杖を進めたと云へば、其の結果は推して知るべしである。

雪風苞雨數百千年、鳳凰山頂蠏寡孤獨であつた大日如來も、日本佛教史の概略と、本縣眞言宗の消息によつて、如何やら身寄が瞭りそうであるが、それは後項に讓つて、次項鳳凰權現の身元調査に移らう。

六、鳳凰權現

大日如來と共に、鳳凰山靈であるとされてゐる、鳳凰權現とは抑も何者であるかを本項に於いて開明しやう。權現と云ふ言葉の、最も用ゐられてゐるのは修驗道である。修驗道が役君小角を始祖とする事は、冒頭に述べてある。修驗道は、宗教上の性質から言へば、

宛も神祇と佛教の、合の子のやうなものであるが、宗教史上には、役君小角を佛教徒として取扱つて居る。恐らく、彼は、開闢以來大和民族に傳はる神祇と、古くから大陸より傳はつた道教を骨子として、之れに其の後傳はつた、密教の妙諦を粉飾して、此の一派を工夫したものと解する事ができる。從つて、密教の改題に等しい眞言宗と、著しく類似し、契印、指法及び呪文祈禱の儀式の如き、殆んど同一の點が少くない。但し、開祖當時の本尊が、何者であつたかは、寡讀にして逸してゐるが、後世に至つて、權現を主神にする事は今に變りがない。之の宗旨を捧ずる所謂行者（山伏又は道者とも云ふ）は、深山幽谷の間を修業の道場とするが、此の點は、平安の眞言、天臺に一歩先んじてゐる觀がある。古來、有名の道場として吉野連山、加賀の白山、出羽の羽黒山、月山、湯殿山、九州の彦山、信州の戸隱山、下野の日光山、二荒山等がある。此の他全國著名の山岳には、多くこれ等の人々の足跡が刻まれ、今に至る種々の話題が傳つてゐる。此の宗教も又、平安初期文德天皇時代より、中期堀川天皇の頃迄、約二百數十年間の隆昌時代のあつた事を、想像する事が出來る。それは、此の間大和の吉野、金峰等を道場の地として賜はつたり、又宮中より幣帛の援助を受けた事が、史上に散見するからである。

平安初期末、佛教徒の間に本地垂迹說なるものが唱へられ、神佛を全く混淆するに至つた。此の說に從へば、神を權現と呼び、佛陀菩薩が衆生濟度の爲めに、權りに現はれ給ふの意であると云ふ。卽ち、吾國では神を權現と呼ぶが、實はこれ等の神の本地、換言すれば本體は、佛であり、其の佛が迹を垂れたものが、吾國の神であると云ふのである。此の說は、初めは概括的に、吾國の神を佛陀の垂れとしたが、各宗共これに滿足せず、更に此の說を延長細別して、各神の各本地佛を決定する樣になつた。それによれば、如來の迹を垂れたものが、權現と云ふ事になつてゐる。從つて大日如來は、鳳凰權現の本地佛であつて、全く同一の主體である事が解る。只だ神佛二教に於いて、各自主體

の名稱を異にし、其の形態を分つに過ぎない。處が、こゝで肝要なのは、兩者の時代的區別を瞭かにする事である。卽ち、此の說の發唱前は、此の山の主體は大日如來のみであつたが、發唱後、新に鳳凰權現を祀り、信仰の中心に加へた事を記憶しなくてはならぬ。解り易く言へば、鳳凰權現は大日如來奉祀後の、ある時代に、修驗道を信仰する何人かによつて、勸請祭祀されたものであると云ふ事になる。實は私も、本地垂迹說を知るに及び最近迄極力否定してゐた、前記甲斐名勝誌中の鳳凰權現黃金像の存在を、此の頃、どうやら肯定し度くなつて來た。

七、古錢の研究

錢貨が穎殼、魚菜と共に、神佛の報賽に供せられる事は、吾國古來の風習であつて、此の度鳳凰山頂で發見された古錢も、亦或る時代の信仰者が山靈に捧げた、賽錢の遺留である事は云ふ迄もない。錢貨は文化發達に伴ふ、自然の要求であるから、何れの國に於いても、製作年代が史上瞭かに留めてある。從つて、古錢の研究調査は、ある程度迄、割合に容易である。殊に、此の度鳳凰山頂で發見された、古錢十四枚中、十枚が支那錢であり、更に其の中、八枚が宋錢である事は、著しく其の研究範圍を縮める譯になる。又、此の研究が直接鳳凰山史の重要なる證明者である事は勿論であるが、支那錢の我國に輸出されるに至つた經路は日支貿易關係のことになつて問題と直接關係ないからこゝに省くが、要するに平安以降、室町に至る六百年の久しきに亘り、吾が國の通貨は、專ら宋錢永樂錢の支那錢であつたが、桃山時代に至つて、村上帝以來中絕の吾が鑄錢事業も、永樂通寶の模倣鑄造によつて漸く復活し、更に江戶時代に入つて益〻盛業になるに及び、さしも旺盛であつた支那錢も、何時しか影を潛め、明治時代に至つては、一種の骨董品として、却つて一部の人に愛好される樣になつたのである。宋錢の輸入通行について、二三の史書中には、鎌倉、室町の頃を以つ

て殆んど決定的に書いてあるのを見たが、外交貿易史によれば、決して然らず、寧ろ平安中期に於いて、最も盛んの様に想はれる。

八、石祠石塔石佛其の他に就いて

石祠は、前記の通り大部分が無銘である爲め、詳細を知る事は出來ない。石祠は形態、様式によつて、其の年代を知る事が出來るそうであるが、淺學にして其の域に至らない。次期登山の折、精査して今回の缺を補ふ事にする。

石塔は、明治廿四年と記銘のもの及び他に一本あるばかりであるから、多く語る要がない。

石佛は、多數に安置されてゐるが、前に述べた通り、殆ど傷物(キッモノ)ばかりである。石佛を此の山に祀つたのは地藏、觀音、藥師を勸請して以來と想ふが、何時代に此の三佛を祀つたか瞭かでない。宗教史に、平安の頃此の三佛を信仰する宗派が勃興し、三十三ケ所巡禮や、三十三ケ寺詣りなどの風は、此の時代に初まつたとあるが、或は此の時代の勸請ではないかと考へる。地藏に子供は付きもので此の山の地藏は、特に子授け地藏を標傍し、子寶の無い婦人間に信仰が篤い。又地藏岳頂三尺に五尺の彫り込みに就いて、私は懸佛の吊し場所として久しく信じてゐたが、其の後山麓清哲村の古文書中より、青木村神社並に鳳凰山明細書(文化三年所記)なるものを寫し取つたが、其の中に

「柳澤甲斐守樣御領國の砌、享保八年中野村屋久兵衞と申者、大命を蒙り地藏ヶ岳によき金山を目付け、上樣へ申上候處大滿足に思召され、野村屋を大本願として早速間府開き(鑛山ノ掘り始メ式)を催し、大日如來樣の御寶前に四人持程の大鏡を納め奉り、宿願成就を祈念の折柄あな不思議や、一天急わかにかき曇り、山鳴り動き大風雨にて、野村屋始め皆の衆共千俣の谷底に吹き落され、二日目漸く目醒め麓の里に來て見れば、小春日和の天氣にて微塵も變りし事なし、野村屋始め皆の衆大に恐れをなして、誰れ一人として生ける心地なし。こは如來地藏樣の靈慮の怒り、罰當りよとして沙汰止みとなり申候。」

とある事より考へて、此の彫り込みは、野村屋久兵衛が大鏡を嵌入納奉する爲めのものと想像する事が出來る。三尺に五尺の方鏡は、恰も四人持ちの大さに一致してゐる。山麓柳澤邊の口碑に因れば、往時山頂近くの路傍に唐銅の大鏡が捨てられてゐたが、今は行衛不明となつたとの事である。此の三點の一致より推察すれば、野村屋の古事は確實と見る事が出來る。更に明細書中大日如來様御寶前に云々とあるを見れば懸佛は彫り込みの上部、卽ち二枚の岩盤の一部に奉祀されてゐた事が解る。數百千年の昔、圓頭黑衣の僧形が只管信仰の力によつて、天空に聳ゆる彼の岩盤を攀ぢ登る景態は、想像してさへも尊き極みである。因に云ふが、此處に見逃す事の出來ないのは、天變に度膽を抜かれ中止した野村屋久兵衛發見の金鑛である。其の後何人によつて發掘された事を聞かない。今何れにか在つて、昭和の久兵衛を待つであらう。

九、劍鉾類と鎌に就いて

これ等のものに就いては、上田氏は單に江戸時代の行者によつて捧げられたものとのみで、多くを語らなかつた。勿論これに就いても、大いに研究の餘地はあるであらうが、前項と共に後日不備を整へる事にする。

十、結　論

以上各項に亘り、甚だ雜然たるものであるが、これを綜合考察すれば、大體次の如く、鳳凰登山史の概要を窺ふ事が出來る。

一、開山は奈良時代より平安初期の間に於いて、密敎（眞言）信者によつてなさる。

二、奈良法皇御登山の傳說を考慮に入れる。前に書き漏したが、此の山に南御室、北御室の地名が殘り、今は登山小舍が建てゝある。御室なる名稱は、法皇の僧

房を呼ぶに用ゐる言葉であつて、決して臣下に用ゆべきでない事から考へると、此の傳說に思ひ當る事がある。然し、法皇なる制度は奈良朝には無く、平安朝に至り、醍醐天皇が上皇（宇多天皇）の落飾に際し奉つたのが始めであるから、一寸矛盾であるが、或は前記裏見寒話にある如く、道鏡が法王と稱し登山したかも知らん。此の疑問を最初に懷いたのは、碩學狹生徂來である。彼は峽中紀行に

問二鳳凰山一則神鳥來栖處、字或作二法王一、法王大日也。現二瑞山上一、或曰法王謫レ東時、涉二此山一望二京師一、予疑二其爲一道鏡一也。

と云つてゐる。道鏡は密教の信者である。兎に角、此の場合、登山者の何人であるかは問題ではない。

二、弘法大師の登山は、決定的とみてよい。同時に、大師によつて大日如來を勸請されたとも想像出來る。尙ほ續いて、多くの高僧が、名峰を慕つて登涉した事が、山麓の日碑に殘つてゐる。

三、和銅開珍、萬年通寶、神功通寶等と共に、當時行はれた支那錢、開元通寶が山頂に發見された。

四、上田氏は懸佛鑑定に際し、名銘なき點に疑問を殘してゐる。

懸佛研究の項にある如く、七百數十年前建仁年間の鑄作にすら、記銘してあるのを見れば、鎌倉室町時代のものには當然それが無くてはならん。して見れば鳳凰山の懸佛は、上田氏の疑問の如く、上代のものでなくてはならん。恐らく奈良、或は平安初期の鑄作と考へられる。

五、山岳宗教の全盛時代である。既に各項に述べた如く、都市佛教を厭ひ、空海、最澄を始め多くの高僧が、修驗道者の後を追ふ如く、盛んに山岳を道場として、伽藍を建立した時代である。

二、登山の盛時は、平安中期より鎌倉時代に及ぶ。

一、本地垂迹說起るや、從來佛教徒を主としてゐた此の山に、新たに鳳凰權現を勸請し、修驗道（神教）者の登山を激增した。

二、此の時代に流行した宋錢が、寬錢の大部分を占め

てゐる。

三、鎌倉時代の通貨、永樂通寶を發見した。

三、開山以來明治時代迄、信仰登山者を絶たず。

前記諸條の外に、

一、天文十一年と記名する石祠、及び同程度の古色をもつ、石祠多數に安置さる。

二、地藏、觀音、藥師を勸請したのは、室町時代と想像する。

三、寛永通寶の發見、及び野村屋の古事。

四、劍鉾、鎌等江戸時代の報賽物發見。

五、天保八年の記名ある石祠あり。又明治二十四年奉納の石塔あり。

四、明治末より大正中年頃迄、一時登山を絶つたが、これを機機に、現在の趣味登山時代を招來す。

首題に對し、內容甚だ不備であるが、これで大要はつきた譯である。一行なりとも、御參考になれば幸甚である。擱筆に臨み、尙ほ一言附記し度い事は、今回發見された品々が、此の山の登山史を考證するよき資料であると同時に、數年前先輩諸氏の論爭を喚起した、鳳凰山名論の解決にも、亦得難き物的證據品である事である。

鳳凰山名論は、改めて云ふ迄もなく、甲論者は現在の鳳凰山名は、古書に徵して間違ひである。事實は、鳳凰山と地藏、觀音、藥師の三山は別個のものであつて、現在云ふ地藏岳が、卽ち鳳凰山である。そして地藏岳と呼ぶ一峰は、他になくてはならぬと云ふ說に對し、乙論者は、否、現在名が正しいと云ふのが、此の議論の焦點である。何れも相當の根據はあるが、古書によれば甲論者の說く處を以つて正とするものである。そして古書を更に裏書するものが、今回出現の諸品である。卽ち、遺物中二枚の寛永通寶を除いた總べてと、古石祠の大部分は、地藏岳（古書に云ふ鳳凰山）頂に在つた。若し乙論者の云ふ如く、三山を總稱して鳳凰山とするならば、遺物の多くは其の主峰、觀音岳頂に無くてはならん。然るに此處には僅かに二枚の寛永通寶が、一部分の石佛と、石祠の前に在つたばかりであ

る。此の事實によつても古書を尊重する甲論者の說の正しい事を知る事が出來る。然し、私は現在の山名について、何等の不滿を抱く者では無く、寧ろ乙論者と共に、現在を尊貴する一人であるが、山名論は鳳凰山史を綴るに、重要なる項目の一つであるから、附記して參考に供した次第である。　九、一二、一五

本稿執筆の後、文中に訂正を要する箇所を多く發見したが、こゝにはそのまゝとして發表する。暫定稿として讀まれんことを附記す。

足高山小記

渡邊獨逸

足高山は富士山の南方駿河灣との中間に蹈踞する消火山で、足高とは富士山の脚下なる高山の意であらう。甲斐國志にも「長濱村の南の山を足和田山といふ、駿州の足高、足柄を合せて富士三足と稱す」云々と見える。

近頃其の山名に愛鷹を專ら用ふるのであるが萬葉集仙覺抄、回國雜記、和漢三才圖繪、駿州名勝志等古文獻の山名は皆足高である。愛鷹は古來足高の最南端に位する一峯の稱であつたのを、其の山頂に鎭座する愛鷹明神桃澤神社を對照とした信仰登山全盛期の影響が斯くあらしめたものであらう。

足高山は所謂富士火山脈中の火山で、第三紀末に於いて富士よりは先に天城、箱根と共に形成された。其の北方から望んだのでは、山頂の分岐と富士の噴出物被覆のために火山としての特性を見ることは少いが、南方からは緩慢な裾野を沼津平原に曳き、過去に於いて其の噴出物を流下放射した狀態が首肯出來るであらう。

「富士に岳くらべせんとて日本へ來るを足柄の明神け崩させ給ひ」云々と傳ふ足高の山頂は、越前岳（一五〇五米）を盟主として、黑岳（一〇八〇米）、呼子岳（一三一三米）、大岳（一二五三米）、位牌岳（一四五七米）愛鷹山（一一八七米）の六峯に分たれ、H形をな

して熊ヶ谷、大澤の兩火口を擁してゐる。鋸岳は其の兩火口の障壁をなす所の峻嶺で、呼子岳位牌岳間二粁に及んで平均一三〇〇米。其の峨々として中空に聳ゆる幾多の奇峯が斯く峭立してゐるのは、全く熊ヶ谷火口に接して大澤が爆裂した事に基因するものと云はれてゐる。

熊ヶ谷は足高火山を構成する諸熔岩を流出した火口で、山頂の中央に位する楕圓形の凹窪地は、長徑二粁、短徑一・五粁、深さ五〇〇米と謂はれ、四周は絶壁をなして登攀することは不可能である。火口底は高矩八〇〇米、今尚噴氣孔死滅の形跡、溫泉湧出の證、及び往時一大火口湖をなしたこと等窺はれるとの事である。

火口は大岳、呼子岳、鋸岳、位牌岳が圍む所の深淵で、火口瀬、須津川は西南隅から峽流して蜿蜒浮島に注いでゐる。

大澤は爆裂火口趾で、黒岳、越前岳、呼子岳、鋸岳、位牌岳が周圍に聳へてゐる。御殿場方面から望んだ時、分岐した山頂の下方に當つて巨顎を東方に向つて開放した様に見えるのが夫である。内壁亦極めて急峻で殊に鋸岳附近の如きは登攀すべき術はない。火口底には熊ヶ谷火口に於けると同様に幾多の岩脈が鋸岳に直角に走るを見る外、水蒸氣のために赭變された岩塊が夥しく散在して當時を物語るかの如くである。

此の爆裂作用は疑ひもなく山體形成後既に滿山樹木鬱蒼たる當時の出來事で、大澤入口や下和田溪谷、桑崎溪谷から掘出された埋木は其の山頂飛散と共に碎破せられた巨木が泥土と共に推出されたものであらう。

足高山の溪谷は一般に深刻されてゐる。大澤、長窪、下和田、須津、桑崎の諸溪谷が其の主なるもので火口を中心として輻射狀に分布してゐる。俚人は百澤と呼び中には人跡未踏のものもあり、或は往々火口趾と間違へられたりするものがある。斯くの如く深刻せられた所以は、由來足高火山の基部は饒多なる集塊質泥流の噴出によつて形成されたもので、其の上層部を被覆した諸熔岩流は極めて少量であつた。故に大澤の大爆裂の影響は終に其の基部深く巨大なる龜裂を生じ、こ

れが長年の浸蝕作用を蒙つたゝめ、今日の狀態を醸生したものであらうと思はれる。

大澤の爆裂は足高最後の火山活動で、斯くして山形を變じたが以後は全く鎭靜に歸したのである。

登山地としての足高の特徴は其の雄大なる眺望と壯年期開析火山としての足高自體の特徴、卽ち原始林、怪巖奇石、深溪、高山植物等に惠まれたることで、其の縱走も橫斷も一日で踏破出來るため、理想的な週末登山地と云ふことを得べく、京濱の地から最も簡單に所謂神祕境を探らんとする都人士には比類なき境地であらう。

コースは縱走するものと橫斷するものを主とし、他に鞍部に於いて其の何れにか合する補助コースがある。

御殿場驛から富士山南口として知られた須山村を起點として黑岳、越前岳、呼子岳、鋸岳、位牌岳、愛鷹山を極めて、沼津或は原に出るのが縱走コースで、全行程十里十一時間、橫斷コースは須山村より入るものとすれば、大澤火口から鋸岳を越え、熊ヶ谷火口に降つて鈴川驛に連絡する、全行程七里で、八時間を要するであらう。

前者は足高六峯を極めながら兩火口をS形に迂回する最も變化に富めるコースで、崇高な富士見臺の富士、駿河灣を背景とする鋸岳の仙境、原始林の靜寂、怪巖奇石を彩る可憐な高山植物、珍鳥の囀り等次から次へと展開される山岳的趣味は登山者のみ知る境地であらう。

愛鷹山は足高火山の最南端の一峯で駿河灣の眺望絶佳なるを以つて知られ、且其の山頂には鄕社桃澤神社が鎭座する。祭神は建御名方神、相殿に瓊々杵命、木花咲耶姫命を配祀する。

社記に云ふ「當社創建は孝靈天皇元年四月八日始めて愛鷹山に鎭座す」と。延喜式に「駿河國駿河郡桃澤神社」と載せられた古祀で、其の下之宮は建久年間源賴朝公の勸請創建したものである。

有名なる愛鷹牧場は今尙其の遺跡を存す。其の起源

建久五年源頼朝社殿を再興したる折、愛鷹一山の芝地を神領とし、且祭神が神馬を愛させ給ふとの社傳によつて、牝牡の馬種九十九頭を奉献牧畜せしめたものであつたが、明治三年廢止せられて全く其の種を絶つに至つた。同社神主奥津氏は天保年中一碑を境内に建て事由を刻したので附記して參考に供する。

愛鷹山碑陰記

維昔建久中、鎌倉右幕府、報賽駿之愛鷹明神祠、奉以騎九十九匹、及永祿中、今川氏割據駿府、寄印記于其祠、載以神馬之事、爾後百有餘年、寛政之初政屬維新、百廢俱興、石見守岩本正倫、奉旨、總括諸牧、於是使僚屬園田、中村二人、先入愛鷹山、巡察地勢、二吏歸奉曰、此地可牧、正倫稟議起駿、自原驛入、謁愛鷹祠、使祠官丹後守義次、筮其方位吉凶、義次辭以不能、正倫曰　然卽抽筮決之　義次曰　我祠所奉唯ㇾ一道　以故不用筮　請公平以紙製筮、正倫默座久之　歎曰、神不用筮　吾何以爲之哉、惟ㇾ誠意可以問神、仍詠和歌一首、朗誦再三、旣而曰、神意旣定、急命諸吏新築牧地　實寛政八年十一月五日也　土人群集　不日經營元野、尾上、霞三牧旣成、翌丁巳三月、正佩再來臨牧、捕馬數百頭、以充官廐之用、其餘散鬻四方、又擇三頭　奉進神祠、終爲恒例　其後駃牝蕃息　騱騱爲群　以爲諸牧之最　蓋正倫誠意所致　神感不可誣也因鐫其和歌于貞珉　又記來由以垂不朽云。

神　納　　從五位下　岩本石見守正倫

いやたかき愛鷹山にのぼりつゝ
　神と君との道をあふがん

天保十有二年歳次辛丑十一月

本祠神主　從五位下　但馬守奥津義晋立
京都直學士　從五位下　圖書頭成島司直撰

後者卽ち横斷コースは鍋岳を分水嶺とし　火口を貫流する大澤、須津川に沿ひて上下するもので、足高の開祖松永敏男氏の遭難された松永溪谷を始め羚羊の安住地である深谷連接し、其の徹頭徹尾峽谷通過のため眺望は得られないが、その爲め、身の壓せらるゝかの如

き峡谷美は、名瀑大柵と共に本コースの特徴である。

足高は之を概括すると一大森林で、殊に山頂及び雨火口附近は原始林である。高山植物は夙に其の豊庫として稱せられ、十有五種のつゝじの豊富なると共に特筆すべきものである。

登山期は春のつゝじ、夏の高山植物、秋の紅葉、冬の氷何れも結構であるが、新緑とつゝじの五月、紅葉の十月が萬人向の季節であらう。

足高は比較的渓水が少い、山頂近く各所に湧水衮々たるものがあつても何時しか渓流が乾河となるは珍らしくない。

今や足高も其の南部に於ける信仰登山期即ち愛鷹可能時代から寧ろ北部鍬岳附近を主とする探勝的な登山期が招來せられた。玲瓏な富士、凄相な足高、何たる吾等郷土の誇りであらう。待望久しく鶴首した丹那隧道も開通し、三島、沼津を起點とする須山口富士登山道があの靈峯を足高、沼津、三島、伊豆等の景勝溫泉郷と連絡せしむるのも近いことであらう。

フレッシフィールドを想ふ

松方三郎

一風貌

現實に巨人といふものが存在してゐたものかどうか、ともあれ私自身の經驗からすれば死んだフレッシフィールド程本來の意味での巨人を連想させた人はない。夏の初めに開かれる地學協會（アルピン・クラブ）の例年の晩餐會の席上であつたか、冬の山岳會（アルピン・クラブ）の大會の席上であつたか、初めて此の偉大なる山岳人の面影に接したその時の印象は、今の世の中ではもうどんな山奥に行つても出會はすことのない、物語りによく聞く、その巨人に廻り逢つたといつたものに近かつた。その人は、大げさに云へば、確に見上げる程大きく、それもたゞ鶴のやうに細く高いのではなくて、がつしりと、一つの大きな岩塊のやうな感じを與へた。そしてその人が又恐ろしくやさしい聲で大人しく靜かに物を云ふ邊りも、なにとなく、本當の巨人といふものが、その外觀とは反對に、性質は靜かで人なつつこく、親切であると云つた風の、自分の勝手な想像に丁度符合したやうで、愈々以て、此の人こそは巨人なのだと考へさせられてしまつたのである。

フレッシフィールドが九十歳（日本の數へ方）で亡くなつた時、恐らく彼は所謂「黄金時代」の唯一の殘存者であらうと云はれた。何れにしても、彼の風貌には今日のどの山の世界にも無い或るものがあつた。それは宛もヴィクトリヤ朝の全盛とウィムパーや、ティングル、スティーヴン時代の登山の隆昌とが一人の人格に結晶したやうな感じであつた。その上に彼の生涯はその儘、コーカサスからアフリカ、印度へと伸びて行つた近世探檢の重要な部分であるのだ。一世紀半に餘る登山史上に活躍した多くの先蹤者の中から精悍と呼ばれ、一騎當千と謳はれる山岳人を十人や二十人選び出すことは決して難しくない。科學的に、又は文學的に我々に

盡きる所のない遺産を殘した人も決して少くない。然してその「柄」と「格」との兩方から云つてフレッシフィールド程の偉大さを併せ備へた人が何人居たことだらう。彼の存在には、澤山の人家が建て込んだ中に一つ際立つて聳え立つ伽藍を想はせるものが確にあつた。こんなことが我々をして別の意味でも彼を巨人と呼ばしめるのに充分な理由を與へて居るのである。

二　登山家及び探檢家として

それ自身が立派な一冊の本になるやうな此の偉大な山岳人の生涯を私は今此處に書かうとは思はない。彼の登山探檢の生涯の梗概を列べた丈けでも山岳會々員錄（アルパインクラブ・レジスター）では尤に二十頁が費されてゐる。然し、此の大伽藍の面影を傳へるのには、矢張り、地上からドームの頂點迄何尺だとか、ファサードが端から端まで何尺だとか、あらまし乍らおほよその綱目を列べるのが早い。

弘化二年と謂へば、我々の生活には歷史の讀本を通して以外殆んど何等の因緣もない程遠い。フレッシフィールドは夫の間宮林藏が六十五歲で歿した此の弘化二年（一八四五年）に生れた。山好きで通つた母に育てられた彼は生れるとから山岳人としての一生を送る運命にあつた。十七歲にしてモンテ・ネロの初登攀をし、一八六四年に廿歲でアルパイン・クラブの會員となつた。宛も本朝に於いては幕府征長の師を起し、佐久間象山兇刃に斃れ天下を擧げて物情騷然たる元治元年の昔の話である。明治二年函館戰爭の頃に、彼は早くもクブラの委員の席に列し、一八七二年（明治五年）から九年間アルパイン・ジャーナルの編纂者となつて居た。そして一八九三年からの三年の間はクラブの會長の地位に就いた。我々の長老ウェストン師がクラブの會員に推されたのは此のフレッシフィールドの會長時代のことであり、今から四十餘年前のことである。そして一九二五年、クラブ會員たること六十年に及んで擧げられて名譽會員となつた。

アルパイン・クラブの兄弟分とも稱すべき地學協會

の會員に擧げられたのは一八六九年、彼の第一回コーカサス旅行の翌年のことである。そして一八八一年から一八九四年にかけての十四年間彼は名譽幹事として地學協會の今日の地位を確立する上に並々ならぬ努力を献げた。「ジオグラフィカル・ジャーナル」の發刊も彼の在職中の仕事であり、色々の反對を敢然押切つて講演に幻燈使用を試みたのも彼の發案であつたとの事、そして任期の最後の年には遂に宿願を達して地學協會のフェローに婦人をも加へることを實現して重大な一期を劃した。降つて大戰時代(一九一四——一七年)には會長として當時の名譽幹事ヤングハズバントと共に會の爲めに盡瘁する所多く、晩年は元老として協會の終身評議員たるの名譽を與へられ、死に至る迄エヴェレスト委員會の特別委員としてその名を列ねた。

彼の長い、そして廣い範圍に及んだ登攀の經歷を簡單に要約することは全く不可能である。六十年代から八十年代にかけてアルプスからコーカサスに及んだ彼の三十に近い初登攀の表を擧げた所で、それは彼の山岳人としての業績全體に比べては餘りにも小さい。

殊に、彼は一生涯を通じて、一度も所謂曲藝的登攀に興味を持つたことがなく、自ら山間放浪者を以て任じてゐたのであるから、登られた山の名が如何に多く擧げられても、それは彼の山岳人としての生涯の說明としては恐ろしく貧弱な材料に過ぎない。

假りにアルプスを除外して見れば、彼の足跡はコーカサス、アフリカ、印度に及び、然も何れも、開拓者として、夫々の地方で何等かの劃期的の足跡を遺して居る。カズベクやエルブルーズ東峯の初登攀をした第一回のコーカサス登攀は遠く溯つて彼の廿四の時のことであり、年代から云へば宛も我が明治元年のことである。二十年の後彼は再びコーカサス探檢を試みてゐる。グルバ、テートヌルド、ショーダ等の初登攀に成功した一八八七年の探檢と、ドンキン隊の搜査を目的とし、ライラの北西峯初登攀に成功した一八八九年の探檢とが之である。そして十年の後一八九九年にはシキムからネポールにかけて、大カンチェンジャンガ一

周の探檢を行ひ、一九〇五年にはマム氏と相携へて米踏の頂ルーウェンゾリを目指してアフリカの奥地に入つた。謂ふまでもなく六十の坂を越して後のことである。然も大戰勃發當時彼は中央アジア探檢を計畫中であつたといふのであるから齡七十に及んでも尙且つ尨大な探檢計畫を抱いてゐた譯である。

二　著述を通して

登山家並びに探檢家としてのフレッシフィールドの偉大な足跡は幸にして彼自身の著述によつて永久に我我共同の世襲財産として遺されてゐる。最初のコーカサス旅行の記錄は『中央コーカサス及びバシャン旅行記』(一八六九年)として發行されてゐるが、その後のコーカサス探檢の報告は一八九六年に發行された『コーカサス探檢』の二卷からなる大冊として公けにされ四十年後の今日尙此の地方に關する最も重要な文獻として、何人も先づ繙くべきものとされてゐる。カンチェンジャンガ探檢の記錄は『カンチェンジャンガ一周』の題の下に一九〇三年公けにされたが之亦今日既に古典として、シキム・ヒマラヤに對する關心の增大すると共に各々その重要性を發揮しつゝある。

勿論アルプスに關しても彼は屢々筆をとつてゐる。然し著述として殘されたものは一八六五年に發行された『トノンからトレントへ』並びに一八七五年に公けにされた『イタリア・アルプス』の二著である。多くの人が北からアルプスを眺めて居た當時、彼が既に南からアルプスを眺めてゐたことは、一生涯を通じて現はれた彼の先驅者的性格をよく物語つてゐるやうに見える。一八七〇年代ではウィムパーの『アルプス登攀記』とフレッシフィールドの『イタリア・アルプス』とが登山界を風靡した二大著述であつた。

『イタリア・アルプス』で彼は「まるで世界が雪線を區切りとして始りそれから下の事物はまるで問題にならないやうな書き振りは愼んだ心算りだ」と書いてゐる。「勿論雪の山を全然除外してしまふことは出來ない。然し、私は雪の山は風景の中でもそれ本來の場所

に置いておいて、出來る丈け此の雪の山を遠くから眺めやうと努めた。」から彼は公然と書いたものである。さうして最も知られることの少い、國境線上のアルプス連峯を跋渉する人々からはまるで見向きもされなかつたロムバルヂアの山々に思ひの儘の禮讃を献げた。マッターホルンの初登攀からラ・メイジュの初登攀迄の間の十年間のこと故、人々は只管に新登路の開拓に打込み、又或る者は既に變態的なヴァリアンテの發見に夢中にならうとしてゐた。然も一方には早くも「アルプスは登り盡された」「登山は行詰つた」といふやうな私語きが何處からともなく起り始めてゐた。その時代に、彼は默々としてたゞその著述を通し一つの大きな抗議を提出した。之こそは正に大きな革命的な仕事であつた。彼が半世紀の後に公けにした彼として最後の公刊書が『雪線の下』なる表題を與へられたことは此の意味からして全く興味が深い。「自分は登山家である。然し少くとも同じ程度に自分は旅行者だ」といふやうな一節が此の著の序文にある。「ピッケルを背負つて氷の世界を歩いたこともあるが、時には蝙蝠を片手に山の中を歩いたものだ」と云ふ彼の意味は山登りは氷と岩の世界丈けだなんて窮屈な考へは止し給へといふ意味なのだ。尤も彼は彼一流の性格からそんな毒舌は吐かない。たゞコーカサスやヒマラヤやアフリカを跨にかけた擧句の彼からこんな事を聞かされて我々は嫌でも何か考へさせられて了ふのである。彼は山の深さと廣さとを敎へた。鳴物も叩かず說敎も垂れずして多くの人の爲めに新しい天地を開き、新しい喜びを齎した。此の見地からすれば彼は、ウィムパーとは全く對蹠的な意味でも、同じやうに重大な役割を果した偉大なる先驅者であつたのである。

然し、フレッシフィールドの文献的事績を述べるに當つて、彼の文學・歷史の方面に對する貢献に言及しないことは許されたい。第一に擧げられるものは謂ふ迄もなく『ドゥ・ソシュール傳』である。一九二〇年に一世の山岳誌家モンクニエーと名を列ねて公けにされた此の著述は、ジュネーヴ大學が彼に名譽博士を贈る程重

大な業績であつた。一九一四年の『再びハンニバルに就いて』も彼に歴史學者としての確乎たる地歩を與へた研究である。單行本として出なかつた彼の史論、畫論、文學論に至つては全く數へ擧げるに遑がない程多い。

筆の人としての彼の高い水準は、彼の何れの著述を繙いて見ても立所に諒解せられる。詩集として獨立して公けにされた『山に寄せて』(一九一四年)の一卷を開く迄もない。勿論問題が單に筆の問題ではなく、廣い意味での教養の深さに、より多く關聯してゐることは謂ふ迄もないが。

四　日本との因緣

此のフレッシフィールドが曾つて我々の山野に親しみ殊の外日本の風物を愛したといふ事實は我々としては忘れることが出來ない。

シベリア鐵道で大陸を横斷して浦鹽から日本へとフレッシフィールドが乘込んだのは一九一三年(大正二年)九月の事である。日本での世話役は當時横濱在住のウェストン師夫妻であつた。然し彼が日本の山らしい山に踏込んだのはそれから北京旅行を終へて後のことで、十一月の初旬、島々谷の紅葉を愛でつゝ德本を越え、新雪の穗高を讃へ、上高地では溫泉に疲を休め、續いて稻核から島々へと出たのである。前後三日の旅乍ら、旅なれたフレッシフィールドは此の三日の經驗を以てして日本の山の含蓄を確りと理解したやうに見える。

日本旅行について彼の書いた所のものがよく之を證明してゐるのである。

高野、梅澤、三枝、小島、近藤、加賀氏等日本山岳會の有志が相寄つて兩國の龜清でフレッシフィールド氏を主賓にしてウェストン師夫妻、志賀重昂氏を陪賓に据えて晩餐を催したのは彼が山から下つた直ぐの十一月十一日のことで招宴後二日にして氏はカナダへと去つた。

「山岳」第八卷第三號には歡迎宴當時の模樣を左の如く記して居る。

席上志賀氏は、フレッシフィールド氏及びウェストン氏夫妻のために、菊花と月と題して英語にて、日本思想より看たる兩者に就きての小講話あり。フ氏等は、當日恰も宮城の觀菊御宴に陪して、後この席に列せられ、折しも氷輪高く空に懸りて、清光大川の水に落ちたる時とて、講話に一層の興味を添へ、欣聽せられたり、畢りて席上の舞妓を呼び山岳に因める「山姥」、菊花に因みて「菊の壽」二番を舞はしめたるは、主人側の心づかひなりき。

志賀氏は、卽席一聯を口占せられ、フレッシフィールド氏は原作者の解說を聞きて、之れを英譯するなど、清興深かりき、フ氏は、山岳趣味の傍ら日本の美術を愛好せられ、北齋の風景版畫を、多く藏せらるゝ由にて、大川端の夜景を、欄干より眺められ、本國に於けるウィスラアの夜景畫に似たりと、賞せられぬ。宴終るころ、氏は答辭を述べられ、本邦山岳研究の盛運に向はんことを祝福し、且山岳研究を精神修養上にも及ぼされたき希望を述べ、當夜の歡迎を謝して、八時半散會したり。

フレッシフィールドは彼の『雪線の下』に日本旅行について詳しく述べてゐるが、その章の終末に引用されてゐる「乾杯の辭」

'On has come down to us from 20,000 feet, but the love of Beauty and Pure Colour will soon carry back the mountaineer to his proper sphere.'

は恐らく當時の志賀重昂氏の詩の翻譯であらう。

「山岳趣味の傍ら、日本の美術を愛好せられ」といふ一節は倫敦での初對面の砌り彼の白いイーヴニングのシャツのボタンが貝作りでもなければたゞの金でもなく、小さな刀の目貫に細工したものであつたことを想ひ出させる。何しろ大きな胸のことであるから目立ちもしなかつたが、それでも赤銅に金の象嵌か何かをした上に彫を加へたホワイト・シャツのボタンなんかが有り得やうとは考へて居なかつた丈けに、奇異の感なきを得なかつたことは事實である。彼が日本訪問以來永く日本の風物に特別の懷しみを持つて居たことはこんな所にも現はれて居たのではあるまいか。

何れにしても彼と日本山岳會との關係は爾來二十餘年に亙り連綿たるものであつた。二十五周年記念に贈つた武田博士の『富士山』別裝に對してもフレッシフィー

ルド氏はそのフォレスト・ロウの家から遙々鄭重な受領の通知を送られた。そして之が會として受取つた氏からの最後の消息となつたのである。龜清招宴の席での記念撮影は寫眞屋がレンズの前でフラッシを焚いて惜しくも無駄となつた。當時記念にと氏の署名を得た會所藏の『コーカサス探檢』も亦震災で烏有に歸した。從つて此の八十七歳の老フレッシフィールドの筆蹟は會としては唯一の故人を忍ぶ記念の品となつた譯である。

五　巨木倒る

ブライス卿、マム氏、曾つて日本の山野に遊んだ此の二人の高名なる山岳人は共にフレッシフィールドに先んじて去つた。そして此の二人の爲めに「アルパイン・ジャーナル」に追悼錄を書いたフレッシフィールドその人も遂に過ぎし人となつた。

一昨年暮のアルパイン・クラブの大會の席上、會長の挨拶の中に一八六〇年代に會員になつた古老が五人今日尙元氣で殘つてゐるとあつた。そして一同之等大先輩等の爲めに杯を擧げて健康を祈つたことであつた。然し「フレッシフィールド老などは近頃はとんともう倫敦に顏も出さない」と聞いて私は少なからず氣に病んだり、折角此處迄來乍ら遂にその偉容に接するの機會を得ずに歸るのかと思つて一入心殘りに考へたことであつた。日本に歸つてからも氣掛りであつた自分は昨年二月八日の小集會の席上で思はず彼のことに語り及んだものである。彼が宛もその頃既に臨終の床に在つた等とは東京に居ては知るよしもなかつた。彼はその翌二月九日永い眠に入つたのである。享年滿八十八歳と十ケ月であつた。

臨終の床にあつた彼は口癖のやうに「フランソア、フランソア」と彼の永年の好き伴侶であつた一代の名山案內フランソア・デヴアッスーの名を呼んだと云ふ話だ。エヴェレスト探檢の問題なども昏々として眠に落ちた彼が繰返し獨りごちた事柄であつた。「フランソア、靴を持つて來い。さあ愈々出發だ」こんなことを譫言に口走つては看病の人達を困らせたと云ふ話は、彼が

世間嫌ひで遠慮深く、天下の羞しがりやとして通つて居た丈けに、そしてよく〳〵でゞもなければ仲間に對してさへ自分の山物語などはしなかつたといふ人であつた丈けに、想像した丈けでも胸のつまる想ひがある。

「充分にして完全なる生涯」、フレッシフィールドは大ブライス卿の生涯を斯く評した。然し登山家、歴史家、探檢家、地理學者、文學者、詩人その何れの道に於いても往く所として可ならざるは無く、然も九十の齢を惠まれて、大往生を遂げたフレッシフィールドその人こそは此の評を受けるに値する人ではなかつたらうか。

"But love of Beauty and Pure Colour will soon carry back the mountaineer to his proper sphere." と謳はれた彼が遂に二萬尺の世界に歸る機會を與へられなかつたことは實に事實だ。然し凡そ之以上に「滿たされて缺くる所なき」生涯を考へることが出來るだらうか。

フレッシフィールド逝いて一年有半、我々は日一日と益々彼の偉大さを感ぜざるを得ない。

「一九三五年三月廿一日現在アルパイン・クラブの會員は六百八十七人であるが、その中で九十歳を超えた會員は五人、八十歳を超えた會員は二十五人に及んでゐる」と最近の「アルパイン・ジャーナル」は書いてゐる。フレッシフィールド存命し、今年の三月六日に九十五歳（一八四一年三月八日生であるから正當に云へば滿九十四歳に二日足りない譯であるが）で長逝した判事オリヴァー・ウェンデル・ホルムスが加はつたならば九十歳以上の會員はもう二人增えた譯なのである。

長命だけが値打をつけるものでないことは會の場合でも個人の場合でも同じ事だ。然し如何に新進氣鋭の士に富み、來年は曇みかけて再びエヴェレストに見えやうと云ふアルパイン・クラブと雖も、古い會員や長老を作り出すことは出來ない。彼等の現在の地位その物が之等大先輩の肩の上に築かれて居るからである。

英國並に世界の山岳界にフレッシフィールドが占めてゐた地位が大きい丈けに、彼の死から來る損失は全く償ふべからざるものである。

遭難報告

鹿島槍ヶ岳に於ける内藤況三氏の遭難

第三高等學校山岳部員内藤況三氏は昭和九年十一月四日午前七時大町に到着。後からの推定であるが、先づ大町で食糧等を補充した後、徒歩で鹿島に向つたらしく、午後二時頃同部落宮坂彦治氏方を訪れたが、同氏不在であつたため狩野治喜衛氏に面會し、同日は營林署の造林小屋に泊つた。この小屋には同日天狗尾根に登つてゐた東京商大山岳部員小谷部全助、森脇芳之、高野勇一の三氏がその前日宿泊し、不要な品を置き殘して置いた。内藤氏は商大隊も東尾根に登つて居ると思つたらしく、翌日出發に際して次の如き文を書いた紙片を小屋に殘して行つた。

「御留守中を使用させて頂き失禮しました。諸兄の後を追つて東尾根を一週間程調べる豫定です。今、明日共山へ寢ます。

十月五日朝　三高山岳部　内藤況三」

なほこの小屋には内藤氏の遺品として携帶天幕一枚、制服上衣、制帽、飯盒、米二升が殘つて居た。

五日までの山の天候はまだ秋で、雪は降つては消え、降つては消えして五日頃には鹿島槍ヶ岳の頂上の邊でも少ししかなかつたらしく、かすかに薄化粧をして居る程度であつた。この意外に少ない積雪と好天氣に氣をよくして内藤氏は勇躍して東尾根に向つたらしい。五日正午頃大冷澤二俣の下手に新築中のスキー小屋を通過しそこに働いて居る大工としばらく話をし、こゝを通りすぎて北俣に入つた。五日の晩は何處で泊つたか不明であるが、商大の一行の報告を根據として判斷すれば多分笹嚙の邊らしく、三の澤を登路に選んだらしく思はれる。商大の一行が内藤氏の姿を初めて認めたのは六日午後四時半頃、第二岩峯の頭へ姿を現した時であつた（此の時はもう日も傾いてそろ〳〵天候が

崩れようとして居た)。商大の一行と内藤氏とは互に呼び合つたり、大聲で話をした。「第一岩峯はどうした」と云ふ商大側の問に對し内藤氏は「草附を巻いた」と答へた。冷側を巻いたのである。第二岩峯も冷側を登つたらしい。第二岩峯の頭からは尾根通しを素晴しい元氣で身輕にドン〳〵登り、商大の組が天狗の鼻に着いた時にはずつと先へ行つてしまつて居た(午後六時頃)。商大の一行は此處で野營をしたが、午後七時頃釣尾根南槍寄りに灯の動くのを見た。當時最低氣溫零下八度。幾分吹雪いて居た。エーホーと呼ぶと三度に一度位内藤氏よりの應答があつた。この夜は毛布と眞綿の寢袋で商大の組は充分安眠出來た。商大組が七時、袋にもぐつてしまつてからの事はわからないが、第二岩峯で見た時はルックサックもピッケルも持つて居たのであるから、その後此の日(六日)か七日の朝かに、釣尾根か南槍の登りに誤つてスリップし、黒部側へ墜落したものであらうと思はれる。何時頃であるかは全然不明である。

翌日(七日)商大組は午前八時出發し、冷小屋へ向はんと北槍を越えて、午前九時釣尾根最低部よりやゝ南槍に寄つた邊で吹雪の中からエーホーの聲を聞いた。商大の一行は變な處で野營したものだと思ひながらも、まさか遭難したとは思はず「一緒に行きませう」と叫んで上つて來るのを待つた。吹雪のために姿は見えなかつたが聲は聞え、其の間不完全な會話をかはした位であつたと云ふ。前夜來吹雪は止まず、一夜の中に釣尾根は既に二尺の新雪で覆れてしまつてゐた。近寄つて來る時に聞いた事は「昨晩このまゝで野營したので消耗した」「スリップして消耗した」「どこの方ですか」等である。その様にして商大の一行は小一時間も寒さにふるへながら待つてゐたが、姿が見えるまでそんなに疲勞困憊してゐるとは思つてゐなかつた。吹雪の中にぼんやりと現れて來る内藤氏を見ると、ルックサックもピッケルもなく、危つかしい足取りでキックステップを作つて商大組の居る處まで登つて來た。この時内藤氏は毛のスエーターの上にウインドヤッケを

着て居り、すつかりぬれて居た。右手には軍隊用手袋、左手はスキー手袋をはめ、スキー帽はかぶつて居たが眼鏡は既に無かつた。右顎打撲傷を負ひ、かなり腫れて居た。又靴紐が片方ほどけて居た。アイゼンははめて居なかつた。尾根に着く迄は割合元氣であつたが、尾根の上に出ると急に體がふら〳〵し出した。已に全身凍傷に冒されてゐたらしく、急に舌ももつれ出したやうであり、腰を下すことが出來なかつた。そして「ルックサックをどうした」との問に對し「一の澤に置いて來ました」と答へ、不審に思つて聞きなほすと「落した」と答へた。それからの會話は充分に聞きとり難く、「三高の內藤況三」と名乘るばかりだつた。

商大の一行は既に三晩を山に露營し、食糧も缺乏してゐたので、僅かに殘したパンの一片とチョコレートとを與へ內藤氏を一緒に連れて行かうとして、ロープで體を互にしばり合つた（三番目）が內藤氏は既に殆んど歩けず、ピッケルを借しても手から落し、シュリンゲに手を通すことも出來なかつた。その中にもう一言も發することが出來なくなり、體が非常に不安定になつて、眼を閉じて昏々として眠らうとするかのやうに見えた。商大の一行は約二時間も吹雪の中で苦勞したが、吹雪は益々強くなるばかりであり、三人共豫定がのびた爲めに食糧が全然なく、且三日間の野營で相當疲勞し、到底南槍の登りの岩場を內藤氏を連れて上る事が出來なかつたので、三人の寢袋を出して重ね、その中に內藤氏を入れた。その時既に內藤氏は體が利かなかつたらしく、抱いて入れようとしたが、片足は自分で入れたが他方は曲げたまゝで入れようとはしなかつた程であつた。寢袋を捨繩で尾根の岩に確保して鹿島側に置いて「行つて來る」と云ふと「うん」と答へた。歩き出してから思ひかへし姓名原籍をたづねるとちやんと答へたが、それから後は何を云つても「あのね、あのね、內藤況三」等とくりかへすだけであつた。氷砂糖を口の中へ入れてやつた時はもうすや〳〵と寢て居た。

商大の一行は急を報ずべく、南槍を登り、冷小屋に

至り、重い網やカンジキ類を置き、尾根道をひた走りに走り下りて、六時頃二俣へ着き、大工を連れて鹿島に着いた（午後八時半頃）。鹿島の人に救援を頼んだが、折悪しく若い者は働きに出て村に居らず、已むなく大町に救援を求める爲めに狩野及び宮坂兩氏は直ちに吹雪をついて大町へ走り、對山館に急報して（午後十二時）、直ちに人夫の手配を對山館主百瀬愼太郎氏に依頼し、又三高へ電報を打つた。次いで大町署へ出頭し事情をのべた。そこで巡査部長堀内信次郎氏は隊長となり、人夫九名を引率して八日午前九時大町を出發、鹿島にて商大の一行三人、及び東尾根偵察の爲め鹿島に滯在して居た法政大學山岳部岡田友二郎、山中利貞、小原武雄の三氏、有明人夫近藤一雄を加へて出發。同日は二俣小屋迄上つて一泊した。天候は相變らず恢復せず、山の狀態は全く冬山となつてしまつた。

救援作業は新雪の爲め非常な困難に遭遇し、京都からも救援隊が到著したが、如何とも手の下しやうなく、救援隊は遭難現狀に到達するまで前後一週間に亙る苦闘を餘儀なくされ、漸く十六日遭骸を冷小屋に收容し、十七日鹿島に下り、十八日大町で火葬に附した。

（第三高等學校山岳部發行遭難顚末報告による）

御嶽に於ける俵、馬嶋兩氏の遭難

第三高等學校山岳部員俵、馬嶋兩氏は一人につき米二升五合、副食物、パン二日分及び非常食糧を持ち、防寒具は羽根のシュラーフザック携帶テント其の他の物を持つて昭和九年十月三日京都を出發御嶽に向つた。

俵、馬嶋兩氏は王瀧より土浦を過り王瀧川を溯行し、頂上に達し、それより嶽の湯を通り落合へ出て九日歸京する豫定であつた。然るに十日・十一日と豫定より二日もたつたが、何等報知がないので遂に捜索隊を出すことになり、捜索隊は十二日午前一時京都發の汽車で御嶽へ向つた。

捜索隊は十一月十三日王瀧川支流小坂谷の出合に二人の靴跡を認め、出合から本流を少し溯つた休泊所で

俵一行の入山最初の夜（十一月四日）の宿泊を確認した。更に翌十四日、八重ダルの出合、魚止めの瀧の下流で焚火の跡を發見したが第三日（十一月六日）以後の足跡は全く發見し得ず、十一月五日より再び六日間に亙り第二回捜索を試みたが、新雪の爲め行動意の如くならず、殊に新雪のため山の狀態は日一日と變化し、遂に目的を達せず今日に及んでゐる。

（第三高等學校山岳部發行遭難顚末報告による）

立山地獄谷に於ける佐伯宗作氏の遭難

本報告は慶應山岳部OBの中村知一氏筆小冊子『佐伯宗作遭難の眞相』によつて編者がその責任に於いて適當に按配したものである。要約載錄を許可された中村氏に厚く御禮を述べる次第である。（編者）

一、出發より遭難前日まで

大阪の中村知一、山田奈良雄兩氏は、山案内佐伯宗作を伴つて昭和十年四月廿七日、芦峅を出發した。目的は春の立山、劒登山にあつた。中村氏によると、『宗作は陽にこそ焼けてゐたが、何處と無く元氣なく』見受けられた。藤橋、材木坂を經てその日はブナ小屋に一泊、夜半より豫報通り天候崩れ、風の音に曉方には雨の音さへ加はつた。

四月二十八日、天候は曇り、雨は小止みとなつたので、八時出發。弘法茶屋に至る頃、南風漸く强く感ぜられ、小雨の中を午後一時過ぎ、追分小屋着。雨は間もなく止んだ。宗作は鐵砲を持ち天狗平へ。晩には宗作を中心にして白頭山の話に花が咲いた。

四月二十九日、矢張天氣惡く、たゞ雨が落ちる程でもないので八時に出發、天狗平の左を廻り、天狗平小舍着。少憩後出發、地獄谷の入口で十分程休む頃、雨氣を含んだ南西風が吹き出した。雷鳥澤の登りも上半分は霧に包まれた。地獄谷の噴煙は相變らず硫黄臭を發してゴウ〳〵となつてゐる。見なれないうんと西よりにも新しく一ケ所から旺んに噴いてゐた。雨は次第に劇しく雷鳥澤を登り、乘越小屋についた時は濡鼠で

あつた。天候は益々悪く、夜に入り吹雪になつた。

四月三十日の午後、二三十分乗越に出て見た。此の頃は、大分風もなぎ風速十米乃至十五米になり、數日前まで岩の出てゐた乗越にも二尺程の新雪を見た。氣溫は終日戸外、零下七—九度、室内一度半—零下三度であつた。二十九日より遭難當日まで小舍に泊つたのは、中村氏一行の外に、金澤醫大の内田太一氏、同校先輩青木浩氏、及び案内豊太郎、早大山岳部員佐藤、廣瀬兩氏及び川西飛行機製作所員三名であつた。其の夜に入つて西風は益々猛烈となり、炭火の爲めか、宗作すら頭痛を感じた。五月一日も吹雪で二三間しか先が見えない。風速三十米以上、氣溫零下十度。終日吹雪き頭痛は昨日よりも劇しい。二日も吹雪。風稍〻鎭まる。室内氣溫零下二度、戸外零下九度。三日、相變らずの吹雪で天候恢復の見込なく、劔を斷念、下山と決したが、午後になつても風止まず下山を見合せる。午後四時劔澤小屋との中間まで滑つて引返した。劔澤側に僅か降ると、劔の裾邊りが見える位に、天候は恢復した。夕食後戸外に出ると、今迄五日間吹雪き通した風雪も、靜まり大日岳も、彌陀ヶ原の雪原も、穩かに、夕闇を通して脚下に横たはつてゐた。劔も駄目なので、明日室堂を經て雄山に登り芦峅に歸ることに決心した。

二、遭　難

五月四日五時前に起床。戸を開けると、風は強い。大日の右の肩の上灰色の雲が一杯擴がつてゐる。その雲に對照して、鷲ヶ御前に續く尾根に、雷鳥澤より吹き上げる雪煙が、低く、舞ひ上つてゐる。ともかく乗越小屋を七時二十分出發した。風は強く、息が出來ない程であつたが、二十間も下ると大した事はなかつた。ブナ小屋の邊りまで見透がきく。小屋に滯在の人全部が揃つて下つて來た。雷鳥澤の下で待ち合せた。風は此の邊りでは全く無く氣溫零度、少時休憩した。そのうちに宗作は海豹皮をスキーにつけ、默つてドンドン歩き出して、地獄谷の入口へ進んでゐた。すぐあとを山田君がついてゐた。私（以下私とは中村氏をさす）

は三番目に十四五間遅れてついて行き、少し下る所で追ひつき、山田君よりスキーが滑つたので追ひ抜き、大きなケルンのある所では、宗作、私、早大佐藤氏の順で進んだ。……何時もよく噴いてゐる穴を左に見、雪橋をすぎる頃私のワックスが、後滑りをしたので、シュプールから外れて、右手に出た。少し進んで又、宗作の後についた。此の間に、豊太郎が宗作とラッセルを代つた。地獄谷も、二十九日に通つた時より見れば、新雪四、五尺増してゐた。豊太郎、宗作、私、佐藤氏の順に先頭は歩いて行き、地獄谷も将に終らんとして、何時も這松の出てゐる尾根を目がけて稍〻上りかゝつた時、突然豊太郎がスキーを着けたまゝ音もなく、雪穴に落ち込んだ。餘りに突發的なので、唯普通の穴に落ちた位に宗作も私も考へてゐた。二・三秒後、恐ろしい叫聲を上げて豊太郎は穴より顔を出した。彼の顔は苦痛に歪められ、油汗がタラ〳〵と顔に流れ再びドツと穴の中に倒れた。その瞬間宗作は、踏んだと思つたら、スキーもルックも脫し、私が「危い！待て」と云ふと同時に、宗作は鋭い叫聲を發し穴の中に姿を消した。私はすぐ穴の處へ駈けよつた。宗作は穴の中で一度踏んで豊太郎のビンディングを外し（豊太郎を引き上げた時は着けてゐたスキーは完全に脫げてゐた）、双手で（兩杖を一本どつちかの手に持つたまゝ）豊太郎の胴をかゝえ、（宗作は西向きにとび込み、そのまゝ豊太郎を抱く、豊太郎の顔は東向き）抱き上げやうとしたその時に豊太郎は全く氣力なく、グンナリとしてゐた。それを宗作が踏んで抱き上げやうとした。抱いた瞬間宗作の顔色は灰色と變じた。咄嗟に亞硫酸ガスの穴と私は直感したので、出來得る限り、ガスを放出しやうと、二・三回兩杖で穴の周圍の雪を叩き落さうとしたが、そんな手緩い事では駄目なので、右手の兩杖を突出し宗作に向つて、「此に摑まれ」と叫んだ。聞えたのか、宗作はもがき苦しみ乍ら、灰色になつた油汗のにじんだ顏を振り向きつゝ右手を出したが、最早双眼は空ろとなり、あらぬ方を見詰めてゐたが、それでも左手で豊太郎を抱いてゐた。再び私が「杖に摑まれ」

と呼んだ時、苦しさうに顏を歪め、二・三回急はしく息をして、二人とも抱き合つたまゝ、宗作が下になつてドツと倒れた。此の間僅に五秒内外の出來事にすぎなかつた。』

三、救出と救援

『私は一度スキーを脫して、すぐ宗作のルックサックからザイルをつかみ出して、穴より北に向けて雪上に引つぱつた。私がザイルを出してゐる間に、私の後にあつた早大の廣瀨、佐藤兩氏、川西飛行機製作所の人が穴の周圍に集つて來られ、上になつてゐる豐太郎のルックサックの負皮にザイルを通して、敏速に豐太郎を引き上げにかゝつた。一度豐太郎はルックサックを下に上向きになつて引上げられたが、負皮が切れずり落ちかけ、危く誰かゞ彼の肩をつかみ偶然に下向きになつて上半身を穴から乘り出したので、協力此を引き上げた。それに要した時間は墜落後、僅かに二分か二分半の事であつた。豐太郎は泡を吹く樣な口付きをし、半ば瞳孔開き、氣狂ひの樣に雪上を輾轉し手も付けられなかつた。豐太郎は救出直後脈搏微弱で危險な狀態となつたので醫學士青木浩氏、金澤醫大內田太一氏の手によつてビタカンフアー一本を注射した。そのため脈搏蘇り、狂へる如く暴れ廻つてゐた豐太郎も靜まる。

『豐太郎に手當中、私は宗作の安危を氣遣ひ、直ちに雪穴に駈せよれば宗作は深さ目測東側四尺內外、西側五尺五六寸穴の底、北寄りに下向きに頭を西にし倒れて居り、如何とも施す術もなく、宗作の顏色(橫顏)は灰色より土色に變じ、一刻も猶豫を許さず、宗作を殺してなるものかと云ふ考へが頭一杯になつた。瞬時に凡ゆる救出法を考慮したが最善の方法は只一つ、自ら穴に入ることであつた。』

そこで中村氏は『豐太郎を引き上げたザイルを、身に付け、一端を宗作の身體を縛るため、約二米程餘裕をとり、他端二十米餘程は、山田君初め、早大、川西の人々に確保して貰ひ、手拭にて、鼻、口にマスクをして、深呼吸して穴の中の作業を試みるべく、出來る

だけ緩かに、穴の底に下りた。穴の底は稍〻乾いて、綠色がゝつた硫黄を多量に含んだ土であつて、宗作は、頭を西向きにして、俯伏しに、穴の底の北寄りの緣に倒れて居り、顏は半ば北に首をねじ、左頰を地につけてゐた。丁度宗作の顏をつけてゐる所邊りが、亞硫酸ガスの噴氣孔になつてゐた。直に、胸に手をあてゝ見たが、心臟は停止して居り、次に顏を反對に南向け、眼を見たが瞳孔は完全に開いてゐた。左頰を平手で打つて見たが感覺はない。すぐ兩脚に確實にザイルを結び付け、穴から夢中でとび出した。ザイルがぐん〳〵引つぱられたので、私は息が止まりそうになつた。一度ザイルを緩めて、私の身體から解き、豐太郎を引き上げた如く北に引つぱつたが、宗作の身體の位置と直角になるので、東に廻つて、穴の東緣より引上げた。私は穴の緣で、先づ足だけ空に浮かし、上に持ち上げておいて、全員協力して、一氣に引上げた。それは豐太郎墜落後四分—五分迄の時間であつた。

『上げると同時に靑木、內田兩氏が脈搏を調べたが、最早絕望となつてゐた。それでも直ぐ、ビタカンファーを二本續けて注射し、穴より五、六間宗作を北に運び、すぐ人工呼吸を開始した。五、六分人工呼吸を試みたが、穴より餘りに近接し、劇しく硫黄臭を感じるので、七八間運び、尾根の中程の通風の良い所へ運び、ビタカンファー一本注射し直ぐ人工呼吸を繼續した。豐太郎は最早、暴れ廻らず、ルックの上に腰を下し、寒い〳〵と連呼しながら震えてゐたので色々のものを着せた。二、三人は豐太郎を看護し、他の者は全部宗作の人工呼吸に交互に替つて最後の期待を抱いて試みた。』

先づ連絡については『早大の方に、すぐ天狗平の番人を呼んで來て貰ふ樣依賴した。その頃、別山乘越の主志鷹雄之氏が雷鳥澤を下りて、地獄谷を通らず、室堂に行くのを認めたので、之に救援を乞ふた。偶々室堂より下山の佐伯豐次氏も現場に駈けつけてくれ、又早大の方に依賴した天狗平小屋番人佐伯七藏氏及び藤木氏も三四十分後に駈けつけ唯突然な此の慘事に全く

言葉もなく、最後の一縷の望みを人工呼吸に期待し、全員勞をおしまず、宗作の爲め人工呼吸をやつて下さつた。豐次氏に宗作遭難看護手當中の悲報を芦峅寺に傳へる爲め下山して貰つた。豐太郎はかなり、顏色を恢復し、寒さを訴え、「大丈夫か？」と聞くと「ウン大丈夫だ」と答へ得る位になつたが、意識は半ば亂れて居る樣に認められた。豐太郎は寒さを訴える度を增した、コッフェルに紅茶を沸し、興奮劑として與へ、アンナカを一本內田氏が注射した。

『九時十分頃、私が宗作の腹部を人工呼吸してゐた頃、急に彼の體溫の下降が冷く掌に感じ初めた。その少し前迄は油汗に皮膚はネチ〳〵としてゐたが、此の頃より汗は氷の樣に冷く體溫はグン〳〵下つて行く。「一ヂ二ィ・一ヂ二ィ」と十八呼吸を算える懸聲のみが聞え、默々と懸命に人工呼吸を續けた。懸聲は、ともすれば早くなり勝ちとなる。靑木、內田兩氏はつき切りで、宗作の脈を取つて居られた。豐太郎も何時迄も地獄谷に置いておくのも良くないので、ジキタミン一本打ち、十時頃一人付添ひ天狗平の小屋へ向はした。早大の方二人に、電報打電を依賴し、芦峅寺に下山して頂く事にした。

『宗作は益々體溫下降し、人工呼吸による吸息は行はれたが、終に脈を蘇す事出來得ず最後のジキタミン一本を注射し、絕望と知りつゝ十一時半迄續けた。最後に、靑木氏が、宗作の心臟を胸部から、一分間七十回の割にて叩く心臟按摩法を試みたが、此の最後手段も空しく、全く絕望となつた。一代の名案內人として、名高かりし佐伯宗作は悲しい屍と變じた。目は半ば開き、口も僅かに開いてゐた顏色も陽に燒けて元氣そうだ。まるで眠つてゐる樣な、ちつとも、苦痛の表れてない安らかな顏だつた。』

『かくして遺骸搬出の事は別山乘越志鷹雄之氏、天狗平佐伯七藏氏が懇ろに宗作の遺骸を運ぶ用意をして下さつた。兎に角天狗平小屋に下る事にして、宗作、豐太郎兩名を引上げたザイルで遺骸を引つぱつたが、新雪深く仲々捗らぬ。八人の手によつて一時間程費して、

やつと天狗平の小屋の見える尾根迄引き上げた。天候は再び崩れ、視界は霧で閉された。一つかなりの澤を越さねばならぬし、遺骸はたゞスキーの上にのせザイルと細引で縛つたのみなので、色々準備のため一同天狗平小屋迄下る事にした。吹雪いて來たので遺骸の埋沒を懸念して天狗平の途中の一地點に置いて十二時四十分天狗平小屋に下つた。此處で今迄御盡力願つた神戸川西飛行機の三人の方に下山して頂く事にした。吹雪は益々荒狂ひ、午後終に、佐伯七藏、志鷹雄之、藤木三氏だけ室堂に、食料、燃料を取りに行き歸路毛布で宗作の遺骸を包んでくると一時頃出た。小舍の二階で寢てゐた豐太郎も下りて來て、「自分も行く」と云つたのを、青木、内田兩氏が之を止め、三人の御盡力を待つ事にした。出かけて間もなく、追分の志鷹新次郎氏が急をきいて應援にかけつけて下さつた。前記三氏は三時間の後、吹雪のため、遺骸の地點不明で不得止小舍に歸着。間もなく日暮となり宗作の遺骸を、あの寒風吹きすさむ尾根に放置する事は、遺族に對しても忍びなかつたが天狗平迄運ぶ事は本日は斷念した。

『六日も朝吹雪いてゐた。八時頃より見透が効いたので豐太郎を不在番にして、他八名遺骸の地點に急ぎ、スキーに釘を打ち、橇となし、宗作の遺骸を毛布で、包みなほして、悲しき行列を作り、力無き懸聲で遺骸を引き下し、澤を越えてより、スキーを着して引つばつた。スキーを着した爲め、案外捗り、十一時頃天狗平小屋より三、四丁東にて榮作氏、喜一氏を加へる先發救援隊に會し、宗作の遺骸を渡した。』かくして遺骸は彼の同僚によつて手厚く守られ午後七時芦峠に安着した。

四、下　山

五月五日一方中村氏等は、天狗平にて晝食を喫してゐる間に、小屋を出遲れてゐる内に非常なる吹雪襲來し、益々荒狂ふので餘儀なく宗作の遺骸に附添ひ得ず天狗平に第二夜を迎へた。

五月六日、珍しい快晴に七時出發、追分弘法を經てブナ小屋の手前で、豐太郎、七藏兩氏に會ひ、材木坂の

中頃にて志鷹雄之、山田兩氏及び金澤醫大の先輩に會ふ。藤橋の營林署小屋の前にて、營林署戸田氏に面會、藤橋にて、山岳取締駐在巡査吉野氏に遭難の報告をなし、芦峅に向ふ。途中で豊太郎の父榮次郎氏、榮作氏に出迎へられ、榮作氏に伴はれ、宗作の家へ重い足を運ぶ。二日前の元氣な宗作は、北枕に頭から白布をかぶつて安置されてゐた。中村氏の口から榮作氏に、宗作の遭難を出發當日より、遭難、絶望となる迄の經過が話された。その夜お通夜に一代の名案内人宗作を失つた宗作一家のみならず、芦峅寺全體が悲嘆に暮れてゐた。

五月七日、最後のお通夜、祭檀は立派に飾られ、生前の偉大なる名案内人を悼む弔電弔文の數々が靈前に供えられた。賑かだけれども悲しむべきお通夜であつた。八日の宗作の葬儀は立派であつた。彼の生前の偉大なる功績と、最後の犧牲的行爲に依つて、組合葬が營まれた。平藏の後繼者と云はれた宗作は緣故深い平藏氏が葬儀委員長となり、立派に營なまれた。

一ノ倉澤に於ける山口敏彦、福田一雄兩氏の遭難

一、登山者氏名

東京慈大、本科三年　山口敏彦　二六才
同　豫科二年　福田一雄　二〇才

二、登山計畫

昭和十年四月二十八日、上野發—土合山ノ家、午後偵察。四月二十九日、土合山ノ家—一ノ倉澤又は二と三との間の尾根—シンセンの右—一ノ倉頂—西黑澤—山ノ家。四月三十日、夕又は五月一日正午歸京豫定。

通信部—大森區久ヶ原町六〇四、小山昇、部有品、ザイル三〇、ツェルトサック一、ハムマー一、ハーケン六、アイスピトン二、カラビナー三、ワッパ二。

三、登山並びに遭難經過

四月二十八日午前八時五十分、上野發、正午頃山ノ家着、午後一ノ倉澤偵察。

二十九日、午前二時半山ノ家出發、午前曇後雨、午

後に到り濃霧風雨烈しく一ノ澤二ノ澤間の尾根に嵐の夜を一泊。

三十日、強烈なる吹雪、更に登り二ノ澤の頭附近にて二ノ澤に墜落せるものと推定す。

四、措　置

A　通　知

四月三十日、午前八時半二十九日現地に在りたる日本登高會員知人より高木文一氏に電話あり。

「山口、福田兩君が昨二十九日午前二時半二ノ澤瀧澤間の尾根を登ると山ノ家に云ひ捨て出發せるも午後二時頃より天候險惡となり登攀者の云ひ殘せし言に從へば五月一日までに歸る筈なるも直ちに以て遭難と斷ず可からざるも天候の險惡は樂觀を許さざるを以て少し早過ぎるとは思ふもお知らせする」と。

こゝに於て高木氏は東京病院に廣瀨誠吾氏を訪ひ善後策を講じ先づ本部を東京病院耳鼻科内に置き、部員先輩に通信を發し夕刻山ノ家からの報告をまちて具體的活動をすることに決定せり。午後部員、先輩等の集合と共に救援隊を組織し先發二名午後六時半上野を發し、十時五十分頃湯檜曾より事態は樂觀を許さずとの狀況報告あり、尚又別に土合山ノ家からも不安の報ありたり。

B　捜　索

部員、先輩等十名の救援隊は午後十一時半上野を發す、五月一日早朝湯檜曾着、先發二名と合し更に地元人夫二名を雇ひ土合山ノ家に到る、部員一名は湯檜曾本家旅館に殘り山ノ家東京間の通信連絡の任に當る、山ノ家にてプランを立て全員十三名を五班に分ち午前七時捜索に出發す。

行　動

第一班　一ノ倉一ノ澤　二名
第二班　同　二ノ澤　二名　人夫　二名
山ノ家歸着午後二時
第三班　マチガ澤　三名　谷川岳北ノ耳―
第四班　西黑澤　三名　西黑澤
山ノ家歸着午後五時

第五班、山ノ家、一名、通信連絡員とす。

報　告

以上五班全部の活動の結果は濃霧風雪甚しく岩壁は新雪附着し氷を以て被はれ展望も不可能にして、彼等遭難の地點と目せられし地點（二ノ澤と瀧澤との間の尾根）に近づくことを許さざりしを以て遭難者發見の手掛りを得るに到らず。當時の積雪狀況は一ノ澤二ノ澤附近四―五寸、國境附近では二尺以上ありたり。

五月一日夜

一、家族に通知すること。

二、本格的捜索を行ふこと。

三、捜索隊用の食料品、道具、人夫を集めること。

四、通信線、山ノ家…土合信號所―湯檜曾驛―本家旅館―東京病院耳鼻科、を全からしむること。

等を檢討し決定す。

五月二日早朝、杉本部長以下先輩、部員等十名山ノ家着、山口氏親族五名湯檜曾着。

準備整ふも風雪更に烈しく一時捜索行動を見合はせんとするも尙ほ可能なる地點を卽ちマチガ澤一ノ澤間のシンセン東山稜の下半の尾根（兩名の歸路の一ツと推定せられしところ）を部員十二名にて捜査するも何等手掛りなし。山ノ家午前十時出發―マチガ澤―尾根―一ノ澤前澤―一ノ倉―山ノ家。

夜廣瀨、福田氏家族と共に五名湯檜曾着。

五月三日、風雪烈しく捜索を見合はせ四日のプランを立てる、午後家族の人々を一ノ倉澤國道まで案內する。

五月四日、曇無風氣溫少しく上昇、夕刻より雨あり。

第一班、四名、援助班三名

山ノ家午前四時半出發―一ノ澤の鞍部（八・三〇）―二ノ澤の頭（二・〇〇）―西黑澤（四・〇〇）―山ノ家午後六時二十分歸着。

二ノ澤の頭附近に於いて舊雪上に足跡發見し之を踏みて登る、足跡は一ノ倉澤側をからむこと約二十米にて尾根に出る、この尾根は鋭き雪稜をなしマチガ澤一倉澤双方に急激に落下し更に二十米にしてマチガ澤側

に傾ける二三の凸起を形成す、足跡はこの雪稜に出でてより不明。

第二班、二名

山ノ家（四・三〇）―一ノ澤二ノ澤間の尾根に取つく（六・〇〇）―登攀（二・三〇）―引返―山ノ家（六・四〇）

尾根にて

一、ブッシュの枝にアイゼンの爪跡。

二、雪面にステップカッティングの跡。

三、折れ木にアイゼンの爪跡。

等を發見し足跡を傳つて午後二時半まで登り第一班の二ノ澤の頭に達するを見双方から足跡發見の連絡をなし直ちに引返す。

第三班、一名、人夫二名

土樽―萬太郎谷―谷川岳頂―山ノ家

第四班、一名、人夫二名

土樽―茂倉谷―茂倉ノ頂―蓬峠―山ノ家

人夫一名は蓬峠より蓬澤を下り土樽に到りその間を捜索す。

第五班、三名

山ノ家―芝倉澤―一ノ倉頂―國境尾根―谷川岳―西黒澤―山ノ家

第六班、人夫三名

谷川温泉―天神峠―山ノ家

第七班

二ノ澤對側尾根にて觀測

第八班

一ノ倉澤國道テント地點にて觀測

第三班より第八班までは手掛りらしきものなし

以上各班凡ての行動結果を綜合檢討するに

一、足跡發見に關し種々なる憶測をなせるも足跡が殘り得る期間内にこの尾根を登りたるを兩名以外に聞かざること。

二、兩名の記載せる登山計畫表により兩名の足跡と斷定するを先づ妥當とする。

三、足跡は同尾根の上部並びに下部に存し一つの登

路として連關あり。

四、足跡は二ノ澤の頭附近にまで達し雪稜に向つて進めるも雪稜にては新雪のため發見し得ず。

五、若しマチガ澤に墜落せるものとすればその狀態よりして致命的とは考へられず、生命に關することなく歸り得るか又途中に留るも五月一日同方面を捜索したる結果は何等發見せられざりきなり。

六、更に若し雪稜を進みて谷川岳北の耳に到達し國境に出でたりとするも五月一日同地點を捜索したる時何等の手掛りもなかりき。

七、又登路を引返したるものとは當時の狀態に在りては考へられず。

八、依つて同雪稜登攀中に二ノ澤に墜落したるものと考へられる。

九、然らば途中に引懸りて在るか下まで落ちたるか。

十、途中に懸つて在るとすれば反對側一ノ倉尾根等からの觀測によつても何等認められるところなく又新雪のために冬の狀態となれる二ノ澤登攀は雪崩の危險をともなひ目下のところ不可能である。

十一、下まで落ちたるものとすれば二ノ澤の下部にはその雪渓の終端に近く岩と舊雪との境するところに斷層をなせるクレヴァスありてこの中に落ち込みたるものか、而もこのクレヴァスには常に二ノ澤からの雪崩落ち來りて凡て埋沒するを認むる故に死體はクレヴァスの中に落ち更にデブリによつて覆はれたるものに非ずやと推定し決論する。

以上の推論に基き次の如き計畫を立て實行す。

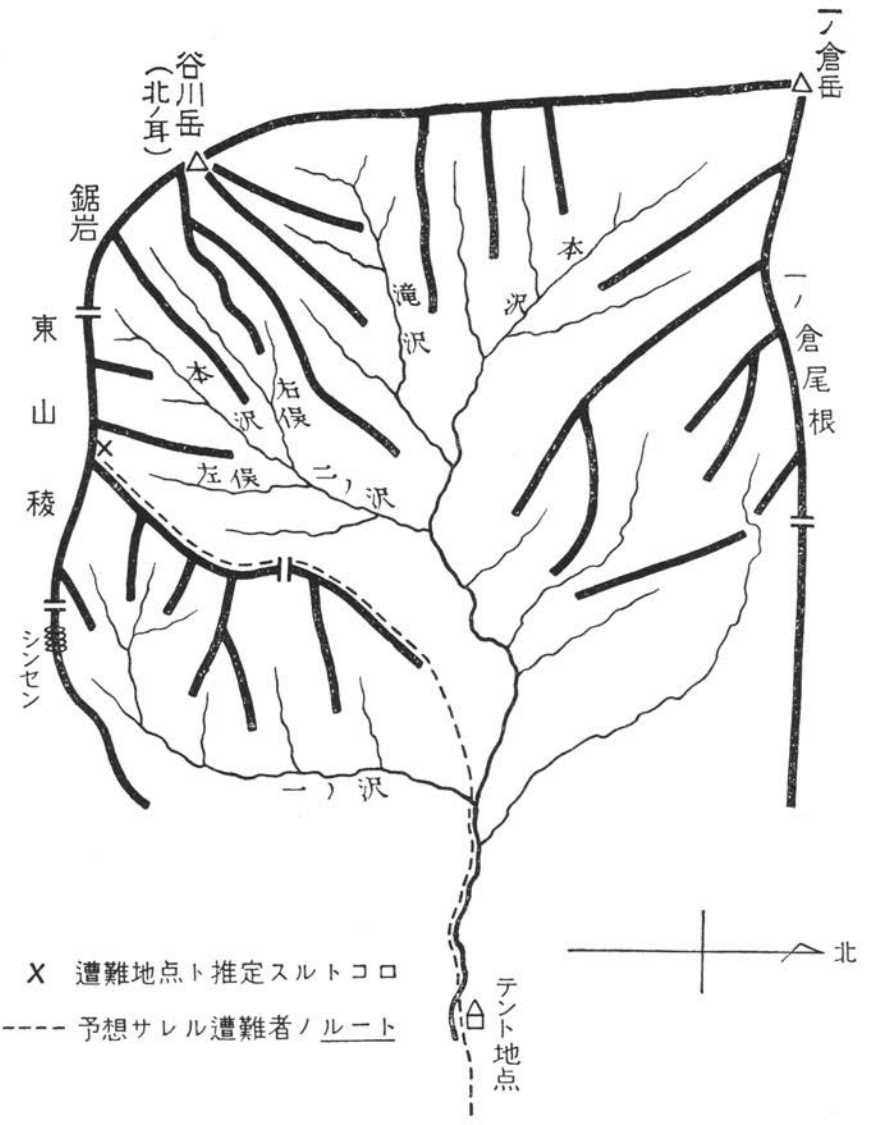
A　二ノ澤下部のクレヴァスを掘ること。

B　人夫を雇ふこと、二十餘名

五月五日

午前一時山ノ家出發二時舊國道テント地着、クレヴァスを掘るには雪崩なきを前提としなければならない、然るに舊國道に到る少しく前より小雨あり、止む見込みもなく雪崩の危險を豫想し暫く作業を見合はせることにせり、暫時にしてもなほ小雨は止まず、作業實行

一ノ倉沢略圖


一ノ倉岳
谷川岳（北ノ耳）
鋸岩
東山稜
シンセン
本沢
滝沢
本沢
左俣
左俣二ノ沢
一ノ沢
一ノ倉尾根
テント地点
北
X 遭難地点ト推定スルトコロ
----- 予想サレル遭難者ノルート

困難となるを以て計畫を斷念せり、而も天候に尙ほ賴むところありて未明まで天候恢復を待つも依然止まず、加ふるに雪崩の音も聞えて全く斷念するに到る。

午前七時先發、部員並びに家族全部テント地に集合、遭難地點に向つて默禱。

午後九時より兩名の遺品を假の靈とし翌朝六時まで通夜。

C　引　上

五月六日午前七時今後の方針に關し協議の結果今後の捜索は相當の長期間に亘り雪崩の危險なき時を選ばねばならぬ關係上且つ發掘作業は人夫を以てするも可能なる故に一先づ大部分の部員を歸校せしめ今後の作業觀測に充分なるだけの部員を七名山ノ家に殘留せしめこゝに捜索隊は一先づ解散して雪解けを待つことと決定せり。

午後部長以下二十名並びに家族の人々は引上げて夕刻歸京せり。

追　記

殘留七名の部員はこの後六日より十日に到るまで西黑澤、マチガ澤、一ノ倉澤に亘り再三偵察を續行し二ノ澤斷層發掘作業を人夫十二名を加へて八日早朝三時間に亘つて行へるも何等の手掛りも發見する能はず、十日夜一先づ引上げて歸京せり。

D　今後の方針

一、山ノ家住人に偵察を依賴す。

二、適當の時を選び特定せる部員を交代に送り偵察、觀測をなさしむ。

三、雪解を待ち雪崩の危險なきに及び二ノ澤の登攀を行ふ。

（東京鐵惠醫大山岳部）

圖書紹介

紀行と隨筆

田部　重治著

四六判二〇九頁・定價一圓二十錢

大村書店發行

此の本は、表題の示す通り、紀行文と隨筆とから成つてゐる。併し隨筆の方は、隨想をものしたといふには、少し理窟の勝ち過ぎてゐるものが多い。然かもその中には、登山の本質論に關するものも相當あり、一時流行した「山岳文學」に關するものもある。

之等の登山の本質論に就てこそ、此の本は、相當批判されるべきものだと思ふけれども、新刊批評欄で簡單な言葉で之に觸れる場合は、或は著者に對し禮を失する嫌もあるので、之等の論述に對しては、他の機會に稍〻詳しく思ふ所を述べるつもりである。從つて此處には、それ等の諸篇には觸れずに置く。

此の本を讀了した後の感想を云へば、本として甚しく編纂の手際の惡いことが目立つて感じられた。かうした短い（五、六頁のものが大部分である）、その時々に書いたものを後に集めて、一册の本として出版する場合には、今一度手を加へて、矢張り一册の本である以上は、首尾一貫した本らしいものであつて欲しい。同じ事が、多少の言葉遣ひの相違こそあれ、何度も繰り返されて出て來るのは、本としての體裁から云つて決して上々とは云へない。例へば、双六池が昔と比べて見違える程汚くなつたことを、著者は痛嘆してゐられるが、同じことが三度も繰返されると、興が殺がれる。殊に九二頁の所と、一四九頁の所とは、殆ど同じ言葉で書かれてあるので、後の方を讀んでゐる時、オヤ本を開け損なつて、同じ所を繰り返して又讀んでゐるのかなと思つた位である。著者としては捨て難いものであらうが、何れかを何とかされたらばと思はされた。そう云へば、此の双六池の出てゐるこの紀行文、「その頃を追うて」と「烏帽子岳より中ノ湯まで」とは、同じ紀行を、一つは詳しく、一つは簡單に書いたゞけのもの、樣に思はれる。秩父に就ての隨想、紀行文にも、かうした重複繰り返しが多過ぎた樣に思ふ。

あつちこつちの雜誌などへ書かれる場合には、同じことを色々に書き改めてゆかれるのも、大變面白いこと、思ふけれど、一册の本の中へ、之を皆集められるのは、本として型がとゝの

はない。その點で、此の本は第一に、田部氏の筆格に似合はない、雜駁の感じを與へる。

此の本に載せられた紀行文を讀んで、正直な所、私は失望した。私の期待が大き過ぎた爲めかも知れない。併し登山を內省的に味得することを以て、登山の本然なりと斷ずる著者から、最も味はふべき紀行文を期待するのも無理はなからう。

此の本に編められた數々の紀行文からは、自然の美しさを、考へ深く捕へ出して來る田部氏を、少しも見出すことが出來なかつた。何處をどう通つて、何があつて、何を見て、何を食べて、何處に泊つたといふ樣な、單なる記錄を詳しく述べたものにしか過ぎない。例へば「藥科の高原」から抜書きして見る。

「こゝの牧場の小屋の手前から右に藥科登山道が別れてゐる。駒場の牧場を見たくなければ、大門峠を越ゆることなしに、あの池ノ平に沿ふ大道を行けば自然に藥科牧場に達し得られるわけである。私達はこゝの牧場を流れる溪流に湯をいやして、やがて右に藥科登山道へさしかゝつた。」

「湯澤鑛泉は聯想してゐたよりは感じがよく、二階の部屋で涼しい風をあびてゐると、膚寒い感じがした。湯にはいつてから飯を食べ終ると、ねむくなつて、ぐつすり寢て仕舞つた。あくれば、天氣が昨日より幾分惡くなつて、十時過ぎに乘合にのつて望月に至り、そこから更に田中驛へと向つた。」

此の同じ道を嘗つて旅した人にとつてならば、之を讀みながら、嘗つての日の自分の旅を回想するよすがともならうが、何も知らない人にとつては、何度讀み返しても、たゞ土地の名前と、時間の經過を知るだけで、何の感興も起されなければ、著者の紀行に就て何の印象も與へられない。此の本に載せられた紀行文からは、風景の繪畫的印象を得ることも出來なければ、又旅に於ける著者の思想を聽くことも出來ない。田部氏から期待するものとしては最も貧しい紀行文である。

理窟抜きの輕い隨筆の中には、いゝものが幾つかあつた。之等の隨筆の中には、他の田部氏の著書の中に書かれたものと、重複して居り、然も他の本にあつたものゝ方が優れてゐる樣なのがある。

更に理窟の勝つた隨筆に就ては、私は、田部氏がもつと想を練られて、隨筆なぞと中途半端にせずに、一貫した田部氏の登山に對する思想を、書かれたらばと思つてゐる。私達の先輩から、最も期待してゐるところのものであり、啓發されるところの多いものであると期待してゐる。

田部氏の先に著はされた、二冊の山の本に對する私の記憶から判斷して、此の本は、最も落ちるものだと思ふ。

最後に、著者は、序文で、「山に關する著述はこれで三册になる。若し著者の山に關する考を見ようとする人があらば、その一つによつて、斷定されないことを讀者に希望しなければならない。其の一部を斷片的に取つて審議されることは、著者の精神に徹するものではないことを玆に云つて置きたい。」と述べてゐる。

之は恐らく、著者の山岳人としての人格、或は生命に對する批判への斷り書きだと思ふ。此の本を、一册の本として批評することは、此の序文の斷り書きに觸れるものではないと思ふ。既に一册の本として世に出されてゐるのであるから。「山岳」の編輯者が、私に此の本の批評を命じられたのも、恐らく同樣な考へからであらう。

（浦松佐美太郎）

白馬連峯と高瀬溪谷

冠松次郎著

四六判・三九七頁・定價二圓五十錢

梓書房版

「この書は私の黒部流域を中心とした、著述の最後のものである。……恐らく今後、自分はかう云ふやうな、一つの山地の經つた概觀、紀行等を書くことは出來まい。これが最後のもので、その意味で、本書は私には卿か名殘を惜まゝ、記念出版であると思つてゐる。」之は著者の序文である。かう書かれたのを讀むと讀者も何となくしんみりと此の書を手にするやうな氣分にならざるを得ないが、考へて見れば著者程古くから山に親しみ、然も今日尚第一線に立つて旺んに山に入つて居る人は少い。卷末の肖像が示す如く、流石に揉上げの邊りには卿か霜の降りたのを認めるが、著者が都會に於いてよりも山中に於いて、より容易に見出され得ることは今日と雖も一向に變りがない所を見れば、そんなに哀傷的な氣分を持つにも當らないやうだ。何れにしても、「黒部溪谷」に始つて、「立山群峯」「劍岳」「黒部」「双六谷」「後立山連峯」此の七年間に於ける著者の黒部流域に對する筆を通しての獻身は、著者の足跡そのものと共に、永く我々の登山史上に遺る一つの歷然たる存在である。

「白馬連峯と高瀬溪谷」は大別して二部に分たれる。第一部は此の表題の地域の概說であり、第二部は紀行と隨筆とである。内容は必ずしも白馬や高瀬谷に限定されて居ない。

第一部は山に入るに當つては必讀の部分であるが、直接關係がなければ必要な時迄棚に藏つておいてもいゝ。要するに問題の取扱ひ方が客觀的である。第二部は反對に山よりも著者が

表面に乘出して居る。

第二部の最初に出てゐる「山は歩かれてゐるか」は著者が本當にその腹の中にある一物を投げつけた一つの爆彈宣言であり、之に同感の意を表する者は決して少くあるまい。日本の山は——日本アルプスも勿論のことだが——決してまだ到底登り盡されては居ない。第二部では何と云つても「銀座とアルプス」式の純粹の隨筆が面白い。然し「自然美と水力電氣」といふやうな短いものに迸つた著者の熱情をも見逃す譯には行かない。年輩から云へば、我々輩の遙に先輩である著者に此の若さと闘志とを見出すことは此の上なく愉快でもあり、又後輩にとつてのよい刺戟でもある。

挿入された寫眞は流石に何れも爽快なるもの、定價が驚く可く廉價であることも特筆に値する。（松方三郎）

Scrambles in Japan and Formosa.
by Rev. W. H. Murray Walton.
22.5×14.5 pp. 304. London. 1934.

著者、マレイ・ウォルトンの名は、我々には親しみの深いものである。我々は氏自身の臺灣登山談を小集會の講演で聽いたこともあり、氏の紀行文が『山岳』を飾つたこともある。彼の日本滯在期は一九一六年頃から一九三二年までであつたが、その間に彼の試みた登山の記錄を集めたものが、この一册になつて公にされた譯である。

本書の卷頭、小島烏水氏の序文には『探險時代に於けるウェストンの成せる功業と相並んで、我が日本の山岳は、ワルトン氏に依つて、新しい名著を寄與された譯である。我等日本山岳人の悦び大なるものがある、こゝに絶東より、歡呼を送る』とある。しかし乍ら、ウェストン氏とウォルトン氏との間には、大きな時代の差異がある。二人の日本の登山の歷史に於ける地位も異れば、日本の山に對する觀方自體も自ら異る。時代的に見て、前者を以つて『日本アルプス探險時代』の人とするならば、後者は正にその『流行時代』の人である。

『流行時代』に現はれたウォルトン氏がこの著書のうちに取扱つてゐる題目は、臺灣の如き特殊な場合を除いては、我々の間にはすでに語りつくされたものであり、從つてそれらの內容を一々詳細に紹介することは必要ではない。たゞ本著の組立を說明する意味から全體を順を逐ふて一瞥する。

著者は、その自序に於て、各章のもつ特色に一言して、ウェストン時代の日本の山と現今の山とを比較し、たゞ今も昔も變

りない一つの條件として日本に於ける天候の不安定を擧げ、『この本のうちで雨のことを書きたて過ぎたかも知れないが、雨をぬきにしては、日本に於ける登山の完全な記述とはならない』と述べてゐる。我々日本の生活は雨と極めて密接な關係にある所から習慣となつて了つて、雨のことが紀行文にどんなに多く出て來ても、我々には餘り氣にならないが、外國人にとつては餘程氣になるらしく、現に出版の相談を受けてウォルトン氏の原稿を讀んだ一書肆主人はそれを讀んでいたく憂鬱になつたと告白し、或る部分の削除を忠告したといふ話だ。

第一章は『山々への序言』と題し、著者の少年時代に於ける南阿の、またスノウドンの思出から、山との關係を說いてゐる。『私は九才の時山へ……』といふ書きぶりは、それを書く人の年齡や經歷によつて隨分變な印象を讀者に與へるものだ。——スマイスなどもやつてゐるが、此の手は兎かくキザで目ざはりだ。——こんな事はこの場合別問題であるが、ともかく著者の山登りらしい山登りは日本で始まつてゐる。斯くして一九一七年の燕—槍(日本アルプスの最初の旅行)と一九一八年の燒、槍—穗高の縱走とが先づ物語られる。

第二章以下 Hira Formosa—葡萄牙語の『美しい島』—と題し、著者の最も得意とする臺灣風物並に臺灣山岳に次の四章を割いてゐる。即ち第二章では臺灣風物一般を、第三章で次高及びハバノラウ、第四章に南湖大山、中央尖山を、そして第五章に新高山を誌してゐる。

それから內地に戻つて、ウェストンさんをあれ程に感慨させた木曾御岳の宗教に先づ第六章をさき、次いで第七章には御岳より乘鞍へ(一九二七年)を、第八章には第三回御岳登山(一九三一年)を誌して後、轉じて南アルプスに筆を向け、第九章には甲斐駒—仙丈—間—農鳥を、第十章には農鳥—間—鹽見—小河內—窓澤を、第十一章に赤石—兎—聖—上河內(一九二六年)を、第十二章に木屑駒(一九二七年)を、と四回の縱走を記錄し、更に北アルプスに一轉して、第十三章に針木—立山—劍—鹿島槍—白馬を語り日本アルプスと別れ、第十四章には東北に轉じて藏王及び盤梯に及び、第十五章には再び南に屋久島を訪れ、第十六章に秩父三峯、第十七章に筑波を、そして第十八章に日光を語つて、最後に短いエピローグで終つてゐる。

尙卷末には、內地及び臺灣の山岳高度表、日本語彙、並びに索引が添付されてある。

寫眞は、著者自作のものとその他全部二十六面。我々には珍らしくない風物ものがあるが撰擇はいゝ。

御岳講ののぼりを表紙に捺した裝幀は、ウェストン氏の眞似

たものか、私としては『遊山地』のやうなさつぱりしたものをとりたい。

本文通覽の感想は、全文至つて無味乾燥な砂をかむ如き味ひであるといふことである。然しそれはあながち筆者のみの責任ではあるまい。筆者は日本の山を知らない人を讀者としてゐるのであり、從つて、我々としては時に退屈を感ぜざるを得ないのも已むを得ない。それにしても我々としてはもつとウォルトン氏自身の眼に映じた儘の日本の山の感想が聞きたい譯だ。日本の生活にも馴れ、言葉にも巧みな氏のことではあつたが、氏の日本山岳觀がもつと語られて居たならば我々は遙に此の本に對し深い興味を持つたことだらう。然し我々は、著者の十年餘にわたる登山に對しては十二分の敬意を拂ふものだ。日本アルプスを初め、北は蔵王から南は臺灣に及んでゐてその足跡の廣さに對し驚異を感じないものは少くないと思ふ。

ウェストンの本は今日一つの立派な古典的存在となつてゐる。古典とはたゞ古いといふのでもなければ、又たゞ過去に重要な役割を果したといふ丈けでもない。旅行案内が多くその現在的効用を失ふと共に捨てられるのはそれに古典價値がないからであらう。

ウォルトン氏の著は、その内容に盛られた範圍の廣さからしても、地名その他の正確さからしても日本に於ける登山の立派な紹介である。然し何となく我々が、物足りなく感ずるのは餘りに總てが事務的に處理されてゐるからではないであらうか。然しそれは——前にも述べた通り——必ずしも著者の責任ではない。又若し著者にその責任の幾分があるとしても、それは寧ろ著者の時代が大部分を負ふべきものであるかも知れない。

（黒田孝雄）

Mountaineering
by Sidney Spencer and others.
21.5 × 14 : pp. 333. London. 1934.

英國山岳會前幹事であり、現副會長スペンサー編輯の下に、英、佛、獨、米、各國にある英國山岳會員を動員して作られた本著の内容の各項目及びその執筆者は、次の如くである。

序　文	Lord Lonsdale.
編輯者緒言	Sidney Spencer.
初期の登山	T. Graham Brown.
登山の一般原則	G. Winthrop Young.
裝　備	C. F. Meade.
地學的構造論	E. J. Garwood.

岩登り	E. R. Blanchet.
氷雪技術	C. F. Meade.
偵察	C. F. Meade.
冬期登攀	Henry Hoek.
應急手當	A. M. Wakefield.
高山植物	H. Roger-Smith.
山岳寫眞	Olaf Bloch.
英國の登山	W. P. Haskett-Smith.
アルプス	Claude Wilson.
ドロミテ	G. R. Speaker.
歐洲の山岳	W. Rickmer Rickmers.
アフリカ	William C. West.
ヒマラヤ	T. G. Longstaff.
ニュージーランド	H. E. L. Porter.
北アメリカ	J. Monroe Theorington.
極北の山岳	J. M. Wordie.
南アメリカ	Philipp Borchers.
日本	Walter Weston.
朝鮮臺灣	Walter Weston.
山岳諸團體	Sydney Spencer.

山岳語彙、山岳書目錄、引照

といふ各方面の第一人者の執筆の協力による本著の紹介は、これで充分につきてゐる。

こゝには全巻にわたる詳細なる紹介並に批評は差控えて置くが、たゞ我々として最も興味のあるロングスタフのヒマラヤ紹介と、ウェストンの日本紹介を稍〻詳しく傳へて置きたい。

× × ×

ロングスタフの擔當したヒマラヤは、目次の通り、七節に亙るが頁數で數へれば、僅かに二十頁に足らない。この短い内に、ヒマラヤ全山系を說明し了してゐる、よくコンサイズされ、少しの無駄なしに述べてある所、長く彼の地にあつた彼にして初めてよくなし得る所であらうとつくづく感ぜさせられる。

第十七章に於てヒマラヤの意味、地形、動植物等について概說を與へたロングスタフは、次の二章に於て、ヒマラヤの旅行、登山、岩登りについて、多くのアドヴァイスとヒントを與へくれてゐる。その何れもがよい暗示に富んで居る。

ヒマラヤに關して、先づ第一に問題となるのは暇と金とであるが、自由に使へる時間が長ければ長い程、比較的安あがりにすむし、反對に、時間の制限が短かい程比較的高くつくものである。次には登山家或は旅行家自らのメンタルな準備が必要で、その地の風物に親しむためには、先づ言語から始める。ヒンドスタニーを少しかぢつて置けばよい。次には目的地の事を書いたものをよく讀んで置いて、その風土習慣を研究して置く。これ丈け準備出來れば、氣の置けない二三の友達と、四ケ

月位の間、ヒマラヤの一シーズンをしかもアルプスに費す位の費用で愉快に送つて來られるものである。

尤もそれは小規模な登山、旅行についてゞあるが、大規模なものとなつては、又特別の用意が必要である。エヴェレストの場合のやうに、今日「新聞」から無形有形の援助を獲ることは必要であるが、しかしこの場合 Our game is worth playing for itself alone といふ事を忘れてはならない。

次にヒマラヤのガイドのこと、ブルース、ケラス等の訓練によつて、土着人のうちにも多くの優秀な擔夫が養成され、彼等が多くの登攀に偉れた功績を殘しつゝあるが、今日では次第にその中から、ガイドの養成も考へられてゐるらしい。しかし充分に熟練した登山家ならば、かゝる土人達を友として登ることもできる。それには、土人達の尊敬と信頼とを得るやうに、またその使用する下男と土人との關係、インド特有の嚴格な階級差別のことにも注意を怠つてはならない。

岩登の立場から見れば、ヒマラヤの領域はなほ無限で、アルプスの凡ての峯がスパイクされ、カウカサスのウシュバが女の足で樂に日歸りされる今日でも、ムスタフタウァやサルトロスパイヤースは、今も征頂されずに殘つてゐる。今日ではこの方面のヒマラヤの價値は、全く低く評價されてゐる。

雪の狀態はこゝではアルプスよりも複雜であつて、アルプスの夏と冬とが同時に見出され、東及び北の斜面と南及び西のそれは全く異つてゐる。雪のスロープは、アルプスよりも急で、雪崩も大規模で、その危險も從つて甚大で、新雪後三日間は近づくことをさけるべきである。

暴風雨は、それによつて起る洪水と共に、殊にヒンヅークシの方面では注意を要する。大きな高い峯々には、それぞれ特有の嵐がある（モンスーンとは無關係に）。しかしこのモンスーンは六月末から始まり、南の方の部分に特にその威力を發揮するが、北の方やラダクの方では大したことはない。このモンスーンの終つた九月はよい天氣がつゞくが、十月高い所に新雪が來るまでがヒマラヤの最もよいシーズンである。

ヒマラヤではガイドブックがないので偵察は必要である。雪斜面はヒマラヤでは、眼に見た以上に急である、初めてヒマラヤの山々に接する人々にとつては、距離の觀念が狂ひ易い、とまれ、地圖によつてよく研究の上、實地に於いてよいグラスによつて目指す峯のルートを偵察して最も近いと思はれるルートを自ら撰ぶのが、一つの成功の祕訣である。

裝備はアルプスと餘り異らない、高い所ではカラコラムにイタリア隊の使用した靴、軟いウインドジャケット、ソラ・トピ

の帽子、ゆるい輕い寢袋、小さな換氣裝置と下敷を縫込んだテント。下の方ではフランネルの輕い着物、寢具も必要である。

一九二八年設立のヒマラヤンクラブは、登山者に便宜を與へ、最近の情勢もよく報告してくれる。皆仕事の片手間にする仕事だから、自分の國で判るやうな事は問合せないやうにしたいものである。

これでロングスタフはアドヴァイスとヒントを終つてゐる。次の數章は、地域別に各山系を案内的に紹介してゐる。

パミール、アライパミール、天山、クエンルーンの山岳は、蘇、支兩國内の政治的事情も關係あつて、非常に接近しがたいし、又、金、暇、準備を充分に整へなければ成功を期し得ない。またヒンヅークシ、ムスタフーカラコラムも略それと同じやうな狀況である。從つて費用の方は第二としても、時間的に制限されないことが、この北部旅行の第一の問題であらう。とまれ、この部分は、登山よりも、むしろ氷河探險の方面からの研究旅行に適してゐる。

クル、スピティ、ラホール、バシャールの山々は普通の登山家には無視されてゐるが、高さを問題にしなければ、接近も極めて樂で安上りだ、處女峯がゴロゴロしてゐるから、どれでも好きな奴を撰んで登れる。休暇利用の登山家がよく登る所である。

ガルワールとクマウンとのアルプス的な構造は、その美はしい森林、花島と共にヒマラヤの最も美はしい地方である。ガンゴトリ、カメット、バンチ・チュリ、ナンダデヴィに分れ、政治的に面倒の少く、近接も比較的手輕であるから、比較的簡短にしかも相當手硬いクライムを享樂し、一方その自然美に接し得るのが、この地方の特色である。

ネパールは政治的に極めて厄介な地方で、探險家には全く閉鎖されてゐて、大規模なエクスペディションの入國は難しいが、三・四人の土着民を友としたパアテイならば差支へないらしい。案外素晴らしい登山が期待できるかも知れない。

エヴェレストに關しては前後四回の登攀を簡約し、將來の登攀は必ずモンスーンの前に行ふべきで、エヴェレストのコンディションは四月が最もよく、第三キャンプは五月一日前に設ける、そしてルートは、ノートンルートをとることなど、詳細に述べられてゐる。

シッキムは、從來多くの人々によつて最も頻繁に登攀され、カンチェンの如き尤物も控へてゐるが、運搬が距離の割合に高くつくこと、雪の狀態がヒマラヤ中で最も惡いこと、しかも蛭の溪谷は熱帶的で不健康なることなどの、不利な條件もある。

ブータンは特殊の任務を有する旅行家のみが入國を許可され、從つて登山家の側からは全く未開地であることは、それ以東の支那國境の部分と同じであるが、將來登山家の活動がこの方面で大いに期待されてゐる。

かくしてロングスタフは最後に次のやうに要約して筆を擱く。繰返して云へば、ヒマラヤに出發するためには先づ自らを準備する面倒を怠つてはならない。高さを問題にしなければ、アルプスよりも安上りである。雪と岩の難しさを撰ぶならば限りはないが、技能的な難しさは、アルプス、カウカサスに經驗した所よりも確かに一段上である。

尙まだ〳〵我々にとつて大切なことも詳しく擧げてあるが、こゝには以上のアウトラインに止めて置く、ロングスタフの上に述べたやうな樣々の注意は、言葉は簡潔であるが、ゆつくりと味つて見たい、含蓄に富んだものである。

× × ×

ウェストンに從つて日本に目を轉じて見やう。第二十八章で日本の山岳が取扱はれてゐる。

日本の主山系はその全面積の四分の三を占めることから說きはじめて、樺太から南下する北方山系と支那・臺灣から入つて來る南山系との接合點が日本アルプスであり、その間に噴出する富士山をその代表とする火山系の介在することなど、日本の山岳について一應の概念を與へる。

日本アルプスをロンバルヂア平原から望むアルプ・マリティムやベルガマスク・アルプスと比較する高度と廣さを持つと云つて、日本アルプスを北南に分つて夫々の特徵について、またそこの動植物を述べたのち、轉じて富士山を說明し、その冬期登山のことに及んでゐる。

それから日本の山岳が約四十年以前「外國」の登山家によつて初めて日本の登山界の注目さるゝに至つてから、急速な發展が見られ、リクリエーションとしての登山が戶外運動の最も普遍的なものとなつたことから、登山道の開拓、山小屋の建設、案內人組合の組織、地圖の製作などのことまで述べられてゐる。

轉じて日本山岳會のこと、學校山岳部のこと、「山日記」のことなどを述べ、之を評して probably the most thoroughly complete volume of its kind in existence と書いてゐるが、汗顏の至りである。

それから節を改めて北アルプスの說明に入り、白馬、鹿島槍、針ノ木、立山、劍、燕、槍穗高、乘鞍、御岳、駒に及び、南アルプスでは甲斐駒、北岳、鳳凰、仙丈、赤石にふれてかなり詳細な案內が記されてゐる。その說明ぶりも親切に、アプツーデ

イトに行はれてゐる。

第二十九章でもウェストンの擔當で、初め朝鮮のことが述べてあり、白頭山、金剛山、集仙峯、五峰のことを僅かに一頁のうちに要領よく說明されて居る。ついで臺灣に入つて、新高、次高のことなどかなりに詳細に說明されて居り、臺灣山岳會のことにも言及してゐる。それから南湖大山、中央尖山のことも出てゐる。

× × ×

以上簡單ではあるがヒマラヤと日本との部分的紹介を終つたつもりである。

本著全體から受ける所感を最後に一言して置かう。

全章何れもその道、その道の第一人者によつて書かれたものであるだけに、何れも傑れてゐる。何の一章を一つ取出しても、立派な獨立したものとして成立し得るものばかり。全體の編輯に當つたスペンサーの腕前も肯首し得る。

挿入された寫眞は全部で百三十面といふ多數に上つてゐる。テクニーク、高山植物に關するものを除いては、多く世界の山々の寫眞であり、よく蒐集されてゐる。

そへられてある地圖は、英國、アルプス、歐洲、アフリカ、アジア、ニュジーランド、北・南アメリカ、日本と大體に世界を網羅した九面から成る。しかしこれらの地圖は、恐らくこの本には最もふさはしからぬもの、第一に青色刷のそれは、見た眼には頗る感じが惡い。

ロンズデールの『登山術』は、英語で書かれたこの種の著書として三度目の試みであるといへる。卽ち登山術に關する綜合的著述として第一に擧げられるのは、バドミントン叢書のデントの『登山術』（一八九二年）であり、その次に位するのが、ヤングの『マウンテンクラフト』（一九二〇年）そして第三がこのスペンサーである。この三册を並べて見ると、それ〴〵特色があるが、それ〴〵その時代を遺憾なく反映してゐるのに先づ注目される。デントの著が十九世紀末葉のイギリス登山家の水準を示すものとすれば、ヤングのそれは大戰前後の水準を示すものであり、スペンサー編輯の本著は一九三〇年代の登山術の水準を示すものである。

こゝにヤングを除いて、前後四十年も各々相隔つたデントとスペンサーを比較することは稍〻穩かでないけれども、全體から見てこの二册の編輯振を比較すると、そこにも大きな變化が見られる。第一に目に止まるのは執筆者の顏ぶれの變化である。デントが英國人のみの會員の協力によるものであつたのが、スペンサーでは英國人のみならず、獨、佛、米と各國にある

會員もこれに參じてゐることで、これは一面から見れば英國山岳會の發展を物語ることでもあるけれども、一つの大きな變遷である。

デントに見られる諷刺的な面白いカットを入れたゆとりある編輯ぶり、それから受けるユッタリした氣持は、ロンズデールでは見出されない。どこまでもギッチリ組まれた組方は、明かに近代的なせゝこましさを感ぜざるを得ない。そうした氣持はデントにある C. E. Mathews Recollections of a Mountaineer の如き章が一つも入つてないことからも感ぜられる。それにしてもデントーヤングースペンサーを貫く英國的の傳統は、最近、山のハンドブックとして出版されたDÖAVの『アルピネス・ハンドブフ』CAF・GHM共編の『マニュアル・ダルピニスム』の如くに現はれて居る大陸の傳統と比較するとき、更に一層明確にくみとられる。この大陸の二著は、記述は如何にも科學的で、取扱ふ項目の分類も系統立つてはゐるが、それらから英國式の温か味をくみとることは出來ない。と同時に英國の三種は記述こそ科學的ではあるが、項目の分類などが自由であつて、それからは科學的の冷たさを何等受けない。何か登山史の事でも、簡單にオイソレと調べたいといふ場合には、大陸の方に至つて重寶ではあるけれども、この五種を並べて置いて、ひまつぶしに何氣なくひろひ讀みしたいといふ場合に手の出るのは、英國の本ではないだらうか。

（黒田孝雄）

會報

會務報告

一月定例理事會

一月十五日會事務所

出席　高頭、鳥山、松方、田口、額田、黒田、櫻井、逸見、槇、藤島（以下委任）磯野、三田、飯塚

一、昭和十年度事務分擔左の通り決定せり

會計　鳥山、飯塚

庶務　鳥山、黒田、磯野

編輯　松方、逸見、森田、福島、磯野、黒田

山日記　田口、黒田、藤島、角田（嘱託）

會報　額田、櫻井、逸見

圖書　三田、松方、磯野

調査　田口、三田、松方

二月定例理事會

二月七日會事務所

出席　高頭、小島、冠、槇、藤島、松方、三田、鳥山、飯塚、別宮、田口、櫻井、磯野、森田、逸見、額田、黒田、角田（嘱託）

一、「山日記」編輯報告

一、次回小集會の件

一、圖書基金の件

一、三十周年記念事業

一、「山岳」二十九年三號報告

一、十年度山岳編輯の件

一、大平氏銅像建設に就いて山岳會より寄附の件（小島）

臨時役員總會

三月十四日會事務所

出席　高頭、木暮、小島、藤島、松方、黒田、額田、飯塚、逸見、櫻井、田口、磯野（以下委任）武田、高野、山川、近藤、冠、中村、木村、三枝、鳥山、別宮、福島

役員總會

一、會則（第九條　評議員推薦に關する條項）の變更の件、條文立案の上改めて議すること

一、創立三十周年を記念して左の事業を行ふに決す

山岳圖書展覽會（五月開催）

三十周年記念有志晩餐會（五月開催）

關西に於ける講演會（十月開催の豫定）
記念出版物版行の件
つゞいて

三月定例理事會

一、「山岳」編輯の件
一、「山日記」編輯の件

四月定例理事會

四月十一日於晩翠軒
出席　高野、高頭、小島、松方、鳥山、藤島、磯野、森田、額田、福島、逸見、三田、飯塚、黒田、冠、田口
一、會則第九條立案の件
一、「山岳」編輯に關する件
一、山岳圖書展覽會の件
つゞいて渡佛する評議員藤島敏男氏の送別會を開催す。

五月定例理事會

五月九日會事務所
出席　高頭、木暮、鳥山、飯塚、逸見、森田、田口、松方（以下委任）小島、黒田、三田
一、「山岳」第三十年第一號編輯報告
一、會則第九條改正案の件
一、第六十七回小集會開催の件
一、山岳圖書展覽會に關する、事務並に會計報告
一、「山日記」編輯報告
一、ポリツア氏極地冬山參加勸誘に關する件

六月定例理事會

六月十三日午後六時半會事務所
出席　高頭、小島、槇、松方、額田、森田、逸見、櫻井、田口、黒田
一、會員肖像募集の件
一、「山日記」發行報告
一、「山岳」第一號編輯報告
一、研究懇談會開催報告
五月三十日　高橋理事上京を期とし白頭山登攀につきこの種の會合を開催せり、今後引續き催すことに決す。
一、今三十周年記念事業の一つとして、山岳遭難救難制度の研究をなすことに決す。

昭和九年度會員大會

昭和九年十二月十三日午後七時より　昭和九年度會員大會を開催す。

高頭會長より先づ一場の挨拶あり。次いで松方理事は一般會務報告、「山岳」、「山日記」、山小屋其の他主なる事業報告の後、登山界全般に亙る昭和九年中の簡明なるレビュウを行ひ、鳥山理事の會計報告あつて閉會。

出席者

笈川一　山崎武士　福田嘉四郎　宮田恒雄
伊藤直三郎　岡本勝二　山口清秀　川上謙
中司文夫　松方三郎　鳥山悌成　岩崎京二郎
飛川維之　角田吉夫　宇田川久太郎　大澤照貞
木村一男　長島春雄　木暮理太郎　加藤恭平
長澤佳熊　岡田喜一　伊藤秀五郎　中原繁之助
木村鑛吉　荒井道太郎　三木高岑　津田周二
飯塚篤之助　高橋健治　兒島勘次　茨木猪之吉
吉田禮二　田口一郎　小林太刀夫　本郷常幸
神谷恭　吉田竹志　橋本晋七郎　西川信義
淺原重繼　村尾金二　黒田正夫　齋藤雄三
堺山清太郎　野口末延　鍋倉英夫　園村孝
長沼重　谷重雄　近藤恒雄　逸見眞雄
小林丘　岡田友治郎　足立源一郎　安田登茂次
湯淺巖　廣瀬潔　田邊主計　渡邊漸
中原繁之助　高頭仁兵衛　小島久太　森田勝彦
黒田孝雄

續いて左の講演に移る。

白頭山登攀

兒島勘次氏

木暮氏の紹介にて、今年夏から秋にかけて朝鮮の山旅に過した會員兒島勘次氏の白頭山其の他面白い登山談があつた。更に美麗なる多數の幻燈によつて見なれぬ山の姿は吾々の前に次々と展開せられ興味深い一夜を過した。

第六十五回小集會

二月十四日於三會堂

一、ゲオルク・ジムメルの山岳觀を中心として

會員　辻　荘一氏

松方理事の紹介で辻氏の講演に入る。内容はジムメルの「デイ・アルペン」の大意を紹介しつゝそれに對する氏の見解を約一時間半にわたつて述べられた。ジムメルの論ぜるアルペン的景觀の極端は氷雪地帶にして、その美觀は、感情移入を拒否して絶對的靜、歷史のうちにありて動かざるものを象徴する所にありとせるも、講演者は文化の發達に從ひ、生の概念の擴充が行はれ、從來生を拒否せるものと考へられたるものが、新らし

き生觀念より見れば却つて生に充滿せるものとなることを一般藝術及自然美について例證し、將來においては氷雪地帶においても十分なる生感情の移入が行はれ、特に登山行動による生化が行はるゝことによつて、ジムメルの考を更に發展止揚し得るものなることを示された。（本號辻氏論文參照）

講演後松方、小島兩氏の質疑應答が辻氏との間に行はれた。

參會者

高頭仁兵衛	松方三郎	酒井忠一	石塚秀次郎
飯塚篤之助	福田嘉四郎	茨木猪之吉	黒田孝雄
内田桂一郎	小林丘	湯淺巖	堀田彌一
淺原重繼	伊勢環	泉眞善	櫻井信雄
慈留邊留ジャン	東良三	吉田竹志	田中菅雄
岡本勝二	土屋鎭雄	橋本晋七郎	磯貝藤太郎
小島久太	藤島敏男	田口一郎	逸見眞雄
西川信義	中司文夫	岩崎京二郎	飛川維之
島田巽	廣瀨潔	田邊主計	木村一男
川喜田壯太郎	田代豐彌	外に會員外十二名	

第六十六回小集會（關西）

四月十日午後七時大阪堂ビル清交社

別宮理事司會にて開催左記講演あり。

一、白頭山登山に就て（ポーラーシステムと白頭山）　宮崎武夫氏

一、白頭山登山準備に就て　長谷川清三郎氏

三十周年記念晩餐會

五月四日午後六時より京橋中央亭に於て開かる。圖書展覽會を見て、それからブラ〳〵行ける樣目論んだのが、當つたのか後に記する樣な大盛會であつた。殊に發起人、オリヂナル・メンバーの元氣盛んなる姿、又現役の學生メンバーの山やけした顏を多數見出した事は非常なる喜びであつた。

先づ控室で記念撮影の後、食堂を開き會長、長老を中心に各自任意に席を占め、談笑、隨處に涌く。

食後、高頭會長のトーストにより山岳會の爲めに乾杯の後、松方、鷹野、小島と順次、順送りに前者の指名によつて立ち以下辻村、辻、近藤、別宮、茨木、三田、佐藤とそれ〴〵一說あり、さながら「山岳」の活歷史をひもどくが如き盛觀であつた。殊に、小島さんのチェムバレンの話や、この種會合等に出席される事の極めて稀れと聞及ぶ辻村太郎氏が「博物の友」と云ふ雜誌に、山岳會の廣告があつたので初めてその存在を知

り、入會するに到つたとの話、茨木さんの「私は本當は非常に若いのだが、年寄とばかりつきあつて居たのでこんなに頭がはげた」說等、印象に殘つた興味あるものであつた。

卓を撤してさらに隣室に到り、紫煙の內に大聲、高聲涌き起り十分歡を盡し、終つたのは十時過であつた。

この三十周年にあたり、かくも盛大な山岳會の威容を見、今さらながら力強く感ずると共に、來る可き四十周年、五十周年には、この力を土臺として、さらに一步前進、世界山岳界の何等か意義ある貢獻をなし得べき事を思つたのは筆者のみであつたらうか。終りに、この盛會に槇、藤島兩君が出席出來なかつた事を深く遺憾とする。（磯野記）

出席者

高頭仁兵衞　田口一郎　松方三郎　茨木猪之吉
行方沼東　黑田孝雄　小島久太　大熊保夫
高野鷹藏　磯野計藏　別宮貞俊　辻荘一
岩永信雄　福田嘉四郎　高木菊三郎　近藤茂吉
本多友司　八木橋豐吉　森田勝彥　村田數之亮
木村一男　伊藤直三郎　廣瀨潔　田村正男
石澤五男　岡本信三　村瀨久保　飯塚篤之助
辻村太郎　岩崎京二郎　岡禁德之助　島田巽
田中菅雄　三田幸夫　谷口現吉　小森宮章正
逸見眞雄　山崎和一　早川義郎　石塚秀次郎
神谷恭　三浦新　佐藤文二　田邊主計
木村鑛吉　吉田竹志　以上四十六名

二十周年記念山岳圖書展覽會

本會創立三十周年記念事業の一つである圖書展覽會は五月三日から七日迄五日間日本橋丸善書店樓上で開かれた。

出品は和書三十三部、洋書百八十二部、地圖繪圖類三十四部、他に登山家の肖像、筆蹟等、陳列棚から壁まで山の本と地圖類で全く溢れるばかりの盛況を呈した。場所の制限から一册々々の本をより鄭重に陳べることが出來なかつたこと、地圖を一時に展覽することが出來なかつたことが心殘りであり、且つ會期が僅かに五日間であつたことが憾みではあつたが、前後五日間の間に、少くとも一千名の同好の士の眼を樂しませたと思へば陳列品の蒐集や陳列に盡した係りの勞力は大いに酬われたと云ふ可きであらう。

陳列品が若干の例外を除いては全部會員並に會圖書室の藏品であつたこと、殊に、時間の關係その他から極く少數の會員に出品を乞ふたのにも拘らず、之丈けの多角的で平衡のとれた

山岳圖書を蒐集展覽することが出來たことは特筆すべき事柄であらう。

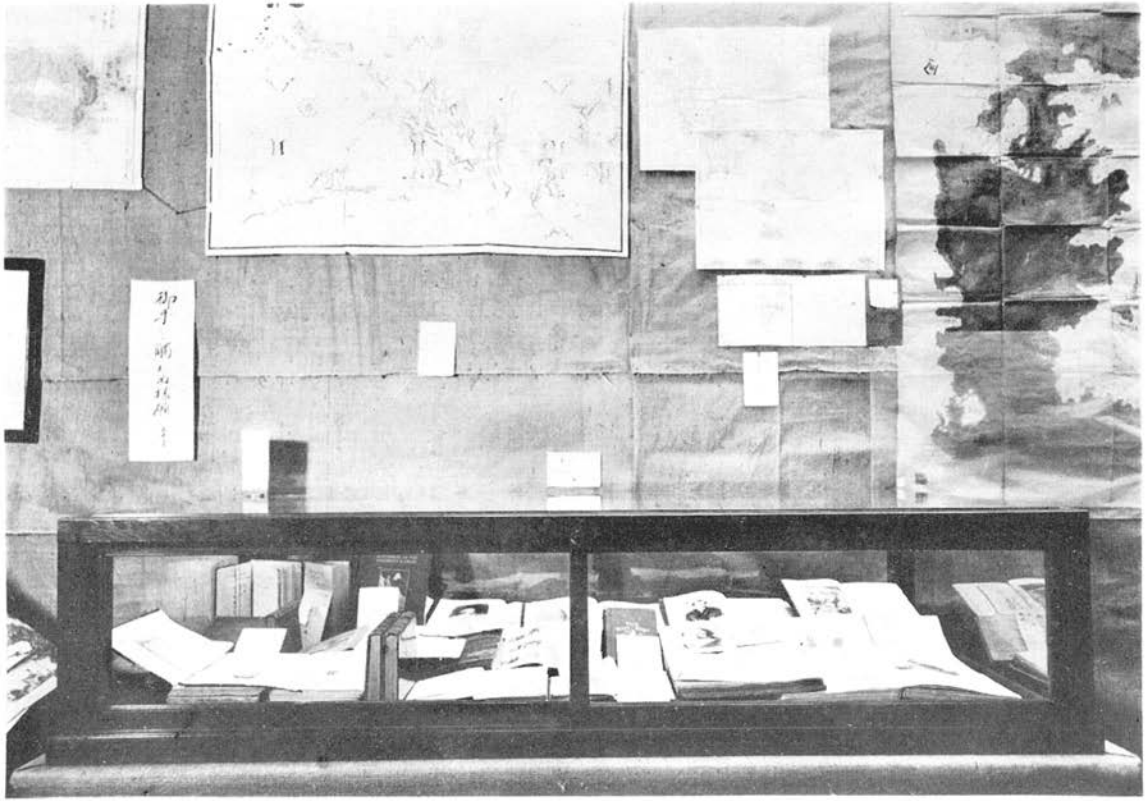
陳列用ケースは上から覗く硝子ケースが五臺、大書棚が三個、小書棚が一個であつた。

この内小書棚が會場の入口に置かれて、日本山岳會の歴史に殊に由緒の深い文獻が此處に祭り込まれた。例へば會公報「山岳」二十余卷、「日本アルプス」四卷、「日本山嶽志」、前後八輯の奮「高山深谷」大揃ひ、ウェストン氏の「日本アルプス」等がそれである。此の他マムの「アルパイン・クラブ・レジスター」三卷、シュトゥーデルの「瑞西アルプス登攀誌」、アルパイン・クラブの「頂、峠及び氷河」三輯等も此處に仲間入りをした。

最初の硝子ケース三個は何れも歐洲アルプスに關聯したもの、第一はコンウェイの「アルプス」豪華版、ブロックドンの「アルプスの峠」二卷、カンニンガムの「アルプスの先驅者」等の大版物の他、クーリッヂ、マムメリー、ウィルス、ティンダル等謂はゞ、英國系の登山家の作で、アルプスを開拓し又登攀した時代を忍ばせるものが多かつた。

次の棚では幾分方面が變つて、ディロール、ドロミーテの物が入り、それにジャヴェル、ゴー、クギー、ウィンクラー等の佛獨墺の登攀者の活動が陳列品を通して物語られて居たが、中央に壁につけて置かれた大きい平棚は陳列品全部がモン・ブラン、マッターホルンに集中されて居た。勿論ドゥ・ソシュール、ウィムパーの作が先づ出るのは當然、ギード・レイの諸著も此處にはなくてならない。ハドソンの「意思ある所に途あり」等と並んでアルバート・スミスの「モン・ブラン」が出て居るのも面白い。エヂプト會館の有名なモン・ブラン・パノラマの筋書ーウェストン氏より本會への寄贈品ーなどどんな古書の目錄にも出て來ない珍品もあれば、山の本としてはなくてならぬラスキンの「近世畫家論」の初版も、ラスキン自署入りの寫眞と一緒に出て居た。ウィムパーの「アルプス登攀記」の決定版も堂々たる自署入りの品。何れにしてもかうやつて見ると、登攀史上のアルプス黄金時代は文獻の上でも黄金時代の觀がある。

此の棚と向ひ合つた壁には額入りでシュラーギントワイトのエヴェレストの繪が懸つてゐて、そゞろに垂涎おく能はざるものがあるが、その下のベンチに列んだのは山岳圖書道の餓鬼仲間、晝食時に抜け出した事故、會社に歸らねばならず、さればとて去るにも去り難しといつた顔ばかり、やれ何の太郎兵衛がウィムパーの自署本を持つて居るのは甚だ怪しからぬとか、某の半兵衛所藏の豪華本は身分不相應だのと、何れも自分のこ



山岳圖書展覽會場にて（一）

山岳図書展覧会場にて（二）

とは棚にあげて喧しきばかり。

ベンチの次の硝子ケースは書翰と筆蹟、それに珍中の珍とも稱すべきマルテルの著と「立山登臨圖記」が同居。書翰にはフムボルト、ティンダル、プライス、ウィムパー、フォーブス、ラスキン等々アルプスとは切つても切れぬ人々の筆蹟、惡筆か達筆かは判らぬが相當讀みにくいのもあるのに氣を強くする輩もある。遺稿の白眉は辻村氏の「續スウィス日記」の原稿、湯本の山出しのデブリの中から發見されたものである。故人を記念する爲めに心を込めて造られた裝訂、見返し等見てゐれば限りがない。その隣りが立山で逝つた板倉氏、ザラ紙ノートに認めた記錄などが故人の風格を物語る。その次に列んだ故大島氏の原稿一束、何れも故人の筆まめさとその道への精進を語つて餘りあるもの、どれも之れも見飽きぬものばかりだが、プルース將軍のヒマラヤ日誌に至つては正に見る者をして唖然たらしめる。どうして之をフーラーから貰つたものか、相手が相當の山男故、眞逆脊したものでもあるまいが、驚くに耐へたことである。アルプスでは山案内をつれて歩くと、そのあとで登攀記錄をその山案内の手帳に書込んでやるのが慣しだが、プルースの手記は、同じ目的でクル、ラホールを歩いた時の日記を書いて當時の山案内フーラーに與へたもの、此の品は三田氏の好意により展覽會を機會に今後會で保管することゝなつた。

和書ケースにはさすがに今迄の横文字の世界とはまるで違つた感じが溢れてゐる。旁々稀覯書に重點を置いた此の箱には古い道中記等もあつたが、和書については何れにしても將來再び日本山岳會の名に於いて大々的の展覽會を開催しなければなるまい。然し何れにしても將來への前菜としては此の一箱の蒐集も充分食慾增進劑としての役目を果して居る。

かうやつてあちらこちらと、硝子越しに、押すな押すなと列んだ名著奇書を順歷した擧句、突當りの大書棚にぶつかると、之れは大ヒマラヤの棚である。エヴェレスト登攀記四卷は勿論、アブルヂ公の「カラコーラム」、讀む讀まぬは別としてイタリア語の豪華版など目映いばかり、天井知らずに値段の上つて行くフレッシフィールドの「カンチェンジャンガ」が眞中に落着き拂つた具合なども清々しい。

隣りの大書棚は一轉してアフリカ大陸と南北アメリカ、然し上段中央にはウェストン氏の肖像と彼の著書三册を初め日本關係の書物が列ぶ、下の方はフレッシフィールドのコーカサスの歷史的著述の豪華版二册、同じ「セイント・エライアス」でも此の棚にのさばつた品は、リボンで末端をしばるといふ念入りの豪華版、アフリカはルーウェンゾリ、キリマンジャロ登攀

記の數々に至つては、平素は一寸その姿を拜むことも出來ない丈けに後光が指す想ひがする。

最後のケースには丸善の虎の子、「アルパイン・ジャーナル」が列び、會からは登山技術關係のもの、文學美術、傳記、各國山岳會の會報等を列べた。

硝子棚の中の品がさうであるやうに壁面に揭げられた品もとりぐ〳〵に興味深いものばかり、地圖などはその一つ〳〵が恐らくはその時代の測量技術、地理常識を反映する貴重品である。アガシ先生の有名なオーベラール氷河の岩小屋の圖等もその中に混つてかゝつてゐるが、東學黨の亂に馳せ參じた磯林大尉の所藏したといふ「東國一統全圖」等も面白い。その道の人から見れば地圖作製技術からしても非常に興味のあるものであるとか。繪圖では矢張り富士山、立山が多いが、富士山では玉蘭齋貞秀の紙の模型が何と云つても、彼一流の地形に對する深い關心がよく出て居て面白い。

一枚ざりの地圖や繪圖が之程迄面白いものとは思はなかつたと、白狀した人が居るか居ないかは知らないが、少くとも本報告者の如きは一枚の地圖の持つ含蓄の深さに全く驚き入つた一人であつた。地圖の歷史などに一層明るければ必ず一枚の地圖を眺めて何日かを樂しむことが出來るのであらう等と考へて、只管に自分の無智を嘆じたことであつた。

終りに、展覽會の準備から後始末まで日夜、一方ならぬ好意と助力を寄せられた、會場主の丸善書店並に店員の方々に、會としての感謝の意を表する。

（S・M）

日本山岳會々則（昭和十年七月改正）

第一條　本會ヲ日本山岳會（Japanese Alpine Club）ト名ツク

第二條　本會ハ山岳ニ關スル科學、文學、藝術其他一切ヲ研究シ以テ健全ナル登山氣風ノ振興ヲ期シ且ツ會員相互ノ連絡親睦ヲ圖ルヲ目的トス

第三條　本會ハ前條ニ揭ケタル目的ヲ達スルタメ左ノ事業ヲ爲ス

(1)　機關雜誌「山岳」ノ發行、又時宜ニ依リ臨時又ハ定時ノ出版物刊行

(2)　其他登山者ノ爲メ適宜ノ事業

第四條　本會ハ毎年大會及小集會ヲ開ク

第五條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長一名、副會長若干名、評議員十五名以內、理事十五名、監事二名以內

第六條　會長ハ本會ヲ代表ス　但シ會長ニ事故アル場合ハ副會長之ニ代ル

第七條　會長及副會長ハ役員總會ニ於テ役員ノ內ヨリ之ヲ推薦ス、會長及副會長ノ任期ハ三ケ年トス　但シ

役員トシテ任期滿了シタル場合ハ會長副會長トシテノ任期滿了前ト雖モ交替スルコトアルヘシ

第八條　評議員ハ本會ノ重要會務ヲ審議ス

第九條　評議員ハ元役員タリシ會員中コリ評議員會ノ推薦セル者ヲ以テ之ニ任ス　但シ必要ニ應シ本會々員ニシテ前項ニ該當セサル者ト雖モ評議員會特ニ之ヲ推薦スル時ハ評議員タルコトヲ得

評議員ノ任期ハ三年トス　但シ重任ヲ妨ケス

第十條　評議員ハ互選ヲ以テ常任評議員若干名ヲ選任ス

第十一條　常任評議員ハ評議員會ヲ代表シテ會務ニ參與ス其任期ハ三年トス

第十二條　理事ハ別ニ定ムル細則ニ依リ候補者中コリ會員ノ投票ヲ以テ之ヲ選任ス其任期ハ三年トシ、理事定員數ノ三分ノ一ヲ毎年改選スルモノトス

但シ引續キ重任スルコトヲ得ス

第十三條　監事ハ評議員會ニ於テ會員中コリ之ヲ推薦ス其任期ハ三年トス　但シ重任ヲ妨ケス

第十四條　役員總會ハ評議員、理事ヲ以テ組織ス

第十五條　役員總會、評議員會及理事會ノ議長ハ會長之ニ當ル　但シ會長ニ差支アルトキハ副會長之ニ代ル

第十六條　役員ハ任期滿了後ト雖モ後任者ノ就任スル迄ハ其任務ヲ行フモノトス

役員ニ缺員ヲ生シタルトキハ前各條ニ依リ夫々之ヲ補充ス　補缺役員ノ任期ハ前任者ノ殘任期トス

前項ノ場合ニ於テ特ニ補缺ヲ必要トセサルトキハ次ノ改選期迄之ヲ行ハサルコトヲ得

第十七條　役員總會、評議員會及理事會ハ會長之ヲ招集ス

第十八條　役員總會ハ役員三分ノ一以上評議員會ハ評議員三分ノ一以上理事會ハ理事三分ノ一以上出席スルニ非レハ議決ヲナスコトヲ得ス

第十九條　役員總會、評議員會及理事會ノ議決ハ出席者ノ過半數ヲ以テ之ヲ定ム可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第二十條　役員ハ總テ無報酬トス　但シ其職務ノタメ必要ナル實費及旅費ヲ給與スルコトアル可シ

第二十一條　本會ハ會員ヲ分チ左ノ三種トス

一、通常會員　會費年額六圓ヲ納ムル者

二、終身會員　一時金百圓以上ヲ納メタル者

三、名譽會員　役員會ニ於テ推薦シタル者

右ノ二、三ニ該當スル會員ハ爾後會員籍ヲ有スル間ハ會費納付ノ義務ナキモノトス

第二十二條　本會々員タラントスル者ハ會員二名ノ紹介ヲ以テ申込ムモノトス、入會許可ノ通知アリタルトキハ入會金五圓ニ會費ヲ添ヘ拂込ムモノトス　入會許可ノ通知アリタル後一ケ月以内ニ右ノ手續ヲナササル者ハ入會ノ許可ヲ取消サル可シ

第二十三條　入會ノ許否ハ理事會ノ決議ニ依ルモノトス

第二十四條　本會會則ノ變更ハ役員總會ノ決議ヲ以テ之ヲ定ム

第二十五條　前條ノ決議ハ役員三分ノ二以上出席シ其出席者三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

第二十六條　本會ハ適當ト認ムル地方ニ支部ヲ設クルコトヲ得支部規則ハ役員總會ニ於テ之ヲ定ム

細則

一、會費其他ニ關スルモノ

（イ）會費ハ毎年二月末日迄ニ納付スヘキモノトス

（ロ）毎年一月一日ヨリ八月三十一日迄ノ入會者ニ限リ其年度ノ會費ヲ二ケ月間延納スルコトヲ得　但シ此適用ヲ受ケントスル者ハ其旨入會申込ト同時ニ申出ス可シ

（ハ）毎年九月一日以後ノ入會者ニ對シテハ其年度ノ會費ヲ免除ス

（ニ）本會ハ會員ニ會員章ヲ交付ス會員章ヲ紛失シタルモノハ實費ヲ以テ再交付ヲ受クルコトヲ得

（ホ）本會ハ機關雜誌「山岳」ヲ毎年發行ン毎號一部ヲ本會會員ニ頒布ス　但シ毎年九月一日以後ノ入會者ニハ頒布セス

（ヘ）毎年九月一日以後ノ入會者カ其年度ノ雜誌「山岳」ノ頒布ヲ希望スルトキハ更ニ一ケ年分ノ雜誌代ヲ納ムルコトヲ要ス

（ト）本會會員ハ別ニ定ムル所ニ依リ本會所藏ノ圖書ヲ閲覽スルコトヲ得

（チ）會員ニシテ退會ヲ欲スルトキハ其旨事務所ニ必ス書面ヲ以テ申出ツヘシ

（リ）會員ニシテ本會ノ體面ヲ毀損シ又ハ會費納付ノ義務ヲ怠リタル者ハ理事會ノ決議ニ依リ除名ス

（ヌ）本會ハ既納ノ金品ヲ一切返付セス

（ル）團體加入者ノ代表者交付シタル場合ニハ新舊兩代表者ノ連署ヲ以テ代表者變更届ヲ提出スヘシ

（ヲ）本會集會室及圖書室ヲ東京市芝區琴平町一番地不二屋ビル三階三〇七號室ニ置ク

（ワ）海外旅行其他ノ理由ニヨリ十二ケ月以上、三十六ケ月以下ノ間不在トナル場合ハ、會員ハ其ノ理由、不在期間等ヲ詳記シ、取扱手數料金貳圓ヲ添ヘ事務所ニ届出ツル

事ニヨリテ、不在會員ノ取扱ヲ受クル事ヲ得、此場合ニハ不在期間ハ會員章ヲ返納スルニ及ハス、會費納付ノ義務ナキモ本會ノ出版物ノ頒布ヲ受クル事ヲ得ス

二、理事選擧ニ關スルモノ

（イ）理事定員十五名ノ內三名ハ之ヲ關西在住ノ會員中ヨリ選任ス

（ロ）役員總會ハ理事改選又ハ缺員補充ノ際ニ會員中ヨリ候補者ヲ推薦スヘキモノトス

（ハ）會員中十名以上ノ推薦ニヨリ會員中ヨリ一名ノ候補者ヲ擧クルコトヲ得　但シ一候補者ヲ推薦シタルモノハ他ノ候補者ヲ推薦スルコトヲ得ス

（ニ）理事候補者タルヘキモノハ入會後滿三ケ年ヲ經タルコトヲ要ス

（ホ）團體ノ代表者タル資格ニ於テ會員タルモノハ候補者タルコトヲ得ス

（ヘ）候補者ノ氏名ハ豫メ本會ヨリ全會員ニ通知シ投票ヲ求ムルモノトス

（ト）候補者ノ數カ改選又ハ補充セラルヘキ定員ノ數ヲ超過セサルトキハ投票ヲ要セサルモノトス

（チ）改選ノ際五名ノ內一名ハ關西在住ノ理事トス

（リ）投票ハ記名連記投票トス

關西支部規則（昭和十年七月）

第一條　日本山岳會關西支部ハ日本山岳會々則第二十六條ノ規定ニヨリ左ノ區域內ニ在住スル會員ヲ以テ構成ス

大阪府、京都府、兵庫縣、滋賀縣、三重縣、奈良縣、和歌山縣

第二條　支部ニ委員拾名以內ヲ置ク

第三條　委員ハ支部區域在住會員中ヨリ會長之ヲ依囑シ其任期ハ貳ケ年トス　但シ重任ヲ妨ケス

第四條　支部事務ハ本會關西在住理事之ヲ擔任シ委員之ヲ輔佐ス

第五條　支部經費ハ本會一般會計ノ一部ヲ以テ之ニ充ツ、尙支部ハ必要ニ應シ有志ノ寄附ヲ仰クコトヲ得

第六條　支部ハ每年一回支部總會ヲ開キ隨時小集會ヲ催ス

第七條　支部規則ノ變更ハ設員總會ノ決議ヲ以テ之ヲ定ム

「山岳」投稿規定

一、投稿は何人も自由とす。日本山岳會員たると然らざるとを問はず。
一、原稿の採否は理事會に於て決定す。
一、原稿は返却せざるものとす。
一、別刷所要の向はその旨原稿に朱記せられたし、その費用は筆者の負擔とす。
一、原稿にはその梗概を付せられたし。
一、紀行には概念圖を添付せられたし。
一、寫眞は光澤印畫紙に燒付けられ度、裏面或は別紙に說明記入を乞ふ。
一、校正は編輯者に一任せられたし。
一、地名及び外國語は特に明確に書かれ度、地名には振假名を附せられ度し。

原稿蒐集所
東京市芝區琴平町一、不二屋ビル、三〇七號室
日本山岳會編輯所

原稿用紙所要の向は前記編輯所宛て申込みあり度し。

昭和十年七月二十五日印刷
昭和十年七月三十一日發行
〔定價金貳圓五拾錢〕

著作權所有

發行所　日本山岳會
東京市芝區琴平町一、不二屋ビル內
電話芝一六四九番
振替口座東京四八二九番

編輯兼發行者　黑田孝雄
東京市神田區神保町一ノ三四

印刷者　高田壬午郎
東京市神保町

發賣所　東京堂
東京市牛込區富久町一四

廣告取扱所　進恒社
東京市牛込區市谷仲ノ町二八

株式會社開明堂東京支店印刷

日本山岳會編（大改訂）

山日記

（自昭和十年六月一日 至昭和十一年五月卅一日）

一九三五年版

菊半截　表紙裏袋附

定價一圓　送料四錢

【内容】

暦・日記欄　登山經歷欄
自由日記欄　住所欄
登山の注意　帝室林野局・營林署所在地
遭難信號　日程表
冬期登山　全國登山團體一覽
服裝・用具・食料登山用品表　各國主要山岳會一覽
登山用食料品目錄　山岳寫眞要項
應急手當及び登山衛生　地圖使用上の注意
本邦主要山岳高度表　十種雲級表
本邦主要峠高度表　星圖
外國の高山百座　地名解讀
各國主要峠高度表　日本山岳會々則
山小屋　寒暖計比較表
高山植物採取規定　度量衡
山案内

山岳圖書展覽會目錄別册

定價　並製金五十錢也（四錢送料）
上製金壹圓也

「山岳」バックナンバー定價

Vol.	No.	定價	送料	Vol.	No.	定價	送料
IV	1	2.00	6	IX	3	70	8
V	2	1.00	8	XIV	2	50	6
〃	3	1.00	〃	〃	3	50	〃
VI	1	1.00	〃	XV	2	50	〃
〃	2	70	〃	〃	3	50	〃
〃	3	70	〃	XVI	2	50	8
VII	1	1.00	〃	〃	3a	50	〃
〃	2	1.00	〃	XVII	3	50	6
〃	3	1.00	〃	〃	3	50	〃
VIII	1	70	〃	〃	1	50	〃
〃	2	70	〃	〃	2	55	〃
〃	3	70	〃	XXI	2b	50	8
IX	1	70	〃	XXII	1c	50	〃
〃	2	70	〃	XXIII	3d	50	〃

a 奥上州號。 b 黒部號。 c 第二奥羽號。 d 臺灣號。

日本山岳會

東京市芝區琴平町一番地五號
不二屋ビル三〇七號

振替東京四八二九番
電話芝(43)一六四九番

25. 越中國立山禪定並略御緣起名所附圖

立山芦峅寺藏板　大版木板圖

26. 越中國立山禪定名所附圖別當岩峅寺

大版木板圖

其　他

伊能忠敬

27. 山城、大和、伊賀

伊能忠敬所製大圖　第百卅四　文化二年 (1805)

28. 攝津國繪圖

肉筆　德川初期　(慶長國繪圖?)

29. 伯耆大山寺略繪圖

木板　略然縮寫

30. 東國一統全圖

掛幅　朝鮮製布地肉筆

『明治十六年一月朝鮮國京城ニ於テ之ヲ求ム　礒林大尉、武田御用掛』と朱書あり。

31. 地球輿地全圖

掛幅　文化庚午七年 (1810) 春　詠歸齋主人校修　溫其軒藏版　江都彫工江川八左衞門

32. 地圖彩色

明治六年 (1873) 新鐫　陸軍文庫　佛國敎師 如爾檀閣、大助敎 小菅智淵、八等出仕 川上寬、中助敎 原胤親 製

我國に於ける最初の陸軍洋式地圖の圖式 (佛蘭式)、銅版、彩色。

33. 木曾御嶽山　雷鳥古圖

掛幅板物

御鳥羽院御製『白山の松の木陰にやすらひて云々』を『御嶽の松のこかげに』と恣に改竄して利用せるがをかし。

34. 御符 (狼に關する)

武州三峰神社　狼の狛犬

甲州山梨岡神社　狼

金峰山火盜猪鹿退除符　狼

信・飛・越 三 國

15. 信濃國名所古跡繪圖

着色大版繪圖、信濃國名所古跡繪圖『禁賣買』とあり年代不明。

16. 飛 驒 國 中 全 圖

肉筆着色、御嶽、乘鞍、鎗、穗高、笠、白山等國境山塊主峯の眺見圖高山を中心に取圍む。

法橋玉隆圖

17. 信州淺間山略繪圖

江戸時代木板　別當所宗旨眞言御室御所、御寺放所、眞樂寺禪定院、松岡定孝刻

淺間山頂は海門禪定、火車岳、淨土平等の名あり『每年四月八日山開ニテ八月八日マデ男女サンケイ多シ』と云へば淺間は女人禁制には非ざりし如し。

18. 信 濃 國 駒 嶽 略 圖

木板、明治中期に發行のものか木曾駒の舊圖は割合に少し。

武 井　　磨

19. 信州戸隱山惣略圖

戸隱村 藤井筑摩　明治三十年 (1897)

袋紙には『全圖』本文には『惣略圖』とあり、高妻祠のところを海面より實測七千三百二十尺と記せり。

20. 信 州 御 嶽 山 圖 面

木板　王瀧村里宮小瀨河出板

21. 木 曾 御 嶽 山 眞 圖

着色縱長木板 （明治早期？）

22. 木 曾 御 嶽 山 繪 圖

木板大版　江戸時代　從福島驛御嶽山頂迄行程十里餘略圖王瀧口限

23. 信州木曾御嶽山繪圖

明治初期　神主黒澤村武居若狹守源定矩とあり

24. 越 中 國 立 山 之 圖

彩色木板小圖

關東及東北地方

7. 羽州湯殿月山羽黑山御參詣案內記

『上總國周集郡中富邑施主行人中奉納之』とあり、施印本、角印御城下、丸印御參詣所、△印御關所。案內記と稱すれど繪圖を入れざる文字圖面なり。

8. 磐梯山噴火顚末

東京 依田周左衞門　明治二十一年 (1888) 七月廿五日

粗惡なる木版刷にて說明の辭を添ゆ、噴火後、十日以內に出版したるものらしく江戶時代の所謂瓦板（カハラバン）に類似のものなり。當時は描速を尊びたるにしても噴火後需にかき板に起し解說を附するに十日を費やししものと見ゆ、定價三錢と記す。

甲・駿・遠 三 國

9. 甲 斐 國 古 圖

着色大版、年代不明なるも文字稚拙、描圖疎野なるが中に風趣あり江戶初期より遲からざるべし。

10. 駿 遠 參 全 圖

一折、大日本全圖の內、井上氏藏版とあり。富士山絕頂の解說に村山口九合目より左りの方の眺望を詳說せり、東台麓人光親記、製本所馬喰町四丁目吉田屋文三郎。年代未詳、蓋し江戶末期ならむ。

11. 富士山彩色木板圖

江戶時代　境道院日壽の題詞あり、施主飯塚氏、宗門書堂村上勘兵衞、畵工各務氏元諸、上部に富士山絕頂之圖を添ゆ、勸請諸尊の名をしるせるは今の人には珍らし、須走口を主とす。日蓮宗徒のための施印本。

12. 富士山東口須走

木板　東口御師行事板、東都伯樂街尙左堂窪俊滿模寫

浮世繪師の模寫は珍重すべし寬政頃の圖板が惜しい哉板木磨滅して鮮明ならず。

麗山白石圖

13. 富士山表口眞面之圖

富士山別當村山與法寺三坊藏板

五雲亭橋本玉蘭齋貞秀案

14. 富士山紙製模型

嘉永戊申元年 (1848)

北　海　道

1. 蝦　夷　全　圖

筆寫 一折　元祿時代 (1688–1703) か

林　子平 圖

2. 蝦　夷　國　全　圖

木板 一折　日本橋北室町三丁目 須原屋市兵衛梓　天明五年 (1785)

喜多野省吾、源高知著

3. 蝦　夷　地　全　圖

木板 一折　嘉永七年甲寅 (1854)

松浦竹四郎

4. 東西蝦夷山川地理取調圖

木板 廿八折　著者藏版　安政六年巳未 (1859)

東西蝦夷山川地理取調圖廿六折の他に、凡例『番合之圖、案內土人名籍』(首) 及び『地名、境界、場所、里數、人別、泊家、山川、本名、名所』(尾) の二折を添ゆ。

阿部　弘撰

5. 北海道國郡全圖

一折　開拓使藏板　明治二年 (1869)

伊能、高橋、近藤諸家の測量並に魯人クルウセンステル測驗書その他一二洋書に據るとある。

邊士來曼外十四名

6. 日本蝦夷地質要略之圖

銅版　開拓使刊行　明治九年 (1876) 五月

我國所製最初の地質圖、地質學長 邊士來曼 (スミス・ライマン) 之を製し、地質補助、顯士門老、山內德、秋山美丸、稻垣徹、桑田知明、三澤思褒、高橋讓三、賀田貞一、坂市太郎、齋藤武治、島田純一、山際永吾、前田精明、西山正吾之を助くとあり。尺度二百萬分之一。

181. Young, Geoffery Winthrop.

Mountain craft.

22 × 14: pp. xvii, 603. London, Methuen. 1920.

デント編纂の『登山術』(1892) 以來の綜合的登山技術書である。前世紀末から今世紀にかけては登山術の上にも著しい進歩もあつたし、又、登山家の海外に勇飛する數も增加し範圍も著しく廣まつてゐる。從つてデント編纂の時代に比して內容には自ら非常な變化がなければならない。ヤングの著は此の三十年の進歩を表現する意味に於いて頗る興味が深いが、登山術、或は寧ろ、登山道にかけてヤングの述べる所は誠に含蓄に富み正に再讀三讀に値するものが多い。技術的方面は大部分ヤング自身擔當し、海外に於ける登攀に關してはレバーン、フインチ、マム、コンウエイ、ウオラストン、ロングスタフ等夫々の第一流の人物が筆を執つてゐる。

182. Zsigmondy, Emil.

Die Gefahren der Alpen. Erfahrungen und Ratschläge von Emil Zsigmondy. Völlig neu bearbeitet und ergänzt von W. Paulke.

Fünfte Auf. 20.5 × 14: pp. xv, 367. Wien, Edlinger.

登山の危險を系統的に說明し之の豫防を論じたものである。エミール・ツイグモンデイーの原著によりパウルケが書改めたもので、此の種著述の先驅者であり又古典でもある。本書は1922年更にパウルケによつて書改められミユンヘン、ローテル書店から重版せられ今日に及んで居る。

スを背景とする山小屋一つ一つの美しい寫眞は寫眞としても優れたものが多く、山小屋の設計者にとつても好箇の材料である。

177. Sektion Uto S.A.C.

Ratgeber für Bergsteiger.

Zweite verbesserte und vermehrte Auglage.

20 × 13: pp. xi, 524. Zürich, Füssli. 1920.

瑞西山岳會ツユーリヒ支部編纂の『登山家提要』。登山技術は固より、衛生、準備等から氣象、地質、植物等をも含み、卷頭には瑞西登山史の一章がある。ルトゲルスの雪崩の章や、ハイムの地質論等は殆んど歷史的文献とされて居るが、權威もあり然も手頃で編纂方法も懇切を極めてゐる。

178. Spencer, Sydney.

Mountaineering (The Lonsdale Library).

21.5 × 14: pp. 383. London, Seeley Service. 1934.

デントの『登山術』ヤングの同種の編纂につぐものと見ることが出來る。デントの著が十九世紀末葉のイギリス登山家の水準を示すものとすれば、ヤングのそれは大戰前後の水準を示すものであり、スペンサー編輯の本著は更に下つて1930年代の登山術の水準を現はすものと云ふことが出來る。前二著が僅の例外を除いてはさうであつた如く本著も英國山岳會會員を動員して作られたものであるが、ヤング、ウイルソン、ミード等の他に、ヘーク、ブランシエ、リクマース、ソーリントン等區籍を異にする會員の名を見出すことは興味が深い。本の仕組も前二著を延長擴大したものと見る可く、但し地方別の山岳解說が全體の半以上を占めてゐることが注目を惹く。日本內地及び朝鮮の二章がウエストンの筆によつて附加されたことも一つの新しい點である。

179. Whymper, Edward.

How to use the aneroid barometer.

22 × 15.5: pp. 61. London, Murray. 1891.

ウイムパーのアンデス行の目的の一つは水銀バロメーターとアネロイドとの比較であつた。本書の第一章はその結果が論ぜられてあり、第二章は實驗的の比較であり、以下はアネロイドによる高度の測定についての考察である。

180. Wilson, Claude.

Mountaineering, with illustrations by Ellis Carr.

17 × 11.5: pp. vi, 208. London, Bell. 1893.

オール・イングランド叢書なるスポーツ叢書の一冊として書かれたもの徹頭徹尾實用を主として叙述された所に本書の値打がある。後のアルパイン・クラブの會長且つは當年英國山岳界のガイドレス登攀者達の先頭に立つてアルプスを縱橫したウイルソンの書として見れば特別の興味が深い。

172. Kruck, G.

Die Klubhütten der Sektion Uto, S.A.C.

23 × 14.5: p.p. 111. Zürich. Sek. Uto, S.A.C. 1922.

スウイス山岳會ウトー（チューリヒ）支部所屬の倶樂部小屋を寫眞並に設計圖により紹介したもの。附錄として十一枚の設計圖があるだけにこの本は小さい乍らS.A.C.の山小屋帖よりも寧ろ我々には一層便利な參考資料である。

173. Kurz, Marcel.

Alpinisme hivernal. Le skieur dans les Alpes. Préface de M. Édouard Sauvage.

22.5 × 14.5: pp. xvi, 393. Paris, Payot. 1925.

アルプスの冬期登山にかけては一方の雄である著者が、深き經驗を基として書いた冬期登山に關する解說書。我國に於ても嘗て故大島亮吉氏によつてその一部が紹介された。美しき寫眞を挿む。

174. Raeburn, Harold.

Mountaineering Art.

16 × 13: pp. xii, 274. London, Unwin. 1920.

アルプス、カウカサス、ヒマラヤに廣範圍の足跡を殘した著者が、多年の體驗に基いて組述した技術書であるが、この種の書に有りがちな無味乾燥さを感じない。

175. Royal Geographical Society.

Hints to travelers, scientific and general. Tenth edition, revised and corrected.

17 × 12: Vol I. pp. xv, 470. Surveying and practical astronomy. Vol. II. pp. vii, 318. Meterology, photography, geology, natural history, anthropology, industry and commerce, archaeology, medical, etc. London, The Royal Geographical Society. 1921.

英國地學協會の權威と知識とを網羅して編纂された旅行者のための心得帳である。但し此の書での『旅行者』とは寧ろ探檢家の意に近い。考古學、人類學、地質學、測量術、天文、氣象等の項を網羅して居るのは之が爲めである。ミル博士、ガーウツド敎授、ダツクウオース博士、サー・ジヨン・ケルテイー、ホーガルス博士、フレツシフイールド等英國地學協會をして今日あらしめたのに貢獻する所多かつた諸權威が夫々の項目を分擔してゐる。

176. Schweizer Alpen-club.

Clubhütten des S.A.C.

20.5 × 29: Lausanne, S.A.C. 1928.

スウイス山岳會本部編纂にかかる。同山岳會所屬の山小屋のアルバムであり、總數百數十に及ぶ山小屋の位置並に小屋の收容人員その他要綱も記されてゐる。アルプ

VII. 技術その他

168. Annonymous.

The roof-climber's guide to St. John's.

21 × 14: pp. 31. Cambridge, Metcalfe. 1921.

嚴格な登山書と云ふことは出來ないが、登山文献界の特異の存在として知られたものである。ケムブリッヂ大學のセイント・ジョンズ・コレッヂの屋根登攀のガイドブックであり、挿繪入りで懇切丁寧を極めたもの。英國登山界にケムブリッヂ派が活躍してゐるのは一說には多數有能の士が此の搖籃で育てられるからだとのこと。

169. Club Alpin Français.

Manuel d'alpinisme.

22.5 × 14.5: Tom I. Partie scientifique, pp. viii, 393; Tom II. Partie technique, pp. 296. Chambéry, Dardel. 1934.

フランス山岳會が G.H.M.（グループ・ドウ・オート・モンターニュ）と共同編纂した登山入門書。科學と技術との二篇に分たれてゐる。獨墺山岳會のハントブツフ二卷と對比すれば編輯ぶりも異り自ら特色が出て居て興味が深い。

170. Dent, C. T.

Mountaineering, (The Badminton Library) with contributions by W. M. Conway, D. W. Freshfield, C. E. Mathews, C. Pilkington, Sir F. Pollock, H. G. Willink, and an introduction by Mr. Justice Wills.

Large paper edition. 24.5 × 19: pp. xxii, 481. London, Longmans, Green. 1892.

登山術に關する最初の綜合的著述である。登山技術に關する各章の他に歷史的記述もある。登山術の發達した今日記述の或る物は過去のものとなつてゐるにも拘らず、幾度び讀返してもその都度得る所少くない。堂々たる古典書と云ふ可きであらう。挿繪やカット等に對する打込み方にも十九世紀ならではと思はれる餘裕もあり、謂はば座右愛玩の書に列すべきもの。大判本は限定二百五十部印刷されたが、普及版は八折版で刊行され頗る人口に膾炙した。

171. Deutscher und Oeterreichischer Alpenvein.

Alpines Handbuch.

26 × 18: Bd. I. pp. 495; Bd. II. pp. 422. Leipzig, Brockhaus. 1931.

獨墺山岳會の有する各專門家と資料とによつて編輯された山岳の手引ではあるが、宛然山岳エンサイクロペデイアの觀がある。

163. Rey, Guido.

Aube alpine. Traduit de l'italien par Émile Caillard. Dessins de André Jacques.

23 × 18: pp. 59. Chambéry, Dardel. 1925.

後年偉大なる登山家として謳われた著者が、その幼かりし日、アルプスの麓に於ける生ひ立ちを追想した隨筆風のもの。簡素なペン畫を挿む。

164. Ruskin, John.

Modern painters. Vol. IV., containing Part V. Of mountain beauty.

26 × 18: pp. xii, 411. London, Smith, Elder. 1856.

ラスキンの『近代畫家論』第四卷は山岳美論に全章を捧げ、ラスキンが崇拜せる畫家タアナアの畫的地形及び光線、藝術の秘奥より一般(但しアルプスを主とす)の山岳論に移り、山の材料、山の彫刻、山の形態等、精緻に論辯記述、全世界の山岳觀を一變せる古典的名著たり。原本なる第一版本卷にはラスキン自作のエッチング又自身の描寫せる山岳、溪谷畫等をラスキン監督の下に專門版畫家に彫摺せしめ之を挿繪とせるものなるが、文章と繪畫と相俟つて第十九世紀英國文學美術に亘れる不朽なる傑作と云ふも溢美にあらざるべし。

165. Young, G. W.

Wind and hill, poems.

18 × 12.5: pp. viii, 106. London, Smith, Elder. 1909.

ヤングの詩集。必ずしも山のみを詠じたものではない。然し山を愛し自然を愛し、自由と原始に憧れる著者の心は至る所に見出される。

166. ———

April and rain, poems.

19 × 13: pp. 32. London, Sidgwick & Jackson. 1923.

ヤングの詩集。『四月の歌』『山のユーモア』『雨』の三部からなり三十三の詩を集錄してある。

167. Wollaston, Mary.

Letters and diaries of A. F. R. Wallaston, selected and edited by Mary Wollaston, with a preface by Sir Henry Newbolt.

21.5 × 14: pp. xiii, 261. Cambridge, University Press. 1933.

ルーウエンゾリ、蘭領ニユギニアに更に 1921 にはエヴエレスト遠征に加はつたウオラストン (1875–1930) が家族に送つた手紙と折にふれて書き遺した日誌を彼の死後夫人が編輯せるもの。彼の紀行は單行本としては纏つたものが少ない今日、これこそは彼の殘した足跡を辿る重要な文獻である。

158. Gos, Charles.

Près des névés et des glaciers. Impressions alpestres.

22.5 × 14.5: pp. xiv, 254. Paris, Fischbacher.

ゴーの幾つかの著作中山岳關係の著述の代表的なものである。

159. König, F. N., Lory, u. A.

Alte Schweizer Trachten.

15 × 10: pp. 277. Zürich, Montana. 1924.

瑞西二十二州の所さまざまの風俗を畫いた、畫家ケーニヒ (1765–1832)、ローリ父子 (1763–1840)、(1784–1846) その他の原書を複製しニコラス博士の序文を附したものである。

160. Mason, A. E. W.

Running water.

17 × 11: pp. ii, 320. London, Dent.

小說家としてのメーソンの名を知らぬ人は少いが登山家としての彼を知る人は少い。本書はメーソンの數多い小說の中で特に山に緣の深いものとして多く讀まれたもので、初版は 1907 年刊行され爾來色々の版を重ねてゐる。シヤモニーを中心とした此の小說で著者はアルジヤンチエール登攀やブレンヴア尾根縱走の場面でアルパイン・クラブの一會員としての蘊蓄を遺憾なく傾けてゐる。

161. Mumm, Arnold, L.

The Alpine Club resister.

3 vol. 22 × 14: vol. I. pp. viii, 391; vol. II. pp. vii, 375; vol. III. pp. vii, 349. London, Arnold. 1923, 1925, 1928.

英國山岳會 (Alpine Club) 會員の銘々傳。第一卷は 1857–1863 年、第二卷は 1864–1876 年、第三卷は 1877–1890 年夫々の時代に會員となつた會員の簡單な一般的傳記、登山經歷その他山岳關係の寄與に關する詳細を極めた記錄である。第三卷はマム (1859–1927) の逝去後出版されてゐるが、アルプスは固より、凡そ探險史乃至登攀史に關心を有するものにとつて此のレヂスター三卷程無盡藏の寶庫は少い。

162. Pye, David.

George Leigh Mallory, a memoir.

21 × 14.5: pp. 183. Oxford University Press, London. 1927.

1924 年エヴエレスト登攀に當つて、アーヴインとともに登頂を期して出發したまま行方不明となつたマロリーを追悼して彼の親友パイの著はした傳記的追想錄。人としてのマロリーの面影もよく出て居てアルプスやエヴエレストでの彼の活躍の光景も覗はれる。

154. Wollaston, A. F. R.

From Ruwenzori to the Congo. A naturalist's journey across Africa.

14 × 22: pp. xxv, 315. London, Murray. 1908.

1906年大英博物館が派遣したオギルヴイー・グラント探險隊に加はつた著者のルーウエンゾリ登山記、キング・エドワード峯、ヴウオニク峯に登頂したが、他は天候不良のためと準備不足のために不成功に終つて居る。

V. ニュー・ジーランド

155. FitzGerald, E. A.

Climbs in the New Zealand Alps.

24 × 18: pp. xvi, 363. New York, Scribner. 1896.

ニユージーランド登山史に名を殘すフイツツジエラルド (1871–1931) の 1894–1895年ニユージーランド行の記錄である。當時問題のマウント・クックは彼の到着に先立ち登頂され彼はニユージーランド最高峯初登攀の機會を失つたが、セフトン、シーリイ、タスマン、ジルバーホルンの登攀に成功して歸國した。本書はマコーミツクの挿繪と著者の撮影になる寫眞が挿入されて1896年刊行されたが、彼には他に1896年のアンデス探檢を記錄した Highest Andes (1899) なる著述がある。

VI. 文學、美術、傳記

156. Dana, William S. B.

The Swiss chalet book.

26 × 20: pp. 151. New York, Comstock. 1913.

著者 Dana は米國人であるが瑞西のシヤレー（山小舍）に興味を有し特にそれを研究する目的を以て瑞西に旅行しスケツチ、寫眞、平面圖等を作りその原構造、裝飾、戸、窓、バルコニー、小舍の内部、家具等まで詳細に記述してゐる。素と米國民にシヤレーの美を知らせるために執筆したものであるが我々日本人に取つても苟くも瑞西の山鄉風景に憧憬する限り一讀の價値はあると思ふ、圖版も多數參考用に挿入されてゐる。

157. Freshfield, Douglas W.

Unto the hills.

17 × 11: pp. viii, 120. London, Arnold. 1914.

詩集。大著『カウカサス探檢記』の卷頭に掲ぐる亡友ドンキンを悼むの詩 "W. F. D., 1888" 其他を收む。

15 × 22: pp. xv, 572. London, Kegal Paul, Trench. 1886.

ジョンストンの1884年の探險はキリマンジヤロ登攀の先驅をなすものであるが、頂に達し得ず漸く雪線に到達し得たに過ぎなかつた。しかし1889年マイヤー博士の初登頂に先立つこと五年先驅者としてのジョンストンの貢獻は沒却することが出來ない。この書には登山記の外同地方の氣象、動植物、人類學、言語學等に關し詳細な研究を發表して居る。多數の挿繪及地圖はすべて著者の手に成る。

151. Meyer, Dr. Hans.

Across East African glacier. An account of the first ascent fo Kilimanjaro. Translation from the German by E. H. S. Calder.

25 × 18: pp. xx, 404. London, Philip. 1891.

キリマンジヤロ初登攀(1889)の記錄を獨逸文から英譯したもの。著者マイヤーは1887年に初めて此の山に志し、1889年漸く最高峯キボー登頂に成功した。

152. ———

Der Kilimandjaro, Reisen und Studien.

Mit 4 tafeln in Falbendruck, 16 Tafeln in Lichtdruck, 20 in Buchdruck, 2 Forbigen originalkarten und 103 Text Bildern.

20 × 30: pp. xvi, 436. Berlin, Dietrich Reimer. 1900.

キリマンジヤロの初登攀者であるマイヤー博士が1889年、Ludwig Furtscheller を伴つて Ratzel 氷河から、この峯に初登頂した際の記錄で、同峯の文獻としては代表的のもの。1848年レツドマン初めて此の山を發見し、1861, 1862年の兩年に亘りデツケンのドイツ登攀隊之を試登す、マイヤーはその後を受けて1887, 1888兩年に試登し、1889年三回目の登攀で成功したものであるが、この登頂に依つて Kibo の大火口が初めて世に紹介されたわけである。マイヤーはその後1898年にも此の地を訪れてゐる。

153. Moore, J. E. S.

To the Mountains of the Moon, being an account of the modern aspect of Central Africa, and of some little known regions traversed by the Tanganyika Expedittion, in 1899 and 1900.

22 × 16: pp. xvi, 350. London, Hurst & Blacket. 1901.

アブルヂ公のルーウエンゾリ初登攀(1906)に先立つて數回此の所謂『月の山』の登攀が試みられてゐるが、ムーアの探檢隊は此の山塊の尾根に到着した最初のものである。尤も此の探檢隊の目的は1905年のフレツシフイールド・マム隊の如く登攀を目的としたものではないから、本書は寧ろ地理、地質、動物調査を主としたタンガニーカ探檢旅行記と見るべきである。

146. Dutton, E. A. T.

Kenya Mountain, with an introduction by Hilaire Belloc.

18 × 25.5: pp. xv, 219. London, Cape. 1929.

アフリカ第二の高峯ケンヤを語る書で、この山が P. Wyn Harris, E. E. Shipton, G. A. Sommerfelt 等の果敢な登山家の目標であつた時代が過ぎて、その森林地帯にも自動車の音が喧しい時代となつて來た。それを嘆く著者が、まだ僅に偲び得る昔を懐んでこの山を記した書である。

147. Filippi, Filippo de.

Ruwenzori, an account of the expedition of H.R.H. Prince Luigi Amedeo of Savoy, Duke of Abruzzi, with a preface by H.R.H. the Duke of Abruzzi.

18 × 25.5: pp. xvi, 403. London, Constable. 1909.

1906年4月より同年9月に到るアブルヂ公一行の探檢隊の記錄で、ルーウエンゾリ及び附近の高峯六座の中五座に登頂するといふ成功振りであつた。1888年スタンレーが北の山を發見して後二十一年目のことであり、フレフシフイールド、マム登攀隊の試登 (1905) の翌年のことである。著者 Filippi はこの行には參加しなかつたが、乞はれて日記、手帳その他の資料を集めてこの一册を纏めた。アブルヂ公の他の探險同僚、ヴイットリオ、セルラが寫眞撮影の筆を振つてゐるが、その他詳細な學術的研究も發表されてゐる。

148. ———

Der Ruwenzori. Erforschung und erste Ersteigung seiner höchsten Gipfel von Ludwig Almadeus von Savoyen, Herzog der Abruzzen.

15.5 × 23: pp. xii, 471. Leipzig, Brockhaus.

上記のアブルヂ公一行の探檢記の獨譯。

149. Freiberg, Hermann.

Das Ruwenzorigebirge, Zentralafrica. Eine länderkundliche Skizze.

15.5 × 23: pp. 111. Leipzig, Vogel. 1929.

ルーウエンゾリに關する學術的研究で學位論文として提出されたもの、著者は恩師にして同地方への先驅者且キリマンジヤロ峯の初登頂者 Dr. Hans Meyer にこの書を獻じて居る。卷尾に 208 册に渡るこの山の文獻を蒐錄す。

150. Johnston, H. H.

The Kilima-njaro expedition. A record of scientific exploration in eastern equatorial Africa and a general description of the natural history, languages and commerce of the Kilima-njaro district.

23 × 17: pp. xxii, 147; Supplementary appendix pp. xxiv, 456. London, Murray. 1892.

1867年、1869年のグリーランド行と1901年と1904のカナダ行との間に挟まるウイムパーの海外探検である。このアンデス行の目的は高度が如何に登山者に影響するか、世界最高の山の登山に對して高度がどの程度の障害となるか、を確めるにあつた。當時ヒマラヤやチリーのアンデスは政治的事情から不便な狀態にあつたので、最高峯チムボラゾをもつエクアドール國のアンデスが彼の目的に撰ばれた。マツタホルンで有名なカレル及びその從弟ルイが行を共にしてゐるが彼は1879年より1880年にかけての一年足らずの間をこの赤道直下の世界にすごした。彼はチムボラゾ、アンテイサナ、カヤムベ等の初登攀、コトパクシの登攀に成功し、數多の貴重な科學的材料を蒐めて歸國した。分冊附錄は彼が蒐集したものを材料としてボンネイ教授をはじめ15人の科學者が研究した結果である。

143. Wilcox, Walter Dwight.

The Rockies of Canada.

24.5 × 27: pp. viii, 309. New York, Putnam. 1900.

1897年刊行"Camping in the Canadian Rockies"を改訂增補したもので、カナダ・ロツキー旅行記、探檢記であり同時に同地帶の一般的叙述である。著者撮影の寫眞による挿繪が非常にいい。

IV. アフリカ

144. Abruzzi, S.A.R. Il Principe Luigi Amedeo di Savoia Duca Degli.

Il Ruwenzori.

Parte Scientifica. Resultati della osservazioni e studi compiuti sul materiale raccolto dalla Spedizione. 17 × 25: Volume I. Zoologia Botanica. pp, vii, 603. Volume II. Geologia Petrografia e Mineralogia. pp. xix, 286 Milano, Ulrice Hoepli. 1909.

アブルヂ公の探檢の際に隨伴した科學者の報告を蒐錄した『ルーウエンゾリ』の科學篇、各卷共、多數の寫眞資料を添へてあるが、第二卷にはルーウエンゾリ一帶の山岳寫眞が豊富である。

145. Dundas, Charles.

Kilimanjaro and its people. A history of the Wachagga, their laws, customs and legends, together with some account of the highest mountain in Africa.

14.5 × 22: pp. 349. London, H. F. & Witherby. 1924.

第一章にキリマンヂヤロ峯の登攀記を揭げ、以下、同地方の歷史、宗教、慣習、傳說、法律等々についての研究を記す。

138. Palmer, Howard.

Mountaineering and exploration in the Selkirks. A record of pioneer work among the Canadian Alps, 1908-1912.

23.5 × 15.5: pp. xvii, 439.

カナダ・ロツキー、セルカーク山地の登攀記錄である。『カナダ・ロツキー登攀案内』(1921, 1930) の共著者であるパーマーは特に此の地方の開拓者として知られ、彼の貢献を記念する爲めパーマー・ピーク、パーマー氷河等の名がつけられてゐる。彼は後(1916-1927) 更に奥地山岳の登攀探検をしてゐるが 1931 年には A pioneer of the Canadian Alps なる一著を著してゐる。

139. Stutfield, Hugh E. M. and J. Norman Collie.

Climbs and exploration in the Canadian Rockies.

22.5 × 14.5: pp. xii, 343. London, Longmans, Green. 1903.

マウント・スタツトフイールドの名はマウント・アルバータ、マウント・ウーレイの名と共に我が登山界に親はしい名であるが、本書はその名の起るカナダ山岳開拓者の一人スタツトフイールドが 1898 年、1900 年、1902 年の三回に亘る探検を同行者ノーマン・コリーと共に叙述したものであり、コリーの 1897 年の探検記錄も加へられてゐる。スタツトフイールドはコリーの他に 1898, 1902 年にはウーレイを伴ひ、1900 年にはスペンサーを伴つてゐる。

140. Thorington, J. Monroe.

The glittering mountains of Canada, a record of exploration and pioneer ascents in the Canadian Rockies, 1914-1924.

22 × 15: pp. xxii, 310. Philadelphia, Lea.

パーマーと『カナダ・ロツキー登攀案内記』を共著した著者ソーリントンは米國人で早くからカナダ・ロツキー踏査に精進した一人としてパーマーと並び稱せられるが醫を業とし乍らアルプス古文献の研究者としても知られてゐる著者のことであるから、此のロツキー登攀十年の記錄にも、隨所に彼の史的考證が見出される。彼には前述書の他 1932 年に Mont Blanc Sideshow の題で刊行されたアルバート・スミス評傳がある。

141. Wheeler, A. O.

The Selkirk Range.

24 × 16: vol. I. pp. xvii, 459. Ottawa. 1905.

カナダ政府から發行された測量調査報告。但し同地方の探検、登山の史的記述をも含みパーマーの著とならんで此の地方に關する一流の權威書と稱せられる。

142. Whymper, Edward.

Travels amongst the Great Andes of the Equador, with supplementary appendix.

134. Hutchings, J. M.

In the heart of the Sierras.

22 × 16: pp. xii, 496. Yo Semite Valley, Old Cabin. 1886.

著者ハッチングスは早くからヨセミテ渓谷に籠居し Old Cabin なる木賃小舎式の宿屋を經営し交通不便の時代に遊客を遠方より馬車にて招致し、ヨセミテの紹介に是れ努めたものである。本書はヨセミテ渓谷の百科全書的案内記で歴史、地理、博物にまで及び大版 496 頁、陸地測量部地図 (1878-1879 年の實測) 一葉の他に大小図版百五十三個を挿入してある。其後ヨセミテは益々高名になり國立公園に編入せられ著者の小舎は强制的に買收されて破毀せられ著者は不運なる先驅者として歿落し本書も今では前代の古地理書として稀に古本屋の店頭に姿を晒すのみである。

135. King, Clarence.

Mountaineering in the Sierra Nevada.

20 × 14: pp. 292. Boston, Osgood. 1872.

シエラ・ネヴアダ (カリフオルニア) の登山探檢は 1860-1870 年代に加州地質調査局長ホイットニーの率ゆる學術探檢隊の實査に負ふところ最も多い。その探檢隊中の勇者は本書の著者クラレンス・キングである。彼は 1842 年に生れ二十歳の青年として加州に轉じシエラ・ネヴアダ連嶺の登山を連續的に敢行し山脈中の最高點に登り Mt. Whitney と命名し又 Mt. Tyndall を發見命名した。その他 Mt. Shasta に於ては氷河を發見報告した。それ等の記述は總べて本書に收められてゐる。著者の米國山岳文献に於ける功勞は恰かも英國に於けるチンダルの位置に匹敵するものであらう。1901 年十二月アリゾナに歿す。本書は實にシエラ・ネヴアダ山岳探檢記としては古典として永久に殘るものである。

136. Meany, Edmond S.

Mount Rainier, a record of exploration.

22 × 14: pp. xi, 325. New York, Macmillan. 1916.

ワシントン大學の歴史教授である著者には米國太平洋岸北西部を中心とした歴史的著述が少くないが、『レニア探檢史』もその一つである。本書はヴアンクーヴアーが 1792 年に初めて此の山を發見した發端から 1870 年のステーヴンス將軍の初めての登頂その後の探檢を夫々の文献から原文を抜萃載錄して各章毎に編者の説明を添へて編纂したものである。

137. Outram, Sir James.

In the heart of the Canadian Rockies.

21.5 × 15: pp. xii, 466. New York, Macmillan.

カナダ・ロッキーの一般的叙述と見るべきものであるが、1906 年以來カナダに移り住み 1901 年にウイムパーと、1902 年にはコリー等とロッキー探檢を共にしてゐる著者 (1864-1925) にして初めて此の種著述を敢てし得るものであらう。本書 1905 年初版今日に及んで居る。

を餘儀なくされてゐる。然し、登攀の準備に於ても方法に於ても 1910 年、1912 年兩回の探檢は人力を盡したものとして推稱されてゐる。挿繪、寫眞も多く、且つ附近一帶の略圖も添附してある。

130. Conway, Sir Martin.

The Bolivian Andes. A record of climbing and exploration in the Cordillera Real in the years 1898 and 1900.

22.5 × 15: pp. ix, 403. London, Harper. 1901.

1892 年にカラコラムに入り、1894 年にアルプスを端から端へかけ、續いて 1896, 1897 兩年にはスピツツベルゲン探檢に募したコンウエイは 1898-1900 年の期間を南米探檢に獻げてゐる。本書は探檢家としてのコンウエイの 掉尾の活躍であつた 南米行の前半を記錄したものでイリマーニ初登攀並に 兩回に亘るソラータ試登を叙述したものである。

131. Cook, Frederick A.

To the top of the continent. Discovery, exploration and adventure in sub-arctic Alaska, the first ascent of Mt. McKinley, 1903–1906.

23 × 16: pp. xxi, 321. New York, Doubleday, Page. 1908.

1903, 1906 兩年の北米最高峯マツキンレイ試登の記錄。第二回探檢には 後にマツキンレイ試登を繰返してゐるパーカー教授、ブラウンの二人が 伴つてゐるが、1906 年のクツクの所謂マツキンレイ初登頂は 甚だ怪しいとの定評を得、從つて 1910 年のロイドの初登攀が眞正の初登攀と公認されるに至つてゐる。

132. Drake, Samuel Adams.

The heart of the White Mountains, their legend and scenery with illustrations by W. Hamilton Gibson.

30 × 23: pp. xii, 318. London, Chatto & Winds. 1882.

北米アパラキアの北部、マウント・ワシントンを主峯とするホワイト・マウンテンス紹介。

133. Filippi, Filippo de.

The Ascent of Mount St. Elias, Alaska, by H.R.H. Prince Luigi Amedeo di Savoia Duke of the Abbruzzi, narrated by Filippo de Filippi illustrated by Vittorio Sella and translated by Signora Linda Villari.

Edition de luxe. 29 × 20: pp. xiii, 240. London, Constable. 1900.

アブルヂ公の 1897 年のセイント・エライアス登攀記錄。當時 公歳廿五歳、北極、ルーウエンゾリ、カラコラムと次々に續いた大探檢行の最初のものである。ヴイツトリオ・セルラの寫眞も美しく、誠に多彩にして光輝に富む公の探檢家として首途を祝ふに相應しい豪華版である。

1886年の滿洲旅行記である。旅行記とは云つても内容は探檢記に近く、明治十年代に既に英國人によつて斯く迄滿洲の地が縱橫に跋渉されてゐたのかと考へれば一驚を喫せざるを得ない。旅行の目的がロシアのシベリア經略の實情踏査にあつたことは謂ふ迄もなく、一行は吉林を中心として琿春、三姓、チチハル等至る所でロシア・コザック兵の前哨線を觀察してゐる。同行したヤングハズバンドは別に彼の中央アジアへの探險記と共に一著を著してゐる。書名『長白山』の起る所以は一行が北から松花江を溯り、此の國境山頂探險をした所から來るが、口繪にはヤングハズバンド筆をもととした天池の色刷なども載せてある。

127. Heim, Arnold.

Minya Gongkar, Forschungreise ins Hochgebirge von chinesisch Tibet, Erlebnisse und Entdeckungen.

23.5 × 15: pp. 244. Huber, Berlin. 1933.

1933年テリス・モーア等のハーヴアード大學隊の一行によつて初登頂されたミニヤ・ゴンカアを中心とする支那チベットの探檢記錄。但し本書記す所の中山大學の川邊調査團は1930–1931年に同地方を歩いたもので、著者ハイムは右調査隊の隊長であつた。調査團はミニヤ・ゴンカアを中心に數多の山岳を發見、測量してゐるが、西部支那國境山脈を紹介した單行本として貴重なるものの一つである。

III. 南北アメリカ

128. Badè, William Frederic.

The life and letters of John Muir.

2 vols. 21 × 24: vol. I. pp. vii, 330; vol. II. pp. 4[illegible]4. Boston, Miffin. 1924.

シエラ山中の哲人、偉大なる自然人ミューア (1838–1914) の傳記並に書翰集。ヨセミテ、カリフオルニア、アラスカの山々にミューアの足跡の及ぶ所は廣い。フエヤウエザー山麓のミユア氷河の名も彼の名を不朽ならしめんとて附けられたものである。

129. Browne, Belmore.

The conquest of Mount McKinley. The story of three expeditions through the Alaskan wilderness to Mount McKinley, North America's highest and most inaccessible mountain. Appendix by Herschel C. Parker.

23 × 15.5: pp. xvii, 381. New York, Putnam. 1913.

1906年のクツク、パーカー、ブラウン踏査に初り、1910年のパーカー、ブラウン試登を叙述し、1912年の第三回登攀に及んでゐる。最後の登攀は犬橇により冬期に試みられたものであるが、一行は最後の頂上を目前に見乍ら吹雪の爲め引返すこと

如く資本化せざりし以前の時代とて舊日本の郷土風景宛ら睹る如く我ながら懐つかしき極みなり。

122. Walton, The Rev. W. H. Murray.

Scrambles in Japan and Formosa.

22.5 × 14.5: pp. 304. London, Arnold. 1934.

著者が1915-1932の日本滯在中の登山記錄。日本アルプスは謂ふに及ばず、北は東北藏王から南は屋久島、臺灣に及び、その足跡は正にウエストン氏以上であつた。新しい姿としての日本山岳を紹介したものとしてウエストンの歴史的名著に次ぐものである。

123. Weston, The Rev. Walter.

Mountaineering and exploration in the Japanese Alps.

23.5 × 16: pp. xiv, 346. London, Murray. 1896.

解說の必要ない有名な本であるが、志賀重昂著の日本風景論と二年後れて出たこの『日本アルプス』は、共に日本の近代山岳文献の双璧である。彼の第一回日本滯在中1881-1894に行はれた北アルプス登攀の紀行であり、日本山岳に關するウエストン最初の書である。

124. ———

The Playground of the Far East.

21.5 × 14: pp. x, 333. London, Murray. 1918.

謂はば第二の『日本アルプス』である。ウエストン第二(1902-1905)、三回(1911-1915)の滯在中の日本アルプス紀行を集めたるもので最初の著述に比し南アルプスの記述が多い。

125. ———

A wayfarer in unfamiliar Japan.

19.5 × 15.5: pp. x, 207. London, Methuen. 1925.

本著はウエストンの近業の一つであるが、日本の餘り知られて居ない地方を歩いた印象記であり、必ずしも山岳文献とは稱されないが、日本近代登山の父とも稱すべきウエストンの日本觀を物語る好個の材料である。

其他アジア

126. James, H. E. M.

The Long White Mountain or a journey in Manchuria, with some account of the history, people, administration and religion of that country.

22 × 14.5. pp. xxiii, 502. London, Longmans, Green. 1888.

Third edition. 23 × 16: pp. xvii, 409. London, Murray. 1896,

ヤングハズバンド大尉（今の Sir Francis Younghusband）の歴史的な單騎アジア大陸横斷記である。旅行はジエイムス氏に同伴した滿洲旅行に始り、ゴビ沙漠横斷、ムスタフ峠越えで一段落してゐる。明治十年代の滿洲旅行記としても、北京から中央アジアに續く東西兩世界を結ぶ古典的交通路の記錄としても重要な文獻であるが、彼の殆んど古典的なヒマラヤ越えは遂に彼の名をヒマラヤ探檢の先驅者として不朽にしたものである。

118. Younghusband, Sir Francis.

Kashimir. Painted by Major E. Molyneux.

20.5 × 15: pp. xiii, 238. London, Black. 1909.

カシミアに關する旅行、狩獵、風俗、歷史、產業、登攀等にわたつてヤングハズバンドが記述し、モリニユーが美しい繪を 32 枚揷入してゐる。カシミアを知るには好個且つ興味ある著作である。

119. ———

Wonders of the Himalaya.

22 × 14: pp. vii, 210. London, Murray. 1924.

ヤングハズバンドが若かりし日のヒマラヤ探檢の想ひ出を追つて書き記したもので少年少女の讀物として書かれたものであるがヒマラヤ探檢の先驅者ロバート・ショウの甥として印度に生れ、終始ヒマラヤに接しその自然の內に育くまれたヤングハズバンド半生の自叙傳とも云ふ可きものである。

日　　本

120. Starr, Frederick.

Fujiyama, the sacred mountain of Japan.

23 × 16: pp. 155. Chicago, Covici-McGee. 1924.

『お札博士』壽多有の著。1917, 1919 年の紀行の外に地質、植物、或は歷史、詩歌、繪畫に現はれた富士山など、凡ゆる視角から富士山を論じてあり、外國語にかゝれた富士山の文獻としては蓋し其右に出づるものはない。多くの風景版畫からとられた揷圖も美しい。故曾我部一紅に獻げられたもの。

121. Steinitzer, Wilhelm.

Japanische Bergfahrten. Wanderungen fern von Touristenpfaden.

22 × 16: pp. 119. München, Reinhardt. 1918.

著者は岐阜、長野、松本等に遊び、駒ケ岳（甲斐）、上高地、槍ケ岳、穗高山、燒岳、立山、サラ峠、針木峠、戶隱、妙高山、駒ケ岳（木曾）、富士山等に登山、その紀行を本書に收めたり、本書に珍らしきは寫眞版にして未だ日本の山岳地が今日の

22 × 14.5: pp. xxvi, 475, London, Blackwood. 1875.

1875年に著者がシムラからカシミールにかけてヒマラヤの前山地帯を歩いた紀行である。こけおどかしや素人臭い記述の上の誤謬も少からず正體不明の口絵等も手傳つて却つて當時問題になつたりしたものである。

112. Workman, F. B. and W. H. Workman.

In the ice world of Himalaya.

20.5 × 13.5: p.p. xvi, 204. London, Unwin. 1901,

後年ヒマラヤに數度の探檢を行つた著者夫妻の第一回の遠征記錄。1898年にはラダーク、ヌブラ等 4,300米から 5,500米の峠を 17回も越え、次いで 1889年にはビアフォ氷河を探檢してゐる。

113. ———

Ice-bound heights of the Mustagh.

24 × 16: pp. x, 421. London, Constable. 1908.

1902–1903年バルチスタンに於ける著者夫妻の登攀記錄。チョゴルンマ氷河を探檢してチョゴルンマに登頂ピラミッド・ピークでは 6,880米迄達してゐる。夫妻としては第二回のヒマラヤ行である。

114. ———

Peaks and glaciers of Nun Kun.

24 × 16: pp. xvi, 204. London, Constable. 1909.

1906年著者夫妻がヌンクンに入つた時の記錄。このとき夫人はピナクル・ピークに登頂し、女子としての登高記錄を殘した。

115. ———

The call of the snowy Hispar.

24 × 16: pp. xvi, 297. London, Constable. 1910.

著者夫妻第四回のヒマラヤ行の記錄で、この1908年にはヒスパア氷河をヒスパアパスまで隅なく探檢しビイアフォ氷河に降りた。

116. ———

Two summers in the ice-wilds of Eastern Karakoram.

23 × 16: pp. 271. London, Unwin. 1917.

著者夫妻が1911–1912年に於けるカラコラム遠征記錄で、シアチェン、バルトロの氷河を探檢した時のものである。彼等はこの行を最後としてヒマラヤから退いた。

117. Younghusband, Captain Frank E.

The heart of a continent: a narrative of travels in Manchuria. across the Gobi desert, through the Himalaya, the Pamirs and Chitral, 1884–1894.

1905年ロングスタフと共にガルワール、ラダクに行つた當時の紀行。本著にはロングスタフがグルラマンダータ登山記を一章書いてゐる。カイラス附近の事もよく書かれてあり、この地方の貴重な文献である。

107. Smythe, F. S.

Kamet conquered.

23.5 × 15.5: pp. xvi, 420. London, Gollanz. 1932.

カンチエンヂヤンガの經驗を以つてスマイスが、グリーン、シップトン、バアニ、ビューマンの英國少壯隊を組織して1931年、東カメット氷河から初登頂した記錄である。カメットの登頂はミードの1913年の試登以來時期の問題だといはれたが、これに登攀した彼等の功績は失はれない。

108. Visser-Hooft, Jenny.

Among the Karakorum glaciers in 1925, with contributions by Ph. C. Visser.

22.5 × 16.5: pp. x, 303. London, Arnold. 1926.

カラコラムに於ける1925年のフイツサー夫妻初めての探險記錄。この時は一行はバツラ氷河を探險してゐる。

109. Waddell, Major L. A.

Among the Himalayas.

21 × 15: pp. xvi, 452. London, Constable. 1900.

十九世紀のシツキム探險者として名高いワデルの著、1888–1896年にわたるシツキム跋渉記である。收むる處、テイスタ河の源流、ラツチユング、ラツチエン兩谿谷の探檢、チベット通商路に當るジエレップ・ラ紀行、カンチエンヂヤンガ南面の探査更にネパール旅行記等。就中グラハムのカブルー登頂問題について本書が論じてゐることは、同問題が後年コンウエイ、コリー、フレツシユフイールド、ウオークマン、レーバーン、ロングスタフ等によつて論爭の的となつたものだけに、仲々興味がある。

110. Wessels, C.

Early Jesuit travellers in Central Asia, 1603–1721.

25 × 16.5: pp. xvi, 344. Hague, Nijhoh. 1924.

最近デシデリーの傳記を編輯したジエスイット教會の著者が1603–1721年の間、中央アジアに布教の旅に出た八名の僧侶の日記手紙によつて彼等の紀行を編輯せるものである。

111. Wilson, Andrew.

The Abode of Snow. Observation of a journey from Chinese Tibet to the Indian Caucasus, through the upper valleys of the Himalaya.

104. Ruttledge, Hugh.

Everest 1933.

25.5 × 17.5: pp. xiii, 390. London, Hodder & Stoughton. 1934.

ラットレッヂをリーダーとする1933年の第四回のエヴェレスト遠征の記錄。豫想外の惡天氣のため第四回の擧も敗れた。1924年の行に殘されたビツケルなどの發見、スマイスの8,534米(?) 迄の登攀が此の年の大きな收獲であつた。前三者と共にヒマラヤ文獻中の壓卷と稱すべきものである。

105. Schlagintweit, Hermann, Adolphe, and Robert de.

Results of a scientific mission to India and high Asia, undertaken between the years 1854 and 1858, by order of the directors of the honourable East India Company.

33 × 27: Leipzig, Brockhaus, London, Trübner.

Vol. I. Astronomical determinations of latitudes and longitudes and magnetic observations during scientific mission to India and high Asia, preceded by general introductory reports. pp. xii, 494. 1861. Vol. II. General hypsometry of India, the Himalaya, and Western Tibet with sections across the chains of the Karakorum and Kuenluen. pp. xvi, 549. 1862. Vol III. Route-book of the western parts of the Himalaya, Tibet, and Central Asia; and geographical glossary from the languages of India and Tibet. pp. xx, 293. 1863. Vol IV. Meteorology of India and analysis of the physical conditions of India, the Himalaya, Western Tibet and Turkistan. pp. xvi, 586. 1866.

Atlas. 95 × 63: Part I. A. Title and dedication. B. Panoramas and views. C. Maps. Part II. A. Panorama and views. B. Panoramic profiles of the snowy ranges of high Asia. Part III. A. Panoramas and views. B. Maps. Part IV. A. Panoramas and views. B. Illustrations. C. Maps.

ヘルマン、ロバルト、アドルフのシユラーギントワイト三兄弟が東印度會社の命によつて1855-1858年ヒマラヤ及び中央アジアに測量並に學術探檢を行つたときの報告。1855年アドルフ、ヘルマンと兩人がイビ・ガミン(カメツト)に於て6,780米に達した(當時としての一記錄)こと、其後ロバートがカシユガールで匪賊の兇手に斃れたことは有名な話となつてゐるが、アルプスでの氷雪登攀の經驗を持つたもののヒマラヤ登攀は彼等を以て嚆矢となすと謂はれる丈けにヒマラヤに於ける彼等のパイオニア・ウオークは本著と共にヒマラヤ登攀史を飾るものである。年代的に見て既に古典には相違ないが、その記述は今日に於ても尙この方面の有要な參考資料たるを失はない。

106. Sherring, Charles, A.

Western Tibet and the British borderland.

25 × 15.5: pp. viii, 367. London, Arnold. 1906.

27.5 × 22: pp. 103. Calcutta, Bengal Secretariat Press. 1885.

當時印度ベンゴール政府秘書官であつたマコーレイのシツキム・チベット・ミツシヨンの報告で、此の種報告は此の時代のヒマラヤ踏査記錄として重要な地位を占めてゐる。マコーレイは此の行でラツチユング、ラツチエン兩溪谷の奥地まで入つてゐるが本書は旅行中に書かれた日記を主としたもので、收むる處の22枚の密着燒寫眞はシツキム高地の氣分をよくつたへて面白い。

100. Merzbacher, Dr. Gottfried.

The Central Tian-Shan mountains, 1902–1903.

22.5 × 15: pp. 294. Murray, London. 1905.

著者 (1846–1926) がパン、カイデル、コストネルと共に 1902–1903 年天山に入つたときの記錄。メルツバツヘルにとつては第二回の天山探檢。第一回はプルチエラーと共に中央カウカサス探檢當時 (1891–1892) これを訪れて居る。第三回の探檢は1907–1908年に行はれた。天山山脈の紀行文獻としては珍らしいものである。

101. Mumm, A. L.

Five months in the Himalaya. A record of mountain travel in Garhwal and Kashimir.

25 × 16: pp. xv, 263. London, Arnold. 1909.

カメツトが登頂されるまでは人間が登つた世界最高の山頂はトリゾール 23,406 呎であつた。1907年のロングスタフの此の登頂は爾來二十餘年に亘り世界の記錄となつたのであるが、マム (1859–1927) の本書はマム、ブルース、ロングスタフ三人の此の時のガルワール登攀記錄を中心として書かれたものである。

102. Norton, Lieut.-Col. E. F.

The fight for Everest: 1924.

23.5 × 16.5: pp. x, 372. London, Arnold. 1925.

ノートンを隊長とする 1924 年の第三回エヴエレスト遠征記錄。第三回の攻撃は前のルートを追ひ、ノートン、ソマヴエルが 8,534 米まで達し次いでマロリ、アーヴインが出發、そのまま行方不明となつた。

103. Rickmers, W. R. u. a.

Alai-Pamir Expedition, 1928, Vorläufige Berichte der deutschen Teilnehmer.

22.5 × 15: pp. 196. Berlin, Die Notgemeinschaft der deutschen Wissenschaft. 1929.

1928年に行はれた獨蘇聯合のアライ、トランス・アライ、パミール探檢に際しピク・フイツケル、ピク・レニンなどに目覺しい登攀記錄を殘したリツクマース、ボルヘルス、アルワイン、シユナイダー等獨逸の報告書。

1906-1908年のヘデインのヒマラヤ探檢記。カシミールからカラコラムを越えて西藏に入り西部ヒマラヤ山脈の間を縱橫に探檢した二年餘に亘る苦闘と發見との記錄である。第三卷は前二卷に對する補卷であり、西藏踏査の歷史に關する三章も含まれてゐる。三卷何れもヘデイン獨特の水彩畫の挿畫が寫眞版又は原色版で思ふ存分載錄されて居り異彩を放つて居る。

96. Hooker, Joseph Dalton.

Himalayan journals; or, notes of a naturalist in Bengal, the Sikkim and Nepal Himalayas, the Khasia mountains, etc.

2 vols. 22 × 14: vol. I. pp. xxii, 408; vol. II. pp. xii, 487. London, Murray. 1854.

植物學者としての著者(1817-1911)が、1848-1850年にわたりシツキムやネパールに深く入つて植物を觀察した當時の探檢記、同じフーカーのヒマラヤ植物研究の貴重文獻と共に、數少い初期のヒマラヤ文獻として古典の一つに數へられる。本書は後上下兩卷を併せて一卷として縮刷發行された。

97. Howard-Bury, Lieut.-Col. C. K.

Mount Everest, the reconnaissance, 1921.

23.5 × 16.5: pp. x, 356. London, Arnold. 1922.

ハワード・ブユリを隊長とする1921年の第一回エヴエレスト遠征記錄。マロリ、バロツク、フイーラアがノースコルの上(7010米)に達して、エヴエレスト登攀路を發見したことは、この踏査の最大收穫であつた。然しヒマラヤ探險の大先輩であるケラス博士が中途にして病のため殪れたことは償ふ可らざる損失であつた。ケラス博士は1907年以來シツキムに於て特にカンチエンジヤンガを中心に數多の登路を開拓し、カンチエンジヤンガに對する造詣はその右に出づるものなかつた。この年も秋に登るべきカブルーの登路探究にシキムに居たが、それを中止してこの行に參加し、不幸にしてエヴエレスト探檢最初の犧牲者となつたものである。本書には他に大版の限定版がある。

98. Knowlton, Elizabeth.

The Naked Mountain.

24 × 15.5: pp. 335. New York, Putnam. 1933.

1932年ナンガパルバツト試登のメルクル隊に加はつた唯一の婦人の手になる遠征報告。登攀隊はナンガパルバツトそのものでは6,900米附近までしか達しなかつたが、ラキオツト・ピーク、西チヨングラ・ピークに登頂した。1934年メルクルは再びドイツ隊を率ひてこれに挑んだが天候激變のため隊長メルクル自身を初め多くの犧牲者を出して痛ましくも敗退して了つた。

99. Macaulay, Colman.

Report of a mission to Sikkim and the Tibetan frontier, with a memorandum on our relations with Tibet.

ブライド・ピイクに登攀、7,500 米の記錄を殘した。附錄の地圖パノラマ寫眞は別冊をなし豪華なるものである。

91. ———

Karakoram and Western Himalaya, 1909, an account of the expedition of H.R.H. Prince Luigi Amedeo of Savoy Duke of the Abbruzzi.

2 vols. 26.5 × 21: pp. xii, 469. London, Constable. 1912.

アブルヂ公 1909 年のカラコラム遠征記錄の英譯本。

92. ———

The Italian expedition to the Himalaya, Karakoram and Eastern Turkestan (1913-1914).

25 × 19: pp. xvi, 528. London, Constable. 1932.

フイリツピを隊長とし、アレツシオ、アペツテイ、ダイネリ、ペテイガスといふ隊員から成るイタリアのカラコラム遠征隊記錄の英譯。レモ氷河、デプサン高地の探檢等が此の行の收獲であつた。世界大戰が起らなかつたら、一層大きな發見もあつたらうと云はれてゐる。

93. Freshfield, Douglas W.

Round Kangchenjunga, a narrative of mountain travel and exploration.

25 × 16: pp. xvi, 373. London, Arnold. 1903.

バウエル以下ドイツ登攀隊の二回に亘る果敢な試登や國際登攀隊の鳴物入りの行列でカンチエンジヤンガは近年著しく問題となつてゐる。然しフレツシフイールドこそはカンチエンジヤンガ探檢の押しも押されもせぬ先驅者である。本書は氏の 1899 年の探檢記錄であり、カンチエンジヤンガ山塊を一周した報告である。

94. Guillarmod, Dr. J. Jacot.

Six mois dans l'Himalaya le Karakorum et l'Hindu-Kush. Voyages et explorations aus plus hautes montagnes du monde.

23.5 × 16.5: pp. iii, 363. Neuchatel, Sandoz.

1902 年バルトロ氷河を遡り K^2 の北東面から目指した、エツケンシタイン、クロウレイ、ノウルス、パンネル、ウエスリー、ギヤルモオの遠征隊の記錄。

95. Hedin, Sven.

Trans-Himalaya. Discoveries and adventures in Tibet.

22.5 × 14.5: vol. I. pp. xxiii, 436; vol. II. pp. xvii, 423; vol. III. pp. xv, 414. London, Macmillan. 1909-1913.

る。1933-1934年にわたつて原著者の一人 Sir Sydney Burrard は Dr. A. M. Herron の助力を得て改訂版を刊行したが、新版は三部に分れ、第三部では氷河のことも述べてあり、地名など訂正された。

86. Collie, J. Norman.

Climbing on the Himalaya and other mountain ranges.

22 × 14: pp. vii, 315. Edinburgh, Douglas. 1902.

アルプスは固よりヒマラヤ、カナダ等に及んだコリーの山岳記文を集めたものであるが、ヒマラヤの部分が大部分を占め、ヒマラヤ登攀史も含まれて居り、就中ナンガ・パルバットのマムメリーの最期も本書に記錄されてゐる。

87. Conway, William Martin.

Climbing and exploration in the Karakoram-Himalayas. With three hundred illustrations by A. D. McCormick.

24.5 × 16.5: pp. xxviii, 709. London, Unwin. 1894.

コンウエイの1892年四月乃至十月のカラコラム探檢記錄、後年のエヴエレストの勇將ブルース（當時中佐）及び山岳畫家として知られたマコーミツクが同行し測量にはエツケンシタインが從つてゐる。探檢家としてのコンウエイの四大探檢の最初のものであり、カラコラム探檢史上に一時期を劃する最初の大規模のもので、アブルヂ公、スポレツト公或はウオークマン、フイツサー等の探檢の先驅をなすものである。

88. Dyhrenfurth, G. O.

Himalaya, unsere Expedition, 1930.

23 × 15.5: pp. 380. Berlin, Scherl. 1931.

カンチエンジヤンガに挑むだ1930年國際遠征隊の記錄。此の隊はバヴアリア隊とは反對にカンチエン氷河によつて試登したが失敗に歸し、近くのジョンソン・ピークなどに登つた。

89. Eckenstein, Oscar.

The Karakorams and Kashmir, an account of a journey.

19.5 × 13: pp. xvi, 253. London, Unwin. 1896.

コンウエイのカラコラム遠征(1892年)に加はつた一人エツケンシタインの日記體の記錄。

90. Fillipi, Fillipo de.

La spedizione nel Karakoram. È nell'imalaya Occidentale.

26 × 21: pp. xix, 471; appendix, pp. 110. Bologna, Zanichelli. 1912.

アブルヂ公 (1873-1933) の 1909年カラコラム遠征記錄。アブルヂ公、フイリピ、セルラ、ブロシユレル、ペテイガスの一行は1909年 K^2 を目ざしてカラコラムに入つた。一行は K^2 の周圍に登路を求めつつ探査したにすぎなかつたが、附近にある

82. Bruce, Major the Hon. C. G.

Twenty years in the Himalaya.

22 5 × 14.5: pp. xii, 331. London, Arnold. 1910.

シキム、ネパールからクマオン、ガルワールを經てパルチスタン、チラス、チトラールに至る大ヒマラヤを前後十九年に亘る探檢、登攀、旅行の經驗に基いて叙述說明し、その山貌の上に現れた對照、住民の多樣さを描いたものである。誠にブルースにして初めて可能なる企てと云ふ可きであるがブルース夫人も婦人の立場から見たヒマラヤ旅行觀を卷末に書添えてゐる。

83. Bruce, Lieut.-Col. the Hon. C. G.

Kulu and Lahoul.

22 × 14.5: pp. xii, 307. London, Arnold. 1914.

前著者に同じ。探檢を主とした幾多のヒマラヤ文献に對し、ブルース中佐(今の代將)のクル、ラホウル紀行は全く異つた視角からヒマラヤを見たものである。探檢家としてブルースの名は廣く識られて居るが、此の旅行ではブルースは必ずしも標高の高いこと、人里を遠ざかることを眼目とせず、休暇を利用した比較的氣輕な登攀の對象として殊更に一萬尺から一萬五六千尺程度の山岳地帶を選んで歩いてゐる。ヒマレイアン・クラブ創立等を續つて漸く勃興の氣運に向ひつつあるヒマラヤでの所謂ホリデー・クライミングの先驅を爲すものと云ふべきである。最後の一章『婦人の立場から』は同行のブルース夫人の筆になる。

84. Bruce, Brigadier-General Hon. C. G. and other members of the expedition.

The assault of Mount Everest, 1922.

23.5 × 16.5: pp. x, 339. London, Arnold. 1923.

ブルース將軍をリーダーとする1922年の第二回のエヴェレスト遠征の記錄、前年のルートに從つて、ノースコールを登り、東山稜から試登マロリー、ノールトン、ソマヴェルの組は 8,225 米まで、フインチとジオフレイ・ブルースの組は 8,321 米にまで達した。

85. Burrard, Colonel S. G. and H. H. Hayden.

A sketch of the geography and geology of the Himalaya mountains and Tibet.

Part I. The high peaks of Asia.
Part II. The principal mountain ranges of Asia.
Part III. The rivers of the Himalaya and Tibet.
Part IV. The geology of the Himalaya.

30 × 22.5: pp. 230. Calcutta, Superintendent Government Printing, India. 1907-1908.

四部に分れて詳細にヒマラヤの山系、水系を說明した本書は、三十年後の今日に於てもなほヒマラヤ研究の一權威書で、ヒマラヤ研究者が必ず坐右に備へるべき書であ

1868年、1886年及1889年の三度のコウカサスに於ける著者自身の登攀記錄とコツキン、ホルダー、ウーレイ、デシーの寄稿による登攀記、セルラ、ドンキンなどの手になる寫眞、この三つによつて、コウカサス山岳文獻の最高峯をなす本書は1888年コウカサスに最後を遂げたドンキンに捧げられてゐるが、ドンキン探索の有名な一節も含まれてゐる。

79. Grove, F. C.

"The frosty Caucasus." An account of a walk through part of the range and of an ascent of Elbruz in the summer of 1874.

19 × 13: pp. iv, 341. London, Longmans, Green. 1875.

1874年のコーカサス探檢記錄、此の探檢にはムーア、ウオーカー、ガーデイナーの三人が同行してゐるが本書は旅行記錄として優れた一典型とされて居り、ウオーカーの寫眞をもとにして刻んだウイムパーの挿畫が入つて居る。グローヴ(1838-1902)は後(1884-1886)アルパイン・クラブの會長の地位に就いたが、1870年には當時問題となつたガードルストンの著書を引用し登攀に際しての案內者有無の優劣を論じたりして居る。アルプスではグローヴの名は常にウイムパー、チンダルに次いでマツターホルンと結びつけられて居る。彼はイタリア側からの第二回(登山家としての最初のもの)登攀者であり、ツエルマツト側からの第五回目の登攀も行つてゐる。

II. アジア

ヒマラヤ及中央アジア

80. Bauer, P.

Im Kampf um den Himalaja, Der erste deutsche Angriff auf den Kangchendzönga 1929.

23.5 × 15.5: pp. 174. München, Knorr u. Hirsch. 1931.

果敢沈着な登攀を以て一世を驚倒せしめたバウエル以下のバヴアリア隊、1929年の第一回カンチエン登攀記錄、此の年バウエル隊はゼム氷河から東北稜により7,400米に達した。

81. ———

Um den Kantsch, Der zweite deutchen Angriff auf den Kangchendzönga 1931.

23.5 × 15.5: pp. 191. München, Knorr u. Hirsch. 1933.

1931に於けるバヴアリア隊の第二回カンチエンジヤンガ攻略の記錄。一行は第一回同樣東北稜から突擊7,700米まで達したがシヤラアと人夫一人を喪ひ遂に退却の止むなきに至つた。1934年、以上二回にわたる遠征の記錄はKampf um den Himalayaとして出版された。

スピッツベルゲン

75. Conway, Sir Martin.

The first crossing of Spitsbergen, being an account of an inland journey of exploration and survey, with descriptions of several mountain ascents, of boat expeditions in ice fjord, of voyage to North-East-Land, the Seven Islands, down Hinloopen Straits, nearly to Wiches Land, and into most of the fjords of Spitsbergen, and of an almost complete circumnavigation of the main island. With contributions by J. W. Gregory, A. Trevor-Battye, and E. J. Garwood.

24 × 17.5: pp. xii, 371. London, Dent. 1897.

1896年六月から同年八月に至るスピツツベルゲン探檢紀行。

76. ———

With ski and sledge over arctic glaciers. Illustrated from photographs taken by E. J. Garwood.

20 × 13.5: pp. vi, 240. London, Dent. 1898.

コンウエイ1897年の第二回スピツツベルゲン探檢紀行。前年同樣六月から八月迄に至るもの、第二回探檢はスキーを利用したことで注目されてゐるが、此の探檢でコンウエイはホルンスンド・テインドに登つてゐる。

コーカサス

77. Freshfield, Douglas W.

Travels in the Central Caucasus and Bashan including visits to Ararat and Tabreez and ascent of Kazbek and Elbruz.

21 × 14: pp. xiii, 509. London, Longmans, Green. 1869.

シリアに始りコーカサスに終つた1868年のフレッシフイールド、タッカーの登攀探檢記である。カズベク、エルブルーズ東峯の初登攀に成功したのは此の時の事である。當時フレッシフイールド二十四歳であつた。從つて本書は彼二十五歳の時の作である。

78. ———

The exploration of the Caucasus, with illustrations by Vittorio Sella.

2 vols. 31 × 24: vol. I. pp. xxiii, 278; vol. II. pp. x, 290. London, Arnold. 1896.

72. Yeld, George.

Scrambles in the Eastern Graians, 1878–1897.

20 × 15: pp. xvii, 279. London, Unwin. 1900.

著者は 1896 年以來三十年の永きに亘り Alpine Journal の編輯に當り、現にアルパイン・クラブ名譽會員の一人である。本書は 1878–1897 年の約二十年間に東部グライアン・アルプス地方の登山記で地圖一枚、圖版二十枚を挿んである。本文は九章より成る。地圖は伊太利政府調製の原圖を縮少スケッチしたもので Cogne 山脈に屬する山岳及び氷河の一覽圖で本文と併せ讀むと興味が深い。

73. Young, Geoffrey Winthrop.

On high hills. Memories of the Alps.

22 × 14: pp. xiv, 368. London, Methuen. 1927.

1910 年前後の時代に於いてヤングの名はアルプスの端から端まで響き渡つてゐた。シヤモニーやヴアリスの山間に彷徨ふ人は今もヤングの遺した足跡を見る。グレポンの東側であるとかグシバルテンホルンの西尾根或はジヨラス、ブルイヤール尾根、等々、何れもその上のヤングの活躍を思はしめる。本書は果敢、卓拔を以て鳴る之等ヤングの登攀記錄を中心とした彼の山岳文章を集めたものであるが、詩人としても聞えた彼のことであるからその文章は又それ自身として讀まれるに値するものである。ヤング今尙健在なるも歐洲大戰に傷き一脚を失ひ爾來往年の飛躍は想ひも及ばない。然し彼の著は能く登攀の勇としての彼を物語り、又依然山に想ひを凝らす彼を映して餘りある。

74. Zsigmondy, Dr. Emil.

Im Hochgebirge. Wanderungen von Dr. Emil Zsigmondy. Mit Abbildungen von E. C. Compton.

26 × 16.5: pp. xv, 365. Leipzig, Dunker u. Humblot. 1889.

1885 年のメイジユ遭難當時ツイグモンデイは二十四歲であつた。ウイーンの醫科大學を出て兵役を了へ漸く醫師として立つたばかりであつた。然し當時ツイグモンデイ兄弟、プルチエラー、シユルツ等は旣に獨・墺登山界の新進と謳はれアルプスを越えて遠くドフイネに迄羽根を延ばして居た。エミールの不慮の死は此の活躍の頂點に襲ひ來つた。『アルプスの危險』の著者であつた彼がメイジユ登攀のより安全なルートを索めて然もその途に斃れたことは如何にも悲傷的であり、宿命的でもある。Im Hochgebirge は彼が生前書遺した登攀記を輯錄し、編者 K. Schluz が卷末に彼の最後を語る一章を加へたものである。登山家として且又山岳畫家として名あるコムプトンの挿繪は此の書の値打を倍加してゐる。

68. Wills, Alfred.

Wanderings among the high Alps.

Second edition, revised, with additions. 18 × 11.5: pp. xix, 426. London, Bentley. 1858.

近代登山史はウイルズ (1828-1912) のヴエツターホルン登攀 (1854) に始るとさへ云はれてゐる。科學者としてアルプスに入つた人はウイルス以前にも少くない、然し一法律家として終始したウイルスは全く樂しみを目的としてアルプス旅行を行つた最初の一人である。此の意味で此の書はアルプス登攀文献中で特殊の地位を持つてゐる。1856年初版が刊行され後二年にして若干の追加を添へて再版された。

69. ———

"The Eagle's Nest" in the valley of Sixt; a summer home among the Alps: together with some excursions among the great glaciers.

19 × 12: pp. xviii, 327. London, Green, Longman. 1860.

ジユネーヴからシヤモニーに行くのには今も昔もアルヴの河を溯るわけだが、シクストの谷は此のアルヴのボンヌヴイーユの上で本流に合流する一支流に副ふ、謂はばシヤモニーの裏谷の一つである。『鷲の巣』といふのは此の谷にウイルスが營んだ別荘の名で本著は此の『巣』を取圍む美しい自然の記述を目的としたものである。シヤモニー街道にはシヤラバンが通つても、シクストの谷は恐らくは今に昔年らの風物を殘してゐるであらう。

70. Wilson, Claude.

An epitome of fifty years' climbing.

22 × 17: pp. 119. London. 1933.

アルプスに幾多の輝かしい記錄を殘したウイルソンが自分の登攀五十年を記念する爲めその登山經歷を綴り知友に頒つたもの。本書は 125 部限定本で勿論非賣の品である。自分の登山經歷をかくも詳細に殘した著者の丹念さ、また前後 238 回ものガイドレス・クライムにただの一度のアクシデントも起して居ない彼の技能の優秀さにはただ驚入るの外はない。

71. Winkler, Georg.

Empor! Georg Winklers Tagebuch. In Memoriam. Ein Reigen von Bergfahrten hervorragender Alpinisten von heute.

25.5 × 16: pp. xii, 324. Leipzig, Grethlen.

若くしてアルプスの華と散つたゲオルグ・ウインクラーの追悼を目的として Erich König により編纂されたもので、ウインクラー自身の登攀手記書翰及び知友の紀行を集めてある。單獨登攀者として讃られたウインクラーが默々として遺した足跡を辿る唯一の書である。1869年生れであるから彼が 1888 年にヴアイスホルンで消息を絶つた時はまだ滿廿歳にはなつてゐなかつた。登山期間は十二歳の時からその死に至る八年間に亘りドロミーテの山々から愈々雪と氷の四千米級の山にかからうと云ふ所で彼は殪れたのである。

アルプス登攀史の上でエドワード・ウイムパー (1840-1911) の名は偉りにも有名である。此の書はウイムパーが最初に世に問ふたアルプス登攀記で前後六回に亙るマツターホルン試登並に 1865 年の初登攀、それに續いて起つた悲傷的な遭難、を始めとし、ドフイネ、シヤモニー、ヴアリス等各地の登攀記錄を輯錄し、彼自らの挿繪を入れたものである。アルプス文献の古典中の古典とも稱すべきものである。本書 1871 年に初版を發行し同年更に再版し忽にして數千部を賣盡してゐる。アルプス文献中之程多く讀まれたものもなければ、又、之程多くの人を發奮せしめ山に驅り立てたものもない。

63. ————

The ascent of the Matterhorn.

22.5 × 16: pp. xxii, 325. London, Murray. 1880.

1871 年に刊行された『アルプス登攀記』の第三版に當るものであるが、此の版は 1879 年に始めて新裝を凝らして現れてゐる。ウイムパーは此の版では原著の或る部分を省略し、特に『マツターホルン登攀』なる題下に公けにしたが、第一、第二版同樣マツターホルン以外の登攀記をも含んでゐる。

64. ————

Scrambles amongst the Alps in the years 1860-1869.

Fourth edition. 23 × 16: pp. xviii, 468. London, Murray. 1893.

『アルプス登攀記』第三版に相當する『マツターホルン登攀』が出てから十餘年後、ウイムパーは決定版として此の第四版を公けにした。内容は第一、第二版を土臺に訂正增補とを施したものであり、從つて實質的には古版よりも優るものと云ふことが出來る。

65. ————

Scrambles amongst the Alps in the years 1860-1869.

15.5 × 10.5: pp. vii, 480. London, Nelson.

『アルプス登攀記』の縮刷版であり第四版によつた廉價普及版である。

66. ————

Chamonix and the range of Mont Blanc. A guide.

19 × 13: pp. xiv, 189. London, Murray. 1896.

ウイムパーの筆になるシヤモニー案内記であるが、シヤモニーを中心とした登攀史もあれば、山岳遭難史も含まれて居て唯の案内書とは大いに趣を異にしてゐる。彼の終焉の地でもあるシヤモニーの谷に彼が獻げた愛着は此の一個の案内書を通しても覗ひ知られる。

67. ————

The valley of Zermatt and the Matterhorn. A guide.

19 × 13: pp. xiv, 212. London, Murray. 1897.

彼のシヤモニー案内記に相對するもの、マツターホルン初登攀者としてウイムパーがツエルマツト由來記を書く最上の資格を備へて居ることは謂ふ迄もない。

58. ———

Über Gletscher und Gipfel.

20 × 12.5: pp. 447. Zürich, Rentsch. 1931.

ゴツトリーブ・シトウーデルが1825-1856年間にアルプスに残した數々の登攀記錄を編纂したもので編輯には Ernst Jenny が當つてゐる。

59. Tuckett, F. F.

A pioneer in the high Alps, alpine diaries and letters of F. F. Tuckett, 1856–1874.

22 × 14.5: pp. x, 372. London, Arnold. 1920.

『彼は無暴の擧を敢てしたことは一度もなく、又人に見せかける爲めに登つたこともない』とフレツシフイールドは著者タケツト (1834–1913) を評してゐる。1853年から1883年に至る長年に亙る輝かしい登攀經歷は一貫して此の面目を貫いて居る。本書は彼の沒後その遺した書翰並に手記を基として編纂されたもので1856年乃至1874年の期間に亙るもの、彼の當時登山界に占めてゐた地位からして、おのづから一つの側面から見たアルプス登攀史とも見ることが出來る。

60. Tyndall, John.

The glaciers of the Alps, being a narrative of excursions and ascents, an account of the origin and phenomena of glaciers, and exposition of the physical principles to which they are related.

20 × 13: pp. xx, 444. London, Longmans, Green. 1860.

アルプス古典の一である。科學者としてのチンダル (1820–1893) は偉りにも有名であるが、アルプスでは彼の名はヴアイスホルンの初登攀者、マツターホルン登攀の一先驅者として人口に膾炙してゐる。『アルプスの氷河』は二部からなり、第一部はアルプス旅行記よりなり、第二部が科學的研究となつてゐる。

61. ———

Hours of exercise in the Alps.

Third edition. 19.5 × 12.5: pp. xii, 475. London, Longmans, Green. 1873.

『アルプスの氷河』出版後十一年にして出たのが此のアルプス旅行記であるが、本書の根幹をなす所は "Vacation tourists" として1860年に、又 "Mountaineering in 1861" として1862年に刊行したものに筆を加へたものである。アルプス登攀の記錄として彼の第一書に比し一段の進境を示してゐることは爭はれない。

62. Whymper, Edward.

Scrambles amongst the Alps in the years 1860–1869.

22.5 × 16: pp. xviii, 432. London, Murray. 1871.

るが、醫師を志し乍ら筆を以て世に知られることになつたスミスの『モン・ブラン』は、彼のパノラマ興行と相俟つて、十九世紀中期の登山勃興の氣運醸成に貢献する所大であつた。

55. ———

A hand-book of Mr. Albert Smith's "ascent of Mont Blanc," with outline engravings of the ascent.

11 × 18: pp. 38. London.

スミスの名を不朽ならしめたロンドン、ピカデイリー、エヂプト館のパノラマの目錄である。エヂプト造りのホールを入ると瑞西のシヤレー式の舞臺が出來てゐて、その奥にパノラマが見える、そして舞臺右の演壇からモン・ブラン登攀の説明をするといふ仕組であつた。セイント・バーナードの眞物が御目見得して婦人連の人氣を一人(匹)で背負つたりして、當時ロンドン一の見世物として鳴らした。興業は内容を少しづつ變へ乍らもスミスの死に至る迄で續けられ、彼が死ななかつたならば何時まで續くことか判らなかつたらうとさへ云はれたものだ。そしてそのパノラマの中では何時もモン・ブランが一番人氣があつた。

56. Stephen, Leslie.

The playground of Europe.

19 × 12.5: pp. x, 321. London, Longmans, Green. 1871.

所謂アルプス古典の一つとしてウイムパー、チンダルの書と並び稱せられるべきもの、思想家、歴史家、或は文學者として幾多の仕事を遺した人である丈けにスティヴン (1832-1904) の著は特にその文章を以て重んぜられてゐるが、彼は同時に幾つかの初登攀によつて黄金時代のアルプス登攀史にその名を遺してゐる。此の書は後にシルヴアー・ライブラリーの一册として若干の追加をして再刊された。

57. Studer, G.

Über Eis und Schnee. Die höchsten Gipfel der Schweiz und die Geschichte ihrer Besteigung.

18.5 × 12: Bern. Dalp.

I. Abtheilung: Berner-Alpen. pp. iv, 300. 1869.
II. Abtheilung: Walliser-Alpen. pp. iv, 330. 1870.
III. Abtheilung: Bernina. pp. v, 302. 1871.
Supplementband: pp, xi, 392. 1883.

瑞西山岳界の先驅者の一人であるゴツトリープ・シトウーデル (1804-1890) は父ゴツトリープ・ジグムント・シトウーデルの子として公證人の職と山岳愛とを受け繼いだ。本書はアルプスの登攀史を各峯別に編纂したものであり、その内容の廣汎詳細な點、その年代の古き點からして正にボールの『アルパイン・ガイド』に比すべきものである。六十九歳の高齢を以てモン・ブラン登攀を敢行したといふ著者の根氣と精力とを以てして初めて可能と云ふべき書である。

Chanbéry, Dardel. 1925.

"Il Monte Cervino" の佛譯本。寫眞は英譯本よりも遙に多く挿入されて居り又能く多樣な此の山の相貌を物語つても居るが、ルビーノの挿繪が虐待されて居るのが惜しい。

51. ———

Peaks and precipices, scrambles in the Dolomites and Savoy. Translated from the Italian by J. E. C. Eaton.

26 × 17.5: pp. 238. London, Unwin. 1914.

アルピニズモ・アクロバテイコの英譯。レイ獨特のスタイルで書かれたこの書物は山の古典として殘るべきものであらう。グレポン、シヤルモ、レカン、ドルー、エギーユ・ヴエルト等のシヤモニーの山々、或はドロミーテの多くの岩峰の最難ルートの登攀記錄を含む。

52. Saussure, Horace-Bénedict de.

Voyages dans les Alpes, précédés d'un essai sur l'histoire naturelle des environs de Genève.

20.5 × 13: Genève, Barde, Manget. 1780–1796.

ドウ・ソシユール (1740–1799) の名とアルプスとは切り離すことは出來ない。彼の1787年のモン・ブラン登攀、1788年のコル・ドウ・ジエアン登攀或は1789年のテオドル・パス登攀等はそれ自身がアルプス開拓史の一節であり、アルプス研究發展の一段階をなすものであつた。彼のアルプス紀行は四折版四册となつて1779, 1786, 1796年に夫々發行され、又八折版として八册に分けて1780–1796年に何れもニユーシヤテルから發行された。本書は後のものである。

53. Schuster, Claud.

Peaks and pleasat pastures.

23 × 14.5: pp. 227. Oxford, Clarendon. 1911.

登山記錄の集錄とは云ふものの、その筆致が著しく文學的なるが故に寧ろ山岳文學書の一つと稱せられてゐる。筆者にとつては特定の頂きや特定の峠はさして重大問題ではない、勿論登山家仲間を相手に書いた技術的な報告でもない。然し其處に著者獨特の境地もあり、本書の値打もあると云ふ可きである。

54. Smith, Albert.

Mont Blanc by Albert Smith. With a memoir of the author by Edmund Yates.

16.5 × 10: pp. xxxvi, 299. London, Ward and Lock. 1860.

アルバート・スミス (1816–1860) はアルプス登攀史に名を掲げる數多くの登山家の中で最も多彩な存在である。彼がモン・ブラン登攀 (1851) の後にロンドンで催した『モン・ブラン登攀』のパノラマ程當時のアルプス熱を煽つたものはないとされてゐ

インゲルシユビツツエで遭難する迄彼はその短い生涯を果敢な山登りに捧げ、能く當時の歐洲登山界に新生面を開拓した。彼は特にドロミーテの山々を愛しこの方面に彼が印した足跡は甚だ廣い。彼が遂にドロミーテの岩峰に華々しい生涯を終つたのも故ありと云ふ可きである。それは彼にとつては七回目のフユンフフインゲルスビツツエ登攀であつた。本書はメイ夫人の編する處で、同夫人による彼の最後の登攀を首め、數多の山行の記事をもつて埋められてある。

47. Ramuz, C.-F. et Edm. Bille.

Le village dans la montagne.

36 × 27: pp. 260. Lausanne, Payot. 1908.

アルプスを旅する者にとつて、アルプス山間の住民の生活は何物にも代へ難い想ひ出の種である。本書は瑞西山村の風物と生活とを素朴直截な繪と文とを以て描く、挿繪は敢て巨匠の手になるものではないが、山を愛する人の筆として雅趣愛すべきものがある。

48. Ratti, Abate Achille.

Climbs on Alpine peaks by Abate Achille Ratti, mountaineer (now Pope Pius XI.) translated by J. E. C. Eaton. With a foreword by Douglas Freshfield, and an introduction by the Right Rev. L. C. Casartelli, Bishop of Salford.

22 × 14: pp. 136. London, Unwin. 1923.

謂ふまでもなく現在のローマ法皇ピウス十一世の著書である。フレツシフイールドの十餘頁に亙る序文は法皇の登山家としての經歴を物語つて餘す所がないが法皇はイタリア人最初のモンテ・ローザ東壁登攀者の一人として知られてゐる。本書の大部分を占める所も此のモンテ・ローザ東壁登攀記錄である。

49. Rey, Guido.

The Matterhorn. With an introduction by Edmondo de Amicis. Translated from the Italian by J. E. C. Eaton.

25 × 18: pp. 336. London, Unwin. 1907.

"Il Monte Cervino"『マツターホルン』(1904) の英譯である。マツターホルンの名が第一に連想させるものはウイムパーの名である。次いで我々はチンダル、グローヴ、マムメリー、ペンナルを想起しマクニアーツやカレルを想ふ。然してその次に來るものがフルグ尾根の初登攀者である我がギド・レイである。『一つの山の爲めに一册の本』と云へば大袈裟にも聞えるが、山がマツタホルンであり、書く人がレイであれば誠に當然でもある。その位此の山は多樣多彩であり、又レイの此の山に獻げた熱情は大きい。本書收むる多くの挿繪(エドアルド・ルビーノ筆)や寫眞も美しい。

50. ———

Le Mont Cervin. Ouvrage traduit de l'italien par Mme L. Espinasse-Mongenet. Préface de E. de Amicis.

43. Moore, A. W.

The Alps in 1864, a private journal. Edited by Alex. B. W. Kennedy.

25 × 16: pp. xxv, 444. Edinburgh, Douglas. 1902.

『ムーア程初登攀にかけて腕を持ち且つ山運の好かつた人は無かつた』と、本書の編者ケネデイーが書いてゐるが、1860年代から1870年代にかけて當時の登山界の第一線に立ち、西はドフイネから東は遠くコーカサスに至る山々を席捲したムーア(1841-1887)の一生は或る意味で登山勃興時代の歴史その物である。ムーアは本來此の驚くべく詳細な登攀記錄を一册の本に纏める望みを持つてゐたが、本職の印度省官吏としての生活の多忙からその望みを果さず、遂にもとの盡で百部内外を印刷に附し知友に分つた。本書はその私刊本を基としてケネデーが編纂したものであるが1864年の山旅でムーアは三度びウイムパーと行を共にし、六つの峠とエクランの初登攀に成功し、更にモン・ブランのブレンヴア氷河からの初登攀を行つてゐる。

44. Mummery, A. F.

My climbs in the Alps and Caucasus.

Second edition. 26.5 × 18: pp. xii, 360. London, Unwin. 1895.

アルプス登攀の黄金時代をウイムパーの著書が代表するならば、十九世紀末葉から今世紀初頃にかけての新しい登山、マムメリー自身の言葉を引用すれば『純粋の遊び』としての登山の勃興した時代を最もよく代表するものは此の著であらう。1855年に生れた著者は1871年初めてアルプスを訪れ1888年及び1890年にはコーカサスに赴き1895年ヒマラヤに遠征しナンガ・パルバツトで遭難、二人のグルカ兵と共にその一生を終つた。ヴアリス、シヤモニーのアルプスを歩く者はマツターホルンに、グレポンにその他到る所にマムメリーの偉大なる足跡を見る。コーカサス、デイクタウはマムメリーの初登攀する所である。本書は之等幾多の果敢なる登攀について彼自身が記した所を集めたもので、彼がヒマラヤへの旅へ出立する直前に印刷に廻されたものである。彼死して後夫人の序文並に彼の友ホブソン(J. A. Hobson)の記す所の追想錄を載せて1903年に改定版が刊行されてゐる。

45. ———

My climbs in the Alps and Caucasus. With an introduction by Mrs. Mummery and an appreciation by J. A. Hobson.

15.5 × 10.5: pp. 379. London, Nelson.

『アルプス及びコーカサス登攀』の改定版を Nelson Library の一として縮刷したものである。

46. Norman-Neruda, May.

The climbs of Norman-Neruda. Edited, and with an account of his last climb, by May Norman-Neruda.

22 × 15: pp. 335. London, Unwin. 1899.

ノルマン・ネルダは1864年にストツクホルムに生れた。1898年の秋、フユンフフ

人であるが、大戦中の激務が著しく著者の健康を損じ遂に戦争終末間もなく瑞西ヴエヴエイの療養院で長逝した。瑞西のシヤレー特有の彫刻文字の研究の一章等はそれ丈けでも興味が深い。

40. Lehner, W.

Die Eroberung der Alpen.

25 × 18: pp. xi, 727. München, Hochalpenverlag. 1924.

アルプス登攀史、第一部史編はモン・ブラン初登攀に至る迄の歴史、第二部はチロール・ドロミーテの所謂東部アルプスに於ける登攀史、第三部は瑞西以西の西部アルプスに於けるそれ。第四部はヒマラヤ、コーカサスその他アルプス外の地方での探検登攀史、挿畫も多い。驚く可き努力の結晶である。

41. Martel, Peter.

An account of the glaciers or ice Alps in Savoy, in two letters, one from an English gentleman to his friend at Geneva; the other from Peter Martel, engineer, to the said English gentleman.

26 × 20: pp. 28. London, 1744.

サヴオイ氷河を報告した二通の手紙で一通は 1741 年に英國の一紳士からジエネヴアの有名なる畫家 Aaland に宛てた佛文手紙の英譯他の一通は著者 Peter Martel からサヴオイ氷河旅行の通信を前記の英國紳士に宛てたものでこれも佛文からの英譯、この二通を合して脚註を加へ銅版地圖一葉、圖版二葉を加へ紙表装に仕立て Peter Martel が印刷人となり一志六片の代價で發賣したものである。恐らく英文でアルプスの氷河を報告したものは本書が最初であらう。併し今では極めて稀本の部に屬し驚ろくべき高價が要求されてゐる。尚ほアルプスの最高峰 Mont Blanc の名が地圖に載つたのは本書挿入の地圖が最初のものである故に C. E. Mathews の有名なる『モン・ブラン年代記』には本書の全文を附錄としてフアクシミルに模刻し右の地圖をも覆製挿入してある。

42. Mathews, Charles Edward.

The annals of Mont Blanc. A monograph, with a chapter on the geology of the mountain, by Prof. T. C. Bonney.

22 × 14.5: pp. xxiv, 368. London, Unwin. 1898.

シヤモニーのクーテの庭には此の高名なる登山家の爲に建てられた記念碑がある。1856 年以來今世紀初期に至る約半世紀に亘りマシウス (1834–1905) の名はシヤモニーからヴアリスの谷にかけて轟き亘つてゐた。アルパイン・クラブの創立者の一人として八代目の會長に推され死に至る迄會の爲に盡す所多かつた彼は又一方故郷バーミンガムでの有力者として此の都市發展の爲にも少からぬ力を致したが、彼が終始最も打込んだものはアルプスであり、それに彼れの人並外れた歴史に對する熱情が結ばれて此の『モン・ブラン年代記』となつたものである。登攀年代記は固より、ボンネイ敎授のモン・ブラン地質論の一章も添えられ、附錄にはマルテルの氷河に關する手記のフアクシミルも出てゐる。

36. ———

Alpine memories. With a bibliographical and literary notice by Eugene Rambert. Translated and with an introduction by W. H. Chesson.

20.5 × 14: pp. vi, 444. London, Unwin. 1894.

ジャヴエルの名著の英譯、今日普及してゐる原著と異り、佛原著二版の爲めのラムベールの數十頁に亘る評傳的序文が譯載されてゐることと、譯者チエツソンの序文の故に單なる英譯書たる以上の値打を持てゐる。

37. Kennedy, Edward Shirley.

Peaks, passes, and glaciers; being excursions by members of the Alpine Club. Second series.

2 volumes. 21 × 14: pp. vol. I, xiv, 445; vol. II, viii, 541. London, Longman, Green, Longmans, and Roberts. 1862.

1859 年刊行の同名の書の續卷として發行されたもの。タケツト、スティーヴン、ウイムパー等の名が筆者の中に出て來てゐる。第一輯に比し內容の地理的範圍も著しく廣まつて居る。ノールウエイ、アイスランドからアルプス、チロール、ドフイネの各地に及び、編纂も此の第二輯では地方別に組織的に記錄を分類して列べてある。編者ケネデイー (1817–1898) は當時ボールに次いで第二代目のアルパイン・クラブ會長の地位にあつた。アルパイン・クラブの會員が初めて定期刊行物の形式でその登攀記錄を發表するに至つたのは此の第二輯發行の翌 1863 年のことである。

38. Kugy, Dr. Julius.

Aus dem Leben eines Bergsteigers.

Dritte Auflage. 24.5 × 17.5: pp. 350. München, Rother, 1931.

クギーの名とユリア・アルプスとは宛もウイムパーとマツターホルンの如く離すことが出來ない。然しクギーはユリア・アルプスの主としてその勇名を故鄉の山間に謳はれたばかりではなく、その足跡はツエルマツトからシヤモニーにも及んで居る。ユリアの山々を熱愛したクギーその人の口から、ユリアやドロミテの山々は西部アルプスの山々と比べれば到底その規模に於いても雄しさに於いても及ぶものでなく西アルプスの登攀の豫備校に過ぎない、と聞かされることは誠に興味が深いが、其處にクギーの面目躍如たるものがある。彼のコリー、マムメリー等との邂逅の光景などにもクギーの恐ろしく謙讓な美しい性格が覗はれる。初版は 1925 年に刊行された。

39. Larden, Walter.

Recollections of an old mountaineer.

23 × 14.5: pp. xv, 320. London, Arnold. 1910.

ウオルター・ラルデン (1855–1919) の山岳關係文章を集めたもの。年代的には 1880 年代から大戰前に至るものである。ジヤヴエルがアンニヴエールの谷を愛し、ウイルスがシクストの谷を第二の故鄉としたやうに、ラルデンはアロルラの谷に打込んだ

20 × 13: pp. xi, 312. London, Longman, Brown, Green, Longmans, Roberts. 1857.

アルパイン・クラブの創立は著者 (1825-1882) に負ふ所大きいとされてゐるが、本書は 1855, 1856 年のアルプス紀行を綴つたものでウイルス、ステイーヴン等の著書と共にアルプス草分時代の文献として貴重なものとされてゐる。

33. Hudson, The Rev. Charles, and Edward Shirley Kennedy.

Where there's a will there's a way: an ascent of Mont Blanc, by a new route and without guides. Second edition. With two ascents of Monte Rosa.

20 × 12 5: pp. xvi 143. London, Longman, Brown, Green, Longmans, and Roberts. 1856.

所謂アルプス登攀の黄金時代は新登攀記録に終始し、幾多のアルプスでの山頂は一應此の 1860 年を中心とした前後十年の間に登頂されて居る。然し同じ時代に於いて既に一方には新登路による登攀の試みが現れ、モン・ブランが專らその舞臺となつてゐた。1855 年のケネデイー (1817-1898) ハドソン (1828-1865) 等のモン・ブラン登攀は、案内無しの最初の登攀であつたことと、サン・ジエルヴエから直接の登頂であつたことから少からず注目を惹いた。1855 年一年の間に版を重ねた事實が當時此の登攀が如何に問題とされたかを物語る。

34. King, Rev. S. W.

The Italian valleys of the Pennine Alps: a tour through all the romantic and less-frequented "Vals" of Northern Piemont, from the Tarentaise to Gries.

20 × 13: pp. viii, 558. London, Murray. 1858.

交通の發達した瑞西側に比べれば同じアルプスでもイタリア側は兎角忘れられ勝ちである。キング (1821-1868) の著は比較的人の訪れることの少い此のイタリア側の風物を叙したものであり、フレツシフィールドの名著『イタリア・アルプス』と列び稱せられるものである。内容は地質、植物、動物等の記述のみならず住民、建築等にも及んで居り、ハンニバルの通過峠論等歷史的所論をも含む。

35. Javelle, Emile.

Souvenirs d'un Alpiniste, preface de Henry Bordeaux de l'Académie Française.

18.5 × 12: pp. 307. Paris, Payot, 1920.

詩想豊かな登山家としてジヤヴエル (1847-1883) の名は佛りにも有名である。愛誦すべき珠玉の文を連ねた山岳書と云へば、佛語にあつては誰しも先づ本書を推すに躊躇せぬであらう。アンリー・ボルドウの序文亦本著者の山岳文學上に於ける地位を說きつくしてゐる。

寫眞の原物を貼付してあるのが一寸異様である。殊に氷河に重きを置いて氷河の成因、現象、職分等を論述してゐるチンダルの先著『アルプスの氷河』の影響を多く受けてゐることは著者の序文及び本文からも看取せられる。本文十三章、寫眞圖版二十八枚、そしてその寫眞は學術的に要點が置かれてある。

29. Gilbert, Josiah, and G. C. Churchill.

The Dolomite mountains. Excursions through Tyrol, Carinthia, Carniola and Friuli.

21 × 15: pp. xx, 576. London, Longman, Green, Longman, Roberts and Green. 1864.

Dolomite 山岳文献としては最も古い方である。著者等は 1861, 1862 及び 1863 年に亘つて Tyrol, Carinthia, Carnioia 及び Friuli 地方から登山旅行をしたもので著者等の實寫に基づいた風景描寫を着色石版に製版してあるがいゝ出來だ。その外に有名なるウイムパーの彫刻した木板圖をも入れてある。最後に Dolomite 山地の地質上の論文と着色地質圖一葉が添えられてある。

30. Girdlestone, Rev. A. G.

The high Alps without guides: being a narrative of adventures in Switzerland, together with chapters on the practicality of such mode of mountaineering, and suggestions for its accomplishment.

21 × 14: pp. 181. London, Longmans, Green. 1870.

ガイドレス・クライミングの先驅者ガードルストン (1832-1908) の著書である。本書收むる所の登攀は多く彼の學生時代のものであるが、案内の有無の問題が英國登山界で盛に問題にされた當時出た此の著はアルパイン・クラブで討議の題目に取り上げたりして少からぬ注目を惹いた。當時は案内なしの山登は全く妥當性を缺くといふ見解が壓倒的であつたが、後三十年ならずして英國山岳界にも勃然としてガイドレスの猛者が續出した。ガードルストンは身を僧籍に置き死に至るまでロンドン、クラファム・パークのオール・セインツ敎會のヴイカーとして激務に從事した人である。

31. Gribble, Francis.

The early Mountaineers.

21 × 14: pp. xiv, 338. London, Unwin. 1899.

アルプス登攀先驅者の業績を述したもの。1786 年のモン・ブラン初登攀から 1854 年のアルフレツド・ウイルスのヴエツターホルン登攀迄をアルプス登攀の黎明期と稱するならば、本書は有史以來から此の黎明期に亘る人類の登山史である。モン・ブラン登攀やそれより遙に溯るゲスナー、ジムラー、シヨイヒツアー等の業績を述べ、ウインダム、マルテルの手記の如き稀覯書からは原文をその儘轉錄してゐる。

32. Hinchliff, Thomas W.

Summer months among the Alps: with the ascent of Monte Rosa.

24. Freshfield, Douglas, W.

Italian Alps, sketches in the mountains of Ticino, Lombardy, the Trencino, and Venetia.

16.5 × 13.5: pp. xvi, 385. London, Longmans, Green. 1875.

1870年代に最も廣く讀まれ、又多くの人を山に驅り立てたものはウイムパーの『アルプス登攀記』とフレツシフイールド(1845–1934)の『イタリア・アルプス』であると云はれてゐる。キングがペンニン・アルプスをイタリア側から眺めてゐるに對しフレツシフイールドはサン・ゴツタルドからエンガデインにかけてのアルプスを南側から眺め、ラゴ・マジョーレ、ラゴ・デイ・コモを取圍む山塊を叙述してゐる。

25. ————

Hannibal once more.

22 × 14: pp. 120. London, Arnold. 1914.

ハンニバルがどの峠を越えてイタリアに乘込んだかは長い間の歷史家の間の問題である。此の書はフレツシフイールドの此の問題に對する寄與で、彼の歷史家としての面目を發揮した少數の著述の一つである。

26. ————

The life of Horace-Bénédict de Saussure.

23 × 17: pp. 479. London, Arnold. 1920.

探檢家、登山家として全く比類なき業績を遺したフレツシフイールドは、歷史家としても幾多の貢獻をしてゐる ドウ・ソシユール傳はその中の最も重要な一つである。モン・ブラン登攀、氷河研究等でアルプス登攀史に不朽の名を遺したドウ・ソシユールその人については殆んど說明を要しない。謂はば本書は偉大なる山岳人の手になる偉大なる山岳人の傳記である。山岳誌家としてクリーツヂと並び稱せられるモンタニエー(1877–1933)が本書著述に當つては重要な協力を獻げてゐる。

27. ————

Below the snow line.

22 × 14: pp. vi, 270. London, Constable. 1923.

雪線の上を步くと同じく雪線以下をも彷徨ひ、體操をする必要のないやうな容易な山登りにも興味を持つた、謂はば登攀者であると同樣に旅行者でもある、と自ら序文で述べてゐるフレツシフイールドの雪線下彷徨の記錄を集めたものであるが、却つて巨人フレツシフイールドの面目躍如たるものがある。上高地や妙義を訪れた1913年著者の本邦滯在當時の記錄も載錄されてゐる。

28. George, H. B.

The Oberland and its glaciers: explored and illustrated with ice-axe and camera.

27 × 22: pp. xii, 243. London, Bennett. 1866.

オーバーランド・アルプスの山岳及び氷河を記述したものであるが題名の通り圖版

20. Fischer, Andreas.

Hochgebirgswanderungen in den Alpen und im Kaukasus.

20 × 14: pp. vii, 311. 1919. Neue Folge, pp. v, 226. 1924. Frauenfeld, Huber.

マイリンゲンの谷の産であるフイツシヤーは山案内として人生の第一歩を踏み出した珍らしい經歴の持主である。後グリンデルワルドの小學校に聘せられ、次いで學位を授けられてバーゼルの中學校に教鞭をとつた。正に立志傳中の人である。然し彼の山への献身は遂に終始變る所なく、遂にその生命を、彼の父及び兄と同じく、山に献げた。技術からしては勿論教養からしても第一流の山岳人に鍛え上げられた彼であれば、その筆も亦尋常のものではない。本書二巻はフイツシヤーの生前書いた所を集めたもので、前後二回のコーカサス探檢記をも含み、又、首巻には編者 Ernst Jenny による傳記をも收めてある。

21. Forbes, James D.

Travels through the Alps of Savoy and other parts of the Pennine chain with observations on the phenomena of glaciers.

25 × 18: pp. x. 424. Edinburgh, Black, 1843.

氷河學 (Glaciology) が起つたのは至つて近代のことであるがその權輿とも大成者とも云ふべきはエデインバラー大學教授フオーブス先生のサヴオイに於けるアルプス登山探檢の結果著述せられたる本書で出品されたのは其第一版である。シヤモニイの『氷の海』の研究、ツエルマツト附近から Mont Cervin, Monte Rosa の氷河研究に及んでゐる。精巧美麗なる藝術的石版九枚、精密なる銅版地圖二枚、說明的スケツチ數點を收めてある高山氷河の研究書として最大の權威書である。

22. ———

The tour of Mont Blanc and of Monte Rosa, being a personal narrative, abridged from the author's "Travels in the Alps of Savoy," etc.

17 × 12: pp. xi, 230. Edinburgh, Black, 1855.

1843年に發行された『アルプス旅行記』から氷河研究の部分を除き登山記錄に關する部分のみを縮刷したものである。

23. ———

Travels through the Alps. New edition revised and annoted by W. A. B. Coolidge.

23 × 16: pp. xxxviii, 572. London, Black. 1900.

フオーブスが『アルプス旅行記』を刊行したのは1843年の事であるが本書はクーリツヂが右書に脚註を附して複刻したものである。然し單著からの複刻は本書の第一部たるサヴオイ及ペンニン・アルプス旅行記に止り、本書第二部以下はクーリツヂが他の著又は雜誌から救出して來たものである。此の意味からして本改訂版はクーリツヂの序文、脚註以外に更に別の値打を持つてゐる。

は謂ふ迄もないが、デントはドウリユに對し十八回の登攀を試み十九回目に漸く成功して居る。文章洵達諧謔亦一流　醫者であつた著者はその道に於いても名をなしてゐるが、更に廣くは『バドミレトン叢書』の『登山術』の編者としても知られてゐる。

16. Edwards, Amelia B.

Untrodden peaks and unfrequented valleys: a midsummer ramble in the Dolomites.

21.5 × 16: pp. xxvi, 385. London, Longmans, Green. 1873.

本書に取材せられた區域はチロールの南東地方で普通に Dolomites と呼ばれた石灰岩特有の山貌を露出するところである。著者の旅程を朱線入りで示した着色地圖一葉の外に大小の圖版は木口木版から成つてゐる木板藝術としては稍や說明的であるが傑作もある。この地方は 1868 年に Ball の案内記が出版されるまでは殆んど知られなかつた區域であつたが 著者に依つて處女峰や 未墾地の開かれたのが少なくはない。

17. Fellenberg, Edmond von.

Der Ruf der Berge. Die Erschliessung der Berner Hochalpen.

20 × 13: pp. 358. Zürich, Rentsch. 1925.

フエルレンベルク(1838-1902)がベルナー・オーバーランドを中心として1862-1883年の間に行つた數々の登攀の記錄をイエンニイ(Ernst Jeanny)が蒐集編輯せるもの。

18. Field, A. E. and Sydney Spencer.

Peaks, passes and glaciers. By members of the Alpine Club.

Third series. 21 × 14: pp. xi, 307. London, Methuen. 1932.

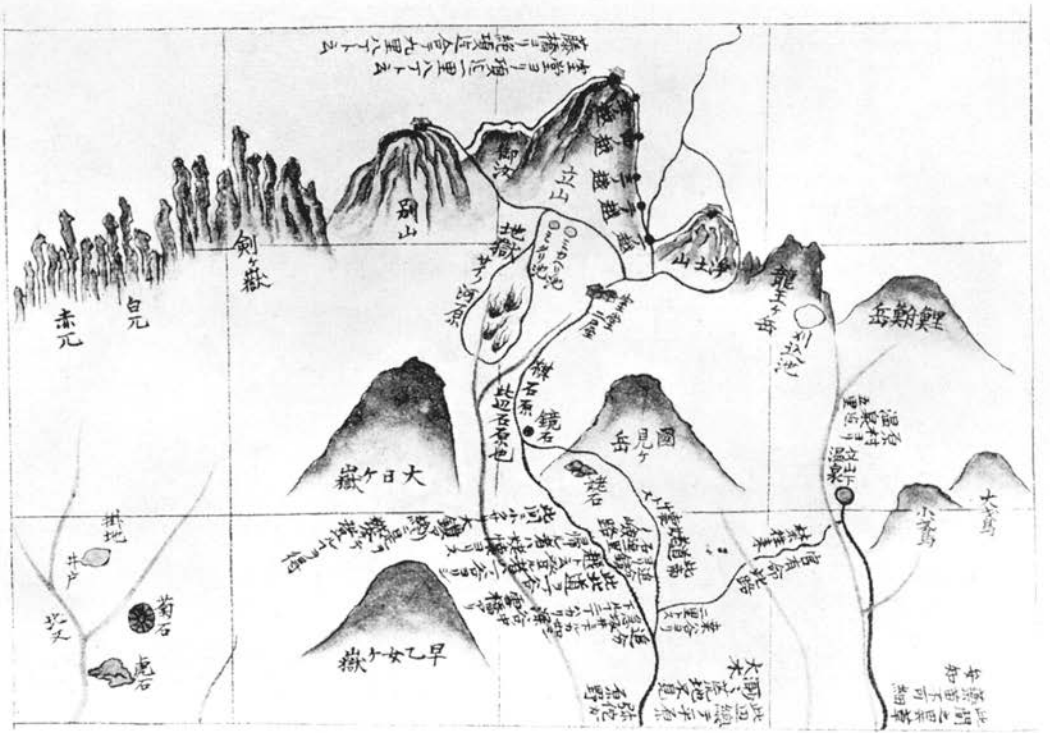
同名の第一、第二輯に續くものである。然し第三輯は既に一度アルパイン・ジヤーナルに發表されたものからの拔萃であり、此の意味でその動機を異にする。内容に盛られた所は 1860 年代から 1870 年代初頃に至るもので、アダムス・レイリー、グローヴ、ウオーカー、ムーア、マシウス、ケネデイー、フレツシフイールド等の文章が輯錄されてゐる。

19. Finch, G. I.

The making of a mountaineer.

23.5 × 15.5: pp. 340. London, Arrowsmith. 1924.

1922 年の第二回エヴエレスト登攀記錄を讀んだ者はジョージ・フインチの名を忘れることは出來ない。濠洲に生れ瑞西で育つた著者は チユーリヒ學生山岳會の一員として早くからアルプスに名を知られて居たもので、本書もこの大部分は彼のアルプスでの登攀記行から成立つてゐる。フインチは 英國青年の精神振興を眼指して此の登山家としての自分の生ひ立ちを編んだと書いてゐるが、此の書から多くを學び、又多くの喜びを抽出し得るものは必ずしも英國青年とは限らない。誠に 快適の書と云ふべきである。



榊原守郁撰『立嶽登臨圖記』より

（13×19.5 cm）

An ACCOUNT of the

GLACIERES

OR

ICE ALPS

IN

SAVOY,

In TWO LETTERS,

One from an

Engliſh Gentleman to his Friend at *Geneva*;

The other from

PETER MARTEL, Engineer,
to the ſaid *Engliſh* Gntleman.

Illuſtrated with a MAP, and two Views of the PLACE, *&c.*

As laid before the ROYAL SOCIETY.

LONDON,
Printed for PETER MARTEL,
And Sold by *W. Meadows* in *Cornhill*; *P. Vaillant* in the *Strand*; *G. Hawkins* between the *Two Temple Gates*; *R. Dodſley* in *Pall Mall*; *J. Pallaret* againſt *Catherine Street* in the *Strand*; and *M. Cooper* in *Paſter Noſter Row*. MDCCXLIV.
(Price One Shilling and Six-pence.)

マルテル著『氷河記』より（扉）

（26×19.5 *cm*）

第六章はアルプスの本體、その周圍の社會並に動植物を說明し、第七、第八兩章でアルプス及その峠の歷史を叙し、第九、第十兩章でアルプス開拓並に登攀の歷史を取扱ひ、更に續いて山案內、アルプス各地方別の說明等、殆んどアルプス百科全書の觀がある。附錄には高度表、登攀年代誌、文獻目錄等を載錄して全く完璧と稱すべきものである。

12. ————

A list of the writings (not being reviews of books) dating from 1868 to 1912 and relating to the Alps or Switzerland.

Privately printed (150 copies). 23 × 16: pp. 37. Grindelwald, Jakober-Peter. 1912.

クーリツヂの著作目錄。クーリツヂの歷史家、山岳誌家としての偉大な業績を知る好個の資料である。

13. ————

Alpine studies.

22.5 × 14.5: pp. xii, 307. London, Longmans, Green. 1912.

『登攀』、『アルプスの歷史』、『雪線下山岳』の三部からなる。クーリツヂの筆になる數多くの述作から著者自らが選擇したもの。山岳誌家として前後に比類なしとされたクーリツヂは、登山家としても當代に並ぶもの少しとされた人であり、特にドフイネの開拓者。1874年のヴエツターホルン、1879年のシレツクホルン冬期登攀では冬期登山の先驅者とも稱せられるに至つた。1909年以來死に至る迄グリンデルワルドに定住したが、彼の足跡は佛、瑞、伊三國に跨りその登頂數は裕に千に及んだと稱せられる。本書第一部には、有名なチンゲル追想記が含まれて居る。

14. Cunningham, C. D. and Cap. W. de W. Abney.

The pioneers of the Alps.

32.5 × 25.5: pp. x, 287. London, Low, Marston, Searle, and Rivington. 1887.

開拓時代のアルプス登攀史並に當時勇名を馳せた山案內の銘々傳。第一部登山發達史は 1387-1885 年を四期に分つて叙述し、更にガイドレス登攀、冬期登攀、登山用具、山案內術等の各章を附加してある。山案內銘々傳の部分は物故並びに當時現存山案內の猛者を網羅し、彼等の肖像も掲げてある。

15. Dent, Clinton.

Above the snow line. Mountaineering sketches between 1870 and 1880.

With two engravings by Edward Whymper and an illustration by Percy Macquoid. 20 × 12: pp. xiv, 327. London, Longmans, Green. 1885.

エギーユ・ドウ・ドウルユの初登攀者として知られたデント (1850-1912) の著書。アルプス登攀記中の白眉である。ドウリユ登攀が本書中の最も興味ある部分であること

翌してゐるが、アルプ・マリテイムから始つた此の大旅行は モン・ブランから オーバーランドに至り、再び南下して ヴアリスに入り、更に 北上オーバーランドから中央アルプスに走り、チロールを經て 遂に アンコーグルで幕を閉ぢてゐる。行程百哩、伊・佛・瑞・墺四ケ國に誇り、前後三十九の峠を越え二十一の頂上を極めてゐる。コンウエイは此の山間放浪で、放射狀登山に對する 縱走登山主義とも 稱すべき一つの登山形式を實踐して放浪派のために萬丈の氣を吐いてゐる。後此の書は 1900年に縮刷され、更に 1933年 Travellers' Library の一册として刊行された。

8. ————

The Alps.

Described by W. Martin Conway, painted by A. D. McCormick.
26.5 × 21: pp. x, 294. Edition de luxe. London, Black. 1904.

1901年コンウエイは自分の愛娘を伴つて 二十九年前に學校の子供として初めて登つたブライトホルンに歸つて來た。アルプスは固より、カラコラム、スピツツベルゲン、南米等に及んだ多樣多彩な探檢と登攀との半生がいみじくも彼にとつての最初の頂きであつた此のブライトホルン登攀で閉ぢられたのである。『アルプス』の著は彼が山の生活の要約として山に、そして山を愛する人々に獻げた エセイを集めたものと見ることが出來る。『カラコラム』以來彼の著書には附物のマコーミツクの色刷の揷畫も一際眼立つて美しい。

9. ————

Mountain memories, a pilgrimage of romance.

23.5 × 16: pp. 282. London, Cassell. 1920.

書名の示す如く、過去の山行を回想風に綴つたもの、舞臺はアルプス、カラコラム、スピツツベルゲン、アンデス等に亘つてゐる。コンウエイは美術批批家、歷史家、登山家、探檢家、政治家、その何れの分野に於いても面目を發揮してゐるが、本書は登山家、探檢家としての彼の一面に就いて物語つたものであり、後1933年に『一登山家の自叙傳』なる題下に Travellers' Library の中の一册として覆刻された。

10. Coolidge, W. A. B.

Swiss travel and Swiss guide-book.

16 × 12.5: pp. xi, 336. London, Longmans, Green. 1889.

瑞西に於ける旅行樣式の變遷、案內記の發達の跡を辿つた 文獻考證が 第一部を占め第二部は 今日では登山の中心として 名だたるツエルマツトの歷史的研究となつて居る。

11. ————

The Alps in nature and history.

22 × 14: pp. xx, 440. London, Methuen. 1908.

クーリツヂ (1850–1926) の名著である。表題の示す通り自然及び歷史から見たアルプスの叙述。アルプス全體を對象として書かれたもので、之程充實したものは前後その比を見ない。著者が 一世無比の山岳誌家として 名ある所以である。第一章乃至

も當時の時世を物語るやうで興味が深い。1926年續巻二册と合せたもの丶抜萃が Everyman's Library 中の一册として刊行された。

4. Berlepsch, H.

The Alps or sketches of life and nature in the mountains.

Translated by the Rev. Leslie Stephen., with 17 plates from designs by Emil Rittmeyer. 22.5 × 15: pp. iv, 407. London, Longman, Green, Longman, and Roberts. 1861.

本書はベルレプシュの Die Alpen in Natur- und Lebensbildern をレスリ・スティヴンが英譯したもの。この本のアルプスの自然及び人間のヴィヴィッドで詩的な描寫が如何に歓迎されたかは、著者の死後原著が第五版まで版を重ねたことでも證明される。

5. Bonney, T. G.

The building of the Alps.

22 × 14.5: pp. 384. London, Unwin. 1912.

アルプスの地質、地形、氷河動植物を論じ、その人文地理、登攀史に及ぶ、恐ろしく廣範圍に亘る題目を包括したものである。登山家であり科學者である著者にして初めて可能な事柄である。

6. Brockedon, William.

Illustrations of the passes of the Alps, by which Italy communicates with France, Switzerland, and Germany.

33 × 24: Volume the first, containing the Little Saint Bernard, the Mont Genèvre, the Mont Cenis, the Mont Saint Gothard, the Great Saint Bernard, and the Mont Stelvio. 1828. Volume the second, containing the Cornice, the Grimsel and the Gries, the Bernardin and the Splugen, the Brenner, the Tende and the Argentière, and the Simplon. 1829. London.

アルプスに關心を持つ人は當然その頂きと頂きとの間に低く横はつてゐる峠路に心を惹かれる。アルプスを挟んで展開した北歐と南歐との文化の跡を辿る人々には尚更ら此の二つの文明を結びつけた交通路が興味のある問題である。ブロックドンの「アルプスの峠」は實に夫々の峠路の圖を集めたのであるのみならず、夫々の峠の由來とも書記したことから、一層興味ある著書と云ふべきである。

7. Conway, Sir William Martin.

The Alps from end to end.

With 100 full page illustrations by A. D. M'Cormick. 24 × 17: pp. xii, 403. London, Constable. 1895.

1892年にカラコラムに入つたコンウェイ（今の Lord Conway of Allington）は此の探檢に同伴したグルカ兵二人をつれて1894年アルプスを訪れ六月の初めから八月の末迄八十六日間をアルプス山中に過した。一行はその間實に六十五日を登攀に

I. 歐　洲

アルプス

1. Agassiz, L.

Etudes sur les glaciers. Dessinés d'après nature par Jph. Bettannier.

41 × 30: Neuchatel, Nicolet. 1840.

氷河學者の開祖とも云ふべきルイ・アガシイ先生の氷河研究論文の附圖と見るべきものであらう。大版の着色石版十四面、その中には有名な Hugi の穴小舍(この中に立てこもつてアールの氷河を觀察研究したのである)もあり、種々の氷河現象を克明に描寫してある。石版はこの時代が發祥の創造期とて稚拙、怪奇なところもあるが、それでゐて學術的の說明には事缺かないだけの要點が把握されてゐる。

2. Auldjo, John.

Narrative of an ascent to the summit of Mont Blanc, on the Eighth and Ninth of August, 1827.

Third edition. 17 × 12: pp. xii, 119. London, Longman, Brown, Green, and Longmans. 1856.

1786年の初登攀から1851年のアルバート・スミスの登攀まで、此の半世紀餘の間に前後三十七回のモン・ブラン登攀が記錄されてゐるが、アウルジョーの登攀は1827年で初登攀から數へて十六回目に當る。山案內の間に挾まつて二本の棒につかまつて歩いた時代の話である。1856年刊行本は最後の版で初版出版以來三十年近く經つて尙此の縮刷版が發行される程、此の書は當時人氣を呼んだものである。

3. Ball, John.

Peaks, passes, and glaciers. A series of excursions by members of the Alpine Club.

21 × 14: pp. xvi, 520. London, Longman, Green, Longman, and Roberts. 1859.

アルパイン・クラブの創立は1857年となつてゐる。そして本書はクラブが最初に編纂した登山記の輯錄。編者ジョン・ボール (1818-1889) は初代の會長である。寄稿家の中にはウイルス、チンダル、マシウス等の名も見え、最後にボールがアルプス旅行者の爲めに心得書を書いたり、アルプス高度表を附けたりしてゐる所が如何に

小島烏水

31. 日本アルプス

23×16：東京 前川文榮閣

（第一卷）	pp. 318, 附錄 13.	明治四十三年 (1910)
第二卷	pp. 304.	明治四十四年 (1911)
第三卷	pp. 294.	明治四十五年 (1912)
第四卷	pp. 317.	大正四年 (1915)

第一卷初版には『第一卷』の字なし。

第一卷、自然の藝術とラスキンの山岳論、第二卷、日本アルプスの風景論、第三卷、日本の氷河問題、第四卷、山岳崇拜論など、が各卷の主要論文である。

外に紀行あり、白峰山脈（第一卷）は明治四十年の失敗記及び四十一年に於ける高頭、田村兩氏との白峰及び地藏、鳳凰の縱走記であり、日本北アルプス縱斷記（第二卷）は同四十三年に於ける高頭、高野の兩氏と共に槍、双六と雲ノ平に出で黑部をこへて藥師に縱走した時の記錄。また谷より峰へ（第三卷）は明治四十四年著者が穗高より槍へ縱走し、更に宮川池より明神に登つた記錄。双六谷（第四卷）は大正三年七月著者が双六谷を探檢し笠に登つた時の紀行である。何れも日本アルプス探險時代の登山記錄として貴重なる文獻である。箱、表紙、見返し、挿畵等夫々織田、大下、丸山、茨木、小杉、中澤、中村、武井、杉浦、赤城、橋本、鈴木等諸畵伯の手になり意匠萬端趣好を凝す。

日本山岳會

32. 高山深谷

第一—八輯　東京　日本山岳會　明治四十三年—大正六年 (1910–1917)

日本山岳會の山岳寫眞集『高山深谷』は、明治四十三年以來大正六年まで毎年一秩宛つ編輯發行され、各秩とも十二枚の密着燒寫眞から成つて居り、辻村伊助氏作スイス風物寫眞を集めた第六輯を除いては、日本アルプスの寫眞が大部分を占めてゐる。一輯の發行部數は 100 部前後。一輯毎に編輯者自ら密着燒付けたもの。

辻村伊助

33. スウイス日記

23×16.5：pp. 266　東京　横山書店　大正十一年 (1922)

本文二六八頁、シユレツクホルン群峰地圖五萬分ノ一、赤線著者登路及びスウイス略圖百九十萬分ノ一圖を添ゆ。寫眞圖版殊に秀ぐれたり。

高　頭　式

26. 日　本　山　嶽　志

22 × 15：　pp. 1075.　東京 博文館　明治三十九年 (1906)

家人によつて登山を禁止された著者の不滿が十年に餘る地誌の文献渉獵の後、この尨大なる山岳志を造り上げた。一つの山岳古典として、重要な參考資料たるは勿論、日本登山界に與へた刺戟からしても歷史的文献たるを失はない。榎本武揚の題字、石黒忠悳、三島毅、建部遯吾、小川琢治の諸家の序文、依田百川氏の跋、小島烏水氏の撰修の言。著者の言について、山岳地圖、寫眞があり、索引について、小島、大平晟、著者の登山術の解說、矢津、神保、志賀、山崎、野中、石川、坪井、佐藤の諸氏による山岳概論、原田、小川兩氏による日本物質構造論、ついで本書の主體をなす山岳各論に入る。山名考、所在、標高、登路などにつき各種文献を引用し、山岳噴火年表、山岳表で終つてゐる。

國府犀東　平福百穗畵

27. 不　二　一　周

26 × 19：　pp. ii, 79.　東京 隆文館　明治四十年 (1907)

著者が平福氏と共に富士登山及び山麓一周せる時の收獲で、國府氏の筆、平福氏の彩畵、相待つて名山富士を描く。

小島烏水補修

28. 富　士　山　大　觀

15 × 11：　pp. 293.　東京 如山堂書店　明治四十年 (1907)

本書は明治三十二年『小國民』の臨時增刊として出版された『富士山奇觀』を烏水氏の補筆して新に發表したもの。

小　島　烏　水

29. 雲　　表

12.5 × 9：　pp. 240.　東京 左久良書房　明治四十年 (1907)

本著の骨子をなす『日本アルプスの南半』は、古く『山岳』に收錄されたもので、著者明治三十九年に於ける一つの登山記錄である。著者の友横瀨夜雨に献げられ彼を病床になぐさむる爲め特に小型に造られた。挿畵　丸山晩霞、中澤弘光氏作各一葉。

小　島　烏　水

30. 山　水　美　論

18 × 13：　pp. 266.　東京 如山堂書店　明治四十一年 (1908)

明治三十六年より四十年にかけての紀行文、風景論等の內より選らばれたるもの、『甲斐山岳の形態美』、『雪中富士登山記』、『日本アルプスなる名稱』、『紀行文論』等。挿畵、大下藤次郎氏上高地風景水彩一葉。

小島烏水撰

20. 旅　　行　　談

15×11：pp. 224. 東京 內外出版協會　明治三十五年 (1902)

撰者の『文庫』時代、日本人は旅行をどう見るかの疑問を抱き、諸方面に旅行談を募集し、そのうちから面白いものを烏水氏が撰集したもので、中には岩手山や立山のことも出てゐる。ともかく當時に於ける日本人の旅行經驗談で、仲々興味が深い。

高島北海畫並に著

21. 寫　山　要　訣

22×15：pp. 78. 175 圖　東京 東陽堂　明治三十六年 (1903)

北海道、千島、東北より本州中部、九州に及び外國の山にも及ぶ、着色地質圖三葉を添ゆ、乘鞍、御嶽、槍ケ岳等の寫生圖あり、本文は地質學的に、山水畫殊に山の繪畫を考察せり。皴法圖、花崗山岳眞景圖、火山形態圖、水層岩形態圖、瀑布形態圖等を實寫を以て解說す。

小　島　烏　水

22. 不　　二　　山

19×13：pp. ii, 208. 東京 如山堂書店　明治三十八年 (1905)

上中下の三篇に分たれ、上篇に自然美を論じ、中篇に裾野や各地から富士を眺め、下篇には富士に登り、その霧、月、雲、日の出を論じてある。附錄として『金剛杖』、『不二研究に資する圖書書籍』が添へてある。

小　島　烏　水

23. 日　本　山　水　論

21×15：pp. 357. 東京 隆文館　明治三十八年 (1905)

從來の日本の風景觀を一變させたといはれる志賀重昂氏の『日本風景論』の出版後十年、小島氏の本著が刊行された。我國の山岳美、森林美、溪谷美を論じ、一面には登山の注意、準備をも說いて剩す所がない。

小　島　烏　水

24. 烏　水　文　集

19×13：pp. 365. 東京 本鄉書院　明治三十九年 (1906)

著者の論文集。『高山植物』の一篇あり。

小　島　烏　水

25. 山　水　無　盡　藏

19×12.5：pp. 312. 東京 隆文館　明治三十九年 (1906)

鎗ケ嶽探檢記、秋の木曾街道、乘鞍嶽に登る記、飛騨縱斷記等の紀行文を集めたるもの。序文、島崎藤村氏、挿繪二葉、丸山晩霞氏。

伊藤圭介著、榊原芳野校補

14. 日本物産志、信濃部

上下兩巻　25.5 × 18：　41, 40 枚　文部省　紀元二千五百三十七年（明治十年）(1877)

明治早期の博物學書にして、上巻にハヒマツ、コマクサ等、下巻に雷鳥、カモシシ、其他所産鑛物の記述あり。『コマクサ』の條に『木曾御嶽の絶頂に近き二ノ池、三ノ池の邊に生ず駒ケ嶽にもあり乘鞍嶽には殊に多し』と記す。又『雷鳥の胃中の食を檢せしにハヒマツ、イハモモ、ツガザクラ等の嫩芽花實等あり』と記す。

志賀重昂

15 日本風景論

22.5 × 15：　pp. 219.　東京 政教社　明治廿七年 (1894) 十月

本文二百十九頁初版のこととて正誤表を添ゆ。表紙は樋畑雪湖氏畫の木曾駒ケ岳を用ゆ。

高島得三

16. 歐洲山水奇勝

25 × 18.5：　I. 佛蘭西 22 圖、II. 伊太利 7 圖、蘇格蘭 11 圖、北海漁莊藏版　明治廿六年 (1893)

北海漁夫作、折本畫帖。フランスの部にはサランシュ村より見たる白山（モン・ブラン）その他シヤモニーの山々及びピレネーの山々の圖を含む。イタリアの部には北イタリアの湖水風景、スコットランドの部にもベン・ネビスその他山地風景數多し。

小島烏水

17. 扇頭小景

18.5 × 13：　pp. 154.　東京 新聲社　明治三十二年 (1899)

著者の處女出版。多摩川を溯り、丹波山を踰へ、昇仙峽に遊ぶなど、甲斐の山水を紹介してある。

小島烏水

18. 銀河

18.5 × 13：　pp. 164.　東京 內外出版協會　明治三十三年 (1900)

冬の富士、富士の委繪など富士に關するものの外、箱根、丹波山の記文もある。

高橋白山

19. 白山文集

全五巻（三册に合綴）　24 × 15：　25, 24, 31 枚　明治三十五年 (1902)

信州高遠藩士高橋白山の文集、文久癸亥 (1863)、鷲津毅堂、明治三十四年依田百川等の序あり、全漢文。中房温泉、白崩岳（東駒岳）、御嶽（木曾）、布引山、淺間嶽等の登攀記あり、殊に白崩岳は明治十五年 (1882) 九月の登山にして早期の登山文献に屬す。

神原守郁撰

7. 立嶽登臨圖記　附 江都方位圖記

27 × 18.5：7枚　嘉永五壬子年 (1852)

立山劔岳北針木山後立山餓鬼岳等を圖示す。別に鳥瞰的寫生圖あり天保甲辰(1844)六月二十六日源守郁登臨於立嶽之圖とあり。和本、彩色寫本（稀）現に存在する寫本として恐らく兩三部を出でざらむ。

8. 富士山用達　諸國道中定宿附

7 × 16.5：75枚　横長の細本　安政六年 (1859)

富士山用達根本表口執事の看版標記あり、大宮表口（舊道）にての出板か。口上に、『此通り木のかんばんをかけ置申候是を目當に御泊り可成下候尤諸事實意に御世話仕候必賣女飯盛などは決而おすすめ不申候』とあり卷尾に富士靈藥の廣告を添ゆ。

逐日庵萩の眞垣生年七十餘歳書

9. 富士山御緣年山本記

寫本　25.5 × 16.5：28枚　文久二戌年 (1862)

富士御緣年記の外に甲斐國御嶽山金櫻神社の舊記を合綴す。

10. 木曾御嶽山圖記

17 × 12.5：12枚

板本、御嶽山の案内記にして詳圖數葉あり、卷尾に覺明傳來神法丸、岳草圓、弘所（ヒロメドコロ）、木曾福島宿岩屋嘉左衛門とあり。

甲斐國瀧口氏源恭親謹述

11. 富士山根元實記

板本　25.5 × 17.5：24枚　椿林堂藏版

神佛混合時代の富士山の教書。

12. 立科山略傳記　附 八ガ嶽

板本　24.5 × 15.5：7枚　年代未詳、江戸中期頃か

八ケ嶽鎭座大神として八柱雷大神（やつはしらいかづちのおほんかみ）を擧げ此神嶽ごとに一座づつ鎭座在しまし五穀のみのりを守るとあり、御冠山に鶫の鳥住むと記載せり靈鳥獸として雷鳥、雷獸の項目あり。

明治時代及びその後

13. 白山調査記　附 沿革

寫本　26.5 × 18：6枚

本文には白山測量略記（石川縣）とあり、『今回石川縣に於て能美郡地誌編輯のため本年の夏始めて實地測量をなしたり因りて左に其の調査する所を略記す』とあれども年月を記せず、然れども明治六年以後のものなることは明らかなり。又最初の實地測量記なるに相違なし。内閣の罫紙赤枠十三行詰めに淨記本文六枚。

江戸時代

1. 木曾道中記

55 × 11：24枚　正徳六丙申年 (1716)

京都より木曾街道を經て熊谷に至る道中記。巻末裏表紙内側に次の書込あり。『此木曾道中記者正徳六年二月出版ニ相成初テ此道中記出來版本五十三册發賣其後天明五年ニ此版少々手入書シテ出版ス實ニ珠本ナリト可云。天保十三年寅三月一日記之』。

後藤梨春纂輯

2. 震雷記

22.5 × 16：15枚

明和末年頃の出板か、梧陰庵藏板。板本、明和二年 (1765) 七月二十二日相州大山に落る雷獣や加賀白山の雷鳥を記述せり。雷獣と雷鳥の圖入り。

山城澤元愷

3. 漫遊文草

全五卷　18 × 12：26, 37, 27, 37, 31枚　寛政元年 (1789)

富士山、金洞山（妙義）、榛名山、岐蘇等の漢文紀行、數圖を挟む。中に富士山絶頂圖あり。

加茂季鷹

4. 不士日記

25 × 18：47枚　文化十一年 (1814)

從來の富士紀行が何れも富士を眺めての紀行であるに反し、本書はその登山日記として特に注目されてゐる。即ち彼の寛政二年 (1790) に於ける登山記錄であるが、また凡ゆる方面から富士を論じてもゐる。

十返舍一九撰

5. 諸國名山往來

17.5 × 12.5：12枚　江戸横山町、岩戸屋喜三郎梓　文政七年 (1824) 正月

所謂名山を紹介したもの。隅田川往來と合册になつ居る。

山田貞實

6. 芙蓉奇觀全圖

18.5 × 23.5：15圖　文政十一戊子 (1828)

折本畫帖。駿府住人山田貞實寫す所の富士十五態。

展覽會期中目錄記載の品以外に登山案內書、登山地圖、外國山岳會刊行雜誌類等をも陳列し、又登山家の肖像、書翰等をも併せ展覽する。

目　次

頁

和書の部　江戸時代 …… 1

明治時代及びその後 …… 2

洋書の部　I. 歐　洲

アルプス …… 7

スピツツベルゲン …… 26

コーカサス …… 26

II. アジア

ヒマラヤ及び中央アジア …… 27

日　本 …… 36

その他アジア …… 37

III. 南北アメリカ …… 38

IV. アフリカ …… 42

V. ニユー・ジーランド …… 45

VI. 文學、美術、傳記 …… 45

VII. 技術その他 …… 48

地圖、繪圖類 …… 53

圖　版　榊原守郁『立嶽登臨圖記』より …… 口絵

マルテル『氷河記』の扉 …… 6–7

凡　例

1. 出品は日本山岳會圖書室藏書を根幹とし、之に會員並に知友からの貸與品を加へたものであり、準備期日の不足から會員全體に訴へて廣く出品を仰ぐことも出來ず、比較的限られた範圍からの出品を陳列し得たに過ぎない。會場の廣さからする制限も、出品點數を限定した他の原因ではあるが。

2. 和書並に地圖に於いて充分廣く出品を仰ぐことの出來なかつたことは殘念であつたが、和書に關しては將來更めて一層全般的の展覽會開催の運びに至る可く、それによつて今回の缺を補ふことも出來やうと考へる。

3. 出品の撰擇標準は和書洋書各々多少異る。即ち、和書にあつては寧ろ本邦山岳關係の稀覯書を陳列するに努め、次いで本邦登山史に重要な役割を演じた文獻を集めるに努力した。洋書にあつては、古典として一定の地位を確立したものを網羅するを志し、必ずしも年代の古さ、或は稀少性を求めず、凡そ山岳圖書蒐集として、一定の鑑形たるべき蒐集を造り上げ、然る故に稀覯書の類を之に加へた。從つて洋書陳列品中には現に市販中のものも少くない。

4. 目錄記載に當つては、著者名、標題、判の大きさ、頁數、發行所、並に年代等の記載を主とし、之に展覽會準備に携つた會員若干名分擔の上、必要に應じて簡單な說明を加へた。書目により發行年數の明記なきものもあるが、特に斷り書なき限り、年代は初版發行年度を示す。要目記載の順序は便宜上多少の前後を生じてゐる。標尺は總て糎。

5. 目錄に於ける書目分類は和書は年代的に分たれ、洋書は地方的に分類の上著者別に列べてある。然し一つの書物にして、歐洲アルプス、コーカサス等二地方以上に亘るものも少くない。かかる場合は夫々の書の內容により、それの重心の在る所に從つて分類挿入した。

はしがき

現在に於ける日本の登山は、既に顯著なる社會現象となつてゐる。素より山岳國なる本邦に於ては、當然のことであるが、併し登山を今日の如く盛んに誘導啓發したのは、過去の日本に於ける導師先達の、宗教的開山の偉業と餘德に依るのは勿論であり、更に、近世西歐に於けるアルプスの探檢登山、科學研究、文學描寫等が、與かつて大に力あることも否み得られない。

それ等廣義の山岳及び登山を扱つた文學、並びに研究資料なる地圖、記錄、一枚摺の類から、先人の手翰、寫眞等に亘つて古今東西を問はず、拾收且撰擇した展覽會は、疾くに開かるべくして、未だ開かれてゐなかつた。偶々本年は、日本山岳會設立の第三十年に當るところから、記念事業の一として、玆に第一回の山岳圖書展覽會を開くことにした。場所に制限があつて、規模はおのづと小さく、出品は可なりに精選したつもりでも、少數人士の所藏品に偏り、時日の切迫から汎く求めてゐない等の不備は、之を認めるが、抑もアルピニストの、山岳愛に於けるや、數量や範圍の問題を超越して、個々の出品物に對して、それぞれ密接なる感情と愛着を持ち得られることと思ふ。何となれば、對象は自然の偉大なる存在とも云ふべき山岳で、文書、圖畫の類は、それ等に對する敬愛と讃嘆の記錄であり、表現である故である。されば、この種の小展覽會も、小展覽會なりに、開會の意義を持つと思ふ。

昭和十年五月

日本山岳會

於　東京日本橋
丸善本店樓上

自昭和十年五月三日
至　同　五月七日

JAPANESE ALPINE CLUB
EXHIBITION of ALPINE
LITERATURE, May, 1935

山岳圖書展覽會目錄

創立卅週年記念

日本山岳會

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XXX. 1935 No. 1.